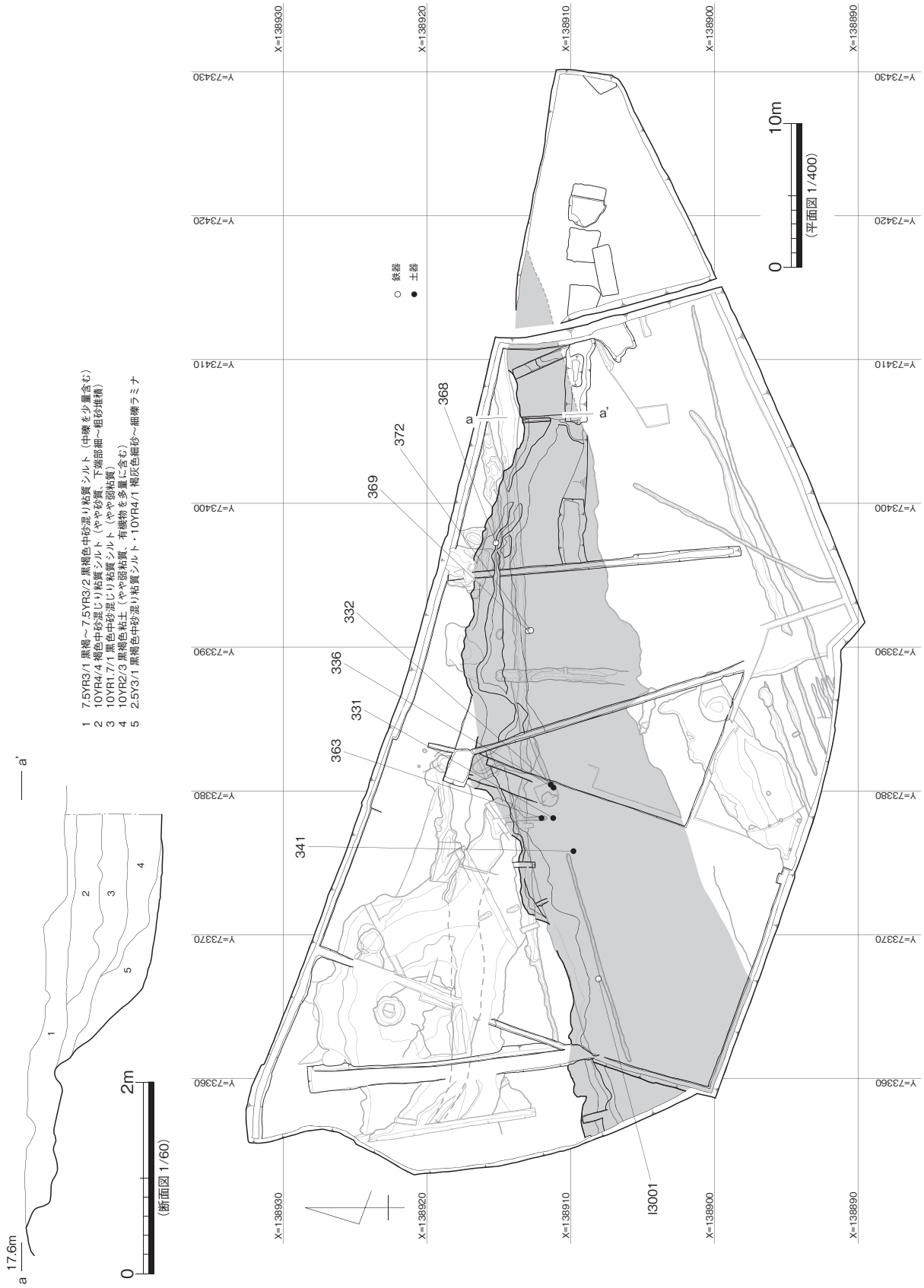


第 61 図　SD161 平・断面図

財センター 2018）が、埋土に関する調査記録はなく、調査担当者から調査後の検討により、本遺構の一部と判断されると教示を得たため、本書では報告しない。本遺構は、検出面幅 11.3 m以上、残存深 1.4

m以上を測る。調査は、主に重機により掘り下げを行ったが、完掘には至っていない。埋土は、第 61 図に掲載した位置のほか、各調査区の壁面等で記録した。19 層以上に細分され、褐色系細砂や粘質シルトなどにより埋没しているが、記録位置により堆積状況が大きく異なり、各層位の対応関係についての記録はなく、調査記録を提示するにとどめる。また、断面形状は、底面まで調査された記録は第 61 図の土層図に限られ、同図では底面が平坦な逆台形状を呈しており、人為的に開削された印象を受ける。

遺物は、コンテナ４箱程度の土器や金属器等が出土した。遺物は調査時に５層（最上層・上層・中層・下層・最下層）に細分して取り上げられているが、上述した理由からすべての堆積層の細分区分を明らかにすることはできず、確認できた層位についてのみ各調査区壁面などの挿図に記載した。**307**・**309**・**315** ～ **317**・**323**・**326**・**329**・**330**・**342** ～ **345**・**348**・**352**・**355**・**357**・**359** ～ **362** が最上層（第８図２区西壁 46・49 層）、**337**・**368**・**369**・**372** が上層（第９図２区１トレンチ 15 ～ 17 層）、**300**・**304**・**305**・**308**・**310** ～ **314**・**318** ～ **320**・**324**・**325**・**327**・**338** ～ **340**・**350**・**351**・**356**・**358**・**363**・**364**・**367** が中層（同図２区１トレンチ 18・19 層）、**302**・**322**・**328**・**331** ～ **336**・**341**・**349**・**353**・**354**・**365**・**366**・**375** が下層（同図２区１トレンチ 23 層）、**303** が最下層（同図２区１トレンチ 25 ～ 27 層）、その他が層位不明の遺物とされる。なお、中層出土の **312** は上述した SD145 出土資料と接合した。

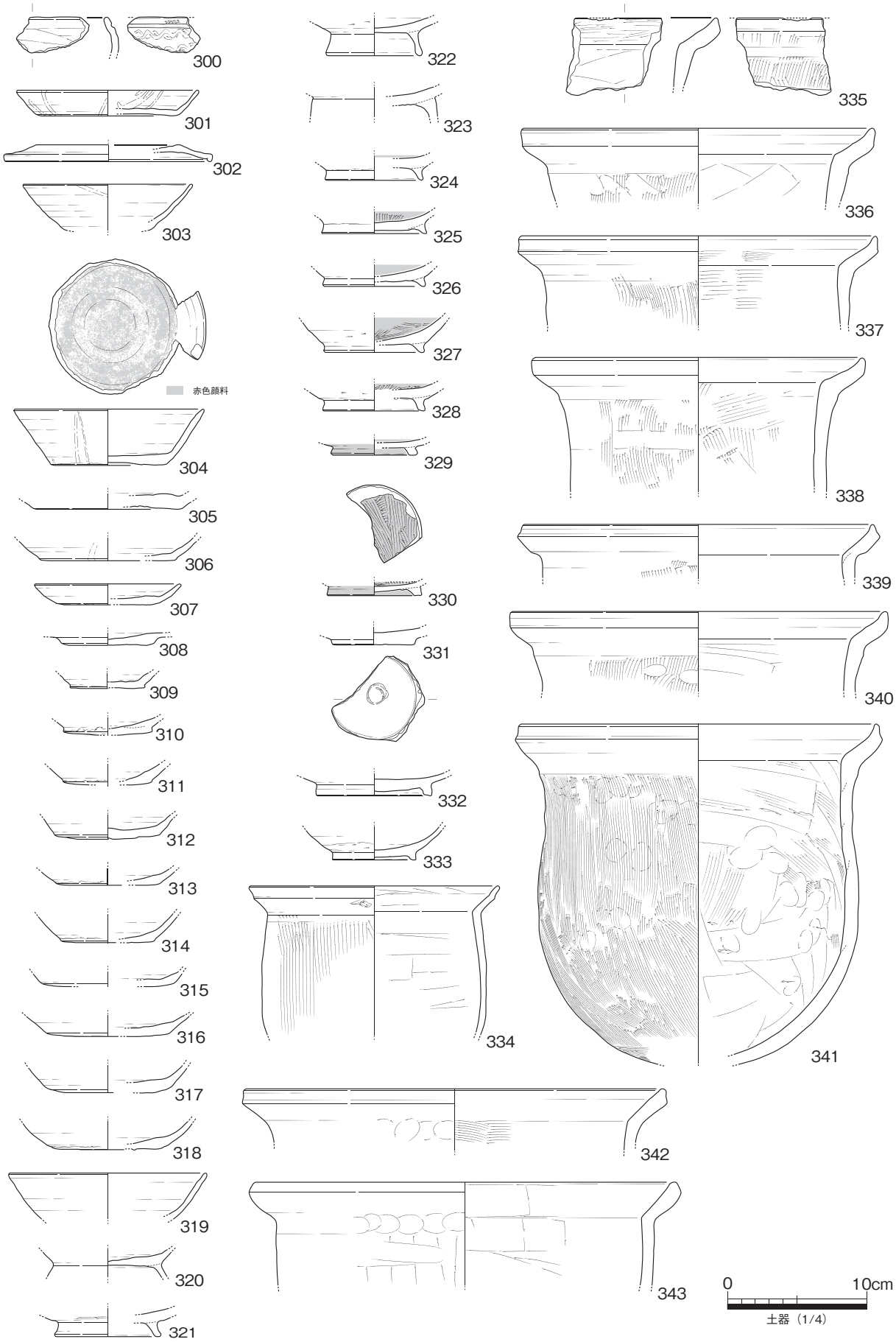
300 は縄文土器浅鉢の口縁部小片。縄文時代後期に遡り、混入資料である。**301** は須恵器皿。**302** は同杯蓋の小片。**303** ～ **306** は同杯として図示した。**304** は、底部内面にやや強い磨滅が認められ、朱墨が明瞭に付着することから、いわゆる杯蓋硯と考える。口縁部は SD142 出土の小片が接合した。底部周縁の破断面に磨滅等は認められず、またその部分に朱墨の付着も認められないこと、現状での朱墨の付着範囲から、本来は完存した状態で硯として使用されていた可能性が高い。また、底部のみではなく体部下端にも墨の付着がみられることから、墨入れとして利用された可能性も考えられる。なお、朱墨については、その成分の理化学的な分析を実施し、水銀朱が検出された。**301**・**303**・**304**・**306** には火襷を認める。**305** は、器壁が厚く小片のため、杯以外の器種の可能性も考えられる。内面に煤が付着し、変色が認められるなど、２次的な被熱の可能性がある。

307 は土師質土器皿。**308** は口縁部が水平に近く開く同皿で、本地域では類例に乏しい。**309** ～ **318** は同杯の底部片として図示した。**316** の内面には一部に煤が付着する。**319** ～ **321** は同碗である。**319** は小片のため別の器種の可能性もある。**322**・**323** は同台付杯の底部片である。

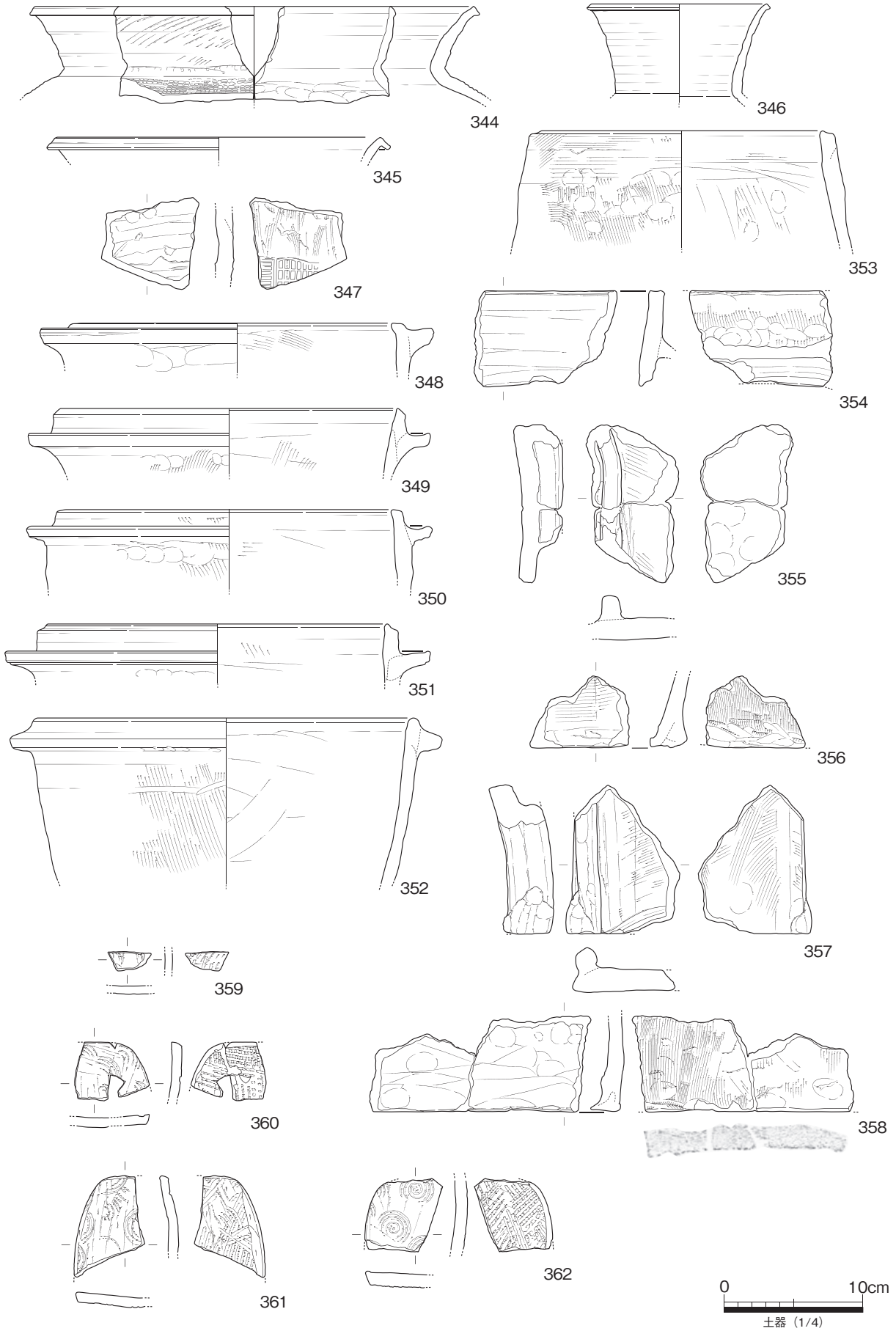
324 ～ **328** は黒色土器Ａ類碗の底部を中心とした小片。**327**・**328** は、いずれも高台上位外面に回転ケズリが施され、**325**・**327**・**328** の内面見込みには、複数方向の平行ミガキを認める。**329**・**330** は同Ｂ類碗である。内面は複数方向の平行ミガキを施す。

331 ～ **333** は緑釉陶器碗の底部片。いずれも削り出し高台で、畿内産とみられる。**331** は平高台で、底部全面を施釉する。**332** は高台を含め底部全面を施釉し、**333** は高台畳付及び高台内は回転ケズリが施され、高台畳付に一部釉が付着するが高台内は無釉である。それぞれ高台形状や施釉範囲が異なり、時期差が伺える。釉調は、**331** は暗緑色（2.5G3.5/2.5）、**332**・**333** は暗青灰色（10BG4/1・2.5B4/0.5）に近い発色を呈する。各々の製作時期は異なるが、釉調はそれぞれ近似しており、また微砂粒を一定量含む胎土も酷似し、同じ生産地の工房で製作された可能性が想定される。

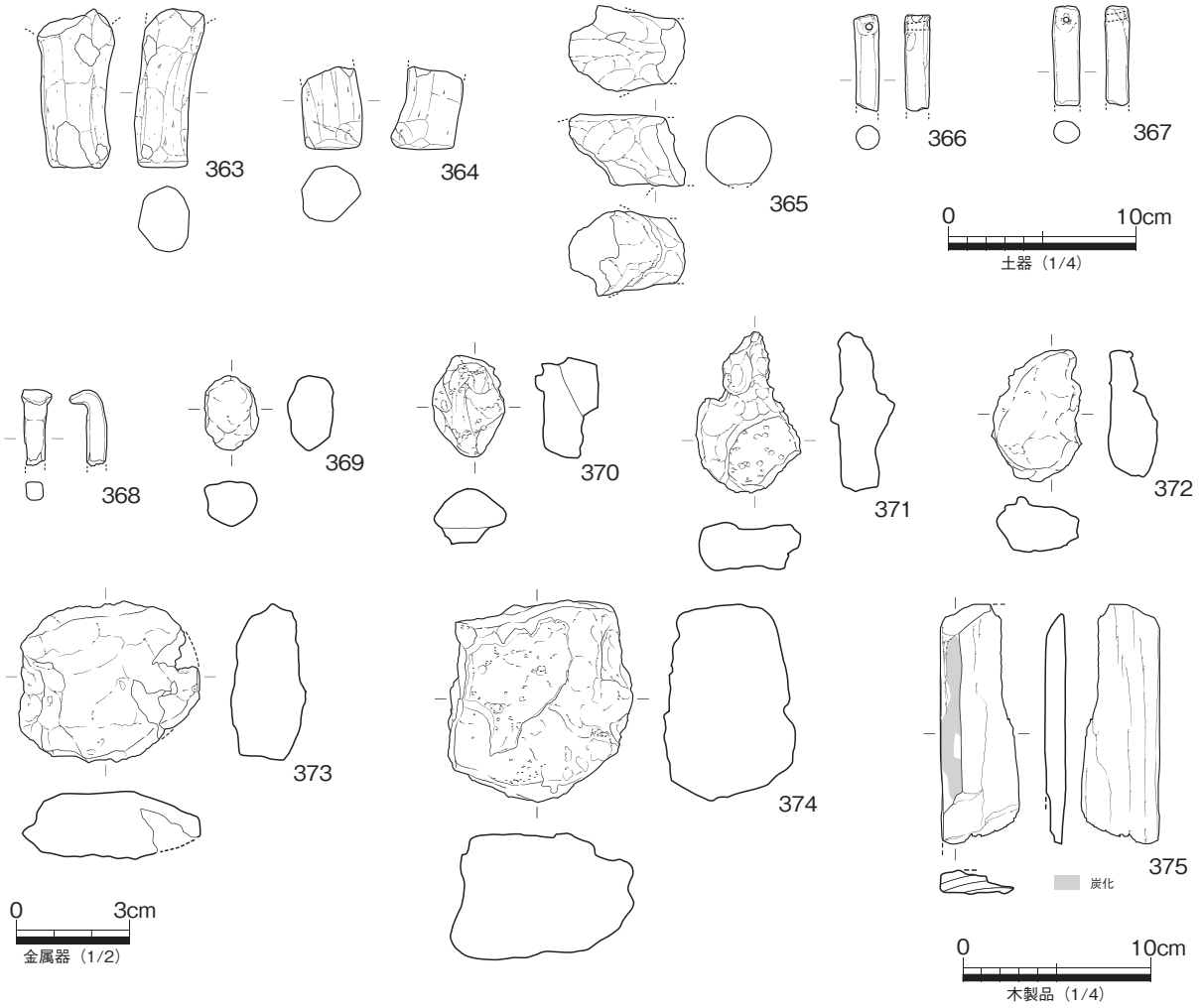
334 ～ **343** は土師器甕。口径により、小形（**334**）、中形（**335** ～ **341**）、大形（**342**・**343**）の３タイプを認める。体部内・外面を中心に、炭化物・煤の付着や変色を認める資料が多い。**341** は完形に近く



第 62 図　SD161 出土遺物実測図 1



第 63 図　SD161 出土遺物実測図 2



第 64 図　SD161 出土遺物実測図３

復元され、調整などの残存も良好である。大形の２点は、体部外面にハケ調整ではなく板ナデやナデ調整が施され、口縁部形状からも中形甕より後出するものと考える。

344・**345** は須恵器甕で、**344** は器形や調整などより十瓶山周辺窯産の可能性がある。**346** は須恵器壺の口縁部片である。**347** は常滑焼甕の体部小片。外面に押印文を施す。

348 ～ **352** は土師器羽釜である。上述した甕同様、体部内外面が被熱により変色し、煤や炭化物が付着する資料が多い。**353** ～ **358** は同移動式竈、**353** は掛口部、**354** は掛口部～焚口部、**355** は焚口部、**356** ～ **358** は底部のそれぞれ小片である。**354**・**355**・**357** では、焚口部の周縁には矩形の鍔を貼付している。**353**・**354** の掛口部の口径は、いずれも 20cm前後に復元される。**353** は内面及び端断面の一部に煤が付着しており、破損後にも被熱した可能性が考えられる。**358** の外底面は未調整で、一部にスサとみられる圧痕や粘土の繋ぎ目を認める。

359 ～ **362** は須恵器猿面硯である。**359** は、小片のためか墨痕を確認できないが、**360** に近接して出土し、胎土や調整等より猿面硯と判断した。接合はしないが、**360** と同一個体の可能性もある。**360**・**361** の硯面はよく使い込まれ、顕著な磨滅や墨痕を認める。**362** は、硯面の磨滅は弱く墨痕を認めないが、それは破片の位置によるものであろう。硯面には４周程の螺旋状の当て具痕が刻まれる。

363・**364** は、土師質焼成の土馬脚部片である。いずれも脚部表面はケズリ調整により断面多角形状

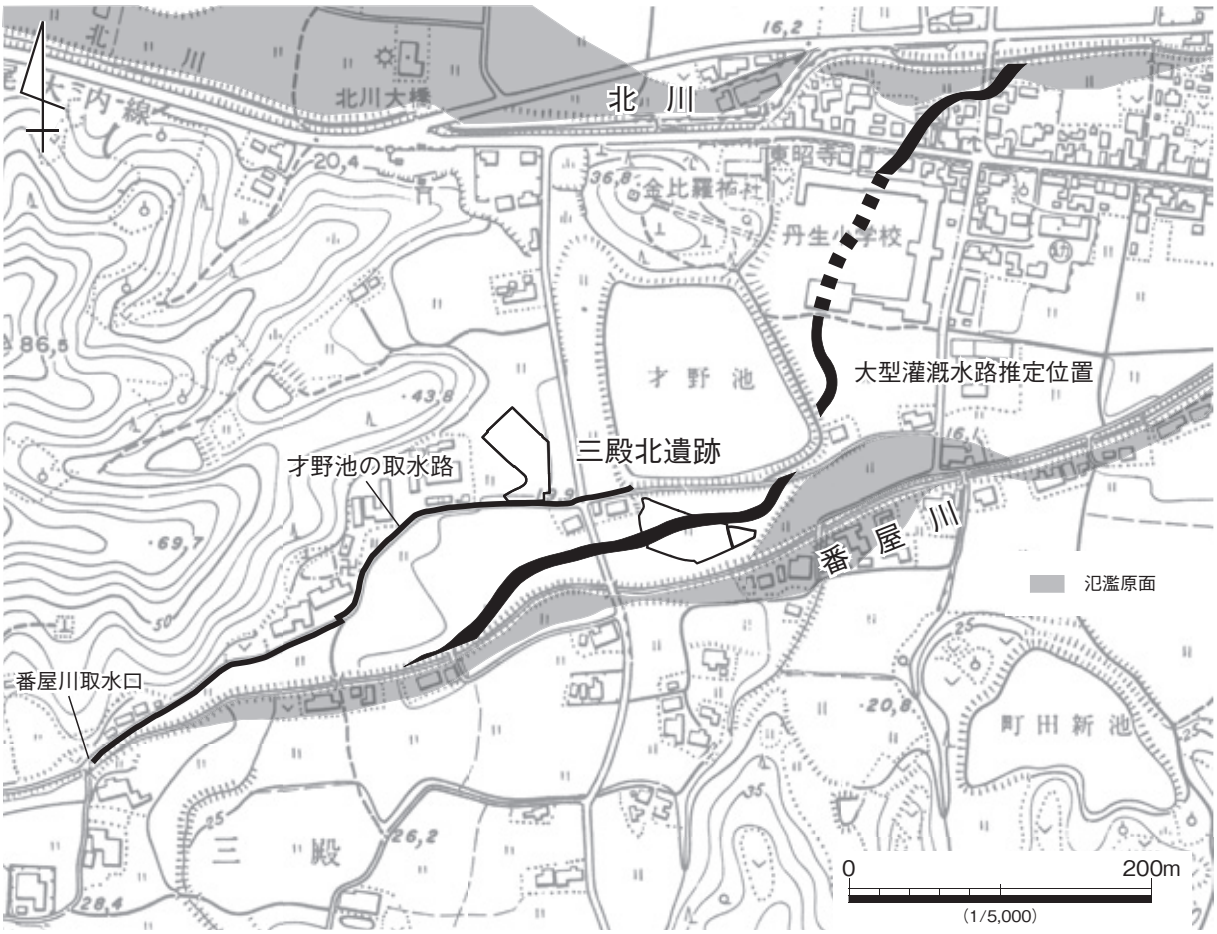
を呈し、蹄尖は鈍く尖り、蹄底はナデ調整が施されて平坦である。形状から前後は不詳だが、**363** は右脚、**364** は左脚と考えられ、両者は胎土や焼成、大きさなども酷似しており、本来は同一個体であった可能性は高い。祭祀終了後に破砕して投棄したと考えられる。なお、いずれも中層より出土しており、後述する各層の堆積時期より、混入資料と考えられる。**365** は用途不明の土製品である。長径 2.5cmの断面楕円形の柱状を呈し、図下面左半部には剥離痕を認める。焼成や胎土は上述した土馬と近似しており、本資料も土馬の可能性も考えられるが、部位を特定できず断定までは至らない。**366**・**367** は棒状土錘である。**366** は、胎土中に角閃石細粒を一定量含み、他地域からの搬入品の可能性がある。

368 は５㎜角の角釘の頭部片である。**369** ～ **374** は鉄滓で、椀形滓の２点 **373**・**374** について理化学的分析を実施した。詳細は次章に譲るが、分析の結果 **373** は鍛錬鍛冶滓、**374** は精錬鍛冶滓と判定された。確実な精錬鍛冶滓の県内での出土は現状では確認できないとされ（森下 2019）、本遺跡の調査においても鍛冶炉は検出されていないが、砂鉄原料を用いた鉄器製作が遺跡周辺でなされていた可能性が指摘された点は重要である。これら鉄滓資料の詳細な帰属時期が明示できない点は惜しまれるが、出土位置が既述した SX03 に近接し、SX03 からの混入の可能性も想定できるかもしれない。**375** は、矩形を呈するカヤの板材とみられるが、欠損のため全形は不明。左図右半分を中心に大きく欠損し、残存部は炭化する。上端部は 1.5 ～ 2.0cm程度斜めに削り、断面三角形状を呈して尖る。**483**（第 80 図に掲載）は、最上層出土とされるが、土層図に記録された層位との対応は不明。２㎝角程度の薄い銅製品で、断面形状は緩やかに湾曲する。後述する２区包含層より出土したとされる銅碗 **482** と酷似し、その体部片である可能性が高い。出土層位より、本遺構へ混入したものと考える。

上述した遺物は、概ねⅠ期：９世紀後半～ 10 世紀前葉（**301**・**304**・**306**・**327**・**328**・**331** ～ **341**・**345**・**346**・**349** ～ **351**）、Ⅱ期：10 世紀中葉～ 11 世紀前葉（**309** ～ **314**・**322** ～ **326**・**329**・**330**・**342** ～ **344**・**348**・**352**）、Ⅲ期：12 世紀後半～ 13 世紀前半（**315** ～ **321**・**347**）の大きく３時期に分けられる。Ⅰ・Ⅱ期の遺物と比して、Ⅲ期の遺物の出土量は僅少だが、これは同時期の屋敷地である第２次調査区から離れていることが要因と考える。以上のほか、土師器竈はⅠ期に位置付けられる可能性が高く、猿面硯はⅡ期の可能性を考えたい。また、土馬２点は、少数だが **302** のように８世紀後半に位置付けられる資料も出土していることから、先行する時期の資料の混入の可能性を想定する。銅製品 **483** は、後述する **482** の出土状況よりⅡ期に位置付けられる可能性が高い。

さて、第 65 図下の空中写真は、1961 ～ 1969 年に調査区周辺を撮影したものである。この空中写真には、本流路と概ね重複する位置に、幅７ｍ前後の帯状の地割が確認される（写真中の矢印）。この地割は、才野池の築池や丹生小学校（現在は廃校）の造成により乱されているものの、番屋川の北岸をやや蛇行しながら東へ延び、才野池東側付近で大きく北へ屈曲して北川に合流するまで、延長約 900 ｍを確認することができる（第 65 図上）。2000 年頃までの空中写真では地割の存在が確認できるが、2000 年代以降は四国横断道の建設や番屋川の河川改修、土地改変などの開発により消失したものと思われ、調査着手時の図面には本地割の記載は認められない。

前章で既述した各調査区壁面の土層図では、近代以降とみられる地下げなどの影響により不明瞭な点が多いが、例えば第８図２区西壁の包含層（９～ 11 層）や第 10 図３区西壁の包含層（４～６層）とした堆積物の堆積範囲は、概ね地割の位置と合致し、地割を埋めた造成土の可能性が想定される。つまり、造成土やその後の削平などにより、地割が消失していることが土層図より読み取れ、また同時に、この地割が本来は周囲よりもやや低い土地であり、その地割が近世段階まで遡及できる可能性が想定さ



国土地理院発行国土基本図Ⅳ-FF38 を一部改変

国土地理院撮影の空中写真（1961 年～ 1969 年）に一部加筆

第 65 図　大型灌漑水路（SD161）推定位置図

れる。調査によって検出された近世遺構の多くが、本地割を避けてその南北に配されていることや、後述する近世溝 SD142 が地割と合流する位置付近で途切れること、その SD142 の検出面の標高が 18.0 m前後、本遺構南側の近世溝 SD148 の同標高が 17.8 m前後であるのに対して、本遺構上面で検出した同じ近世溝 SD143 の同標高が 17.6 m前後と 0.2 ～ 0.4 m低い位置で検出されていることは、上述した想定の傍証とすることができよう。つまり、近世段階まで本地割は遡ることが可能で、周囲よりも 0.2 ～ 0.4 m程低い帯状の窪地であったことが復元できる。

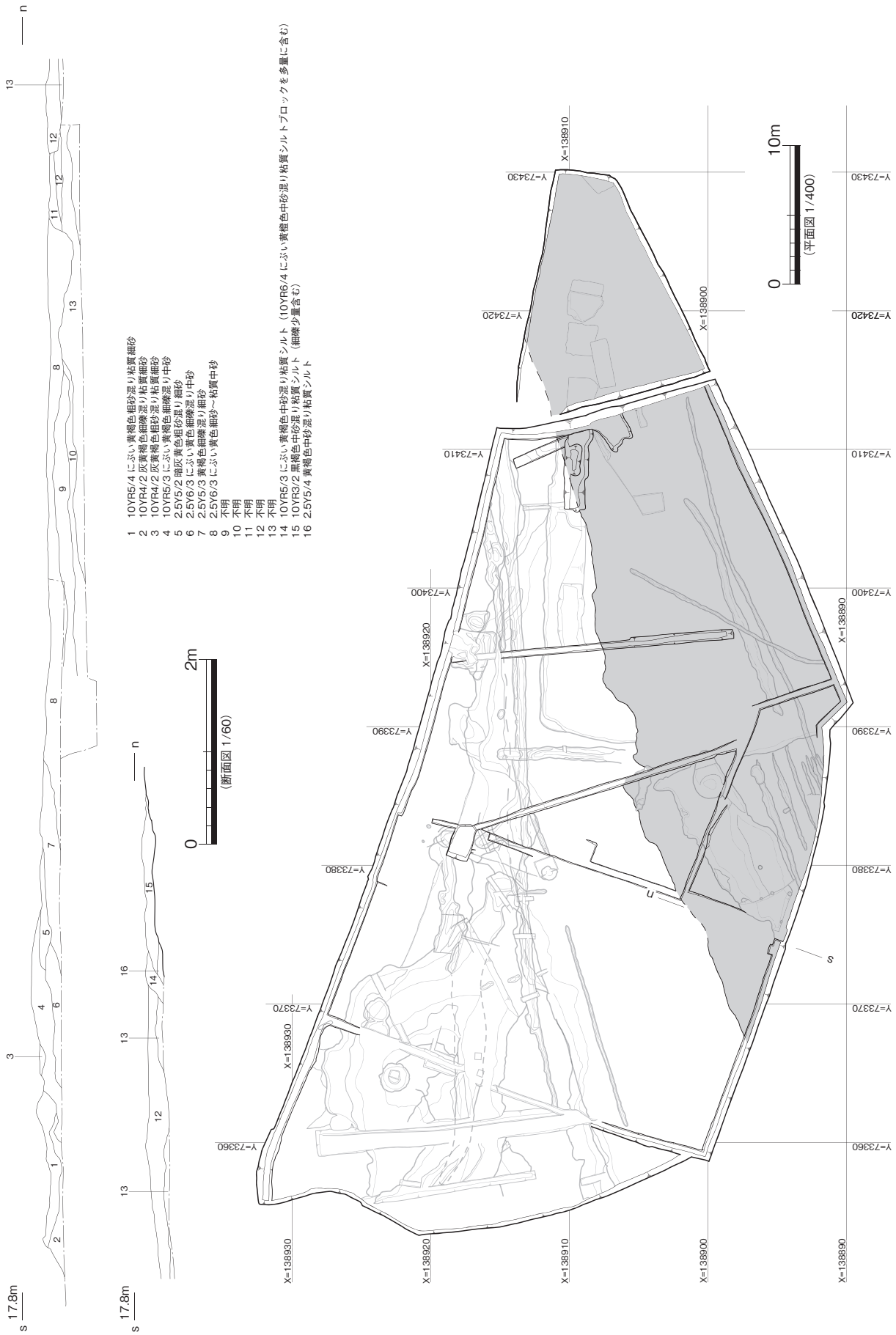
写真１　才野池用水番屋川取水口近景（東より）

上述した点を実証するには、さらに 1980 年代以前の地籍図等の分析も有効だが、現状では上述した調査成果を参照するだけでも、地割と本遺構との関係を想定するには十分と考える。空中写真に見られる窪地状の地割は、溝か番屋川の旧流路の痕跡が考えられ、その平面形状や後述する流下時期より、溝の可能性を想定したい。つまり、この地割は番屋川から取水して余剰水を北川へ排水した、大型灌漑水路の痕跡であり、本遺構はその灌漑水路の一部であった可能性を想定する。

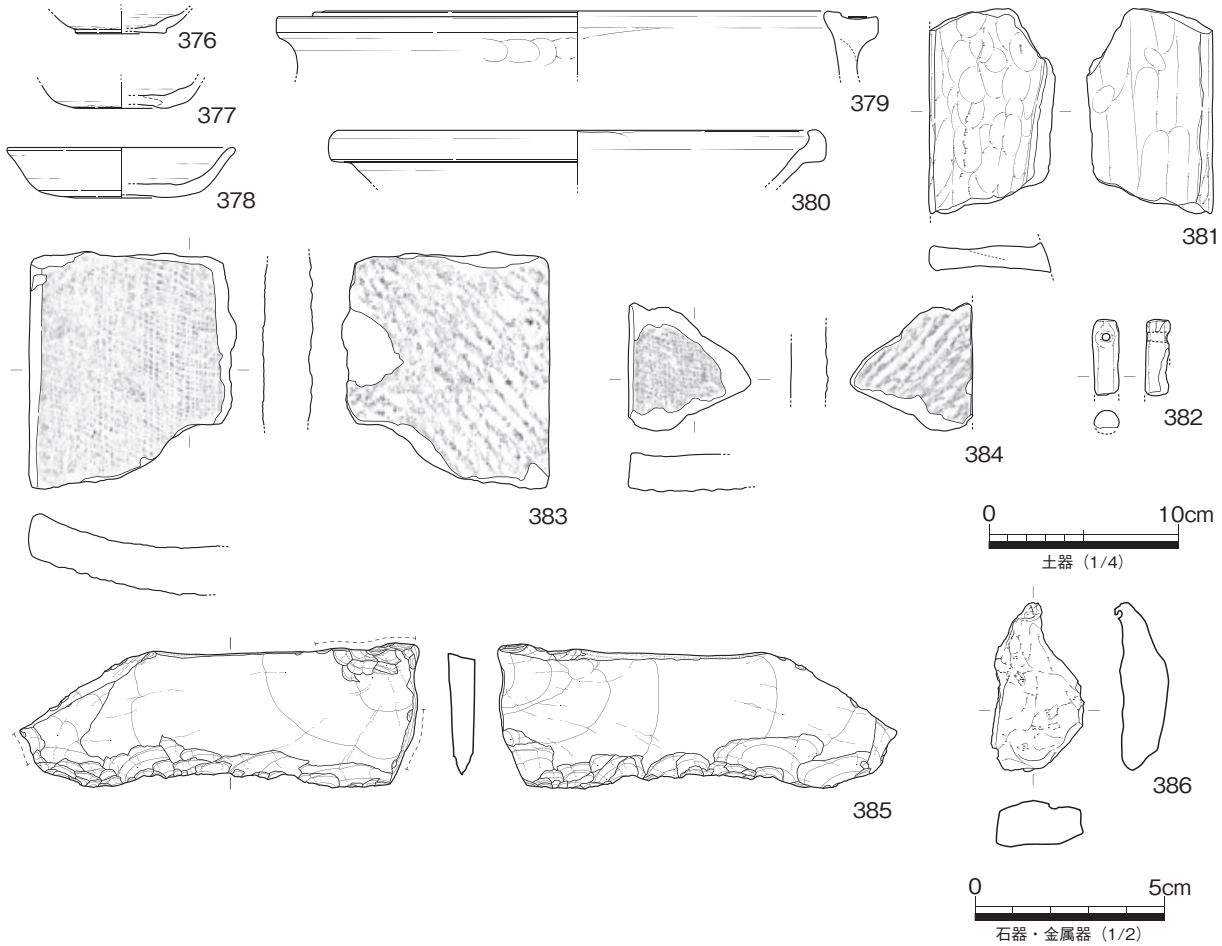
本遺構を人為的に開削された溝とした場合、前述した断面形状の違和感は払拭できる。さらに本遺構の出土遺物には、明らかな混入とみられる資料を除いて、前述したように大きく３時期が認められ、中層を一定度掘り下げた位置よりⅢ期の遺物が出土していることから、13 世紀代には本遺構が一定の埋没過程にあったことは確実で、既述した本遺構上面に開削された SD145 より、13 世紀後半～ 14 世紀前葉には完全に埋没していたとみられる。また、図版 23 の SD161 や SE02 の調査時の写真には、本遺構の底面とみられる位置に、土坑状の遺構とみられる黒色土壌が多く確認され、それらは図版 14 に掲載したように底面有機物層として、本遺構の下層ないしは最下層として調査された可能性が高い。しかし、平面プランは整った円ないし楕円形を呈していたとみられ、同様な位置で上述した井戸 SE02 が検出されていることから、これらも SE02 と近接した時期の遺構とみるのが順当であろう。古代に位置付けられる遺物の一部は、既述した SX01 ～ SX04 や SE02 以外の、本来は重複する遺構に帰属するものであった可能性も考えられる。第 61 図に示した出土位置が記録された遺物のうち、古代に位置付けられる遺物のいくつかが、図版 23 から推定される土坑とみられる遺構周辺から出土している点も、上述した想定と矛盾しない。つまり、本遺構出土の古代の遺物は混入の可能性が想定され、本遺構の開削時期については、中層出土遺物の時期より 12 世紀を大きく遡ることはないと考える。

なお、本水路の流路方向はやや蛇行して配され、現地表面に認められる条里型地割の方向とは合致しない。この点は、第２次調査区で検出された 13 世紀代の屋敷地の遺構の多くが条里型地割の規制を受けず、調査で検出した建物や溝にみられる６度前後西偏した主軸方向が、現在の地割へ継承されている点からみて、遺跡周辺では条里型地割の施工がなされなかったと考えられ、本水路が地割に規制されないことをもって、これを自然河川とする根拠とはならないものと考える。

本遺構の灌漑範囲については、その開削位置から、才野池東側より枝溝が東へ分岐し、番屋川と北川に挟まれた完新世段丘上面の最大約 0.9㎢の平野部が、その範囲と想定される。また第 65 図に示したよ



第 66 図　SX05 平・断面図



第 67 図　SX05 出土遺物実測図

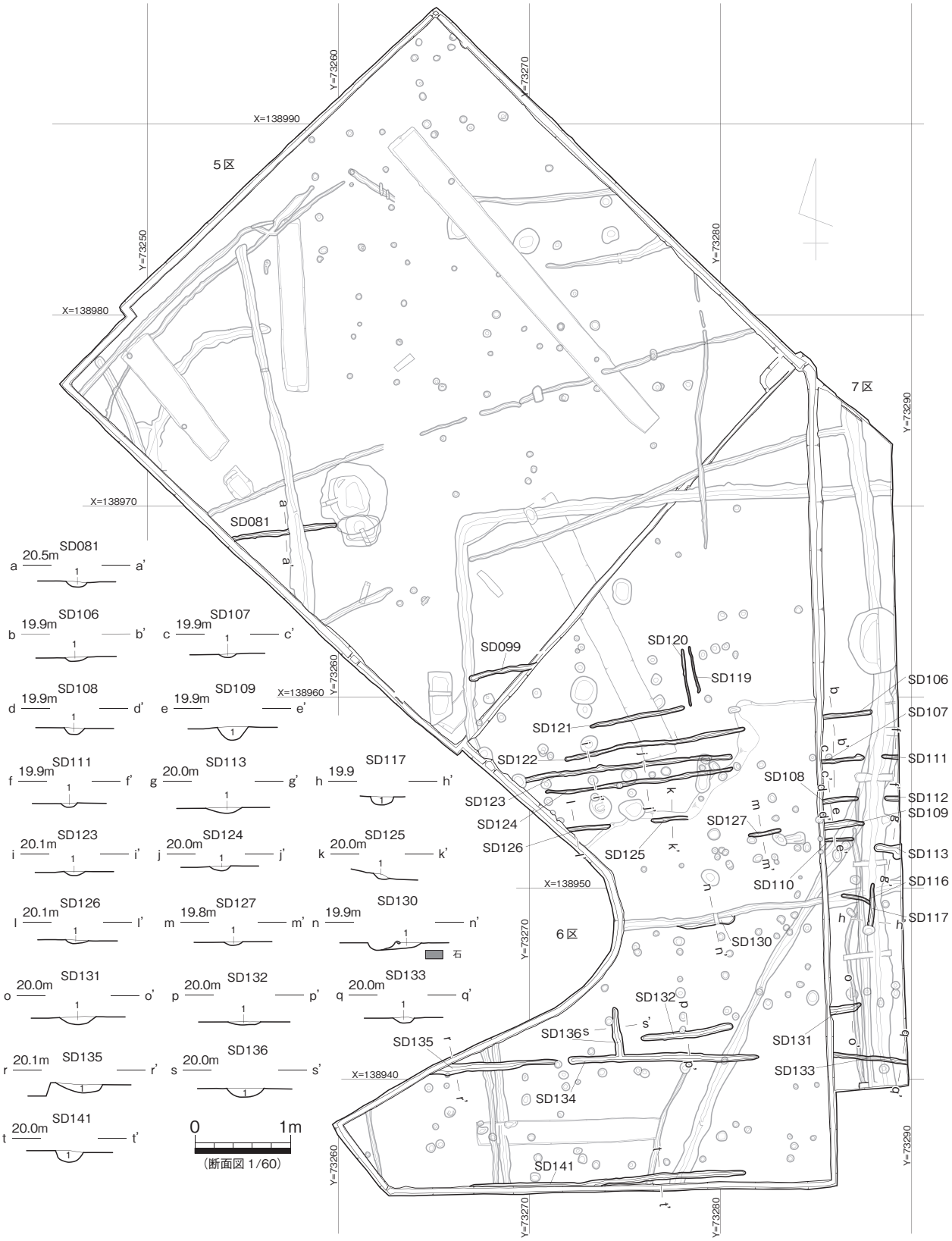
うに、本灌漑水路は番屋川北岸の完新世段丘面上に開削され、想定される灌漑範囲より少なくとも 400 m程上流部で取水している。おそらくは 10 ～ 11 世紀前半における番屋川や北川の河床の低下と段丘崖の形成により、灌漑範囲の至近地より揚水することが困難となったことが、本水路開削の要因と考えられ、上述した本遺構の開削時期と整合する。実際調査地周辺では、番屋川は現地表面より約２ｍとかなり深い位置を流下しており、隣接する耕作地へ直接給水する施設は調査区周辺には認められない。

本遺構は、出土遺物より 13 世紀後半には埋没の過程にあった可能性が想定される。一方、才野池は主要な水源が番屋川にあり、現在本灌漑水路の推定取水位置より 200 m程上流に取水口を設けている。用水路は番屋川北側の丘陵裾を東へ流下し、２次調査区南側から池へと給水しており、本遺構が有する用途・機能は、才野池へ継承されたと考えられる。後述する SX05 や包含層２の堆積時期から、13 世紀前半代には本遺構は機能を停止し埋没していた可能性が想定されるが、その後才野池が築池されるまで、新たな用水路が開削された可能性も考えられる。この点は今回の調査で実証することはできず、今後の調査に期待することとしたい。

性格不明遺構

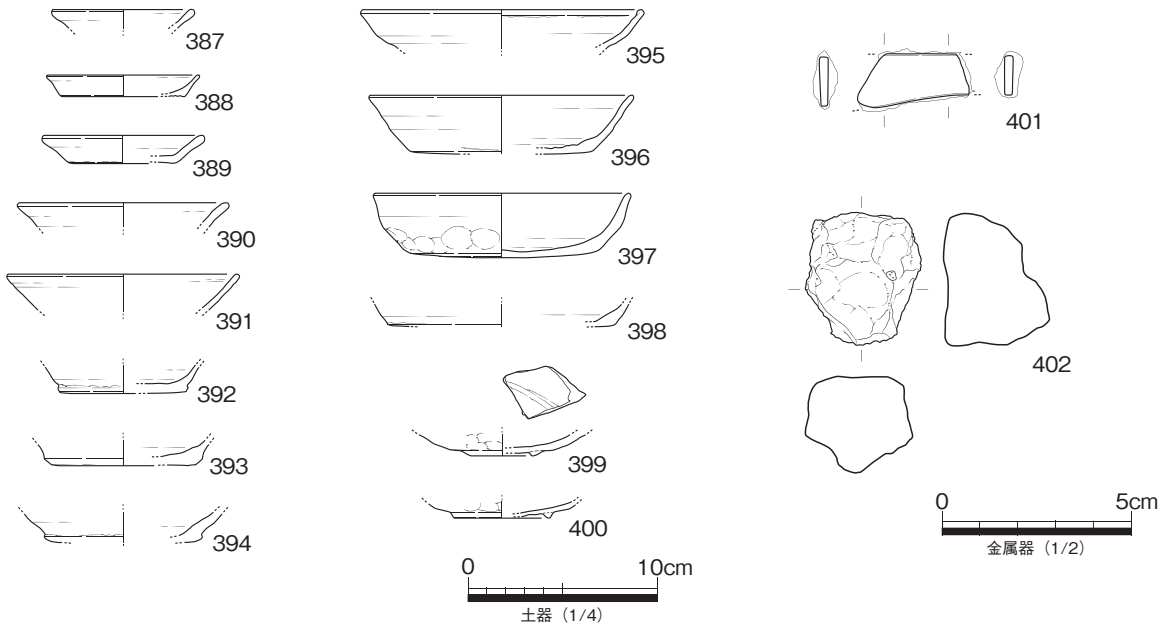
SX05（第 66・67 図）

第１次調査区南端を東西に流下する旧番屋川の自然河川として調査され、切り合い関係より既述した SD161 より後出するとされる。調査区内では北岸を確認したのみで、南岸は調査区外にあり、検出面



a-a'　j-j'
1　10YR4/2 灰黄褐色粗砂（SD081、SD124）
b-b'　d-d'　e-e'　f-f'
1　7.5YR6/1 褐灰色混細砂粘質土（SD106、SD108、SD109、SD111）
g-g'　q-q'
1　7.5YR5/1 褐灰色混細砂粘質土（SD113、SD133）
c-c'
1　7.5YR5/1 褐灰色混中砂粘質土（SD107）
i-i'　j-j'　r-r'　s-s'
1　7.5YR7/2 明褐灰色混細砂粘質土（SD123、SD124、SD135、SD136）
l-l'
1　10YR7/1 灰白色混細砂粘質土（SD125、SD126）
m-m'
1　2.5Y7/2 灰黄色細砂質土（SD127）
o-o'
1　7.5YR6/2 灰褐色混細砂粘質土（SD131）
p-p'
1　7.5YR6/3 にぶい褐色混細砂粘質土（SD132）
t-t'
1　5YR6/1 褐灰色混細砂粘質土（SD141）

第 68 図　第２次調査区第２面鋤溝群平・断面図



第 69 図　第２次調査区第２面鋤溝群出土遺物実測図

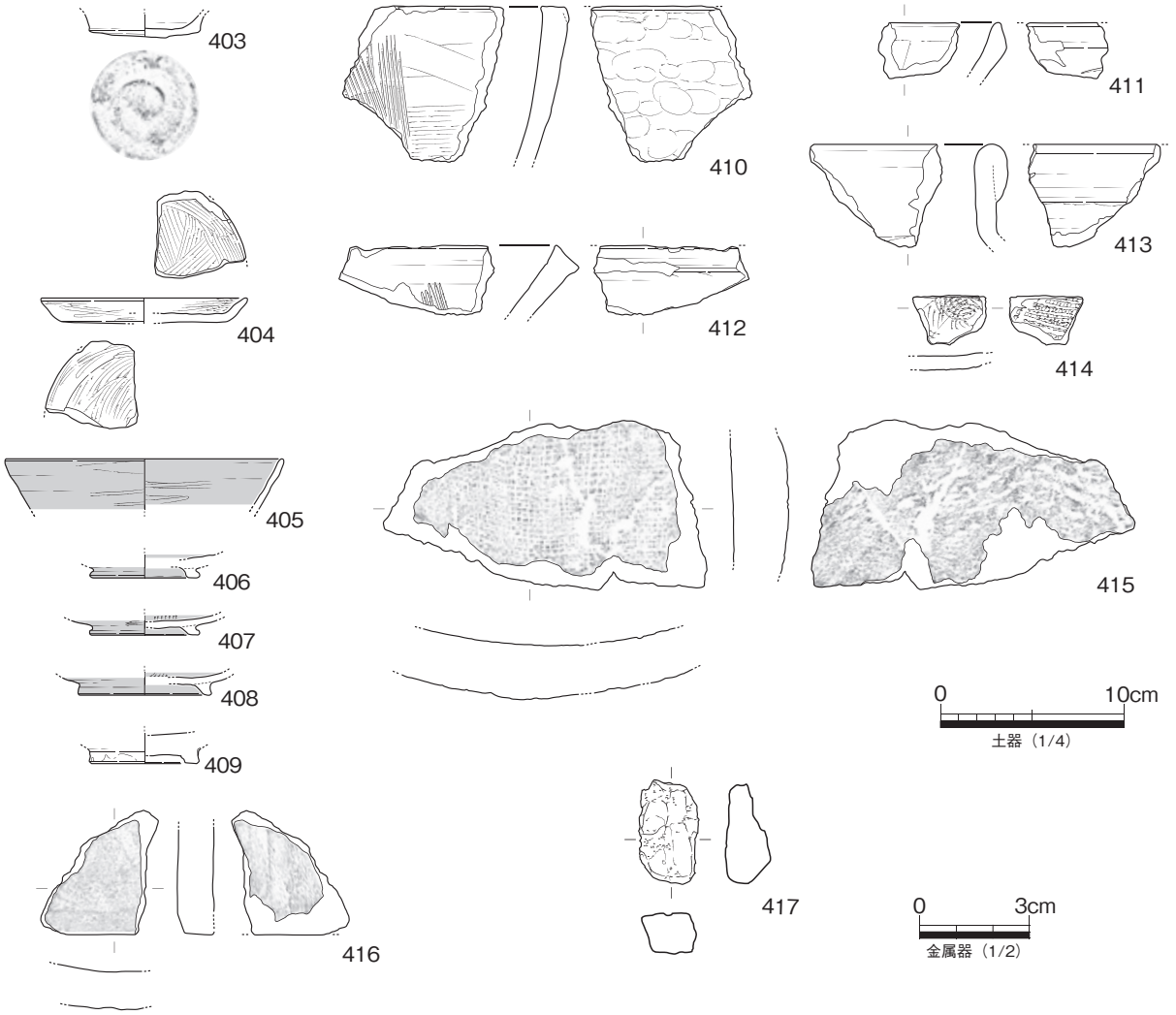
幅は最大で 15.6 m以上を測る。埋土の観察は、各調査区壁面などを中心になされており、第 66 図は３区西壁の土層図（第 10 図）より本遺構の堆積物のみを抜き出したものである。埋土は 16 層以上に細分され、各調査区壁面などの観察位置により堆積内容は相違するが、粘質シルトや細～粗砂により埋没したことが記録される。

しかしながら、本図でも明らかなように、調査は流路底まで及んでおらず、また２区西壁（第８図）での観察では、本流路堆積層とされる 26 ～ 41 層は、大半が黄色系の細～中砂で埋没しており、これは無遺物層とされるベース砂層の 60 ～ 63 層と酷似し、本遺構の埋土としてよいか判断できない。さらに比較的近接した地点で堆積層の記録化がなされているにも関わらず、その記録位置によりその詳細は相違して対応関係が明示できない。調査時には、「約１m掘り下げたところで人頭大の亜角礫を含む砂礫層が確認でき…その過程で微量ながら十瓶山産のものと考えられる 12 世紀代の甕の破片が認められ…」とする（香川県埋蔵文化財センター 2018）が、後述するように本遺構上面より開削された SD148 が東に延伸する可能性も考えられ、出土した 12 世紀代の遺物が確実に本遺構に伴うものか、正確な出土位置や層位が記録されていないため、断定することは困難であろう。

その出土遺物は一括して取り上げられ、またその大半は、後述する遺構上面に堆積した包含層２の時期幅に収まり、一部を除いて上位層以下に調査が及んでいないことからも、本来は包含層２に帰属する遺物が混入している可能性も考えられる。出土遺物の位置や層位に関する詳細な記録を欠くことなどより、本遺構が自然河川である可能性は高いものの、それが調査記録にあるような当該時期の遺構であることを合理的に評価することは困難であり、不明遺構として報告する。

遺物は、弥生土器甕、土師器、須恵器杯･甕、黒色土器Ａ・Ｂ類碗、土師質土器皿･杯･足釜･鍋･擂鉢、東播系須恵器捏鉢、備前焼擂鉢・甕、中国製白磁、布目平瓦、焼土塊等の小片がコンテナ半箱程度出土したほか、サヌカイト剥片１点（49.01 g）が出土した。

376・377 は土師質土器皿、**378** は同杯である。**379** は土師器羽釜の口縁部小片。外面鍔部～体部は被熱により変色する。**380** は東播系須恵器捏鉢の口縁部小片である。森田編年第Ⅸ期第２段階に位置付



第 70 図　包含層２出土遺物実測図

けられる。**381** は土師器竈の鍔部の小片。幅 6.5cm前後を測る。本資料も、図右面は被熱により弱く変色する。**382** は棒状土錘である。**383**・**384** は土師質焼成の布目平瓦の小片である。凸面には粗い縄目タタキを施す。**385** は、下縁に直線的な刃部を有するスクレイパーとして図示した。背部に自然面と、一部に敲打による刃潰しを施す。**386** は鉄滓の小片である。

耕作痕（第 68・69 図）

主に６・７区第２面で、多数の小溝群を検出した。流路方向が一定し、等間隔で並走するものが多く認められることなどより、鋤溝群の可能性を想定する。既述した SD130 などの一部の溝を除いて、SD105、SD115、SD138、SD128、SD139 などの屋敷地に関係する遺構に後出し、鋤溝以外の溝が少数混在している可能性は否定できないが、屋敷地廃絶後に調査区周辺が耕作地として利用されていたことが考えられる。

鋤溝群には、東西溝と南北溝があり、東西溝が多数を占める。東西溝では、主軸方向によりＮ 82 ～ 84° Ｅ前後の SD081・SD099・SD106 ～ SD109・SD121 ～ SD127・SD131・SD132・SD141 と、Ｎ 88° Ｅ前後の SD134・SD135、Ｎ 86 ～ 88° Ｗ前後の SD111 ～ SD113・SD116・SD133 の大きく３方向が認

められる。各溝は、検出面幅 0.2 ～ 0.5 m、残存深 0.04 ～ 0.14 mで、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は確認されたものでは褐灰色粘質土を中心に、灰白色や灰黄色砂質土などが認められ、上述した主軸方向も考慮して、数時期の耕作痕が重複している可能性を想定する。

遺物は、器種不詳の弥生土器や土師質土器皿・杯・碗・鍋、黒色土器Ｂ類碗、十瓶山周辺窯産須恵器碗、瓦質土器、和泉型瓦器碗、龍泉窯系青磁Ⅰ -2 類碗、須恵質布目瓦等の小片が出土している。出土遺物の大半は、自然河川 SR01 や中世屋敷地の各遺構からの混入と考えられる資料であり、本遺構の時期を直接示す資料は乏しい。

387 は SD131、**388** は SD122、**389** は SD136、**390** は SD126、**391** は SD109、**392** は SD134、**393** は SD130、**394** は SD141 より出土した土師質土器皿とした。**388** は底部糸切である。径がやや大きく復元される **390**・**391**・**394** は、小片のため杯となる可能性もある。**395** は SD117、**396** は SD123、**397** は SD116、**398** は SD134 よりそれぞれ出土した同杯である。**397** は全体の半分程度が残存し、本来は重複する SD102 か SD129 に帰属する遺物であった可能性が高い。**399** は SD122、**400** は SD109 出土のそれぞれ和泉型瓦器碗の底部片である。いずれも炭素の吸着は乏しい。尾上編年Ⅲ期後半に位置付けられる。**401**・**402** は SD134 出土の金属器で、**401** は薄い板状を呈する鉄器片で、刀子の可能性を考え図示した。**402** は椀形滓の小片である。

上述したように、出土遺物より本遺構の詳細な時期を特定することは困難だが、遺構の重複関係より屋敷地が廃絶した 13 世紀後葉以降と考えられる。

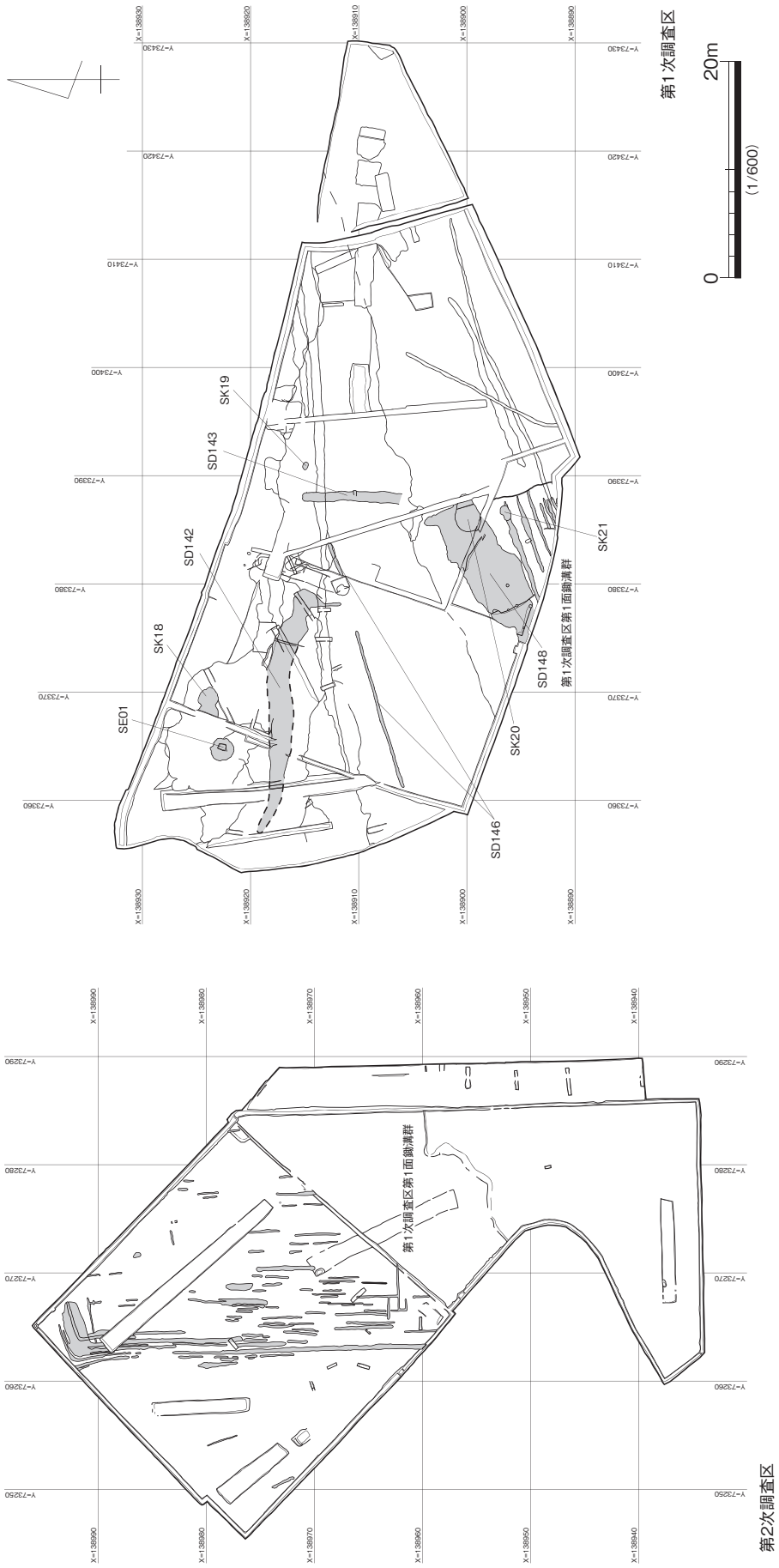
包含層２（第 70 図）

第 70 図は、第１次調査区の第２遺構面上面に堆積した包含層２出土の資料である。遺物は、図示した以外に弥生土器、土師器甕、須恵器、土師質土器皿・杯・足釜・擂鉢、黒色土器Ａ・Ｂ類碗等の小片が 80 点程度出土しており、大半は第２遺構面中世以前の遺構からの混入資料とみられる。

403 は土師質土器平高台の碗の底部片。外底面は回転ヘラ切である。**404** は黒色土器皿。ミガキを多用した精製品である。**405** ～ **408** は黒色土器Ｂ類碗の小片。いずれも高台形状より、12 世紀前葉前後とみられる。**409** は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の底部片。**410** は土師質土器擂鉢の小片。楠井編年Ⅱ -1 期前後に位置付けられる。**411** は瓦質土器擂鉢の口縁部小片。**410** より後出し、楠井編年Ⅱ -2 期か。**412** は備前焼擂鉢の口縁部小片。乗岡編年中世３に位置付けられる。**413** は備前焼大甕の口縁部小片。乗岡編年中世４に位置付けられ、本層堆積の上限を示す資料である。**414** は須恵器猿面硯の小片。周縁部は残存していない。硯面はやや磨滅を認めるが、墨痕は確認できない。SD161 等出土の他の資料と比して、焼成はややあまく、別個体とみられる。詳細な出土位置は不詳だが、本層が上述した SD161 上面に堆積していることからすれば、SD161 からの混入遺物と考えられる。**417** は鉄滓の小片である。

近世

当該期の遺構は、各調査区の第１面で検出した。第１次調査区では、調査区北西部で石積み井戸や土坑、区画溝とみられる遺構を検出し、建物遺構は確認できなかったが、屋敷地として利用されていた可能性が考えられた。また、調査区南半部を中心に、耕作痕と考えられる鋤溝群を検出し、畑地などとしても利用されていたと考えられる。第２次調査区では、ほぼ調査区全面において、鋤溝群が検出され、本時期には耕作地として利用されていたことが判明した。

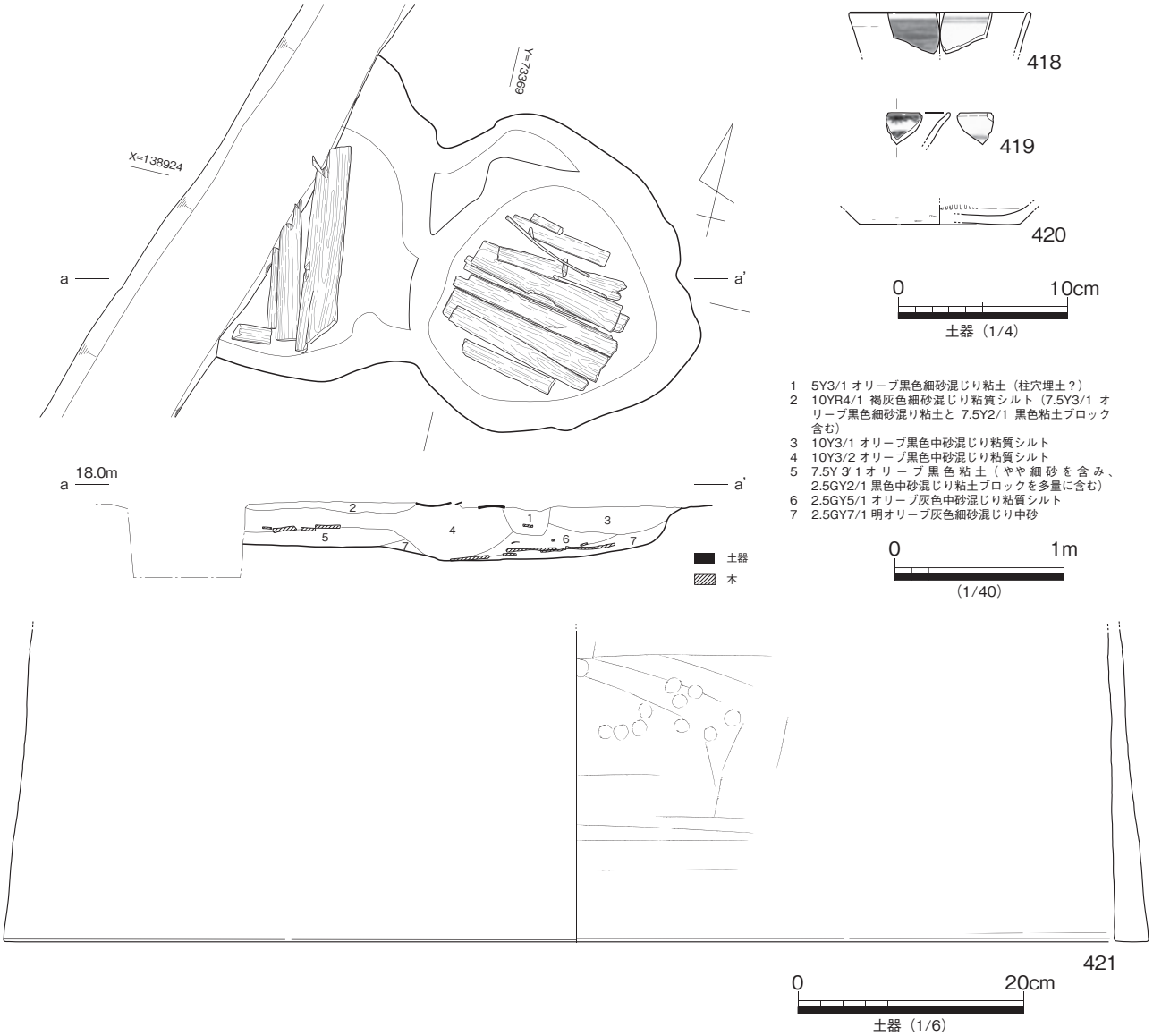


第71図　近世遺構配置図

土坑

SK18（第72図）

３区北西隅部で検出した土坑である。西端部は、調査区側溝に断ち切られ全形は不明である。平面形状は、径約1.7ｍの歪な円形土坑が２基、東西に連接して検出され、各々の底面付近に板材が据え置かれて出土し、板材の方向や出土レベルが両者で相違することから、本来は機能を等しくする２基の土坑が重複して掘り込まれていたと考えられる。土層の記録からは、西側の土坑の埋土（５層）が、東側の土坑の埋土（７層）を切るように堆積し、東側の土坑が先行する可能性が考えられる。また、上位層（４層）は両土坑を跨いで堆積しており、最終的には別の遺構が上面より掘り込まれた可能性も考えられるが、上位層（４層）は据え置かれた板材を乱すことなくその上面に堆積しており、調査

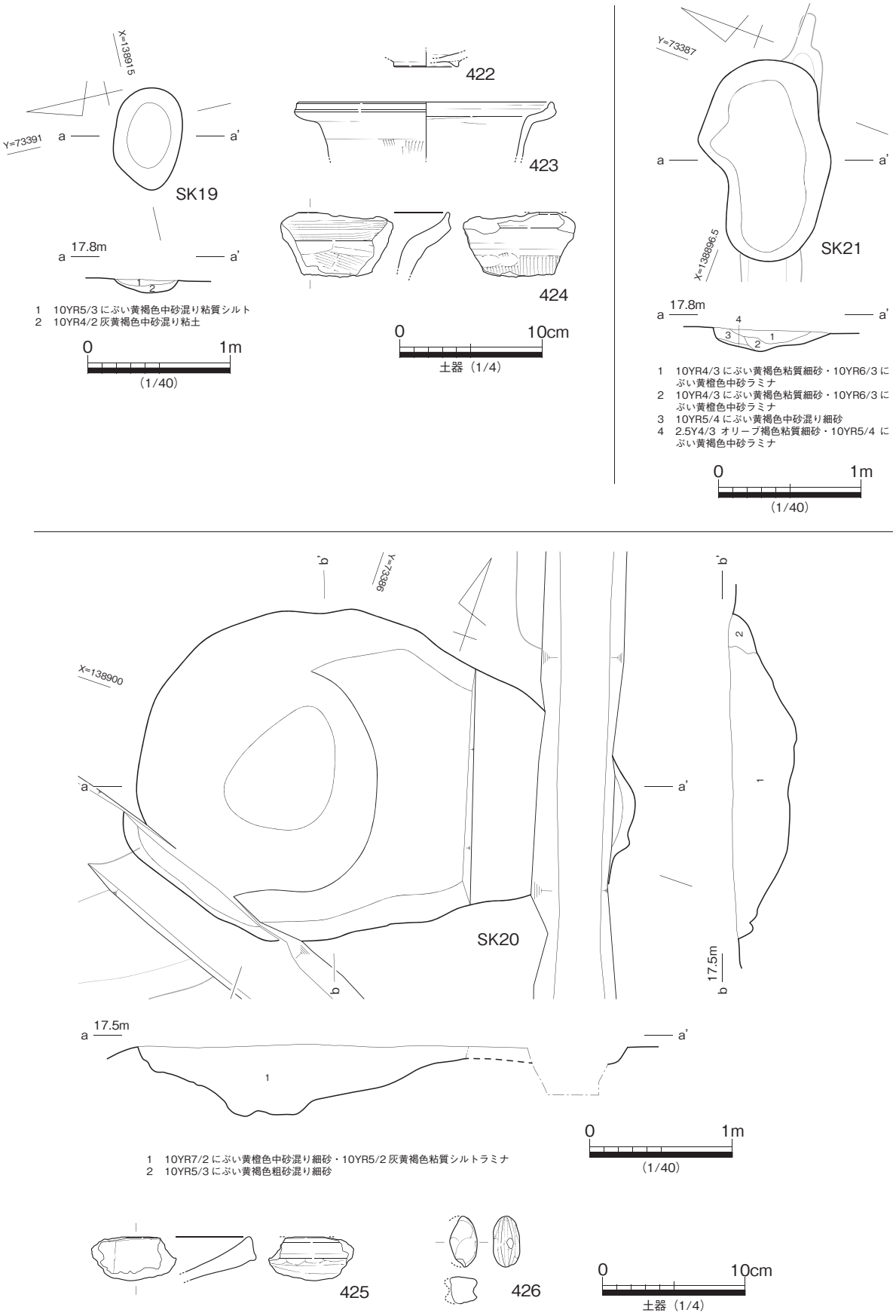


第 72 図　SK18 平・断面・出土遺物実測図

記録からは別の遺構の開削を断定することは困難である。残存深は、東側の土坑がやや深く 0.35 m を、西側の土坑は 0.27 m をそれぞれ測り、断面形は箱形を呈するとみられる。板材は、土坑底面にほぼ接して設置（東側土坑）されているか、人為的な置土の上面に設置（西側土坑）されており、板材は上面に何らかの構築物を据える際の土台としての機能が想定される。

遺物は、弥生土器や土師質土器甕、備前系焼締陶器擂鉢、肥前系染付磁器碗、平瓦の小片がコンテナ１箱程度出土した。なお、板材については調査時に廃棄したため、詳細は不明である。**418** は染付磁器碗の小片。呉須にはコバルトを使用する。**419** は肥前系染付鉢の口縁部小片。18 世紀後半～ 19 世紀初頭。**420** は、堺・明石産焼締陶器擂鉢の底部片。体部内面には１単位 10 条以上の卸目を施し、底部外面にハナレ砂が付着する。内面は使用によるマメツを認める。**421** は土師質土器井戸側の底部片である。図示した以外にも、同一個体とみられる小片が多数出土している。胎土中に角閃石や黒雲母粒を含み、高松市御厩焼の可能性がある。

上述したように２基の土坑が重複しているが、遺物の詳細な出土位置は不詳であり、遺物から両土坑



第 73 図　SK19 ～ SK21 平・断面・出土遺物実測図

の時期を特定することはできない。少なくとも **418** より、最終的な埋没は明治時代以降に位置付けられる。

SK19（第 73 図）

２区北部で検出した土坑である。SD161 よりは後出するが、包含層２との関係は不明であり、あるいは第２遺構面に帰属する遺構の可能性も考えられる。東西 0.69 m、南北 0.45 mを測り、平面形はやや歪な隅丸長方形を呈する。残存深は 0.09 mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は２層に細分され、黄褐色系シルトないし粘土が堆積していた。

遺物は、土師器甕、土師質土器碗、黒色土器碗等の小片が 10 点程出土した。**423**・**424** は下層出土、**422** は出土層位不明の遺物である。**422** は土師質土器碗の底部小片。**423**･**424** は土師器甕口縁部の小片。**423** は小形甕で、体部内外面には被熱などによる変色を認める。

出土遺物はいずれも 13 世紀を下限とし、既述した SD161 などからの混入と考えられる資料である。周辺で既述した SD144 以外に中世の遺構は認められず、当該期の遺構の可能性を考え報告する。

SK20（第 73 図）

２区中央南端で検出した土坑で､SD148 上面より掘り込まれている。東西 3.49 m､南北 2.27 mを測り、平面形はやや歪な楕円形を呈する。残存深は 0.5 mで、断面形は概ね椀底状を呈する。埋土は２層に細分され、大半は黄色系の細砂と粘質シルトのラミナ堆積により埋没する。

遺物は、図示した以外には土器小片７点が出土したのみである。**425** は土師質土器鍋の口縁部小片である。**426** は土師質焼成の有溝土錘である。図左半部を欠損する。

土師質土器鍋は楠井編年Ⅱ -2 期に位置付けられ、既述した包含層２からの混入の可能性が高い。SD148 より後出することから、17 世紀前葉以降の遺構の可能性を想定する。

SK21（第 73 図）

２区南西隅付近で検出した土坑で、後述する鋤溝 SD149 上面より掘り込まれている。東西 1.38 m、南北 0.88 mを測り、平面形は歪な隅丸方形状を呈する。残存深は 0.18 mで、断面形は皿状を呈する。埋土は４層に細分され、褐色系細砂が堆積する。

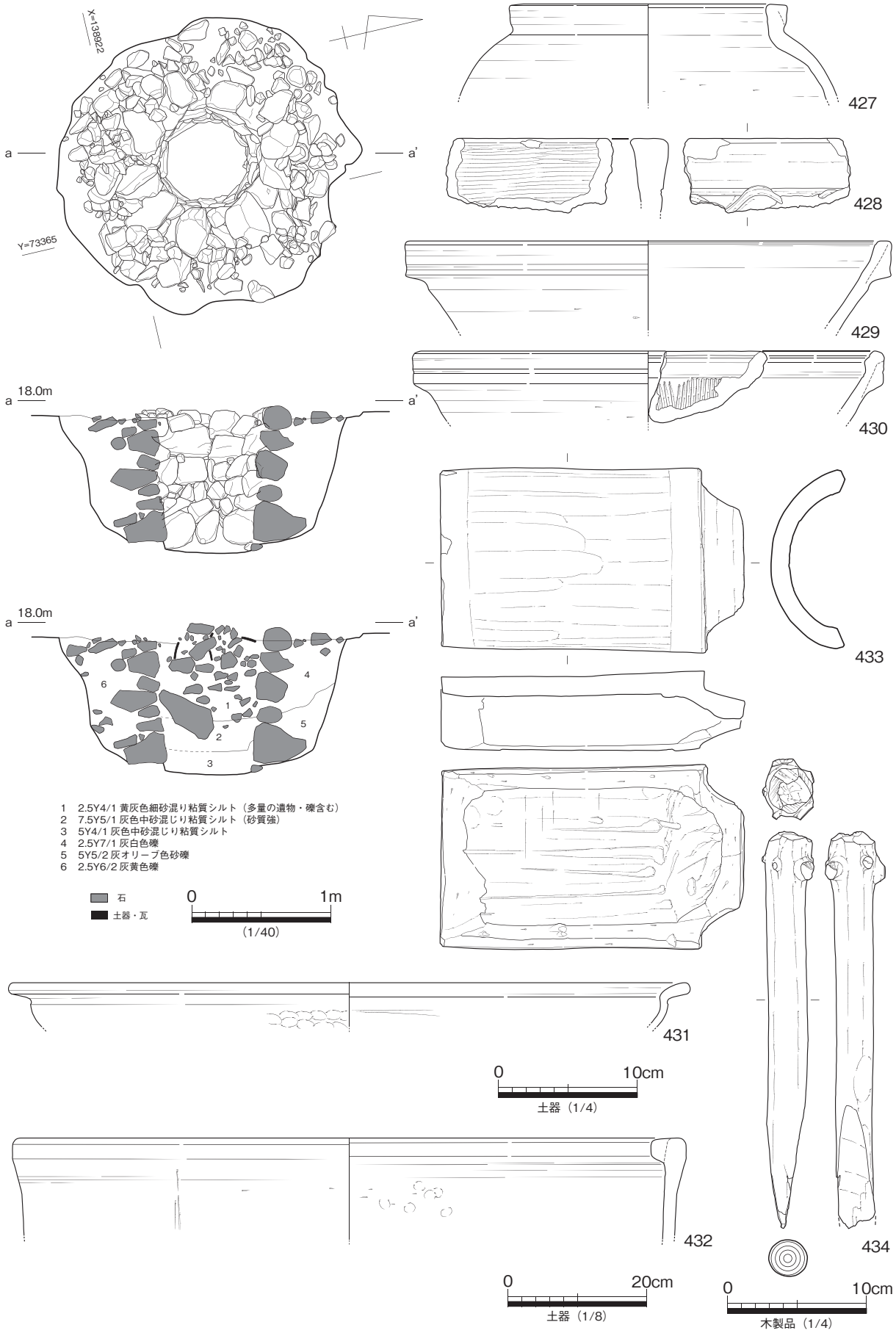
遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難だが、鋤溝より後出することから、近世以降の時期が想定される。

井戸

SE01（第 74 図）

４区北部で検出した井戸で､石組の井戸枠を伴う。掘り方は､径約 2.1 mの略円形を呈し､残存深は約 1.0 mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。掘り方底面は弥生時代の自然河川 SR02 を掘り込み、透水層に達しているとみられ､調査時には顕著な湧水がみられた。検出面で石組が露出し､井戸上面は削平を被っていることが考えられる。

石組は、掘り方のほぼ中央に、平面がほぼ円形に設置され、裏込めとなる拳大～幼児頭大程度の多量の石礫を含む砂礫により、掘り方との隙間を充填されていた。石組の内径は、検出面で 0.77 mを、底



第 74 図　SE01 平・断面・出土遺物実測図

面で 0.62 ｍをそれぞれ測り、開口部に向けて緩やかに開く。石組上端の石材は平坦ではなくやや高低差が認められ、石組内部の堆積土中より、石組に使用された石材と石種や大きさが近似する石材が多量に出土したことから、石組上部を崩しながら埋め戻したと考えられる。石材は、長軸 30 ～ 40㎝程度の深成岩の亜角礫を主体に、拳大～幼児頭大の深成岩や砂岩などの亜角礫や亜円礫が使用されている。いずれも遺跡周辺で入手可能な石材である。これら石材を、小口積みを主体に、上面より見て時計回りの方向に、螺旋状に５～６段以上が積み上げられていた。最下段の石材は、他の石材よりも大きな石材が選択され、さらに４段目にも比較的大きめの石材が使用されるなど、石積み方法に工夫がみられた。井戸側内には、３層に細分される堆積土がみられた。上層からは、上述したように多量の石礫や遺物が出土し、井戸廃絶後の埋め戻し土と考えられる。下位２層は、灰色粘質シルトが水平堆積し、井戸機能時の堆積層であろう。なお、集水施設、浄水施設とも認められなかった。

遺物は、石組内より土師質土器焙烙・火消壺、堺・明石系焼締陶器擂鉢、平・丸瓦の小片がコンテナ半箱程度、掘方埋土より中世土師質土器、堺・明石系焼締陶器擂鉢、肥前系染付磁器皿や平・丸瓦の小片がコンテナ１箱程度出土した。**428**・**430** が掘方埋土、**427**・**429**・**431** ～ **434** が石組内より出土した遺物である。

427 は土師質土器火消壺である。外面はやや磨滅を認める。**428** は同井戸枠の口縁部小片。**429** は、備前焼鉢である。外面に塗土を施す。**430** は、堺・明石産焼締陶器擂鉢である。体部内面に１単位 10 条以上の卸目を施す。器面は磨滅がやや顕著に認められる。**431** は土師質土器焙烙である。外面に炭化物が付着する。**432** は同大甕の口縁部小片。小片のため井戸側となる可能性もある。**428** と **432** は、いずれも外面と破断面の一部に炭化物の付着を認め、２次的な被熱の可能性が高い。また、上記した土師質土器４点は、胎土中に角閃石や黒雲母粒を含み、高松市御厩焼の可能性がある。**433** は完形の丸瓦である。同規格の完形品が他に３点出土している。全長 21.8㎝の小型品である。

434 は、長さ 28.5㎝のマツ属複維管束亜属の芯持材を用いた木杭状の木製品。下端部を表裏２方向より削り尖らせる。上端２～３㎝下位で、周囲ほぼ同位置にある枝をいずれも５㎜程残して切り落としており、意図的に部位が選択された可能性が考えられる。また、上端面には４方向の切断痕を認める。

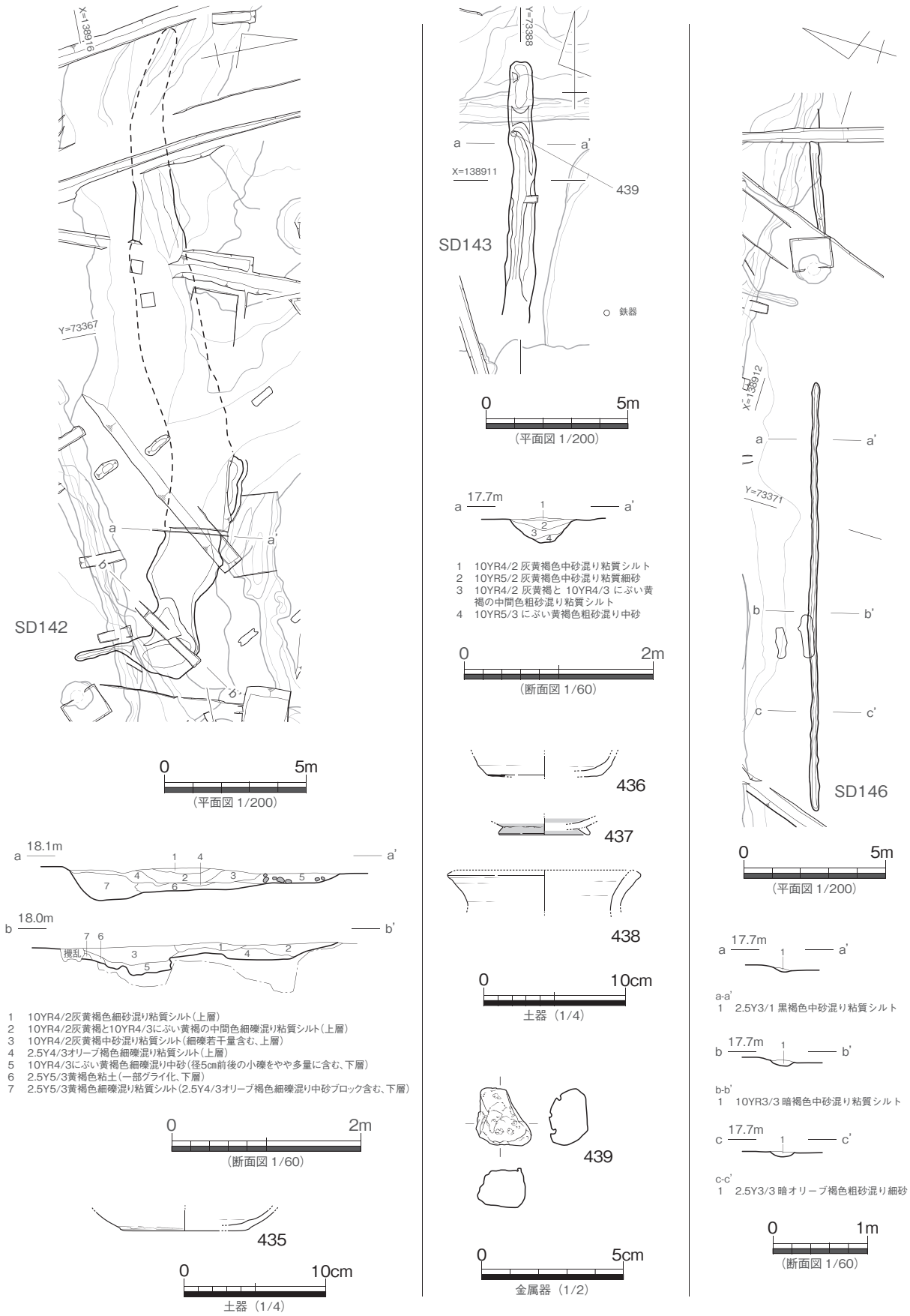
掘方出土の **430** より、井戸の開削時期の上限は 19 世紀前葉～後葉に求められる。**429** を除いて、確実に明治期に下る資料は出土しておらず、比較的短期間で廃絶した可能性も考えられる。

溝

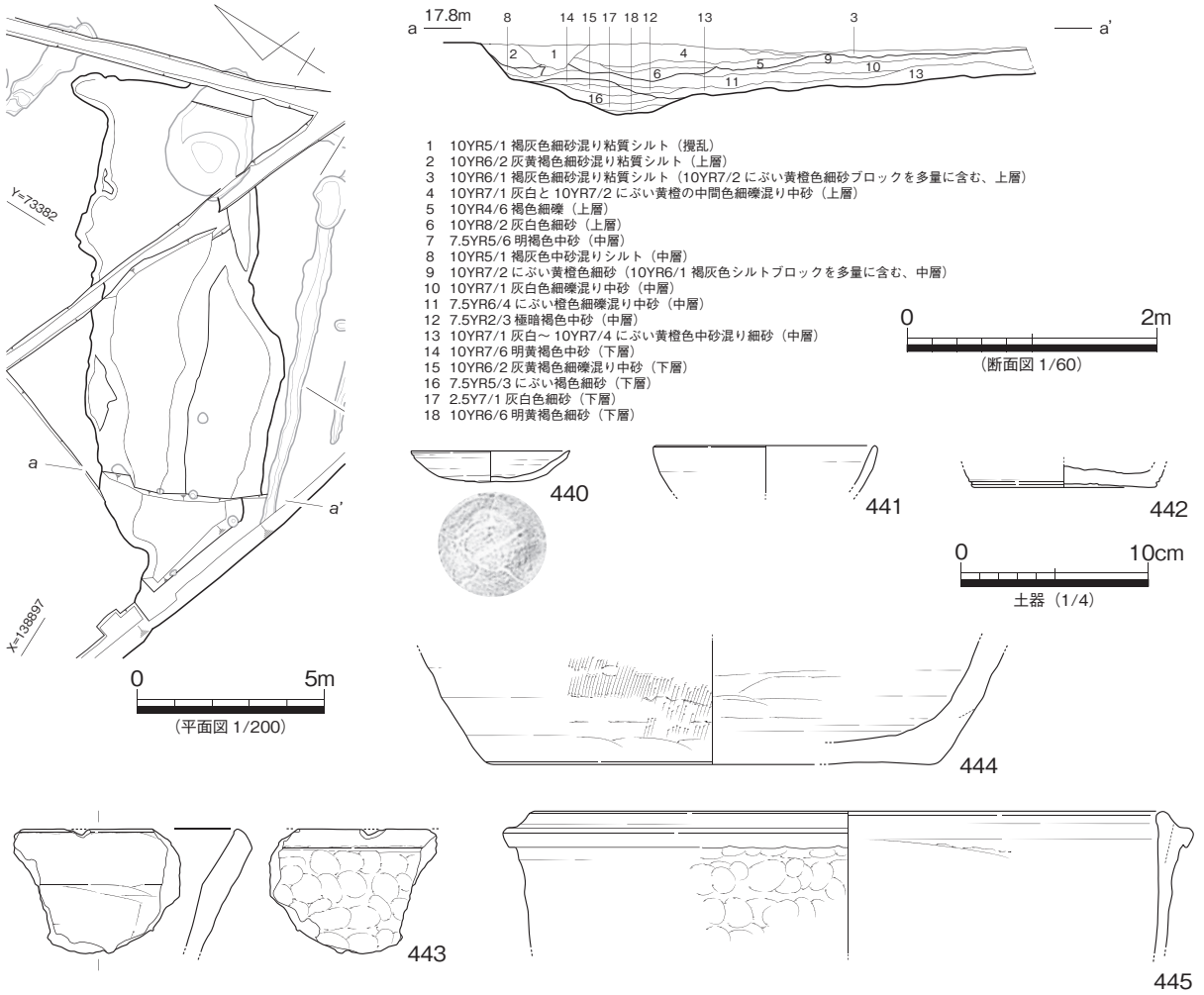
SD142（第 75 図）

３・４区北半部で検出した東西溝だが、遺構の残存状況は悪く、断続的にしか検出できていない。概要報告（香川県埋蔵文化財センター 2018）に掲載された図を参考に、遺構の平面プランを復元して示した。やや蛇行して東西に走行し、東西両端を結んだ流路方向はN 81.69° Wであった。北に上述した SK18、SE01 が位置し、建物遺構は検出されていないが、屋敷地の南辺を区画する区画溝の可能性も考えられる。検出面幅 1.26 ～ 2.24 ｍ、残存深 0.3 ｍ前後で、断面形は南側がやや深く掘り込まれた不整な逆台形状を呈する。溝底面の標高は、西半部で 17.8 ｍ前後を、東端部で 17.5 ｍ前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は７層に細分され、堆積状況より上下２層に大別が可能である。上層は下層を掘り込んで堆積しており、改修の可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器甕、土師器甕、須恵器杯、黒色土器碗、土師質土器皿等の小片が少量出土したのみ



第 75 図　SD142・SD143・SD146 平・断面・出土遺物実測図



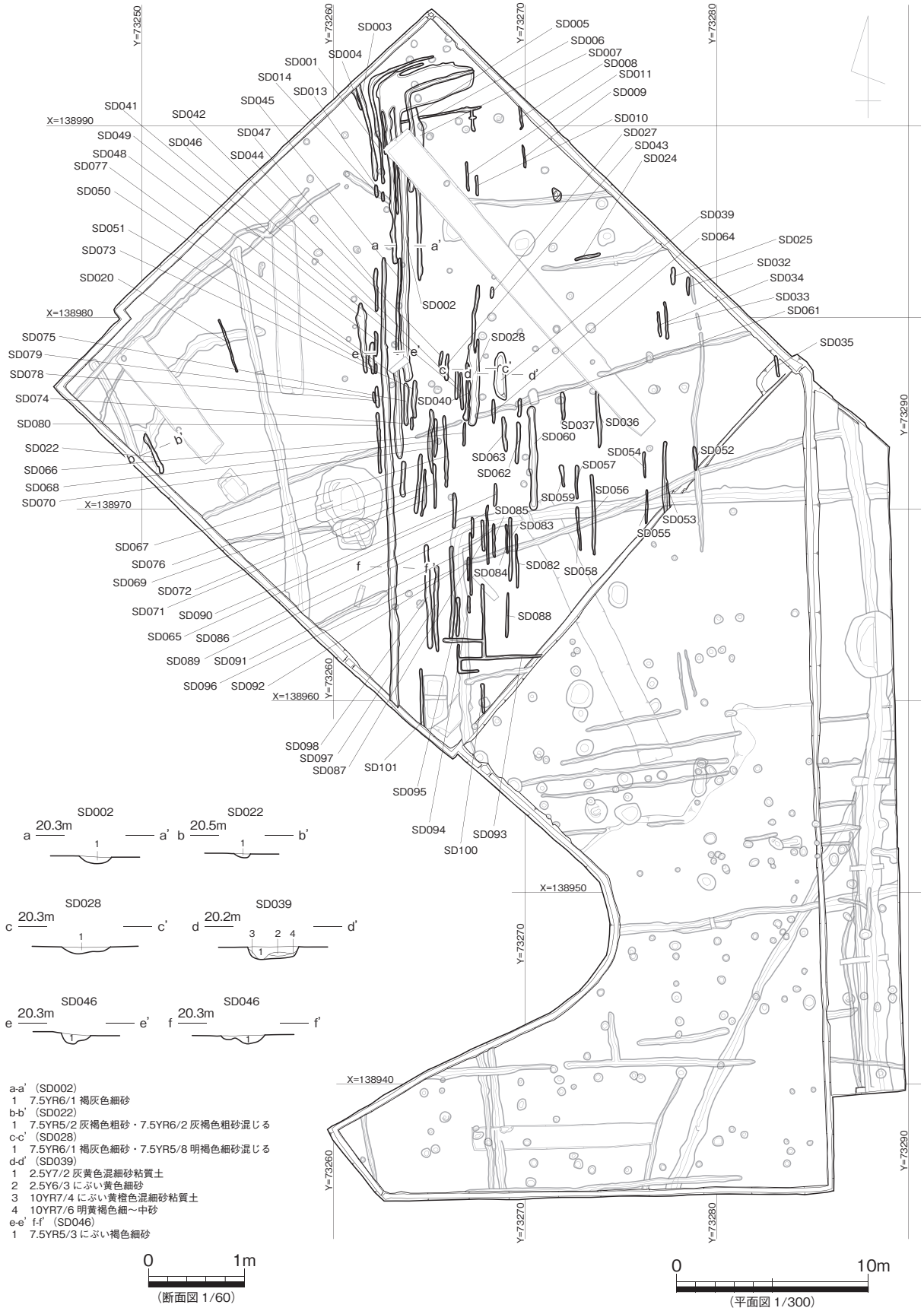
第 76 図　SD148 平・断面・出土遺物実測図

である。出土遺物の大半は、重複する SR03 などの遺構からの混入の可能性が想定される。また、出土遺物が示す時期の下限は中世ではあるが、埋土の特徴を根拠とする調査時の所見（香川県埋蔵文化財センター 2018）に従い、当該期の遺構として報告する。**435** は土師質土器杯の底部片。10 世紀代に位置付けられ、混入資料と考える。

SD143（第 75 図）

２区西半部で検出した南北直線溝で、南北両端は調査区内で途切れる。流路方向N 0.73° E と、ほぼ正方位に配される。検出面幅 0.82 ～ 1.06 m、残存深 0.3 m前後を測り、断面形はU字状を呈する。溝底面の標高は、北端部で 17.4 m前後を、南端部で 17.3 m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していたと考えられる。埋土は４層に細分され､黄褐色系の中砂や粘質シルトがレンズ状に堆積していた。

436 は土師質土器杯の底部片。外面には煤が付着する。**437** は黒色土器Ｂ類碗の底部片である。**438** は灰釉陶器壺の口縁部小片。**439** は鉄滓の小片。全体にやや磨滅を認める。本遺構も、埋土の特徴を根拠とする調査時の所見では当該期の遺構として報告（香川県埋蔵文化財センター 2018）されており、掲載した遺物は重複する遺構からの混入資料と考える。



第 77 図　第２次調査区第１面鋤溝群平・断面図

SD146（第 75 図）

２・３区中央部を東西に走行する直線溝である。SD161 上面より掘り込まれるが、本遺構も包含層２との関係は不明であり、あるいは第２遺構面に帰属する遺構の可能性も考えられる。東西両端は調査区内で途切れ、延長約 24.3 ｍを検出した。流路方向Ｎ 73.03° Ｅに配され、後述する鋤溝群と概ね並走する。検出面幅 0.24 ｍ前後、残存深 0.05 ～ 0.07 ｍと浅く、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、西端部で 17.5 ｍ前後を、東端部で 17.4 ｍ前後をそれぞれ測り、高低差より北東方向へ流下していたと考えられる。埋土は、褐色系粘質シルトの単層であった。

遺物は、弥生土器壺や器種不詳の土器片等が 30 点程度出土した。大半は、近接する SR02・SR03 からの混入とみられる弥生土器小片であるが、１点のみ土師質土器足釜の体部片を確認した。さらに、流路方向が１次調査区南半の近世鋤溝群などの方向と概ね一致することなどより、詳細な時期を特定することは困難だが、当該期の遺構の可能性を考え報告する。

SD148（第 76 図）

２区南西部で検出した溝で、西端は調査区外へ延長する。平面記録では、東端は調査区内で途切れるとするが、調査時の写真（図版 10）では東の隣接する調査区へ延長するようであり、埋土にも流水堆積とみられる砂層の堆積が下位層を中心に記録され、閉鎖的な遺構とするよりも、直線溝とするのが妥当のように思える。上面より既述した SK20 が掘り込まれる。流路方向は概ねＮ 64.73° Ｅに配された東西直線溝で、流路方向より既述した SD161 との関係も想定されるが、時期的な隔たりもあり不詳である。検出面幅 4.52 ～ 4.97 ｍ、残存深 0.55 ｍを測り、断面形は歪な逆台形状を呈するとみられる。埋土は、18 層に細分され、上・中・下層の３層に大別して遺物が取り上げられている。平面形状や埋土の堆積状況より、複数の遺構の重複のほか、改修の可能性が想定される。

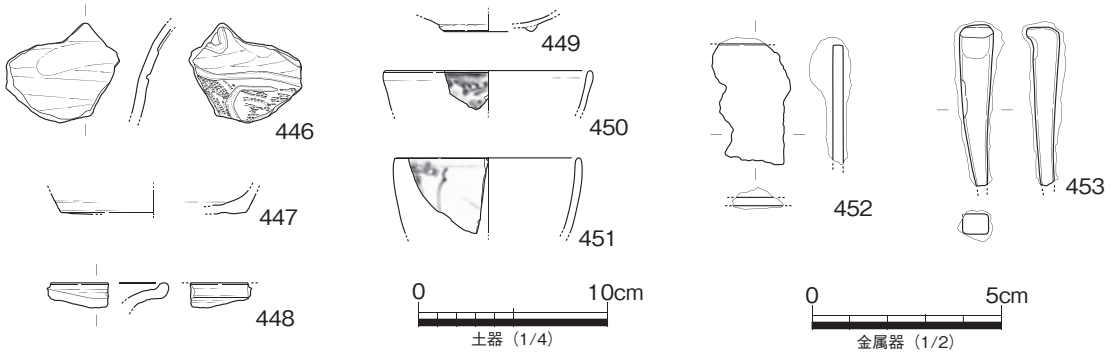
遺物は、弥生土器甕や須恵器、土師質土器皿・杯・碗・足釜・鍋、十瓶山周辺窯産須恵器碗、和泉型瓦器碗、備前焼甕等の小片がコンテナ 1/4 箱程度の他、サヌカイト剥片１点（0.59 ｇ）が出土した。**440**・**443** が上層、**442** が下層、その他は層位不明の遺物である。**440** は土師質土器皿である。口縁部の一部を欠損する以外、ほぼ完形に近く出土した。**441** は同杯口縁部小片。**442** は同杯底部片。**443** は同鍋、**445** は同足釜である。**443** と **445** の外面には煤が付着する。**444** は備前焼甕の底部片。包含層２や SX05 からの混入とみられる資料が多く出土しているが、**440** と **443** より 16 世紀代には埋没の過程にあったと考えられる。

耕作痕（第 77 ～ 79 図）

当該期の耕作痕は、第１次調査区（２区）と第２次調査区（５～７区）において検出した。

５区では、第１面で複数条の鋤溝群を検出した。６・７区にも延伸するが、平面的な調査は実施していないため、以下では５区の調査成果をもとに報告する。また、第１面で検出された流路方向が一定な小溝を鋤溝として報告するが、SD039 のように鋤溝以外の遺構が混在している可能性は否定できない。

遺構は、調査区東半部を中心に検出され、西半部では希薄である。第１面は、調査区西半部が東半部と比して約 0.1 ｍ高く、上記した調査区東西での遺構の広がりの相違は、後世の遺構面の削平が影響していると考えられる。また、この段差は調査区がかつて東西に２筆の耕作地に分筆されていたことを示していよう。



第 78 図　第２次調査区第１面鋤溝群出土遺物実測図

調査区東半部の溝は、南北溝を主体として一部東西溝を認める。また、SD002 や SD005 などは、北端部が東へ屈曲するが、これは調査区北側に南西より伸長した低丘陵が所在し、地境となるためと考えられる。南北溝は、主軸方向Ｎ 1.3° Ｗ前後とほぼ正方位に配され、検出面幅 0.1 ～ 0.3 ｍ、残存深 0.05 ～ 0.12 ｍ、断面形は皿状ないし箱形を呈する。埋土は多くが褐色系細砂の単層であった。溝は切り合うものや接するように配されたものがあり、複数時期の溝が混在していることが考えられる。

調査区西半部の溝は、SD020 と SD022 の２条が検出されたのみである。主軸方向Ｎ 19.4° Ｗ前後に配され、東半部の溝と方向が大きく相違する。検出面幅 0.1 ～ 0.2 ｍ、残存深 0.03 ｍ前後、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色粗砂が堆積し、東半部の溝とやや相違する。

遺物は各溝より土師質土器等の小片が少量出土した。出土遺物の大半を占めるのは、**447** の土師質土器杯や **449** の和泉型瓦器碗のように、第２面の中世遺構からの混入資料である。また、**446** は SD046 出土の縄文土器深鉢で､SR01 からの混入資料であろう。**450** は SD046 出土の肥前系染付碗の口縁部小片。**451** は SD093 出土の同丸形碗。**448** は、SD083 出土の同施釉陶器鉢の口縁部小片で、内外面に灰釉を施釉する。**452** は SD046 出土の板状の鉄器片で、小片のため器種を特定できない。**453** は SD100 出土の角釘。下端部等を折損する。遺物量は乏しいが、肥前系陶磁器が本鋤溝群の帰属時期を示す遺物と考えられ、17 世紀中葉前後には耕地として利用されていた可能性が考えられる。

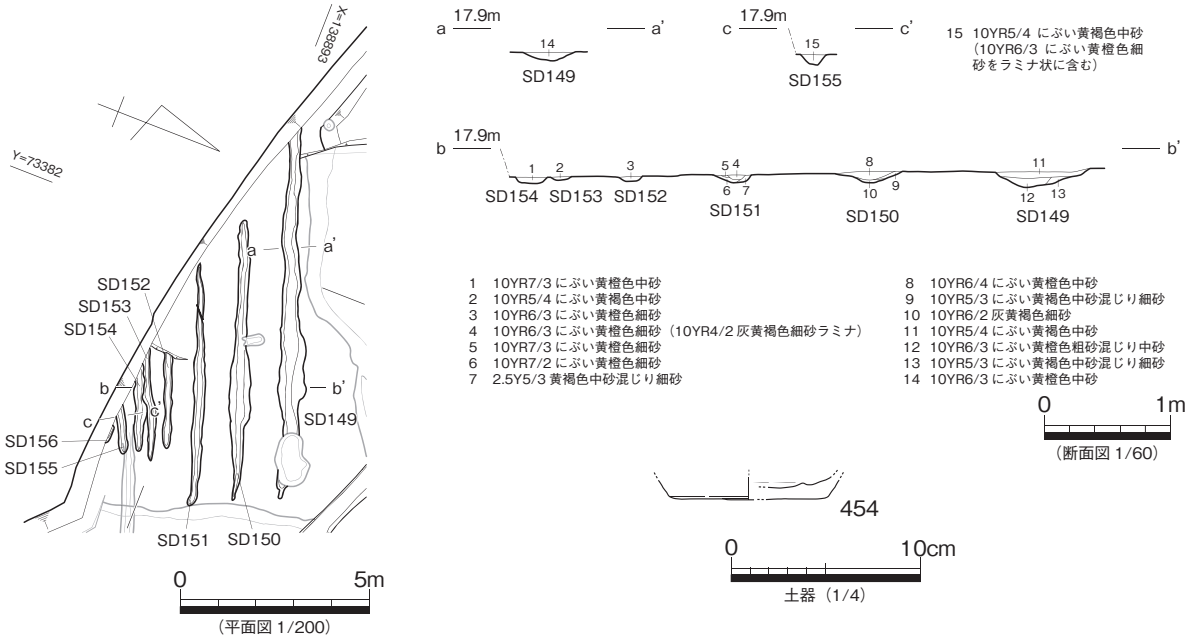
２区では､南西隅で８条（SD149 ～ SD156）の鋤溝を検出した。既述した区画溝 SD148 の南に配され、SD148 と主軸方向が概ね合致することから、同時期の遺構の可能性が高いと考えられる。溝は、主軸方向Ｎ 70.0° Ｅ前後に配され、検出面幅 0.2 ～ 0.6 ｍ、残存深 0.02 ～ 0.12 ｍで、断面形は皿状を呈する。埋土はにぶい黄橙色細～中砂を中心に、北半部の溝を中心に数層に細分されるものも認められた。北半の溝 SD149 ～ SD151 は、溝幅が広く、埋土が複数層に細分され、南半部の溝 SD152 ～ SD156 は、溝幅が狭く単層で、一部に重複する溝が認められ、溝の間隔も狭いことから、複数時期の溝が混在している可能性が考えられる。

454 は、SD151 出土の土師質土器杯の底部片で、重複する包含層２などからの混入資料であろう。本溝群の時期を直接示す遺物に乏しいが、上述したように SD148 と流路方向が概ね合致することから、本調査区周辺が中世末～近世初頭には耕作地として利用されていたと考えられる。

遺構外出土の遺物（第 80・81 図）

第 80・81 図に掲載した資料は、各調査区の機械掘削や遺構検出時などで出土した遺物である。

455 は、縄文土器浅鉢の口縁部の小片。**456** は弥生土器長頸広口壺である。**457** は同壺の底部片。外



第 79 図　第 1 次調査区第 1 面鋤溝群平・断面・出土遺物実測図

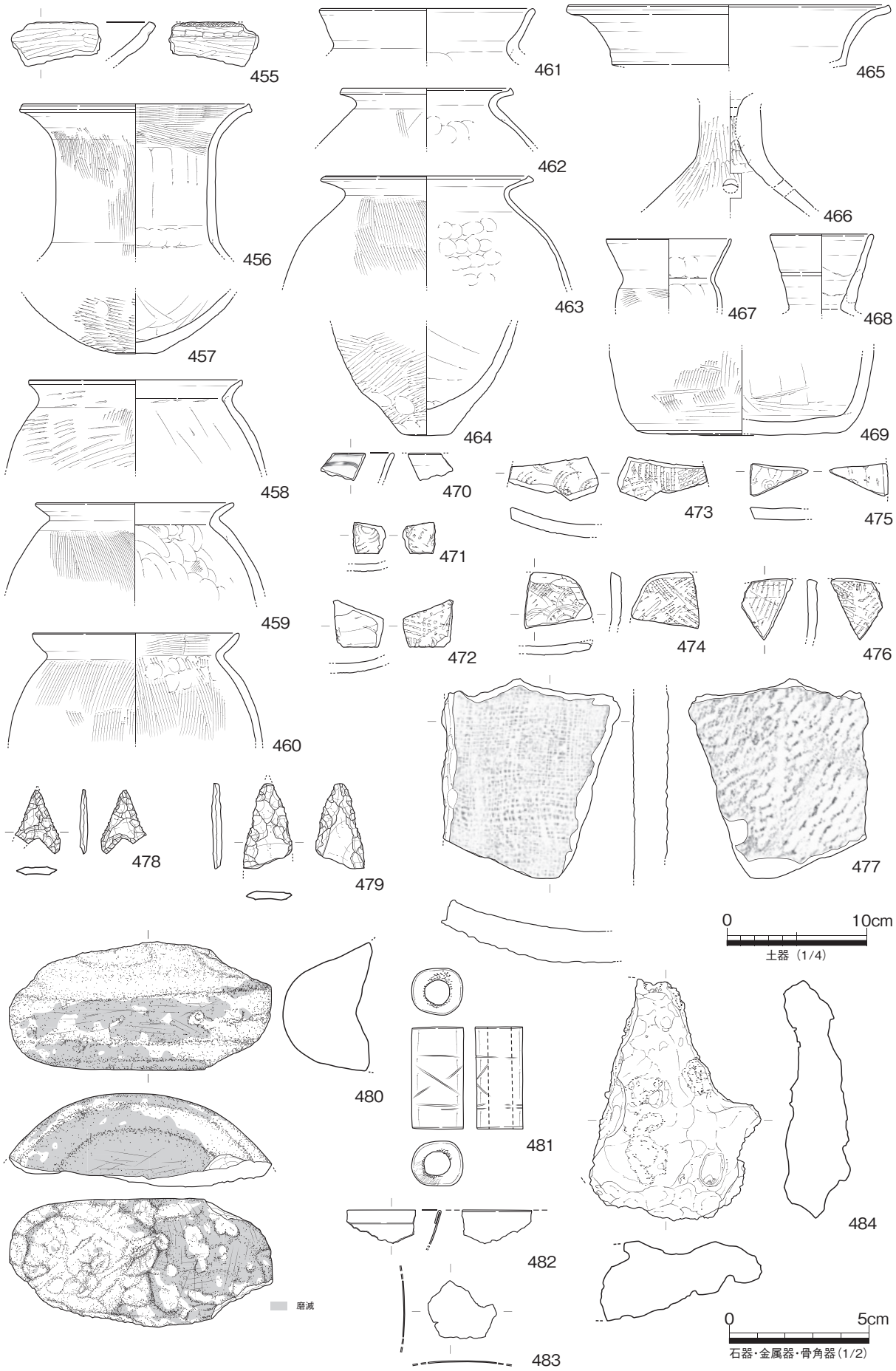
面には左上がりの螺旋状のタタキ調整を施す。**458** は口縁部タタキ出しの甕である。**459** は体部外面右下がりのハケ調整の甕で、古墳時代前期前葉に位置付けられる可能性がある。**460** は球形に近い体部を呈するハケ甕。**461** は古式土師器甕で、いわゆる布留系甕の口縁部片である。**462**・**463** は古式土師器甕で、いわゆる東四国系甕（蔵本 2001）。いずれも胎土中に多量の雲母粒を含む。**464** は弥生土器甕の底部片。体部外面には螺旋状のタタキ調整を施す。**465** は古式土師器高杯の杯部片。胎土中に角閃石粒とみられる黒色細粒を含み、搬入土器の可能性が高い。**466** は高杯の脚部片。裾部に円形透孔を１孔のみ認める。**467** は古式土師器小型丸底土器である。上述した遺物は、いずれも５～６区を中心に出土した資料で、本来 SR01 に帰属する遺物と考えられる。

469 は、２区機械掘削時に出土した土師器の底部片である。鉢か平底の甕の可能性があるが、小片のため器種を特定できない。内面の一部に煤が付着する。**470** は、１区遺構面精査時に出土した龍泉窯系青磁Ⅰ類碗の口縁部小片である。

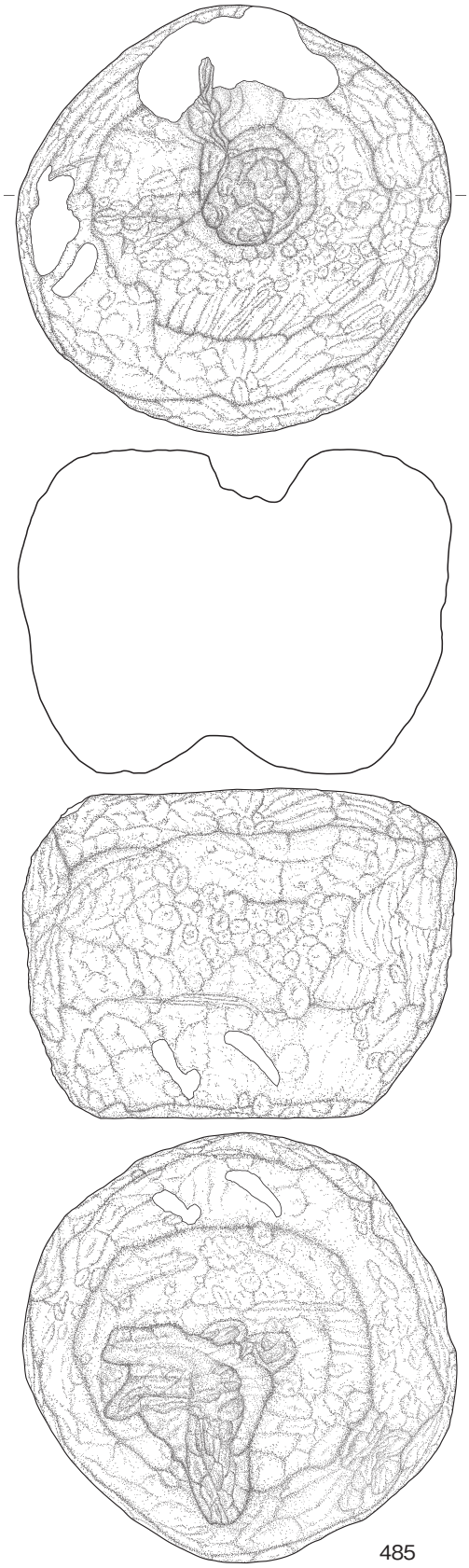
471 ～ **476** はいずれも須恵器猿面硯とみられる小片で、**471** は２区 SD161 周辺の上面精査時に、**472**・**473** は２区攪乱、**474**・**476** は２区東端 SD144 周辺、**475** は２区水田攪乱とされる土層よりそれぞれ出土した。詳細な出土位置は不詳だが、１・２区周辺に出土が集中し、本来は SX01 などの古代の遺構に帰属する遺物と考えられる。**471** は、周縁部は残存していない。背面は格子タタキ後丁寧に削り調整が施される。硯面は、布目痕や当て具痕を認め、最終的にはナデ調整が施される。**475** の背面は丁寧に削り調整が施され、小片だが格子タタキ痕は認めない。硯面もナデ調整が施され、当て具痕は不明。僅かな窪みに布目痕を認める。

477 は、７区の調査時の遺構名で SD7017 出土とされる須恵質焼成の平瓦片だが、平面図で遺構の位置を特定できなかった。側面に布目痕を認める一枚作りの平瓦である。

478・**479** は、いずれも５区第２面精査時に出土した打製石鏃である。本資料も本来は SR01 に帰属する遺物であろう。**480** は、２区北西隅の暗灰色粘質砂層より出土した、砂岩円礫を利用した磨石である。隣接する調査区壁面の土層図に該当する堆積層は記載されず、出土遺構などについては不詳のため、



第 80 図　遺構外出土遺物実測図 1



第 81 図　遺構外出土遺物実測図２

遺構外出土の遺物として報告する。図下半部を大きく破損し、周縁と広端面の一部に使用痕が認められ、また破断面の一部にも使用痕を認める。**481** は、４区攪乱出土の骨製品である。長さ 3.63cmの円筒状を呈し、中央部に長径 0.97 cmの円孔が貫通する。外面は丁寧に研磨され､光沢がある。側面には、上下２条の横線による区画の間にＸ字の線刻が施される。用途は不明である。

482 は、２区北西隅の暗青灰色粘質砂と砂質土の境付近より出土したとされる銅製品だが、本資料も隣接する調査区壁面の土層図に該当する堆積層は確認できず、正確な出土位置や層位を特定できない。おおよその出土位置から、２章で既述した２区北壁 28 層の黒色土器碗 **1** が出土した不明遺構に帰属する可能性も考えられる。厚さ 0.1㎜の銅板の端部を約５㎜片方に折り返しており、この部分を口縁部として図示した。同様の口縁部を有する銅製品には、丸底碗や平底碗、小盤が知られており、残存部の形状から碗の可能性が高いが、小片のため器種を特定できない。既述したように、SD161 出土の銅製品 **483** と同一個体の可能性が高く、それを前提とすると碗の可能性が想定される。**484** は、６区南壁側溝掘り下げ中に出土した椀形鍛冶滓の破片である。

485 は、１区包含層出土の角礫凝灰岩製の五輪塔水輪である[註1]。詳細な出土層位・位置は記録されていない。ザクロ石等を含むいわゆる火山石である。上・下面をほぼ平坦に削り、中央部からややずれた位置に、径８～９cm程度の枘穴を穿つ。火山石製水輪は、上面が蒲鉾状に膨らみ、中央に枘が削りだされるのが一般的とされ、本資料のような枘穴とするものは、その位置がやや偏ることからも、後世の追刻の可能性が考えられる。時期は 15 ～ 16 世紀代に位置付けられる。

補注

1　火山石製五輪塔の記載については、石材などを含め大川広域事務組合松田朝由氏よりご教示を得た。記して感謝申し上げる。

参考文献

香川県埋蔵文化財センター 2018『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 28 年度』
鐘方正樹 2003『井戸の考古学』，同成社
蔵本晋司 2001「四国島における畿内系土器の動向（予察）」『庄内式土器研究』ＸＸＶ，庄内式土器研究会

報告書は巻末に一括して掲載する。

第４章　自然科学的分析の成果

第１節　金属資料の鉛同位体比

１．はじめに

香川県東かがわ市三殿北遺跡（みどのきたいせき）から出土した資料（銅鋺）に関して自然科学的な調査の依頼を受けた。本資料に関して鉛同位体比法を用いた材料産地の推定を行い、資料の意義を推定する。

２．資　料

本資料は香川県東かがわ市の三殿北遺跡の２区 包含層から出土した金属片で、「銅鋺」と推定されている。時代は発掘状態からは推定できず、弥生時代から近世までの可能性があるという[＊1]。この資料の表面化学組成が蛍光Ｘ線法で測定されており、主元素は錫で 80% 以上と高く、他に鉄 10 %、銅 ５% 程度となっている（図版１･表１）。このことから､資料は錫製品のようにも推測される。しかし銅が ５% 含まれていることから、青銅（銅と錫の合金）表面の銅が溶出されたのかもしれない。錫が主成分で鉄が 10% 含まれるという組成に関して、錫 - 鉄合金で錫 50% 以上の合金組成はあり得ない[＊2]。このことから鉄は外部から表面付着した可能性もあり、鉄の付着と銅の溶出とが起こっていたのかもしれない。

遺跡名	遺物名	Si	P	Fe	Ni	Cu	Zn	As	Zr	Nb	Ag	Sn	Pb	Bi	資料番号
三殿北遺跡	銅鋺	1.373	0.163	10.844	0.038	5.074	0.053	0.045	0.0037	0.003	0.404	81.84	0.085	0.0072	NS1HC41
	測定精度	± 0.087	± 0.034	± 0.078	± 0.008	± 0.039	± 0.006	± 0.005	± 0.001	± 0.001	± 0.009	± 0.11	± 0.005	± 0.004	

ハンドヘルド蛍光Ｘ線分析計 VANTA M series　装置仕様：管電圧 50kV、800 μ A、Rh ターゲット、SOD 検出器、AlloyPlusExtra メソッド、照射径 8mm、FP 法

表１　試料（銅碗）の蛍光Ｘ線分析結果（mass%）

３．科学的調査

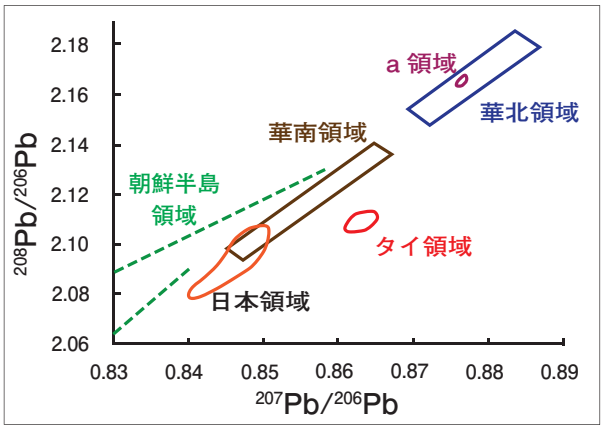
調査には資料の材料となった銅あるいは錫の産地を推定できる自然科学的な方法として鉛同位体比法を用いる[＊3、4]。鉛同位体比法は資料の銅あるいは錫に含まれていた鉛、あるいは製品を作る際に金属の強度などを考慮して、加えられた鉛の同位体比から、銅あるいは錫の産地を推定する方法である。産地の情報は資料の特徴を明らかにする上で有用である。本資料の鉛濃度が低いことから、鉛は製品を作る際に加えられたのではなく、当初から含まれていた元素と推定される。

3.1　鉛同位体比法の原理

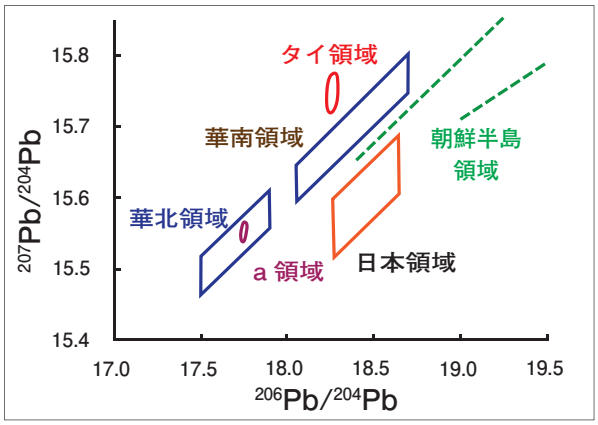
今までの研究で、鉛には重さが異なる４種の同位体（^{204}Pb, ^{206}Pb, ^{207}Pb, ^{208}Pb）が混在しており、鉛同位体の中で鉛 -206(^{206}Pb) はウラン -238(^{238} Ｕ) から、鉛 -207(^{207}Pb) はウラン -235(^{235} Ｕ) から、鉛 -208(^{208}Pb）はトリウム -232(^{232}Th) から自然の放射壊変で生成されることがわかっている。地球が生まれた時に、岩石などの中に他元素とともに鉛がウラン・トリウムと共存していれば鉛の同位体は時間とともに生成され、既にあった鉛に付加される。地球の歴史のあるときに、地殻変動や火山活動で鉛が硫化物や塩化物などとして流動し、これら岩石から抽出されて鉛鉱床を生成すると、この時に鉛はウラン･

トリウムから切り離されるので、鉛同位体の量と比が定まり、もう変化しない。各地域の鉛鉱床の鉛同位体比は鉛鉱物を作った岩石中のウラン・トリウム・鉛の量比の違い、および地殻変動などの鉛鉱床を形成する時期が一般的には異なるので、各鉛鉱床でそれぞれ異なった値となる。すなわち東アジア地方では第 82 図 (A 式図：$^{207}Pb/^{206}Pb$-$^{208}Pb/^{206}Pb$) と第 83 図 (B 式図：$^{206}Pb/^{204}Pb$-$^{207}Pb/^{204}Pb$) で示されるような地域毎に鉛が分布する。両図は含まれる鉛同位体が異なるので、少々意味が異なっている。両図ではそれぞれの地域が日本、朝鮮半島、中国華北・華南などの領域として示される。未知資料の鉛同位体比を測定し、これらの図に載せた場合、両方の図で設定された同じ領域に含まれれば、その地域で生産された鉛が含まれている可能性が高いと示される。もちろん例外はある。鉛同位体比の表現方法として各種あるが、第 82 図 ($^{207}Pb/^{206}Pb$-$^{208}Pb/^{206}Pb$：A 式図）と第 83 図 ($^{206}Pb/^{204}Pb$-$^{207}Pb/^{204}Pb$: B 式図）の方式で示されることが多いので、本報告でもこの方式で表現する。この原理を用いて文化財資料に含まれる鉛の同位体比から銅や鉛の生産地を推定する方法を鉛同位体比法と称している [*5, 6]。

地殻変動で鉛とともに、銅・亜鉛・錫などの元素も類似して挙動すると言われ、銅製品に含まれる鉛は一般的には銅鉱床を生成した鉱床生成活動に付随した鉛で、銅鉱床を作る際に銅と鉛は類似した挙動を示す。最終的には銅と鉛は別鉱床として生成されるが、鉛は銅鉱床の近くに鉛鉱床を形成する傾向がある。それ故、銅を精錬した際に、昔の方法では共存した鉛を除ききれず、鉛は精錬した銅に少量含まれていることが普通である。また、銅あるいは青銅に鉛を加えて金属の性質を変えることがあるが、鉛は安価に精錬できるため、遠くから運ばれることは少なく、銅鉱山の近くの鉛鉱山で精錬された鉛を利用することが多い。どちらにしても、銅鉱床の近くで採取された鉛であるため、鉛の同位体比から利用された鉛あるいは銅の産地を推定できる。



第 82 図　鉛同位体比を用いた産地推定の概念図（A 式図）



第 83 図　鉛同位体比を用いた産地推定の概念図（B 式図）

3.2　鉛同位体比の測定方法

本資料の材料産地を推定するために鉛同位体比法を利用する。鉛同位体比を測定する方法として、表面電離型質量分析法、二重収斂型 ICP 質量分析法などあるが、本研究では表面電離型質量分析法を用いる。この方法で鉛同位体比を測定するために本体から採取した微小量部分を使用する。表面電離型質量分析計で鉛同位体比を測定するときに鉛の純度が高ければ高いほど精度が上がる故、鉛を単離する。測定用に採取した微少量 (～ 1mg) の試料に次のような化学操作を行って鉛を分離する。

試料を石英製ビーカーに入れ、硝酸 0.3ml を加え、1 日放置して資料を溶解する。試料が溶解した後、

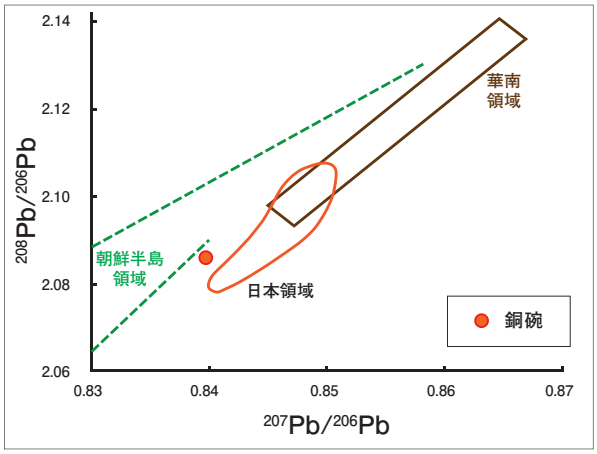
蒸留水で 5—10ml に希釈し、電極に白金板を利用し、直流電圧 2V で電気分解する。鉛は酸化され、二酸化鉛として陽極の白金電極上に析出するので、この白金電極を取り出して硝酸と過酸化水素水で鉛を還元溶解する。この溶液の鉛濃度を ICP 法で測定し、0.2μgの鉛を分取する。この分取した鉛にリン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に載せ、加熱固化する。以上のように準備したフィラメントを日鉄住金テクノロジー社に設置されている質量分析計（Finnigan MAT262）の中にセットし、測定諸条件を整え、フィラメント温度 1200℃で鉛同位体比を測定する。測定値は同一条件で測定した標準鉛試料 NBS-SRM-981 で規格化する（*7）。

3.3　鉛同位体比測定の結果

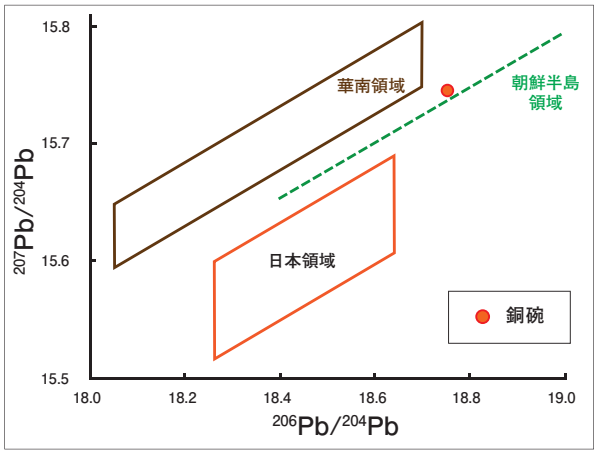
香川県東かがわ市三殿北遺跡から出土した資料の鉛同位体比値を表２で示し、第 84 図と第 85 図で図示する。

遺跡名	遺物名	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	資料番号
三殿北遺跡	銅碗	18.751	15.745	39.117	0.8397	2.0861	NS1HC41
	測定精度	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

表２　試料（銅碗）の鉛同位体比



第 84 図　銅碗の鉛同位体比（Ａ式図）



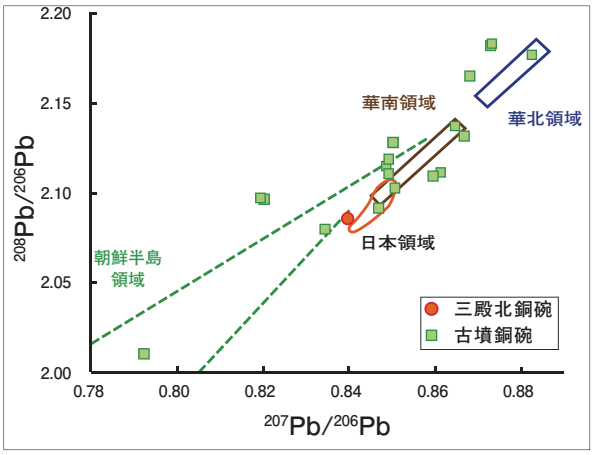
第 85 図　銅碗の鉛同位体比（Ｂ式図）

4. 結果と考察

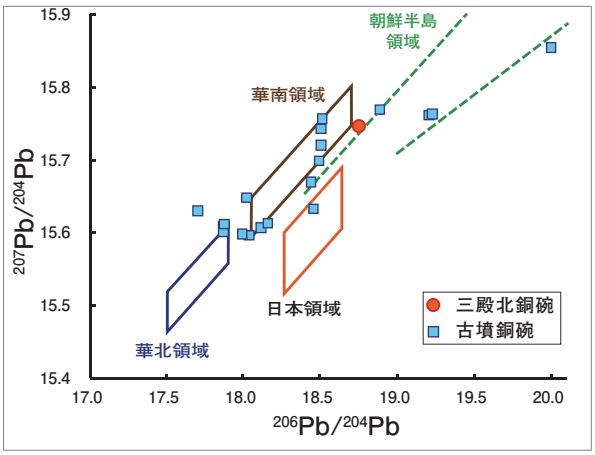
香川県東かがわ市三殿北遺跡から出土した資料の鉛同位体比は第 84 図と第 85 図で示され、朝鮮半島産材料であると推定される。Ａ式図では日本と朝鮮半島産材料領域の間で朝鮮半島産材料領域に近いので、朝鮮半島産材料である可能性は高いが、なお日本産材料である可能性も残る。しかしＢ式図では朝鮮半島産材料領域の線上に載っており、日本産材料領域からはかなり外れるので、日本産材料である可能性は非常に低いと判断される。

銅鋺はどの時代にも存在するとしても、古墳時代の銅鋺の鉛同位体比がいくつか測定されている（*8）。三殿北遺跡から出土した銅鋺の鉛同位体比をこれら古墳時代の銅鋺の値と第 86 図と第 87 図で比較してみる。文献値の中で重複を避けた約 20 資料の分布を示す。

第 86 図と第 87 図の各測点の分布から判断すると、古墳時代の銅鋺は朝鮮半島産材料あるいは中国華南・華北産材料でできていると示される。朝鮮半島産材料といってもそれぞれの銅鋺で同位体比がかな



第 86 図　古墳時代銅碗が示す鉛同位体比分布
（A 式図）



第 87 図　古墳時代銅碗が示す鉛同位体比分布
（B 式図）

り異なることから、朝鮮半島各地で作られた資料が日本へ持ち込まれたと判断される。三殿北遺跡出土の本資料と近い値を示す銅鋺はないが、この分布の中の 1 資料とも考えることができる故、本資料は朝鮮半島産材料を利用して作られていると考えることができる。

日本における青銅製品（材料）の主生産地は各時代によって異なり、弥生･古墳時代は朝鮮半島と中国、奈良・平安中期までは日本、平安後期・鎌倉時代は中国華南、室町時代は中国華南・日本、戦国時代は中国華南・東南アジア・日本、江戸時代は日本であるというおおまかな流れが示されている[*9]。しかし、どの時代にも頻度は少ないが中国華南産資料や朝鮮半島産資料（材料）が流入してきているのも事実である。このような製品（材料）の流れができていると考えると、本資料はどの時代の資料でもあり得る。銅鋺という資料が古墳時代に朝鮮半島から多く流入していたことから、古墳時代の資料とも考えられるが、他の時代でもあり得るので、その場合には特別例として考える必要があろう。

技術協力・執筆
日鉄住金テクノロジー（株）
渡邊 緩子，半田 章太郎，隅　英彦
帝京大学文化財研究所
平尾 良光

引用文献
1）佐藤竜馬 :「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業 (1) 9 世紀後葉～ 11 世紀前葉の供膳器種」『香川県 埋蔵文化財センター年報 平成 26 年度』香川県埋蔵文化財センター（2016）
2）長崎誠三 , 平林眞編：二元合金状態図集 , アグネ技術センター（2001）
3）平尾良光：鉛同位体比法,「青銅鏡・銅鐸・鉄剣を探る」『文化財を探る科学の眼 - 3』，平尾良光・山岸良二編，国土社 (東京), p13-19(1998)
4）平尾良光：鉛同位体比法の応用ー歴史資料の産地推定ー，RADIOISOTOPES 57, p709-721(2008)
5）平尾良光，鈴木浩子：弥生時代青銅器と鉛同位体比，『古代青銅の流通と鋳造』，平尾良光編，鶴山堂 (東京)，p163-208(1999)
6）平尾良光編 :「古代東アジア青銅の流通」鶴山堂 (東京)，pp352(2001)
7）平尾良光，馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sector の規格化について，保存科学 28,17-24(1989)
8）平尾良光，榎本淳子，鈴木浩子：古墳時代青銅製品の鉛同位体比，考古学雑誌 97,27-62(2013)
9）平尾良光：日本の歴史における産地推定のための鉛同位体比値、「帝京大学文化財研究所研究報告」17, p15-70 (2018)

図版１　銅碗の蛍光Ｘ線分析結果

写真左:蛍光X線分析位置（赤丸範囲）
試料採取位置（黄色枠内）

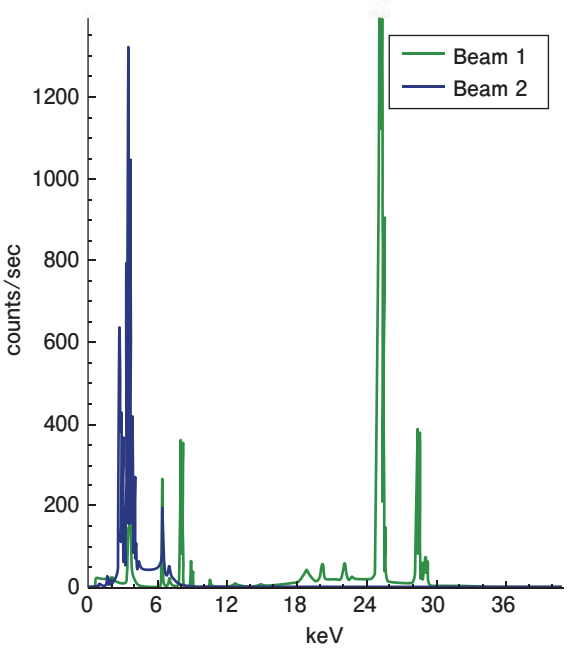
写真右:分析位置拡大（内部カメラ）

検出元素　（Mass%）

El	%	+/-
Zr	0.0037	0.0010
Zn	0.053	0.006
Sn	81.84	0.11
Si	1.373	0.087
Pb	0.085	0.005
P	0.163	0.034
Ni	0.038	0.008
Nb	0.003	0.001
Fe	10.844	0.078
Cu	5.074	0.039
Bi	0.072	0.004
As	0.045	0.005
Ag	0.404	0.009

ハンドヘルド蛍光X線分析計 VANTA M series（Olympus製）
装置仕様:管電圧50kV、800μA、Rhターゲット、SOD検出器、
AlloyPlusExtraメソッド、照射径8mm、FP法

測定スペクトル



第 2 節　三殿北遺跡出土鉄滓の分析調査

１．いきさつ

三殿北遺跡は香川県東かがわ市三殿に所在する。発掘調査地区内では鍛冶遺構は検出されていないが、大形灌漑水路跡（SD161）や溝跡から鉄滓が出土した。そこで、これらの鉄滓がどのような作業工程の反応副生物かを確認するため、以下の調査を実施した。

２．調査方法

２－１．供試材

出土鉄滓３点を調査した（表３）。

２－２．調査項目

（１）肉眼観察

遺物の外観の特徴など、調査前の所見を記載した。

（２）マクロ組織

外観の特徴から断面観察の位置を決めて、試料を切り出し、エメリー研磨紙の #150、#320、#600、#1000、およびダイヤモンド粒子の３μｍと１μｍで順を追って研磨し、全体像を撮影した。

（３）顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属組織の観察を目的とする。

金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真を撮影した。また金属鉄部の組織観察には 3% ナイタル（硝酸アルコール）を腐食に用いた。

（４）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬度を測定した。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は 50gf で測定した。ビッカース硬さは測定箇所に圧子（136°の頂角をもったダイヤモンド）を押し込んだ時の荷重と、それにより残された窪み（圧痕）の対角線長さから求めた表面積から算出される。

（５）EPMA 調査

EPMA（日本電子製㈱ JXA-8230）を用いて、鉄滓の鉱物組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧：15kV、照射電流（分析電流)：2.00E-8A。

（６）化学組成分析

出土鉄滓の定量分析を実施した。測定方法・元素は以下の通りである。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）：燃焼容量法、硫黄（S）：燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO2）、酸化アルミニウム（Al2O3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K2O）、酸化ナトリウム（Na2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO2）、酸化クロム（Cr2O3）、五酸化燐（P2O5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

３．調査結果

３－１．２区（SD161）出土遺物

MTK －１：椀形鍛冶滓

（１）肉眼観察：大形の椀形鍛冶滓の中央部の破片（121.6g）と推測される。滓の地の色調は灰褐色で表面はやや風化気味である。着磁性は弱い。側面は全面破面で気孔は少なく緻密である。部分的に羽口または炉材等の粘土が溶融した黒色ガラス質滓が確認される。また表面には広い範囲で黄～茶褐色の土砂や鉄銹が付着するが、金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。

（２）マクロ組織：図版２①に示す。素地は暗灰色の滓部で、微細な不定形青灰色部は銹化鉄である。

（３）顕微鏡組織：図版２②③に示す。②の青灰色部は銹化鉄である。内部には亜共析組織痕跡が残存する。パーライト（Pearlite）の割合から、炭素量は 0.2% 以下の軟鉄と推測される。また③は滓部の拡大である。素地はガラス質滓（非晶質硅酸塩）で、微細な淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）、白色樹枝状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、発達した淡灰色盤状結晶のファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（４）ビッカース断面硬度：図版２③の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 624Hv であった。ウルボスピネルと推定される。また淡灰色盤状結晶の硬度値は 638Hv であった。ファヤライトの文献硬度値（約 600 ～ 700Hv）の範囲内で、ファヤライトと推定される（注１）。

（５）EPMA 調査：図版２④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。写真上側の白色樹枝状結晶の定量分析値は 73.8%FeO － 2.7%TiO_2 － 1.7%Al_2O_3（分析点 1）であった。マグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）で、少量チタニア（TiO2）、アルミナ（Al_2O_3）を固溶する。左下の淡茶褐色多角形結晶の定量分析値は 65.3%FeO － 22.4%TiO_2 － 5.6%Al_2O_3 － 2.8%V_2O_3 － 1.1%Cr_2O_3（分析点 2）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）と推定される。右下の淡灰色結晶の定量分析値は 66.1%FeO － 1.2%MgO － 29.3%SiO_2（分析点 3）であった。ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）で、少量マグネシア（MgO）を固溶する。また素地の暗灰色部の定量分析値は、42.9%SiO_2 － 16.8%Al_2O_3 － 7.9%CaO － 6.3%K_2O － 3.8%Na_2O － 21.1%FeO（分析点 4）であった。非晶質珪酸塩である。

（６）化学組成分析：表４に示す。全鉄分（Total Fe）39.25% に対して、金属鉄（Metallic Fe）は 0.32%、酸化第１鉄（FeO）が 30.89%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）21.33% の割合であった。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）の割合は 36.59% で、このうち塩基性成分（CaO ＋ MgO）2.21% と低値であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 2.38%、バナジウム（V）が 0.05% であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.19%、銅（Cu）は＜ 0.01% と低値であった。

当鉄滓は精錬鍛冶滓と推定される。滓中には製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響がみられる。

MTK －２：椀形鍛冶滓（含鉄）

（１）肉眼観察：小形の椀形鍛冶滓（38.9g）である。表面は黄～茶褐色の土砂や鉄銹で覆われる。端部が１箇所銹化割れで欠損している。金属探知器反応もあり、内部には金属鉄が含まれていると考えられる。

（２）マクロ組織：図版３①に示す。素地部分は鉄滓で、上面側の不定形明白色～褐色部は金属鉄である。

（３）顕微鏡組織：図版３②～⑤に示す。②③は金属鉄部の拡大である。亜共析～共析（C ≦ 0.77%）

組織が確認された。この金属組織から、鉄中の炭素量は部位によるばらつきが大きく、約 0.1 ～ 0.8% 程度と推定される。④は木炭破片の拡大である。内部には導管が分布しており、広葉樹材の黒炭と推定される。また⑤は滓部の拡大である。素地はガラス質滓（非晶質硅酸塩）で、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。椀形鍛冶滓（MTK － 1）のように砂鉄起源の鉄チタン酸化物はなく、鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

（4）ビッカース断面硬度：図版３②③のの硬度を測定した。硬度値は 115 ～ 243Hv であった。白色の針状フェライト（Ferrite：α相）の割合が高い箇所が軟質で、ほぼパーライト（Pearlite）の箇所が最も硬質であった。それぞれ組織に見合った値である。

（5）EPMA 調査：図版３⑥に滓部の反射電子像（COMP）を示す。淡灰色柱状結晶の定量分析値は 65.8%FeO － 29.1%SiO_2（分析点 5）であった。ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）に同定される。素地の暗灰色部の定量分析値は 46.5%SiO_2 － 11.9%Al_2O_3 － 7.0%CaO － 2.3%K_2O － 1.9%Na_2O － 26.5%FeO（分析点 6）であった。非晶質珪酸塩である。また滓中の微細な明白色粒の定量分析値は 98.0%Fe（分析点 7）であった。金属鉄である。

（6）化学組成分析：表４に示す。滓部を供試材とした。全鉄分（Total Fe）36.79% に対して、金属鉄（Metallic Fe）は 1.37%、酸化第１鉄（FeO）が 11.09%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）38.32% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）34.07% で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は 2.17% と低値であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.26%、バナジウム（V）が 0.02% であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.12%、銅（Cu）は＜ 0.01% と低値であった。

当鉄滓は砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2、V）の低減傾向が顕著で、鍛錬鍛冶滓と推定される。また鉄滓上面には不定形の金属鉄が確認された。

３－２．５区（SD019）出土遺物

MTK － 3：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：小形で偏平な椀形鍛冶滓の端部破片（14.8g）である。側面３面は破面で、微細な気孔が点在する。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。表面には薄く黄～茶褐色の土砂や鉄銹が付着するが、金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。

（2）マクロ組織：図版４①に示す。素地は淡灰色の滓部、上面表層および滓中の青灰色部は銹化鉄である。

（3）顕微鏡組織：図版４②③に示す。②は滓部の拡大である。素地はガラス質滓（非晶質硅酸塩）で、白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また③は木炭組織の拡大である。内部には導管が分布しており、広葉樹材の黒炭と推定される。

（4）ビッカース断面硬度：図版４②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は 459Hv であった。ウスタイトの文献硬度値（約 450 ～ 500Hv）の範囲内で、ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は 619Hv であった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内で、ファヤライトと推定される。

（5）EPMA 調査：図版４④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色樹枝状結晶の定量分析値は 94.5%FeO（分析点 8）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）と推定される。淡灰色柱状結晶の定量分析値は 65.4%FeO － 1.6%CaO － 29.4%SiO_2（分析点 9）であった。ファヤライト（Fayalite：

$2FeO \cdot SiO_2$）で、ライム（CaO）を少量固溶する。暗灰色結晶の定量分析値は 18.7%K_2O － 60.0%SiO_2 － 24.3%Al_2O_3（分析点 10）であった。オルソクレース（Orthoclase：$KAlSi_3O_8$）と推定される。また素地の暗灰色部の定量分析値は 38.3%SiO_2 － 15.1%Al_2O_3 － 13.6%CaO － 2.4%K_2O － 3.7%Na_2O － 23.3%FeO（分析点 11）であった。非晶質珪酸塩である。

（６）化学組成分析：表４に示す。全鉄分（Total Fe）49.52% に対して、金属鉄（Metallic Fe）は 1.34%、酸化第１鉄（FeO）が 31.81%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）33.53% の割合であった。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）22.15% で、このうち塩基性成分（CaO ＋ MgO）は 1. 37% であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.14%、バナジウム（V）が 0.02% と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.15%、銅（Cu）＜ 0.01% と低値であった。

当鉄滓も砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2、V）の低減傾向が顕著で、鍛錬鍛冶滓に分類される。

４．まとめ

三殿北遺跡から出土した鉄滓３点を調査した結果、以下の点が明らかとなった。

４－１．２区（SD161）出土鉄滓（推定年代：９世紀後半～ 13 世紀前半）

（１）椀形鍛冶滓（MTK － 1）は精錬鍛冶滓と推定される。滓中には製鉄原料の砂鉄（含チタン砂鉄）起源の鉄チタン酸化物〔ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）〕が確認された。これは砂鉄製錬滓を含む未加工の鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）が、鉄産地から当遺跡に搬入されていたことを示す遺物である。

現在のところ、香川県内には古代～中世の製鉄炉跡の報告例はなく、鍛冶遺跡から出土した鉄滓の分析調査をみても、ほぼ熱間での鍛打加工に伴う鍛錬鍛冶滓と報告されている。今回、製鉄原料（砂鉄）起源の脈石成分の影響が残る精錬鍛冶滓が確認されたことは、地域の鍛冶原料の調達を考える上で注目される。

（２）椀形鍛冶滓（MTK － 2）は鍛錬鍛冶滓と推定される。製鉄原料（砂鉄）起源の脈石成分の影響はなく、鉄材を熱間で鍛打加工した際の反応副生物である。さらに鉄滓に付着した木炭破片から、鍛冶炭は広葉樹材であったと推定される。

また鉄滓上面には不定形の金属鉄部が確認された。炭素含有量は部位によりばらつきがある（約 0.1 ～ 0.8%）が、硬さや焼入れ性が要求される刃金（鋼）に向いた鍛冶原料を加工していたと推測される。

４－２．５区（SD019）出土鉄滓（13 世紀後葉）

椀形鍛冶滓（MTK － 3）は鍛錬鍛冶滓と推定される。製鉄原料（砂鉄）起源の脈石成分の影響はなく、鉄材を熱間で鍛打加工した際の反応副生物である。また椀形鍛冶滓（MTK － 2）と同様、鉄滓表面に広葉樹材の木炭破片が付着する。

（注）

（１）日刊工業新聞社 1968『焼結鉱組織写真および識別法』

ウスタイトは 450 ～ 500Hv、マグネタイトは 500 ～ 600Hv、ファイヤライトは 600 ～ 700Hv の範囲が提示されている。ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）の硬度値範囲の明記はないが、マグネタイト（Magnetite：$FeO \cdot Fe_2O_3$）と同じスピネル類の化合物で、チタニアを固溶するためマグネタイトよりも硬質である。ウルボスピネル組成であれば通常 600Hv 以上の値を示す。ヘルシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）はさらに硬質で 1000Hv を超える。

技術協力・執筆　　日鉄住金テクノロジー（株）鈴木 瑞穂

符号	遺跡名	調査区	遺構名	遺物番号	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器反応	調査項目					備考
							大きさ（mm）	重量（g）		マクロ組織	顕微鏡組織	ﾋﾞｯｶｰｽ断面硬度	EPMA	化学分析	
MTK-1	三殿北	2区	SD161	**374**	椀形鍛冶滓	9c後半～13c前半	51 × 47 × 36	121.6	×	○	○	○	○	○	
MTK-2				**373**	椀形鍛冶滓（含鉄）		50 × 42 × 20	38.9	○	○	○	○	○	○	
MTK-3		5区	SD019	**194**	椀形鍛冶滓	13c後葉	33 × 35 × 12	14.8	×	○	○	○	○	○	

表３　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第１鉄 (FeO)	酸化第２鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素* (SiO_2)	酸化ｱﾙﾐﾆｳﾑ* (Al_2O_3)	酸化ｶﾙｼｳﾑ* (CaO)	酸化ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ* (MgO)	酸化ｶﾘｳﾑ* (K_2O)	酸化ﾅﾄﾘｳﾑ* (Na_2O)	酸化ﾏﾝｶﾞﾝ (MnO)	二酸化ﾁﾀﾝ (TiO_2)	酸化ｸﾛﾑ (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P2O5)	炭素 (C)	ﾊﾞﾅｼﾞｳﾑ (V)	銅 (Cu)	二酸化ｼﾞﾙｺﾆｳﾑ (ZrO_2)	造滓成分Σ*	造滓成分 / Total Fe	TiO2 / Total Fe	注
MTK-1	三殿北	SD161	椀形鍛冶滓	9c後半～13c前半	39.25	0.32	30.89	21.33	25.93	6.54	1.81	0.40	1.20	0.71	0.19	2.38	0.03	0.045	0.38	0.52	0.05	<0.01	0.04	36.59	0.932229299	0.060636943	
MTK-2			椀形鍛冶滓		36.79	1.37	11.09	38.32	23.97	6.38	1.78	0.39	0.95	0.60	0.12	0.26	0.03	0.082	0.77	0.99	0.02	<0.01	0.05	34.07	0.926066866	0.007067138	
MTK-3		SD019	椀形鍛冶滓	13c後葉	49.52	1.34	31.81	33.53	16.46	3.66	1.02	0.35	0.35	0.31	0.15	0.14	0.02	0.022	0.40	0.69	0.02	<0.01	0.05	22.15	0.447294023	0.002827141	

表４　供試材の化学組成

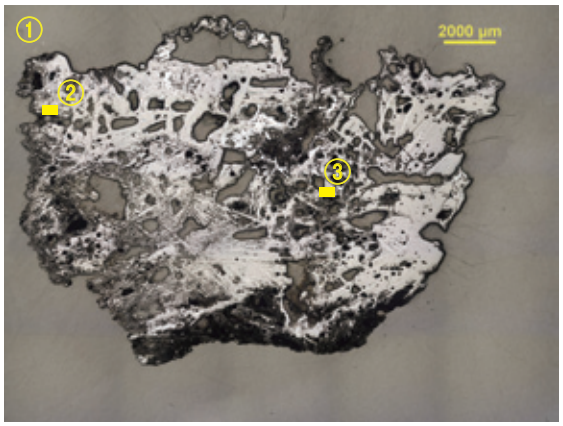
符号	遺跡名	調査区	遺構名	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
							Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
MTK-1	三殿北	2区	SD161	椀形鍛冶滓	9c後半～13c前半	滓部:W+M+U+F	39.25	21.33	2.21	2.38	0.05	0.19	36.59	<0.01	精錬鍛冶滓（始発原料：砂鉄）
MTK-2				椀形鍛冶滓		金属鉄部：亜共析～共析組織、滓部:F、木炭破片：広葉樹材	36.79	38.32	2.17	0.26	0.02	0.12	34.07	<0.01	鍛錬鍛冶滓（金属鉄部：鋼）
MTK-3		5区	SD019	椀形鍛冶滓	13c後葉	滓部:W+F、木炭破片：広葉樹材	49.52	33.53	1.37	0.14	0.02	0.15	22.15	<0.01	鍛錬鍛冶滓

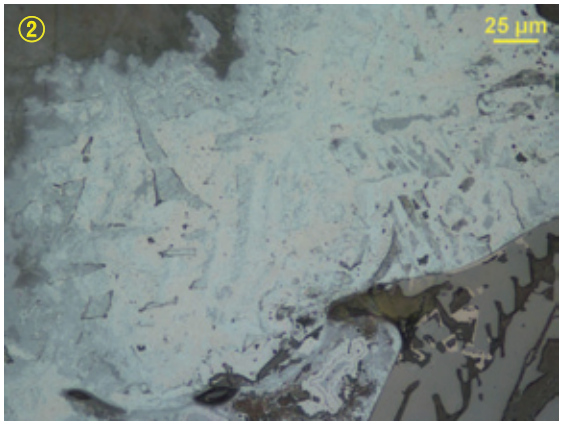
W:Wustite（FeO）、M:Magnetite（FeO･Fe2O3）、U:Ulvöspinel（2FeO･TiO2）、F:Fayalite（2FeO・SiO2）

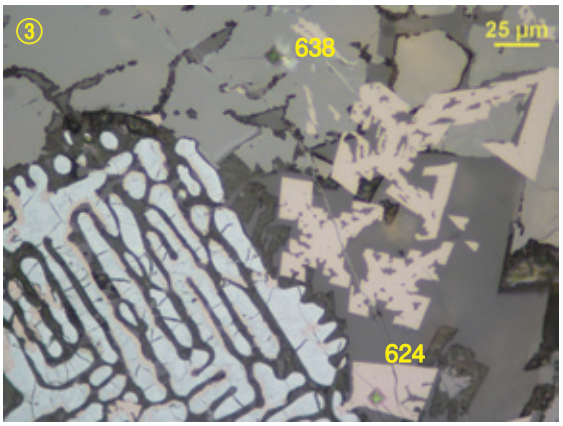
表５　出土遺物の調査結果のまとめ

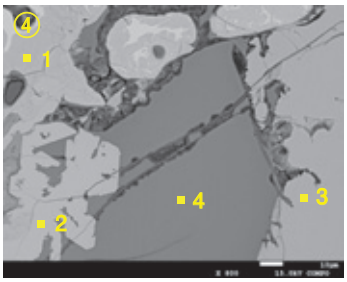
図版２　椀形鍛冶滓の顕微鏡写真・EPMA 調査結果

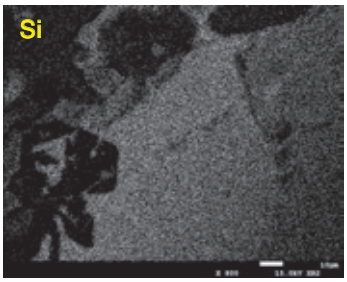
MTK-1
椀形鍛冶滓
①ﾏｸﾛ組織
②青灰色部：銹化鉄、亜共析組織痕跡、
③滓部：ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ（624Hv）、ｳｽﾀｲﾄ、ﾌｧﾔﾗｲﾄ（638Hv）

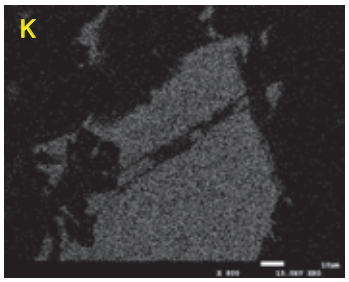


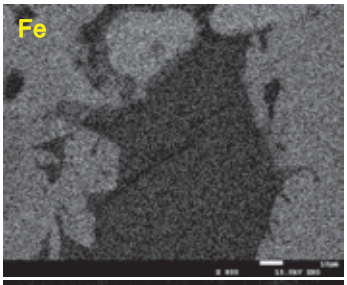


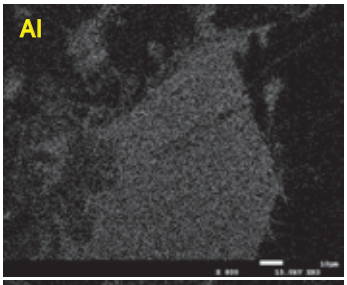


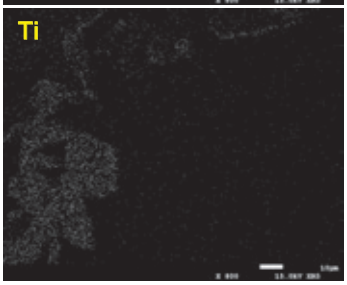


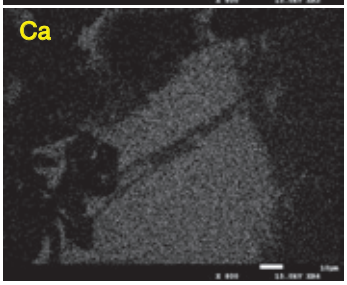












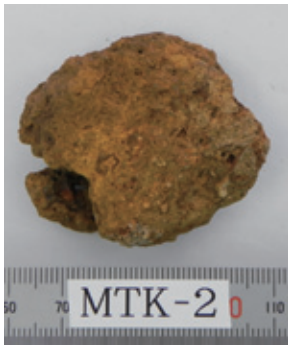
滓部の反射電子線像（COMP）および特性Ｘ線像

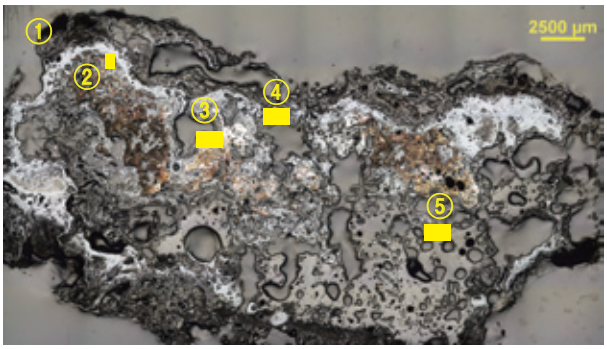
定量分析値

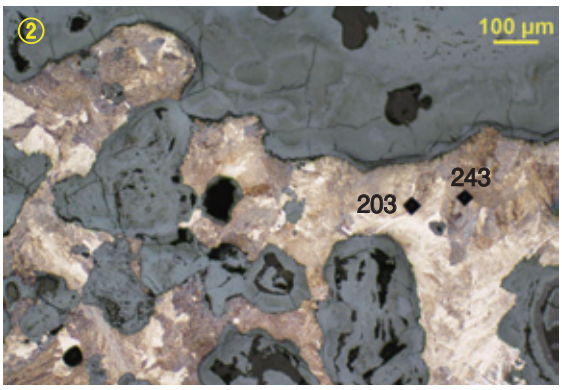
Element	1	2	3	4
MgO	0.066	0.051	1.241	0.042
SiO_2	5.880	0.189	29.259	42.899
Na_2O	0.066	-	0.021	3.827
Al_2O_3	1.721	5.589	0.073	16.792
CaO	0.133	-	0.483	7.940
TiO_2	2.704	22.404	0.305	0.809
S	-	0.009	0.005	0.019
ZrO_2	0.019	0.068	-	0.006
P_2O_5	0.072	-	0.002	0.237
K_2O	0.013	0.004	-	6.294
CuO	-	0.020	-	0.004
FeO	73.826	65.275	66.136	21.112
MnO	0.033	0.086	0.344	0.062
Cr_2O_3	0.100	1.065	0.004	0.010
V_2O_3	0.364	2.783	0.022	-
Total	84.997	97.543	97.895	100.053

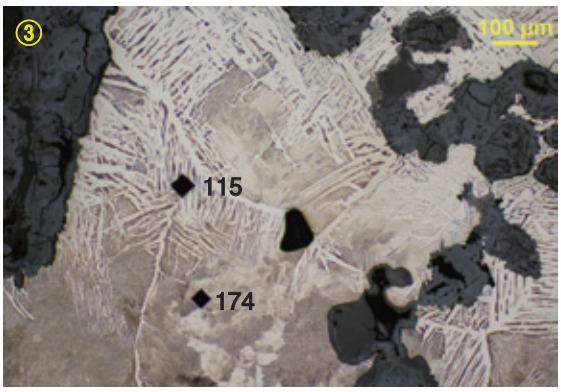
図版３　椀形鍛冶滓の顕微鏡写真・EPMA 調査結果

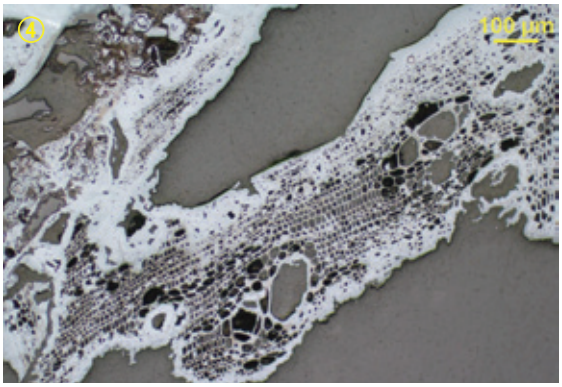
MTK-2
椀形鍛冶滓
①ﾏｸﾛ組織
②③金属鉄部 : 亜共析
～共析組織 (115~243Hv)
④木炭破片、広葉樹材
⑤金属鉄粒 : 亜共析組織、
滓部 :ﾌｧﾔﾗｲﾄ

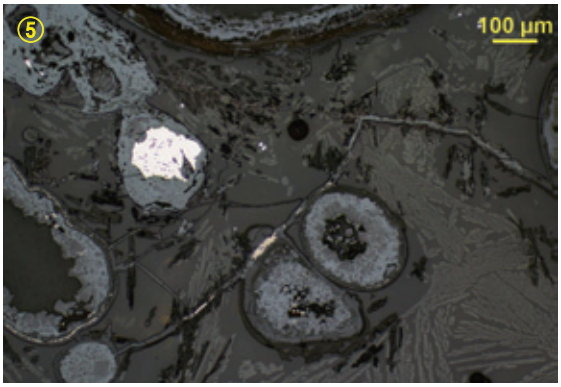


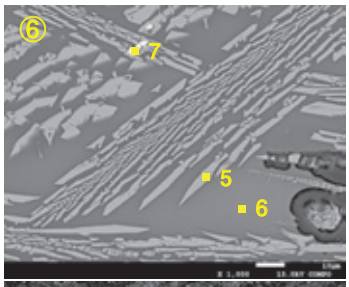


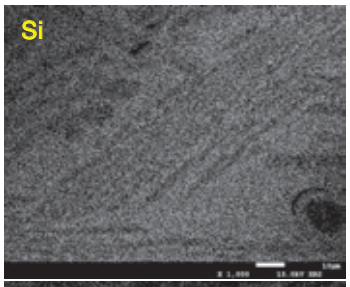


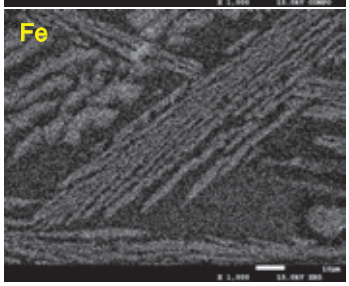


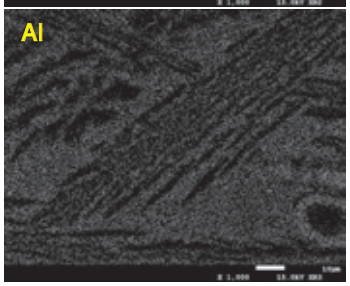












滓部の反射電子線像（COMP）および特性Ｘ線像

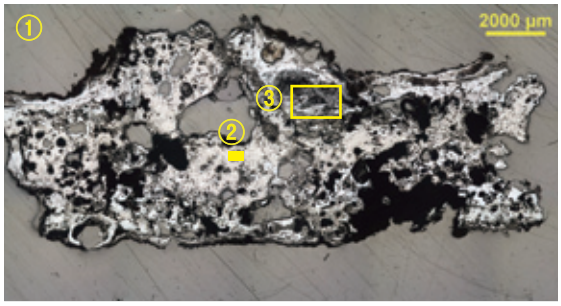
定量分析値

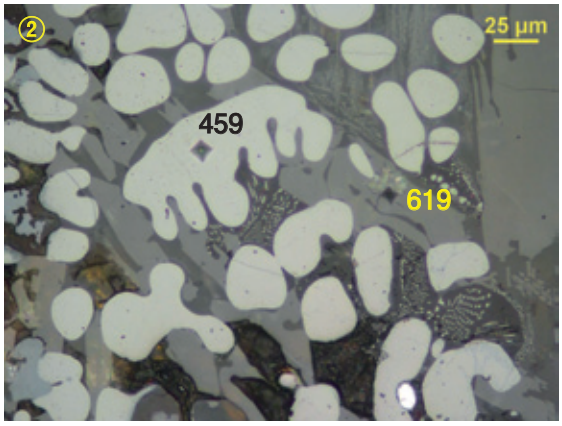
Element	5	6
MgO	0.579	0.042
SiO_2	29.127	46.454
Na_2O	-	1.873
Al_2O_3	0.030	11.868
CaO	0.475	7.021
TiO_2	0.123	0.614
S	0.005	0.025
ZrO_2	-	0.031
P_2O_5	0.075	0.139
K_2O	0.048	2.291
CuO	-	0.034
FeO	65.803	26.487
MnO	0.135	0.031
Cr_2O_3	0.007	0.034
V_2O_3	0.020	0.005
Total	96.427	96.949

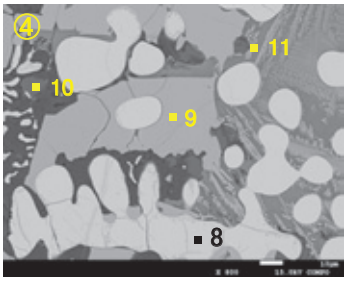
Element	7
F	0.378
O	0.416
Si	0.082
Na	0.013
Mg	0.016
S	0.001
P	0.005
K	0.063
Fe	98.045
Cr	0.020
Ti	0.011
Total	99.050

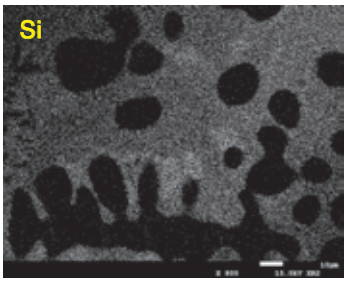
図版４　椀形鍛冶滓の顕微鏡写真・EPMA 調査結果

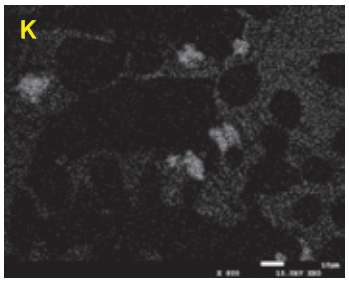
MTK-3
椀形鍛冶滓
①ﾏｸﾛ組織
②滓部:ｳｽﾀｲﾄ(459Hv)、
ﾌｧﾔﾗｲﾄ(619Hv)
③木炭破片、
広葉樹材

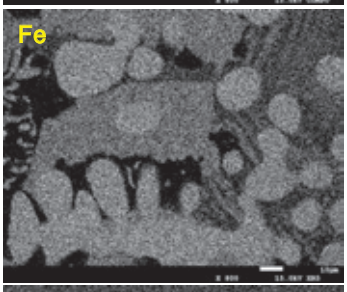


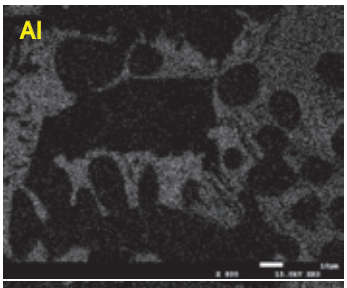


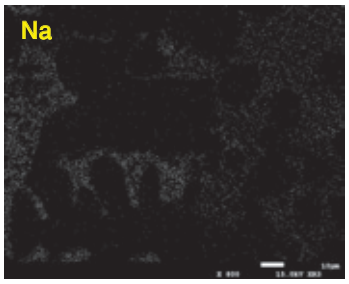


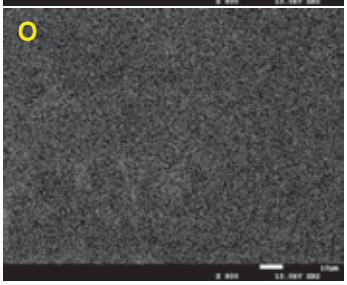


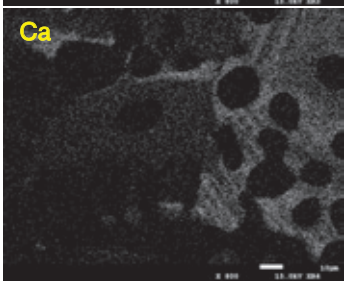












滓部の反射電子線像（COMP）および特性Ｘ線像

定量分析値

Element	8	9	10	11
MgO	0.090	0.793	-	0.042
SiO_2	0.318	29.351	60.011	38.346
Na_2O	-	0.031	0.762	3.692
Al_2O_3	0.681	0.136	24.280	15.122
CaO	-	1.567	-	13.569
TiO_2	0.523	0.086	0.038	0.262
S	0.011	-	0.002	0.086
ZrO_2	0.102	0.067	0.012	0.039
P_2O_5	-	0.228	0.005	0.975
K_2O	-	-	18.714	2.366
CuO	0.031	0.066	0.069	-
FeO	94.525	65.446	1.326	23.256
MnO	0.075	0.235	-	0.104
Cr_2O_3	0.015	0.027	-	0.017
V_2O_3	0.088	0.025	-	0.017
Total	96.459	98.058	105.219	97.893

第３節　出土試料の放射性炭素年代測定

１. はじめに

香川県東かがわ市の三殿北遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２. 試料と方法

試料は、3 区の井戸跡である SE02 から出土した曲物の綴紐 1 点（試料 No.1：PLD-37398）である。測定試料の情報、調製データは表６のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-37398	試料 No.1 遺物番号：36 調査区：3 区 遺構：SE02	種類：生材（樹皮） 器種：曲物綴紐 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表６　測定試料および処理

３. 結果

表７に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第 88 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

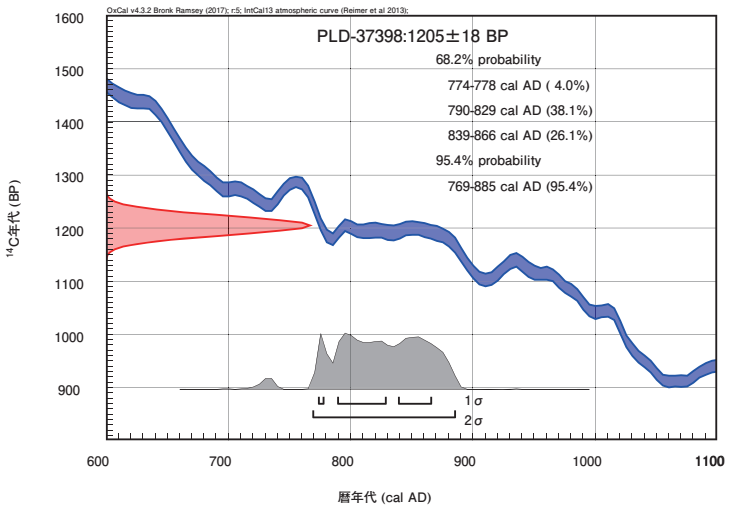
^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４. 考察

以下、2 σ暦年代範囲（確率 95.4％）に着目して結果を整理する。

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-37398 試料 No.1 遺物番号：36	-30.84 ± 0.23	1205 ± 18	1205 ± 20	774-778 cal AD (4.0%) 790-829 cal AD (38.1%) 839-866 cal AD (26.1%)	769-885 cal AD (95.4%)

表７　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果



第 88 図　暦年較正結果

3 区の井戸跡 SE02 から出土した曲物の綴紐（試料 No.1：PLD-37398）は 769-885 cal AD (95.4%) で、8 世紀後半～ 9 世紀後半の暦年代を示した。これは、奈良時代～平安時代前期に相当する。なお、試料は樹皮であり、測定結果は枯死もしくは伐採年代に近い年代または、樹皮が採取された年代に近い値を示すと考えられる。

技術協力・執筆

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・小林克也

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第４節　須恵器付着の赤色顔料の蛍光Ｘ線分析

１．はじめに

東かがわ市三殿に所在する三殿北遺跡より出土した須恵器に付着する赤色顔料について、蛍光Ｘ線分析を行い、顔料の種類を検討した。

２．試料と方法

分析対象は､3 区の SD161 の中層より出土した須恵器の杯１点の内底面に付着する赤色顔料である（図版 5-1）。実体顕微鏡下で、セロハンテープに赤色部分を極微量採取して分析試料とした。

分析装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type Ⅱを使用した。装置の仕様は、Ｘ線管が最大 50kV･1mA のロジウム（Rh）ターゲット、Ｘ線ビーム径が 100 μｍまたは 10 μｍ､検出器は高純度 Si 検出器である。検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）であるが､ナトリウム､マグネシウム（Mg）といった軽元素は蛍光Ｘ線分析装置の性質上、検出感度が悪い。

本分析での測定条件は､管電圧が 50kV､管電流自動設定､測定時間 500s､ビーム径 100 μｍに設定した。定量分析は、標準試料を用いない FP 法による半定量分析を行った。

さらに、蛍光Ｘ線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

３．結果

分析により得られたスペクトルおよび FP 法による半定量分析結果を第 89 図に示す。

水銀（Hg）､硫黄（S）､ケイ素（Si）が主に検出され､他にカリウム（K）､カルシウム（Ca）､鉄（Fe）が少量検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像を図版 5-2 に示す。

４．考察

赤色顔料の代表的なものとしては､朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で､鉱物としては辰砂と呼ばれ､産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe_2O_3､鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬，2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約１μｍのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており（岡田，1997）、鉄バクテリア起源の含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬，1998）。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した試料からは､水銀と硫黄が多く検出され､赤色部分は水銀朱と判明した。なお､ヒ素（As）は、水銀（Hg）のピークの一部と重複するため、水銀を多く含む物質からの検出は困難である。ケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、鉄（Fe）といった胎土や土砂中に一般的に含まれる元素を除くと、その他の微量元素は特に検出されなかった。表８に、分析結果を示す。

5．おわりに

三殿北遺跡より出土した須恵器の内底面に付着する赤色顔料について分析した結果、水銀朱と確認された。

技術協力・執筆

（株）パレオ・ラボ

竹原 弘展

引用文献

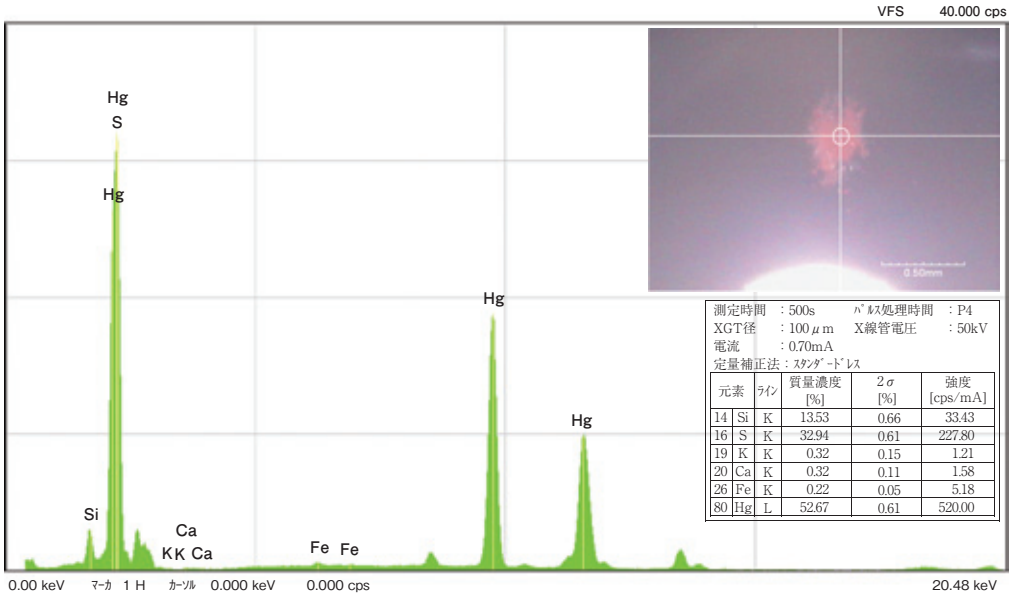
成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料Ⅰ―赤彩土器―．考古学ジャーナル，438，10-14，ニューサイエンス社．

成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料．正倉院紀要，26，13-61，宮内庁正倉院事務所．

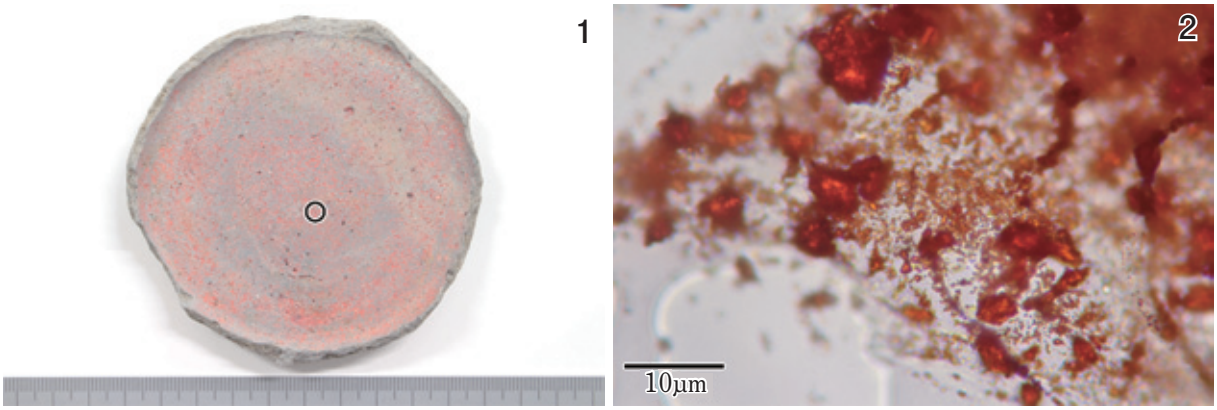
岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元．日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集，38-39．

試料番号	遺物番号	出土位置	器種	採取位置	主な検出元素	顔料種類
1	**304**	3 区 SD161 中層	須恵器・杯	内底面	Hg,S,Si	水銀朱

表８　分析結果



第 89 図　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析結果



図版５　試料採取位置および赤色顔料の生物顕微鏡写真

１．資料採取位置　２．生物顕微鏡写真

第５節　木製品・加工木の樹種同定

1．はじめに

東かがわ市三殿北に位置する三殿北遺跡から出土した木製品・加工木の樹種同定を行なった。

2．試料と方法

試料は、弥生時代後期の旧河道 SR03 と、古代の性格不明遺構 SX01、中世の土坑 SK04・SK08 と柱穴 SP99、大型水路 SD161、近世の井戸 SE01 から出土した木製品や加工木など計 43 点である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

	弥生時代後期			古代						中世					近世		
	SR03			SX01			SK04			SP99		SK08			SD161	SE01	
樹種	木杭	丸太材	木杭	板材	斎串	板材	木杭	竹製容器	加工木	柱材	板材	木杭	加工木		板材	用途不明	計
モミ属			1								8						9
マツ属複維管束亜属							1		4	1	1	1	9			1	18
ツガ属											4						4
ヒノキ				1													1
アスナロ					1												1
カヤ															1		1
ツブラジイ						1					1						2
コナラ属クヌギ節	2	2	2														6
タケ亜科								1									1
総計	2	2	3	1	1	1	1	1	4	1	14	1	9		1	1	43

表９　器種別の樹種同定結果

3．結果

同定の結果、針葉樹はモミ属とマツ属複維管束亜属、ツガ属、ヒノキ、アスナロ、カヤの６分類群、広葉樹はツブラジイとコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）の２分類群、そのほかに単子葉類のタケ亜科があり、計９分類群が確認された。遺構および器種別の樹種同定結果を表９、結果一覧を表 10 に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属　*Abies*　マツ科　図版６　1a-1c（**26**）

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織で数珠状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、１分野に１～４個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約５種がある。材は軽軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

(2) マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　図版６　2a-2c（**119**）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロ

マツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(3) ツガ属　Tsuga　マツ科　図版６　3a-3c（**156**）

仮道管、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は急である。放射組織の上下に放射仮道管があり、有縁壁孔対によって確認できる。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1 分野に 2 ～ 4 個存在する。

ツガ属は暖帯から福島県以南の温帯に生育する常緑高木で、ツガとコメツガがある。材はやや強い程度で、耐朽性・保存性は中庸、割裂および乾燥は容易である。

(4) ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　図版６　4a-4c（**73**）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1 分野に 2 個存在する。

ヒノキは福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性および耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

(5) アスナロ　*Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc.　ヒノキ科　図版６　5a-5c（**72**）

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ 2 ～ 13 列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1 分野に 2 ～ 4 個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また、精油分が多く、耐久性に優れている。

(6) カヤ　*Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc.　イチイ科　図版６・７　6a-6c（**375**）

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。仮道管壁に 2 本対のらせん肥厚がある。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 4 個程度存在する。

カヤは宮城県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は木理直通で緻密であり、弾性および耐久力が強く、水湿にも強い。

(7) ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky　ブナ科　図版７　7a-7c（**142**）

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性および乾燥は中庸であり、耐久性は著しく低い。

(8) コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科　図版７　8a-8c（**27**）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の 2 種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靱で、加工困難である。

(9) タケ亜科　Subfam. *Bambusoideae*　イネ科　図版７　9a（**137**）

向軸側の原生木部、その左右の 2 個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部

に関わりなく厚くなる。

タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間で、日本には 12 属がある。

4．考察

時期別にみると、弥生時代後期の試料はクヌギ節が多く、モミ属が 1 点であった。旧河道の SR03 出土の木杭がクヌギ節とモミ属、丸太材がクヌギ節であった。香川県では、弥生時代後期～古墳時代初頭の杭材や加工木にクヌギ節やコナラ節が多く確認されている（伊東・山田編，2012）。

古代の試料では針葉樹のヒノキとアスナロ各 1 点で、性格不明遺構 SX01 から出土した斎串はアスナロで、板材はヒノキであった。ヒノキやアスナロ、カヤはいずれも木理通直で真っすぐに生育し、加工性が良い（伊東ほか，2011）。香川県で確認されている古代の斎串や板材にはヒノキが多く使われている（伊東・山田編，2012）。

中世の試料ではマツ属複維管束亜属が多く、そのほかにモミ属が 8 点とツガ属が 4 点、ツブラジイが 2 点、カヤが 1 点みられた。土坑 SK04 から出土した竹製容器は、タケ亜科であった。タケ亜科は中空であり、そのまま容器として利用されていたと考えられる。同じく SK04 出土の板材はツブラジイ、木杭や加工木はマツ属複維管束亜属、大型水路 SD161 出土の板材はカヤであった。柱穴 SP99 出土の柱材はマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は針葉樹の中では重厚で、加工性の良い樹種である（伊東ほか，2011）。SK08 出土の板材と加工木はマツ属複維管束亜属であった。板材にはモミ属とツガ属が多く、杭や加工木にはマツ属複維管束亜属の利用が多い傾向がみられた。モミ属の材は軽軟で加工容易、ツガ属の材は針葉樹の中ではやや重硬で強度があり、どちらも材の色が比較的薄めである（伊東ほか，2011）。

近世の試料では、井戸 SE01 出土の用途不明の木製品がマツ属複維管束亜属であった。

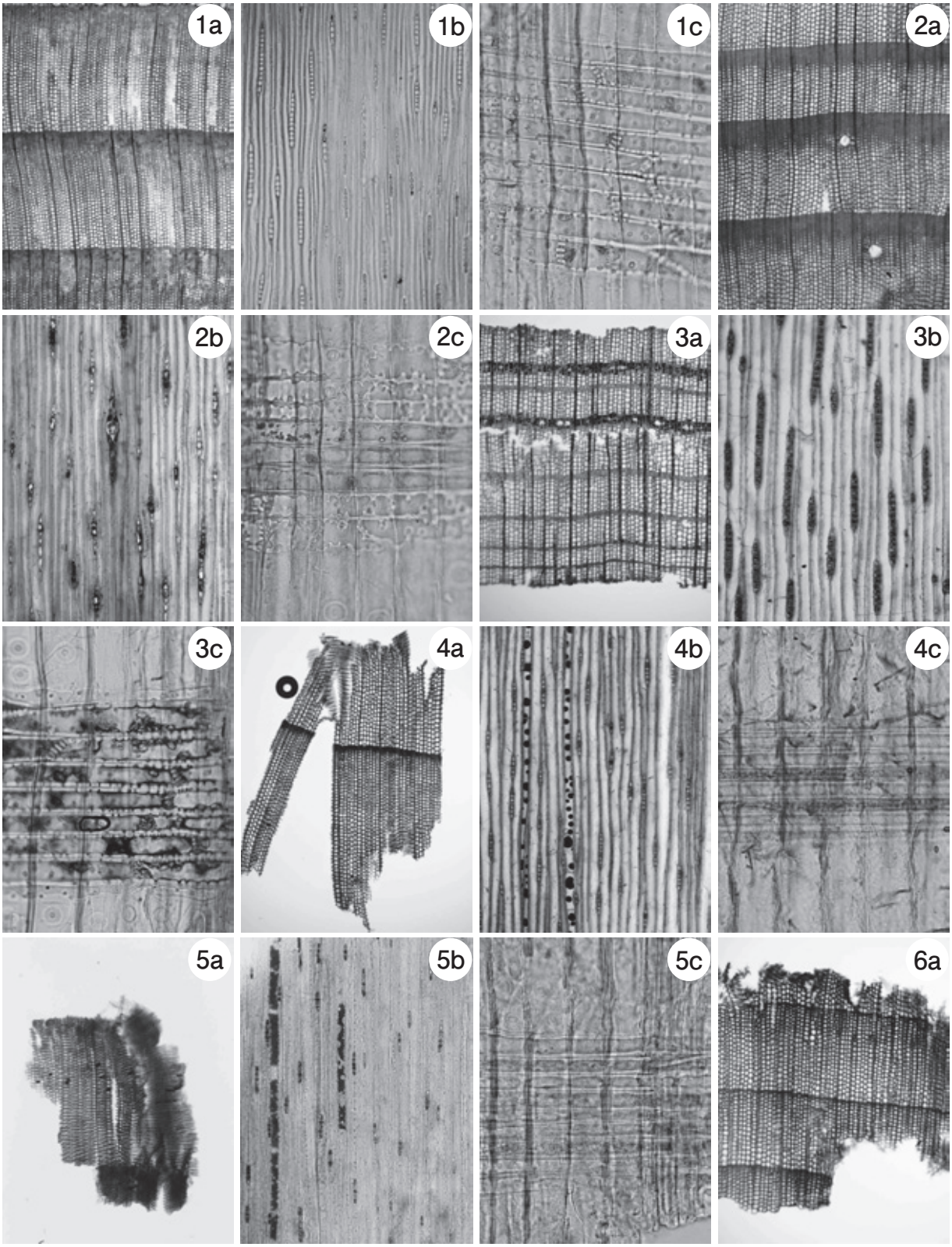
技術協力・執筆
（株）パレオ・ラボ
小林克也・黒沼保子

引用文献
伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社.

遺物番号	出土遺構	器種	樹種	木取り	時期
26	3 区 SR03	木杭	モミ属	芯持丸木	弥生時代後期
27	3 区 SR03	木杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	弥生時代後期
28	3 区 SR03	木杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	弥生時代後期
29	3 区 SR03	丸太材	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	弥生時代後期
30	3 区 SR03	木杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	弥生時代後期
31	3 区 SR03	丸太材	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	弥生時代後期
32	3 区 SR03	木杭	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	弥生時代後期
72	3 区 SX01	斎串	アスナロ	板目	古代
73	2 区 SX01	板材	ヒノキ	板目	古代
119	6 区 SP99	柱材	マツ属複維管束亜属	芯持丸木（加工）	中世
137	5 区 SK04	竹製容器	タケ亜科	丸	中世
138	5 区 SK04	木杭	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	中世
139	5 区 SK04 最下層	加工木	マツ属複維管束亜属	割材	中世
140	5 区 SK04 最下層	加工木	マツ属複維管束亜属	柾目	中世
141	5 区 SK04 最下層	加工木	マツ属複維管束亜属	割材	中世
142	5 区 SK04	板材	ツブラジイ	柾目	中世
143	5 区 SK04 最下層	加工木	マツ属複維管束亜属	割材	中世
150	7 区 SK08 上層	加工木	マツ属複維管束亜属	割材	中世
151	7 区 SK08	板材	ツブラジイ	柾目	中世
152	7 区 SK08	板材	モミ属	板目	中世
153	7 区 SK08	板材	モミ属	追柾目	中世
154	7 区 SK08 下層	板材	モミ属	板目	中世
155	7 区 SK08 下層	板材	ツガ属	板目	中世
156	7 区 SK08	板材	ツガ属	板目	中世
157	7 区 SK08	板材	モミ属	板目	中世
158	7 区 SK08	板材	モミ属	板目	中世
159	7 区 SK08	板材	モミ属	板目	中世
160	7 区 SK08 下層	板材	モミ属	板目	中世
161	7 区 SK08	板材	モミ属	板目	中世
162	7 区 SK08	木杭	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	中世
163	7 区 SK08 下層	加工木	マツ属複維管束亜属	板目	中世
164	7 区 SK08 上層	板材	マツ属複維管束亜属	板目	中世
165	7 区 SK08	板材	ツガ属	板目	中世
166	7 区 SK08	板材	ツガ属	板目	中世
167	7 区 SK08 下層	加工木	マツ属複維管束亜属	割材	中世
168	7 区 SK08 下層	加工木	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	中世
169	7 区 SK08 下層	加工木	マツ属複維管束亜属	割材	中世
170	7 区 SK08 下層	加工木	マツ属複維管束亜属	板目	中世
171	7 区 SK08	加工木	マツ属複維管束亜属	割材	中世
172	7 区 SK08 下層	加工木	マツ属複維管束亜属	板目	中世
173	7 区 SK08	加工木	マツ属複維管束亜属	割材	中世
375	2 区 SD161 下層	板材	カヤ	板目	中世
434	4 区 SE01	用途不明	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	近世

表 10　木製品の樹種同定結果

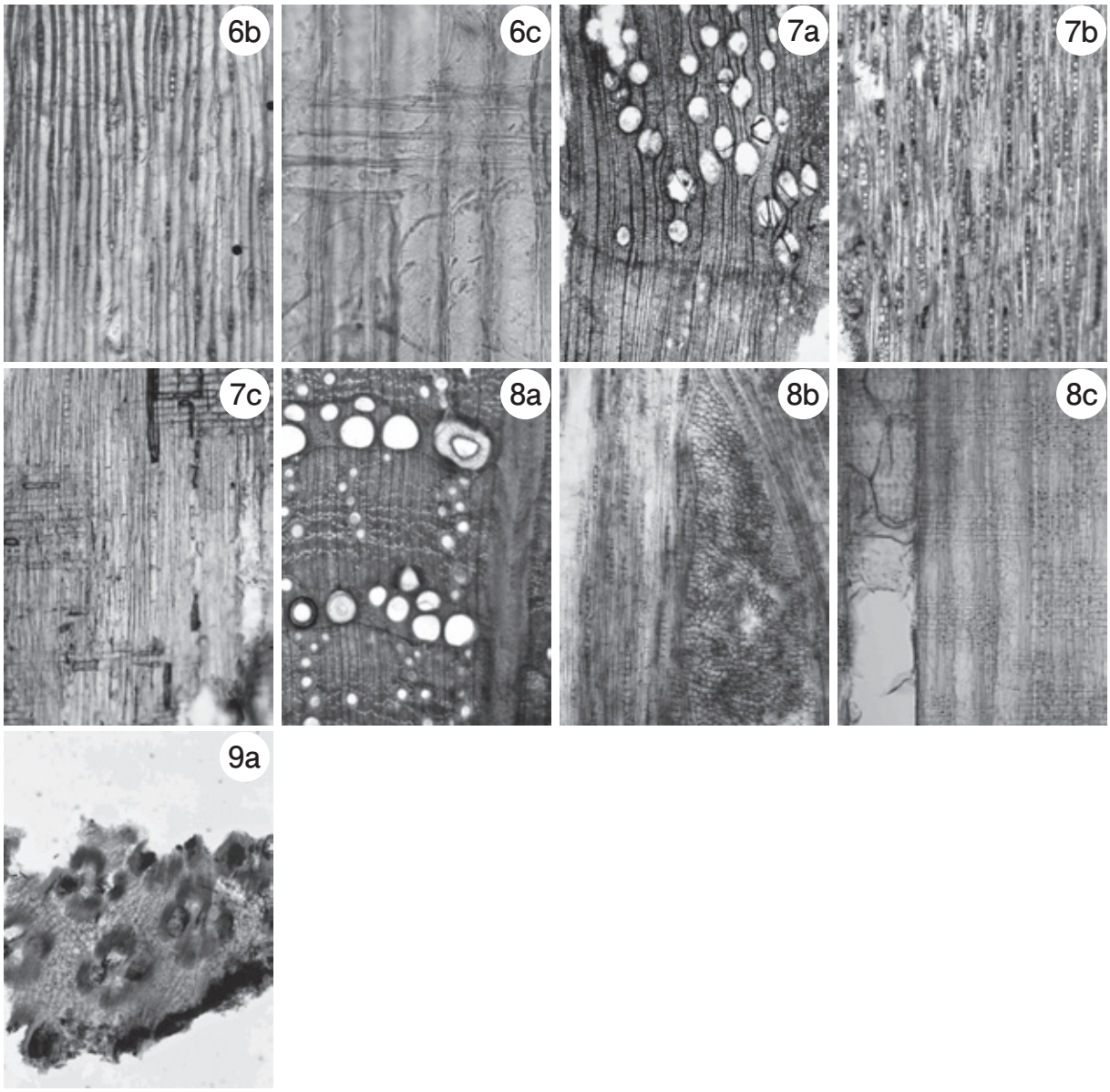
図版６　木製品の光学顕微鏡写真（１）



スケール：

1a-1c.　モミ属（**26**）、2a-2c.　マツ属複維管束亜属（**119**）、3a-3c.　ツガ属（**156**）、4a-4c.　ヒノキ（**73**）、5a-5c.　アスナロ（**72**）、6a.　カヤ（**375**）
a：横断面（スケール =500 μ m）、b：接線断面（スケール =200 μ m）、c：放射断面（スケール =50 μ m）

図版７　木製品の光学顕微鏡写真（２）



スケール：

6b-6c. カヤ（**375**）、7a-7c. ツブラジイ（**142**）、8a-8c. コナラ属クヌギ節（**27**）、9a. タケ亜科（**137**）
a:横断面（スケール =500 μ m）、b:接線断面（スケール =200 μ m）、c:放射断面（スケール =6:50 μ m、7-8:200 μ m）

第６節　三殿北遺跡出土大型植物遺体の同定

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

１．はじめに

本報告は、香川県埋蔵文化財センターの委託により、同遺跡内において出土した大型植物遺体を対象に実施した種実同定の報告書である。また、三殿北遺跡は香川県東部の東かがわ市三殿に所在する。

２．試料について

香川県埋蔵文化財センターより御提供を受けた試料を対象に、大型植物遺体の同定を行った（表 11 参照）。

３．分析方法

試料は既に水洗され、個々の個体が識別可能な状態になっていた。それぞれの個体を肉眼、あるいは実体鏡下で観察し、同定を行った。同定に際し、現生標本及び文献資料を参考にした。また、代表的な個体について記載を行うとともに、写真を図版に示した。

４．分析結果

分析結果を表１に示し、代表的な個体について特徴を示す。また、代表的な個体につい写真図版に示した。

(1) クロマツ（球果）：*Pinus thunbergii*

卵球形。種鱗先端が肥厚し、アカマツのような鋭い突起がない

(2) イヌガヤ（種子）：*Cephalotaxus harringtonia*

基部に小孔状のへそがあり、薄く固い２面形で表面はざらつく

(3) オニグルミ（内果皮）：*Amygdalus persica*

表面には不規則なおうとつがあり、脈状で不規則な細い筋が粗く全面に分布する。内果皮壁は固く緻密で壁内部に空隙があり、内面は４室に分かれる構造となっている。ほぼ完形の個体には、ネズミ類による食痕がある。

(4) ブナ科 (果皮片)：Fagaceae

暗褐色～明褐色で光沢があり細胞配列が線状に並んでいるため裏表に細い筋がある。基部、頂部ともに欠くためブナ科のどの属に当たるかは不明。

(5) コナラ属 (果実)：*Quercus* sp.

果実は広卵形で基部の着点は中央がやや突出する。

(6) アカガシ亜属（幼果 / 核斗）：*Cyclobalanopsis* sp.

核斗に同心円（渦巻）状の文様が入る。

(7) アラカシ（果実）：*Quercus glauca* (*Cyclobalanopsis glauca*)

果実は広卵形で基部の着点は中央がやや突出する。頂部の花柱は先端が取れているが輪状紋が確認され、果実の肩に薄く広がる。

(8) イチイガシ（幼果）：*Quercus gilva* (*Cyclobalanopsis gilva*)

花柱は太く、柱頭は傘状で外向き。

(9) シラカシかアカガシ（種子）：*Quercus myrsinifolia*（*Cyclobalanopsis myrsinifolia*）/*Quercus acuta*（*Cyclobalanopsis acuta*）

花柱が肩の延長上に緩く突出し、輪状紋は花柱基部のみにある。

(10) クロモジ属かクスノキ (種子)：*Lindera* sp./*Cinnamomum camphora*

種子は破損し変形するが、球形と考えられる。種皮は平滑。低い１個の隆条がへそから始まるが、破損しているために１周するか否かは不明。

(11) ウメ (核)：*Prunus mume*

やや扁平。頂部は尖り、1 本の明瞭な縫合線が発達する。表面には全面に小点状の孔がまばらに分布し、着点に向かって収束するやや短い脈状で浅い溝がある。

(12) モモ (核)：*Amygdalus persica* (*Prunus persica*)

やや扁平な広楕円形。頂部は尖り、基部中央に湾入したへそがある。１本の明瞭な縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。ネズミ類による食痕のある個体が多くある。

(13) トチノキ (幼果)：*Aesculus turbinata*

果実は歪んだ球形で上半部が太く、縦方向３片に分割される構造で、出土した幼果は果軸と２片が残っている。果皮は褐色で厚くやや柔らかく表面はざらついて粗い斑紋がある。内部はおよそ３室に分かれている。

(14) ムクロジ (種子)：*Sapindus mukorossi*

種子は歪んだ球形で黒色で鈍い光沢があり、長軸の約２分の１程度の長い線状のへそがある。出土した種子はやや未熟でへその周囲に果皮の内側部分が残ってしわを呈している。

(15) エゴノキ（内果皮）：*Styrax japonica*

狭楕円で、基部が腹面に斜切形。表面がややざらつく。ハクウンボクやコハクウンボクよりも粗い網目。

５．破断面の特徴

多量に検出できたモモ（核）について、完形、ほぼ完形の個体が 79 個あり、そのうち側面に丸い穴が空くネズミ類の食痕のある個体（？付きも含む）が 38 個あった（同様の食痕が、オニグルミにも認められた。）。また、リスの食痕には縫合線に沿って半分に割れる特徴がある。片としたほとんどにこの特徴が認められるが、自然に割れた個体との区別ができない。一方、小片に関してはこの判断もできなかった。また、明らかに縫合線以外の場所で割れた個体も存在するが、ごく僅かであった。縫合線以外の場所で割れた個体に関して、人為を想定することも可能であるが、「自然環境下で同様の割れ方をしない」という確証がない。更に、今回は数が少なかったことから、人為を想定することには難がある。

参考文献

浅野貞夫（1995）新装版 原色図鑑 芽ばえとたね - 植物３態 / 芽ばえ・種子・成植物 -．p.278，国農村教育協会.
石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑．p.326，石川茂雄図鑑刊行委員会.
徳永桂子（2004）日本どんぐり大図鑑．p.156，偕成社.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000）日本植物種子図鑑．p.641，東北大学出版会.

調査区	遺構名	層位	番号	分類名	部位	状態 (数量)	食痕	その他
5 区	SK04	最下層	K5044	アラカシ	果実	ほぼ完形 1		
			K5018	アラカシ	果実	片 2		
				イヌガヤ？	種子	小片 2		
			K5024	シラカシかアカガシ	果実	ほぼ完形 1		
				アカガシ亜属	果実	片 1		
				コナラ属	果実	片 2		
			K5025	クロマツ	球果	ほぼ完形 1		
4 区	SE01	掘方	E0005	イヌガヤ	種子	完形 1		
3 区	SE02	掘方	X0031	モモ	核	完形 1, 片 1, 小片 1		
			X0032	モモ	核	片 1		
			X0039	モモ	核	ほぼ完形 1, 片 1, 小片 3	ほぼ完形 1/1 に食痕	
			X0045	モモ	核	完形 1, 片 1, 小片 2	片 1/1 に食痕	
				アカガシ亜属	核斗	片 1		
		掘方	X0050	モモ	核	片 1		
			X0052	モモ	核	完形 1		
		曲げ物内	X0056	モモ	核	完形 1, 片 1		
7 区	SD129		D5246	モモ	核	完形 1		
3 区	SD145		D0063	モモ	核	ほぼ完形 1, 片 2, 小片 2		
2 区	SX01		X0023	モモ	核	ほぼ完形 1, 小片 1	ほぼ完形 1/1 に食痕	
			X0029	モモ	核	完形 2, 片 2, 小片 1		
			X0034	モモ	核	ほぼ完形 1, 小片 1		
			X0035	モモ	核	片 1		
			X0037	モモ	核	完形 2		
3 区			X0043	モモ	核	完形 20, ほぼ完形 6, 片 30, 小片 1	ほぼ完形 6/6 に食痕	
				ウメ	核	片 1		
			X0048	モモ	核	完形 3, ほぼ完形 4, 片 3	ほぼ完形 3/4 に食痕	
2 区	SX02		X0015	モモ	核	ほぼ完形 3, 片 2, 小片 2	ほぼ完形 3/3 に食痕	
	SX03		X0007	モモ	核	ほぼ完形 3, 片 2, 小片 2	ほぼ完形 3/3 に食痕	
3 区	SR02		R0119	モモ	核	完形 1		
			R0133	オニグルミ	内果皮	片 1		
4 区		下層	R0152	コナラ属	種子 (やや不熟)	ほぼ完形 1, 小片 1		
			R0155	クロモジ属またはクスノキ	種子	完形 1		
				オニグルミ	内果皮	ほぼ完形 1, 片 1, 小片 2	ほぼ完形 1/1 に食痕、小片 1/2 に食痕？	
		下層	R0160	コナラ属	果実	ほぼ完形 1		
				シラカシかアカガシ	果実	片 3		
				ムクロジ	種子	片 1		
				トチノキ	幼果	片 1		
			R0162	コナラ属	果実	小片 1		
			R0169	シラカシかアカガシ	果実	ほぼ完形 1		
				イヌガヤ	種子	片 2		
2 区	SD161	中層	R0051	モモ	核	完形 1, ほぼ完形 1, 小片 3	ほぼ完形 1/1 に食痕	木片 2
		下層	R0052	モモ	核	片 1		
			R0057	モモ	核	小片 5,2 個は接合		
				不明（ブナ科の可能性有り）	果実？	小片 1		
		中層	R0061	モモ	核	完形 2, 小片 4	小片 1/4 に食痕	
		下層	R0062	モモ	核	ほぼ完形 4, 小片 10	ほぼ完形 1/4 に食痕	木片 2
		最下層	R0063	モモ	核	片 3		
		最下層	R0064	ブナ科	果皮	片 1		木片 1
				コナラ属	果実	片 1, 小片 1		
				アカガシ亜属	幼果	完形 2		
				アカガシ亜属	殻斗	片 1		
				イチイガシ	幼果	完形 1		
				シラカシかアカガシ	果実	完形 2, 片 1		
				エゴノキ	内果皮	片 1		
		中層	R0083	モモ	核	完形 1, 片 8, 小片 3	片 1/8 に食痕？	
			R0084	モモ	核	完形 2		
			R0093	モモ	核	完形 21, ほぼ完形 10, 片 7, 小片 13	ほぼ完形 7/10 に食痕 , ほぼ完形 3/10 に食痕？	
		下層	R0095	モモ	核	完形 1, 片 6		
			R0099	モモ	核	完形 1, ほぼ完形 3, 片 4	ほぼ完形 3/3 に食痕	ほぼ完形の 1 つは接合
3 区		下層	R0103	モモ	核	完形 10, ほぼ完形 1, 片 20	ほぼ完形 3/3 に食痕	ほぼ完形の 1 つは接合
				ウメ	核	完形 1		
		最下層	R0105	モモ	核	完形 5, ほぼ完形 3, 片 11, 小片 4	ほぼ完形 3/3 に食痕	
			R0110	モモ	核	完形 2		完形の 1 つは接合

表 11　種実同定結果

図版８　大型植物遺体

クロマツ（球果）

イヌガヤ（種子）

オニグルミ（内果皮）

ブナ科 (果皮片)

アカガシ亜属（幼果 / 核斗）

イチイガシ（幼果）

シラカシか
アカガシ（種子）

クロモジ属か
クスノキ (種子)

ウ メ(核)

モ モ(核)

トチノキ (幼果)

ムクロジ (種子)

エゴノキ（内果皮）

背景は 1mm 方眼

第５章　まとめ

第１節　遺構の変遷

弥生時代前期～中期

第１次調査区において、自然河川 SR02 と合流する溝 SD160 を検出した。また、当該期の遺構を含む検出された一部の遺構から、少量ではあるが縄文時代後期に遡る遺物の出土が確認され、あるいは本遺構のベースとなる砂層が、縄文時代に遡る時期の流路である可能性も想定される。さて、SR02 は調査時の所見をもとに、大きく蛇行して配されることから、東西走する自然河川として報告した。

遺物量は乏しいが、土器の調整等の残存は良好で、上流域に近接して当該期の集落が所在した可能性は高いと考えられる。

弥生時代後期～古墳時代前期

第１次調査区において自然河川 SR03 を、第２次調査区において自然河川 SR01 をそれぞれ検出した。SR01 は東西走する自然河川で、流路幅 50 m以上を測り、三殿の谷部を大きく蛇行して流下していた番屋川の旧流路と考えられる。一方 SR03 は、流路幅５m前後と小規模で、概ね直線状に配されることから、検出延長が短いため断定はできないが、大型灌漑水路の可能性も否定できない。流路内には複数の木杭が打設されていたようであり、シガラミなどの構造物が設けられていた可能性も考えられる。こうした点から、上述した SR02 から分岐する SD160 は、本来は本流路から分岐していた可能性も考えられる。

なお、SR01 と SR03 は、出土遺物から同時期に流下していたと考えられるが、調査区が離れていることから、関係については明らかにはできない。また、南に近接する三殿出口遺跡では、当該期の土坑などの遺構が検出されており、本遺跡周辺に小規模な集落が点在していた可能性が想定できる。

古代

９世紀後半～10 世紀後葉に位置付けられる井戸１基 SE02 と、土坑状の落ち込み４基 SX01 ～ SX04 が、第１次調査区北半部で検出されている。検出された遺構に飲用などに供されたと想像される井戸が含まれ、甕や鍋といった多数の炊飯具が出土していることからも、本調査区周辺において、集落ないしは居館等の居住施設が経営されていた可能性は高いと考えられる。出土遺物には、上述した時期以降の 11 世紀代にかけての遺物も一定量出土しており、また第３章にも既述したように、調査時の写真記録などからは報告遺構以外にも遺構とみられるものが複数確認され、遺跡が比較的長期にわたり経営されていた可能性が指摘できる。

出土遺物には、銅碗や緑釉･灰釉陶器、杯蓋硯や猿面硯といった複数面の陶硯、墨書土器や斎串、土錘、製錬鍛冶滓などがあり、11 世紀代にまで時期を拡げるなら、越州窯青磁や多量の平・丸瓦も含まれ、銅碗との関係から寺院に類する施設の存在と、多様な職能集団を抱えた有力階層の居住が推測される。

また、中世の大型灌漑水路 SD161 からは、律令祭祀具である土馬と考えられる土製品が出土している。土馬は、旧稿での検討（蔵本 2017）において、県内では９世紀前葉を下限とすることを指摘したが、SD161 からは少量ながら十瓶山編年Ⅱ -3 ～ 4 期に位置付けられる須恵器などの資料が出土しており、上述した下限の資料が追加されたものと評価したい。同時に本遺跡周辺が、８世紀後葉～９世紀前葉には律令制祭祀の祭祀場として利用されていたことが明らかとなったことも重要であろう。

中世Ⅰ期

11 世紀後葉～ 12 世紀前葉を本時期とする。第１次調査区で大型灌漑水路 SD161 が、第２次調査区で溝 SD021 と SD128 がそれぞれ開削される。SD161 は、第３章で既述したように、調査時には番屋川の旧流路として調査されたが、調査資料や空中写真の検討から、大型灌漑水路の可能性を指摘する。開削時期については、11 世紀前葉までの遺物を混入の可能性を想定し、当該期の可能性を想定する。また 13 世紀前葉には一定度埋没し、上面に開削された溝 SD145 より 13 世紀後半には完全に埋没していたと考えられる。SD128 は、第２次調査区を北東方向に斜断する直線溝で、上流に SD161 が想定されることから、その支線水路の可能性を想定する。SD021 も、SD128 の半町ほど北をほぼ同方向に配された溝であり、同様な機能を有する溝と考えられる。大型灌漑水路の開削を契機として、本地域の耕地としての開発が進められた可能性を想定したい。

中世Ⅱ期

12 世紀後葉～末を本時期とする。第１次調査区 SD161 は用水路としての機能を維持し、第２次調査区に新たに屋敷地が成立する。屋敷地の遺構として SB02 と SD023 を想定する。SB02 は、後述する SB01 に先行し、SB01 とほぼ同位置に重複する同規模の建物であり、相前後して建て替えられた可能性が想定される。つまり、後述する中世Ⅲ期とは大きな時期差はないものと考える。

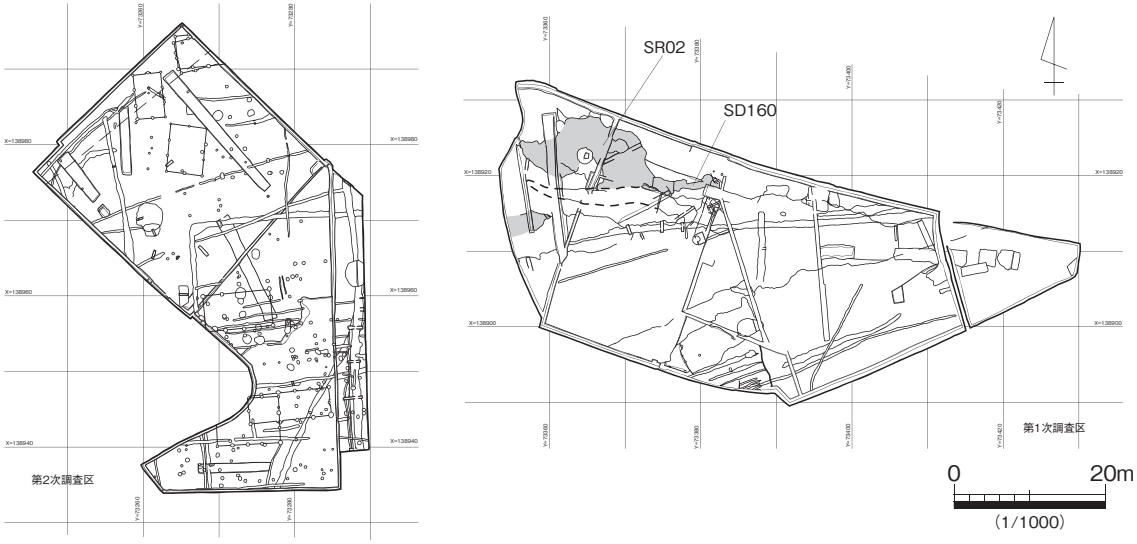
屋敷地の成立は、大型灌漑水路 SD161 開削からかなり遅れるものの、SD161 と近接した位置に屋敷地が開かれ、水路の維持･管理を含め、屋敷地が水路と無関係に設置されたとは考え難い。

中世Ⅲ期

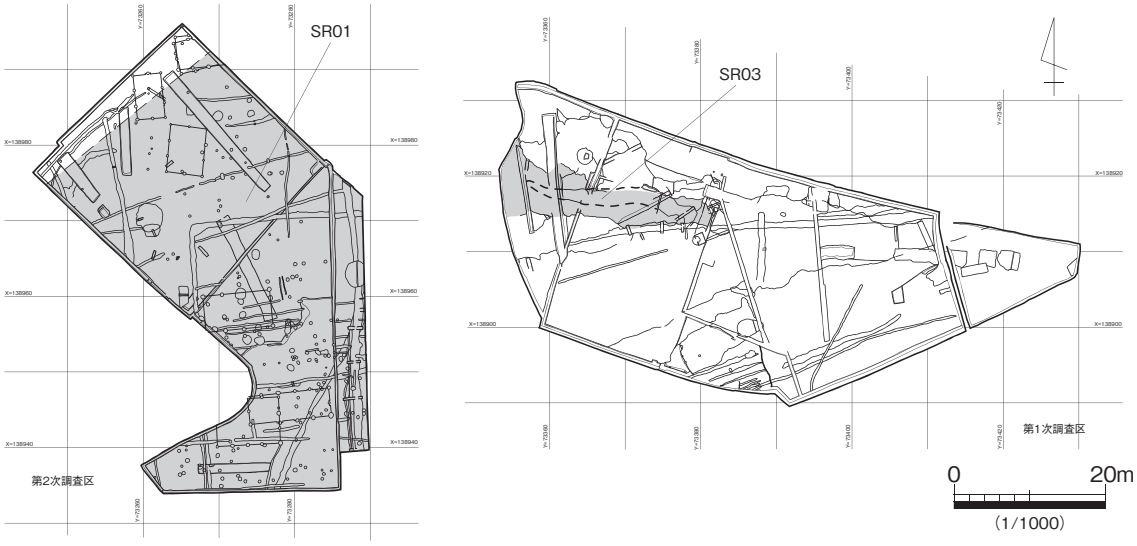
12 世紀末～ 13 世紀前葉を本時期とする。SD161 は依然用水路として機能していた可能性は高く、第２次調査区屋敷地では、出土遺物より SB06、SD129 を当該期の遺構とし、それらと主軸方位が一致する SB01、SB03、SB05 も同時期の建物の可能性を想定する。

調査区南部に大型建物群を、北部に小型建物群をそれぞれ配

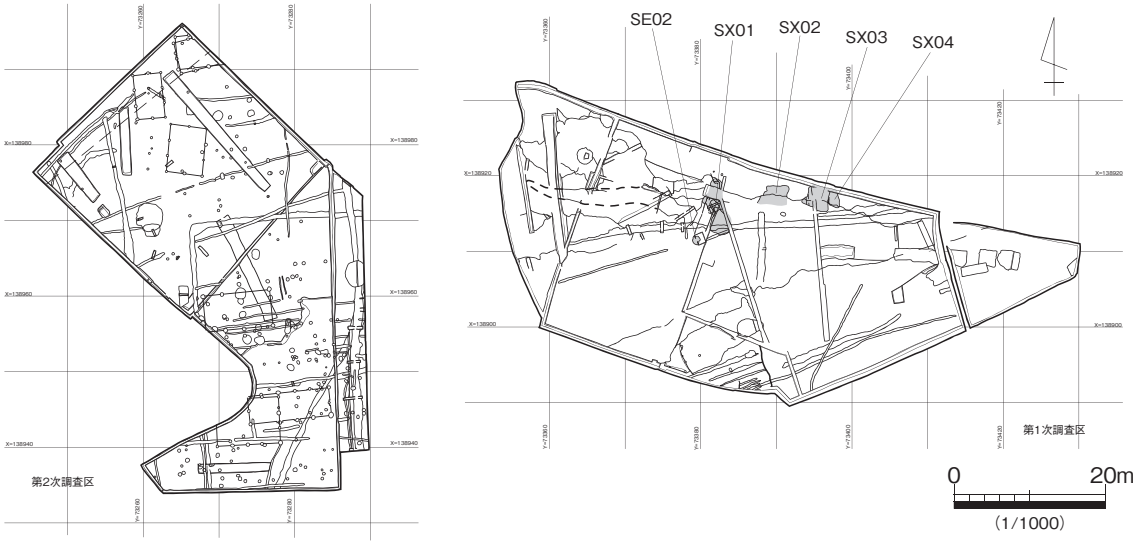
弥生時代中期



弥生時代後期～古墳時代前期

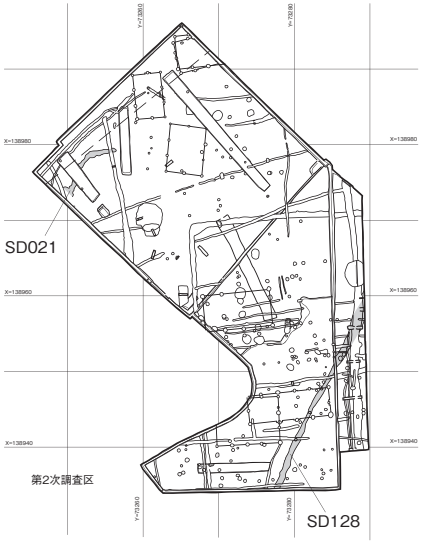


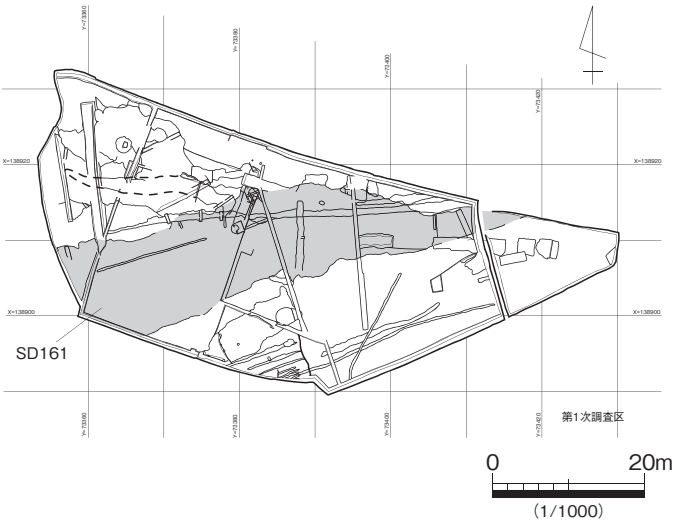
古代



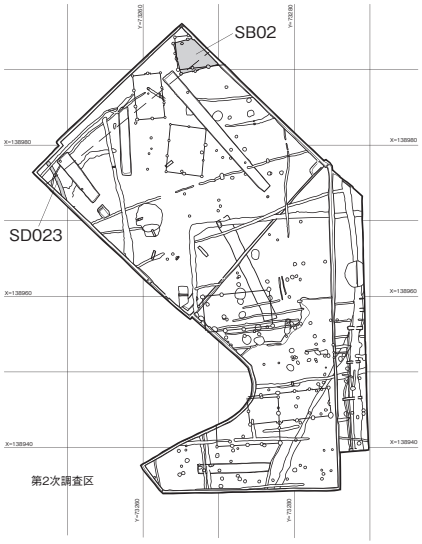
第 90 図　遺構変遷図 1

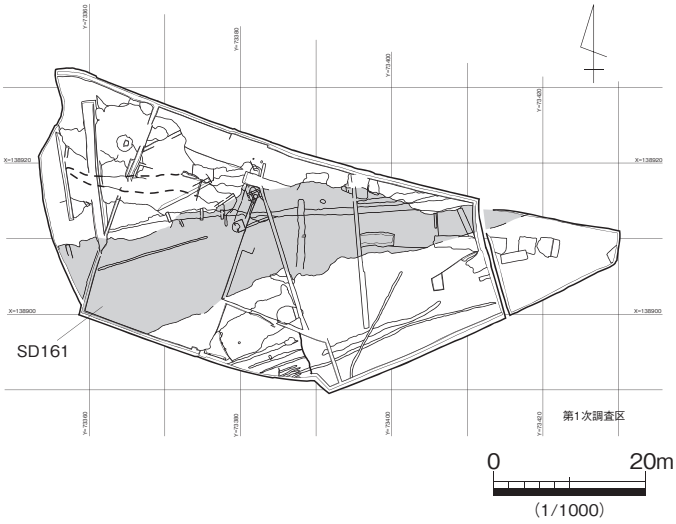
中世Ⅰ期（11 世紀後葉～ 12 世紀前葉）



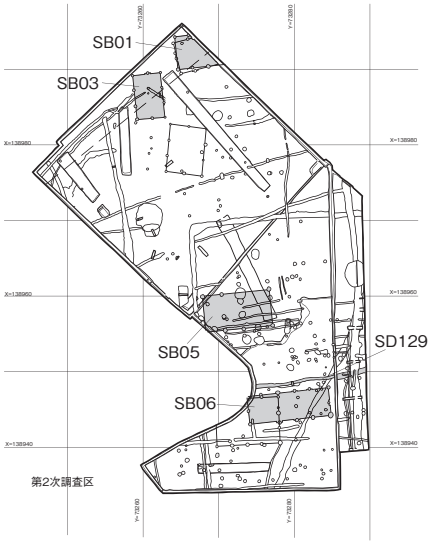


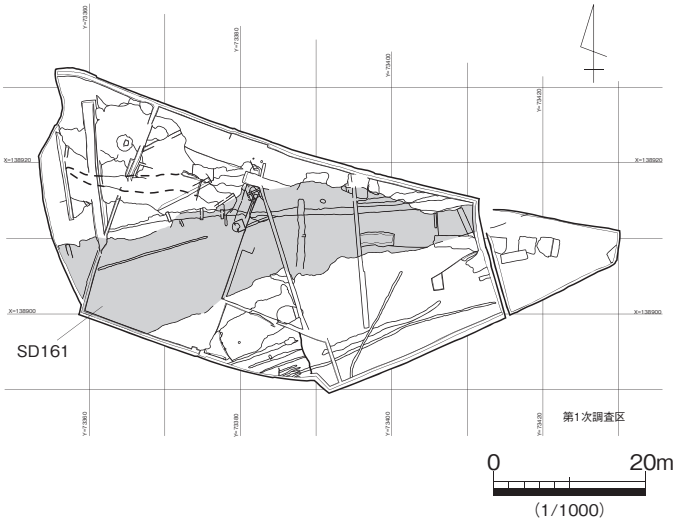
中世Ⅱ期（12 世紀後葉～末）





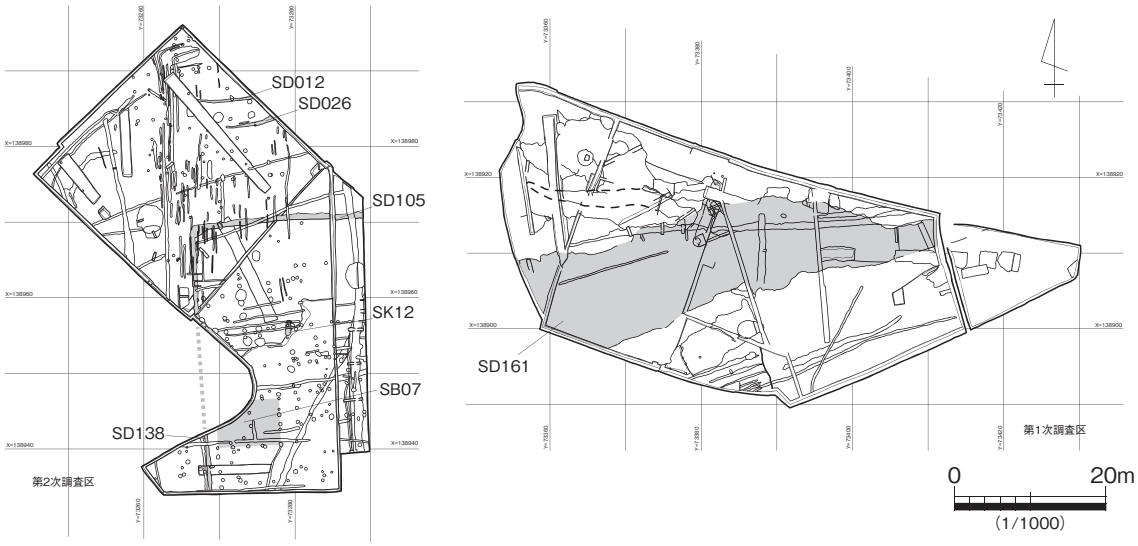
中世Ⅲ期（12 世紀末～ 13 世紀前葉）



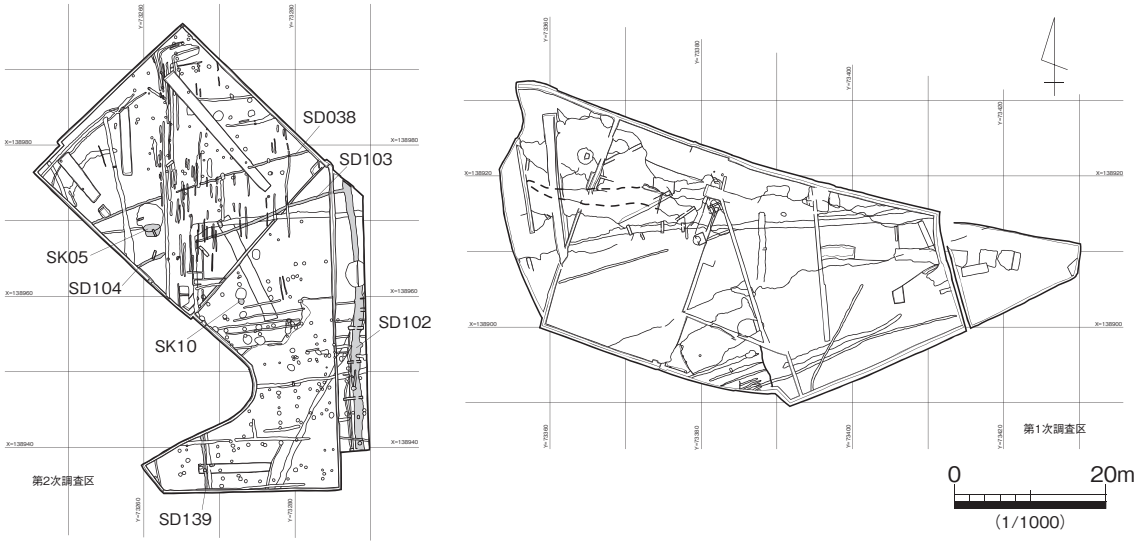


第 91 図　遺構変遷図２

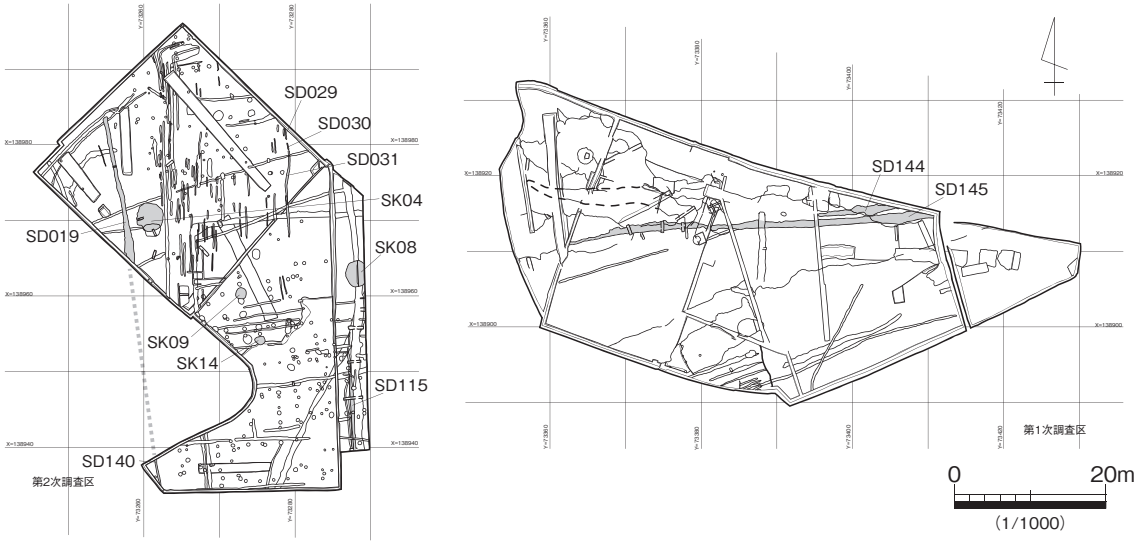
中世Ⅳ期（13 世紀前葉）



中世Ⅴ期（13 世紀前葉～中葉）



中世Ⅵ期（13 世紀中葉～後葉）



第 92 図　遺構変遷図３

して、階層的な建物配置を認めるものの、両者を隔てる明確な区画施設は明らかではない（註1）。また、中世Ⅱ期と比して建物数は大きく増加し、大型建物群が出現するものの、建物群周囲を囲繞する明確な区画施設は未検出であり、この点は今後の課題であろう。

中世Ⅳ期

13 世紀前葉を本時期とする。SD161 は、低湿地状を呈して一定度埋没が進行し、用水路としての機能は低下していた可能性が考えられる。屋敷地では、この段階で区画溝 SD105・SD138 が開削され、区画内部に大型建物 SB07 が配される。復元された建物は 1 棟のみだが、建物を構成しない柱穴は多く、さらに区画施設の内外に建物が配されていた可能性は高いと思われる。その他に、SK12、SD012、SD026 について当該期の遺構の可能性を想定する。

中世Ⅴ期

13 世紀前葉～中葉を本時期とする。SD161 は、おそらくは中層段階まで埋没が進行し、用水路としての機能は停止し、窪地状を呈して放棄されていた可能性が高い。この段階で、新たな用水路が開削されたかどうかは、調査では明らかにはできなかった。

第 2 次調査区屋敷地では、早くも区画溝は埋められ、新たに SD102 などが開削される。本時期には、建物遺構は未確認だが、溝などへは多量の遺物が投棄されており、生活空間が近接して所在した可能性は高い。こうした状況は、次の中世Ⅵ期へと継続し、東側の調査区外に居住空間が移動した可能性も考えられる。SD102 のほか、SK05、SK10、SD038、SD103、SD104、SD139 は、当該期に同時並存する遺構の可能性を想定する。

中世Ⅵ期

13 世紀中葉～後葉を本時期とする。第 1 次調査区では、SD161 が完全に埋没し、その北縁に小規模な東西溝 SD144、SD145 が開削される。第 2 次調査区屋敷地では、大型土坑 SK04、SK08 を中心に、SK09、SK14、SD019、SD029、SD115、SD140 は、当該期に同時並存する遺構の可能性を想定する。大型土坑 SK04、SK08 からは、板材や竹製品のほか、虫損のみられる加工木や炭化材などの木製遺物が多量に出土した。出土した木製品は、板材を中心とするものの、複雑な加工が施された加工木なども出土しており、屋敷地内で木工に関与した専門工人が居住していた可能性が考えられる。

中世Ⅶ期

13 世紀末以降を本時期とする。第 1 次調査区では、包含層 2 が 15 世紀中葉にかけて堆積し、明確な遺構は確認されていない。第 2 次調査区では、調査区南半部を中心に、鋤溝とみられる小溝群が確認され、屋敷地は放棄され、耕作地として利用されていたと考えられる。鋤溝群から出土した遺物は、多くが屋敷地の各遺構から混入した遺物とみられ、詳細な時期を特定することはできなかったが、後出する遺物が出土していないことからすれば、屋敷地廃絶後の比較的短時間のうちに、耕地化された可能性も考えられる。

近世Ⅰ期

14 ～ 16 世紀にかけて明確な遺構は確認されておらず、次に調査区周辺で土地利用が明らかとなるのは、16 世紀後半～ 17 世紀前葉で、第 1 次調査区南西部第 1 遺構面において SD148 が開削される。SD148 の性格は明らかではない。SD148 の南に配された鋤溝群は、おそらくは SD148 と重複し、近接した時期に位置付けられる可能性も考えられる。おそらくは 17 世紀前半代には、第 1 次調査区南半部は耕作地として利用されていた可能性は高いと考えられる。

近世Ⅱ期

18 ～ 19 世紀を本時期とする。第 1 次調査区北西部で、井戸 SE01 や板敷の土坑 SK18 が、18 世紀後葉～ 19 世紀初頭を上限として構築され、建物遺構は確認されていないが、明治期にかけて周辺が屋敷地として利用されていた可能性が想定される。また、SD142 は屋敷地の南縁を区画する区画施設であった可能性も考えられる。その他、 SK19 ～ SK21、SD143、SD146 も出土遺物から時期を特定できないが、当該期の遺構の可能性を想定する。

一方第 2 次調査区では、第 1 面において鋤溝群が確認され、18 世紀後半代には調査区周辺が耕地化されていたことが確認された。

本文註

1　区画溝 SD105･SD138 は、当該期に開削されていた可能性も考えられるが、この場合、溝と SB05 北西隅柱の芯々間は約 1 m しかなく、遺構面上面の削平を考慮すると、同時期に両者が並存した可能性は低いと考えられ、区画溝は後出するものと判断した。

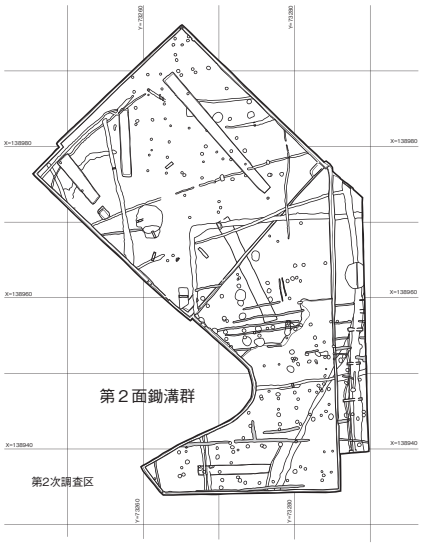
第 2 節　三殿北遺跡出土の銅碗について

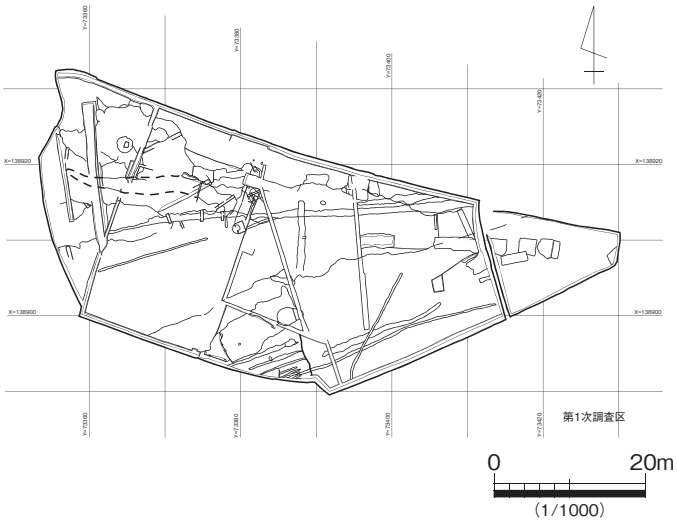
1　はじめに

本遺跡からは、SD161 最上層と 2 区北西隅の包含層より、銅製品の小片各 1 点が出土した。報文中にも記したように、2 片の銅製品は、器壁の厚さなどの特徴より、本来は同一個体であった可能性が高いと判断した。そのうち包含層より出土した資料（482）は、端部を約 5 ㎜内側に折り返した特徴を有し、銅碗の可能性を想定した。さらに、近接した位置より 10 世紀後半頃の黒色土器碗（1）が出土し、銅碗が出土した層と同一層とは断定できなかったものの、銅碗の所属時期も 10 世紀を中心とした時期である可能性が想定された。

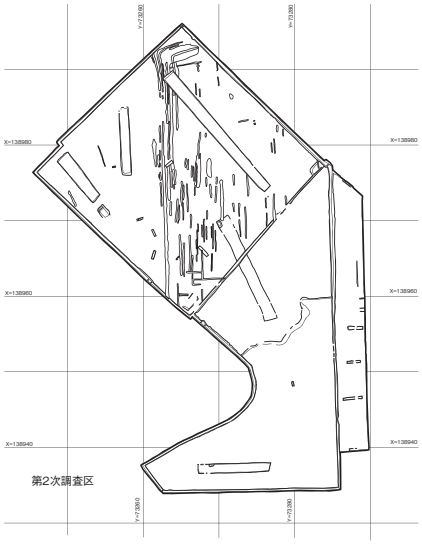
さて、香川県内で古代～中世初頭の銅製容器の出土例は、管

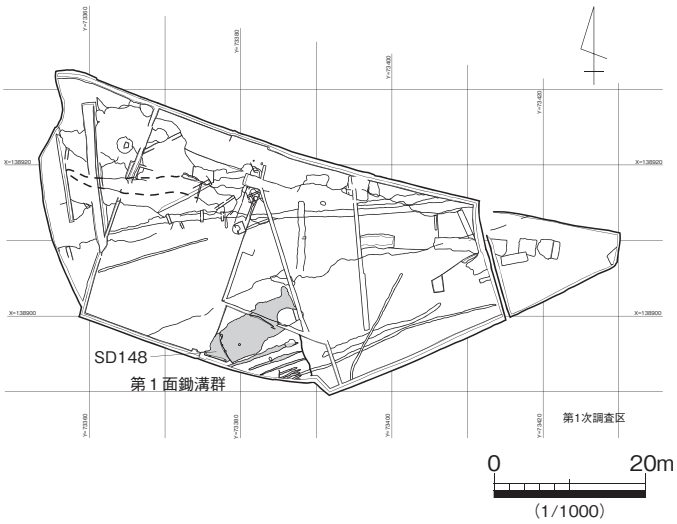
中世Ⅶ期（13 世紀後葉～）



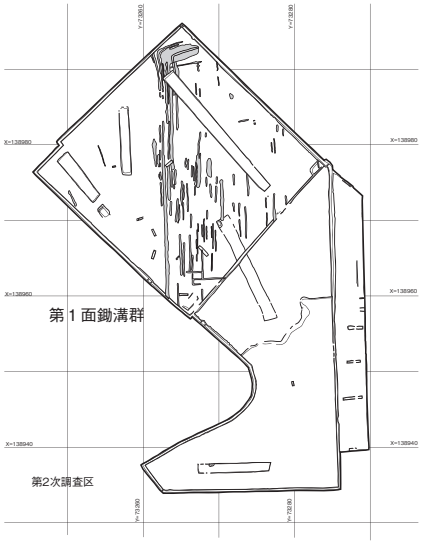


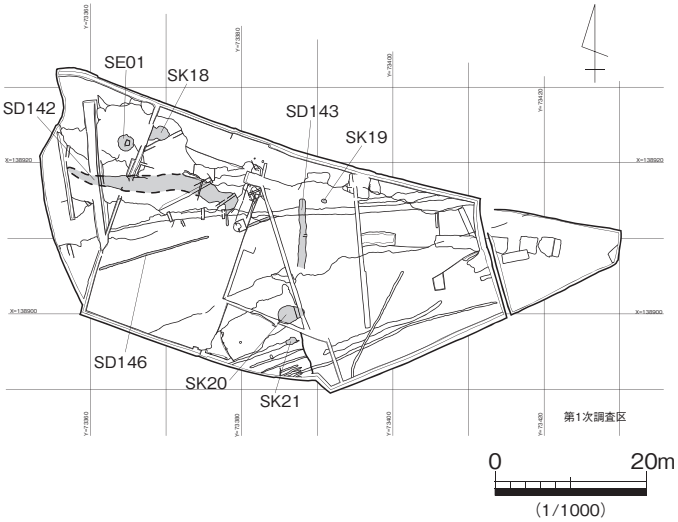
近世Ⅰ期（16 世紀後半～ 17 世紀前葉）





近世Ⅱ期（18 世紀～ 19 世紀）





第 93 図　遺構変遷図４

見の限りでは坂出市讃岐国府跡 SD1002 出土銅碗（香川県教育委員会 2019e）[註1] と、善通寺市旧練兵場遺跡Ⅱ -2 区 SD2001 出土銅鉢（香川県教育委員会ほか 2013）の２点に限られる。そのほか、高松市讃岐国分寺跡（高松市教育委員会 2019）より板状の青銅製品の小片が数点出土しているが、いずれも容器類ではないようだ。旧練兵場遺跡出土資料は、12 世紀前半の「道路状遺構」と推定される遺構出土資料（同書図 819-1）で、古代に位置付けられる資料も少量共伴していることやその形態などの点から、本資料も古代に遡る可能性は考えられる。

上述のように、県下での銅碗の出土例は乏しく、本遺跡出土資料の重要性は高いと思われる。既述した第４章での鉛同位体比分析の結果を踏まえ、以下では、本遺跡出土の銅碗の位置付けや評価について、若干の考察を加えることとしたい。

２　自然科学的分析結果

さて、本遺跡出土資料については、第４章において鉛同位体比分析と器表面の蛍光Ｘ線分析による含有元素の定量分析を実施し、その結果を掲載した。分析の結果、朝鮮半島産材料を使用して製作された可能性のあること、錫の含有比が非常に高いことが明らかとなった。

鉛同位体比分析では、Ａ式図（第 84 図）では、朝鮮半島領域には合致せず、Ｂ式図（第 85 図）で朝鮮半島領域に近接していることから、朝鮮半島産材料の可能性が示されている。しかし、分析結果は完全には一致せず、なお検討の余地を残していると考える。また、蛍光Ｘ線分析では、簡易的な分析であるため、数値に厳密性は乏しいが、錫の含有が非常に高く、鉛の含有が１％以下と低い特徴が示され、いわゆる二元系高錫青銅容器（清水 2010）である可能性が高い。錫の含有量が異常に高いが、第４章にも示されているように、銅が約５％と少なく、埋没後に銅が溶出したことが要因と考えられる。

近年の鉛同位体比を用いた分析では、朝鮮半島産材料を含めた「非国産原材料を使用した無台丸底銅鋺は６世紀末から７世紀初頭の所産、また国産原材料を使用した無台平底銅鋺が７世紀中葉の所産」であることが明らかにされ（澤田・齋藤・長柄・持田 2019）、国内での銅精錬が７世紀中葉までさかのぼることが分析により確認されている（齋藤 2019b）。

しかし、本資料のような二元系高錫青銅容器の製作技術は、古代において列島へは伝播しなかったとされる（三船 2017）。鉛同位体比分析の結果からも、本資料が舶載品で朝鮮半島産である可能性は高い。しかし、厳密には未だ断定するまでには至らないように思われる。

香川県内の古代～中世の出土資料で、鉛同位体分析が実施されている資料を表 12 に示した。讃岐国府跡出土の金銅製龍頭を除いて、概ね９～ 10 世紀を境に、日本産原料から半島・大陸産原料へと変化していることが読み取れる。こうした状況は、一般に平安時代中期以降、銅鉱石の枯渇により、国内での必要量を賄うことができなくなったとの指摘と整合的である。

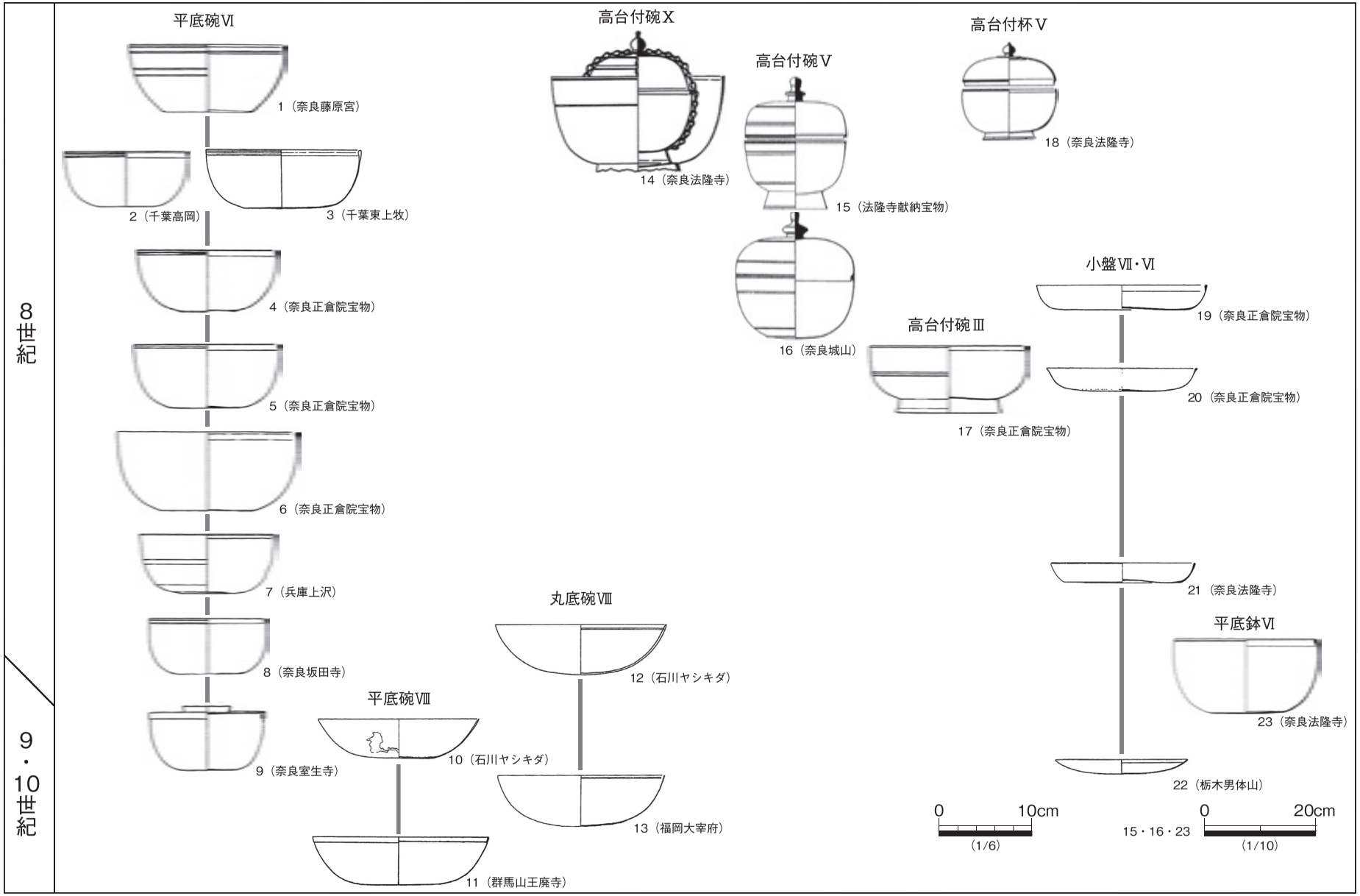
３　銅碗の形態

上述したように、本遺跡出土の銅製品は小片であるが、考古学的な観察から銅製容器の可能性が想定された。共伴する資料から詳細な時期を特定することは困難であったが、周辺の遺構からの資料を参考とすると、９世紀後半～ 11 世紀前葉の可能性が考えられる。さらに、仮に上述した黒色土器碗を共伴資料とするならば、10 世紀後半を下限とする時期が想定される。

さて、口縁部を内側に折り返す金属製容器には、平底碗、丸底碗、高台付碗、高台付杯、小盤、平底鉢の各器種がある。第 94 図には、口縁部を内側に折り返す金属製容器について、先学の編年図（毛利光編 2005）を一部改変し、８世紀以降の資料についてのみ提示した。同書によれば、上述した特徴を有する容器は、10 世紀の群馬県山王廃寺出土の平底碗Ⅷ類を最後に、以後は外反口縁もしくは単口縁の六器や高台付碗に収斂されるとされる。上述した本遺跡出土資料の時期とも、大きな齟齬はみられない。また、本資料は口縁部が直立せず、緩やかに湾曲し

表 12　古代以降の香川県内出土試料の鉛同位体分析結果

遺跡名	所在地	遺物番号	器種	時代	206Pb/204Pb	207Pb/204Pb	208Pb/204Pb	207Pb/206Pb	208Pb/206Pb	産地	出典
讃岐国府跡	坂出市府中町本村	12-1013	金銅製龍頭	８世紀前～中葉	18.8780	15.6923	39.6156	0.83124	2.09851	半島	齋藤 2019
奥白方中落遺跡	仲多度郡多度津町奥白方	252	隆平永寶	796 年初鋳	18.419	15.605	38.529	0.8472	2.0918	日本	魯・平尾 2008
奥白方中落遺跡	仲多度郡多度津町奥白方	254	隆平永寶	796 年初鋳	18.420	15.605	38.528	0.8472	2.0917	日本	魯・平尾 2008
奥白方中落遺跡	仲多度郡多度津町奥白方	255	隆平永寶	796 年初鋳	18.423	15.609	38.542	0.8473	2.0921	日本	魯・平尾 2008
奥白方中落遺跡	仲多度郡多度津町奥白方	256	隆平永寶	796 年初鋳	18.421	15.609	38.539	0.8473	2.0921	日本	魯・平尾 2008
奥白方中落遺跡	仲多度郡多度津町奥白方	257	隆平永寶	796 年初鋳	18.424	15.610	38.544	0.8473	2.0921	日本	魯・平尾 2008
飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町東二	201	帯金具	平安時代前葉	18.403	15.594	38.497	0.8473	2.0919	日本	平尾 2018
西村遺跡	東かがわ市西村	492	帯金具	平安時代前葉	18.434	15.602	38.53	0.8464	2.0902	日本	平尾 2019
多肥松林遺跡	高松市多肥上町	217	八稜鏡	９～ 10 世紀	18.417	15.608	38.536	0.8475	2.0924	日本	平尾 2016
西村遺跡	東かがわ市西村	705	鉛製水瓶	平安時代後期	18.459	15.646	38.955	0.8476	2.1103	不明	平尾 2019
三殿北遺跡	東かがわ市三殿	482	銅碗	10 ～ 11 世紀	18.751	15.745	39.117	0.8397	2.0861	半島？	本書
田村遺跡	丸亀市田村町	未報告	銅滴	12 世紀	18.67	15.647	38.64	0.8381	2.0697	不明	平尾 2019
誉水中筋遺跡	東かがわ市中筋	627	和鏡	12 後半～ 13 世紀	18.317	15.666	38.778	0.8553	2.1170	華南	平尾 2017
東坂元秋常遺跡	丸亀市飯山町東坂元	142	坩堝	13 世紀	18.313	15.671	38.783	0.8558	2.1178	華南	平尾 1019



毛利光俊彦編 2005『古代東アジアの金属製容器Ⅱ（朝鮮・日本編）』，独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所掲載付図７・８を一部改変転載

第 94 図　金属製容器編年図

て立ち上がるようであり、また一定の器高を有するとみられる点を重視すると、平底碗Ⅷ類ないし丸底碗Ⅷ類が本資料の候補となろう。小片のため、これ以上器種を特定することは困難だが、丸底碗Ⅷ類や平底碗Ⅷ類の国内での出土例は、８世紀後葉～ 10 世紀にあり、本遺跡で井戸 SE02 や性格不明遺構 SX01 などが開削された時期と合致する。本資料が、本遺跡において何らかの目的で使用されたことは確実と考える。

国内で出土した平底碗Ⅷ類と丸底碗Ⅷ類は、いずれも統一新羅の平底鉢や丸底鉢の小型品とされ、８世紀末～ 10 世紀の銅器の形式変化は「中・晩唐や統一新羅の変化に対応」する（毛利光編 2005）。上述した自然科学的分析からは、断定は困難ながら朝鮮半島産の材料の使用が確認された。統一新羅時代（A.D. 7 ～ 10 世紀）には、B1 型の二元系高錫青銅容器が出現する（清水 2010）。こうした自然科学的分析と考古学的な検討を踏まえるなら、本資料が統一新羅時代末期の銅碗である可能性が高いと考えられる。

４　平安時代の国際交流

明確な国家が誕生する以前から、列島社会では大陸と、一時的な断絶期間を除き、絶えず関係を築いてきた。大陸からもたらされた奢侈品は、平安時代においても「さかんに政治利用され、支配者たちの権威を高める威信財として機能していた」とされる（田中 2016）。日本の正史に明記された最も早い外国商人の来航は、『後紀』弘仁五年（814）10 月丙申条の「新羅商人」であるが、それ以前から多くの奢侈品がもたらされていたことは、奈良正倉院に唐や新羅、インドなどの国際色豊かな宝物が多数伝世されていることからも明らかであろう。

奢侈品が有する政治性とは、「舶来品の入手の機会を地位や位に応じて与えることで、天皇を中心とする同心円的な身分制の強化をはかった」こと（田中 2016）にそもそも起源し、その質と量の多寡によって階層的に表示される。実際、平安時代の文学作品である『竹取物語』や『うつほ物語』には、虚構の世界での設定ではあるが、貴族たちの周辺に多数の舶来品が登場し、『日本三代実録』仁和元年（885）10 月 21 日条や、『類聚三代格』巻十九（延喜三年（903）８月１日条）には、唐船が博多周辺に来航すると、「都の貴族たちが争って使者を遣わし、朝廷が先買権を行使する前に唐物を買い漁ってしまうことへの禁制が」記録されている（河添 2014）。また、『権記』や『小右記』、『帥記』、『御堂関白記』などの日記類には、実際に貴族が購入した舶来品の内容やその来歴が記されている。

やや時期的に新しい 11 世紀前半成立の資料ではある『新猿楽記』には、中国からの海商がもたらした交易品の品目が記されている。その中には新羅産の仏器は登場しない。しかし、貞観十三年（871）の『安祥寺伽藍縁起資財帳』には、「僧の恵運が大宰府講師兼筑前国講師を拝した折りに、「新羅商客」の「銅鋺疊子（托）」などを購入したこと」が記載され、そのほか「寺物の供養具」として多くの新羅や唐の仏具が掲載されている（毛利光編 2005）。おそらく中央や大宰府の大寺院だけではなく、地方の寺院にも舶載の仏器が招来されていたことは想像される。県内では、三豊市弥谷寺に唐代の金銅五鈷鈴が知られているのみで、またいつ頃から弥谷寺の所蔵となったかは明らかではないが、地方寺院における舶来仏具の実例として貴重な資料といえる。

では、本遺跡で出土した銅碗は、どのような経緯で本遺跡へ搬入されたのであろうか。本遺跡に近接する西村遺跡での検討を踏まえて、次にこの点について考えてみることとしよう。

５　西村遺跡との比較

西村遺跡（香川県教育委員会 2019a）は、本遺跡の東約２㎞に位置する集落遺跡で、平安時代以降与田郷に属していた。西村遺跡では、11 世紀前半新相とされる小型の青銅溶解炉 SF101 が検出されている。SF101 は「直径 35㎝のドーナツ状に…硬化した砂質土…の内側」に、薄い砂混じり粘質土を挟んで上下に炭化物層が堆積し、下部炭化物層より「青銅粒 597 点、合計 78 ｇ分」が出土している（註２）。青銅粒（銅滴）の一部について化学成分分析を実施した結果、鉛をほとんど含まず（0.015%）、錫の比率の高い（約 22 ～ 24%）高錫青銅であることが示され、「舶載鏡などの（高錫青銅：白銅）製品を、鋳造原料に再利用していた」可能性が指摘されている（渡邊・隅・鈴木 2019）。

「鉛を含まず、Sn22% 前後の一群は、明らかに熱間鍛造を行う典型的な二元系高錫青銅容器製作技術の系譜を引いている」とされ（清水 2010）、西村遺跡出土の青銅粒は二元系高錫青銅製品を原料とし、錫の含有比からも既述した三殿北遺跡出土銅碗と同様に、統一新羅時代の製品である可能性が高いと考えられる。

一般に青銅器は、錫の含有量が 20% を超えると衝撃で割れやすくなり、25% を超えると鋳型の中で割れてしまうとされる（三船 2010）。西村遺跡の青銅粒の錫は、鋳型内で割れるとされる 25% 以下の含有量ではあるものの、高錫青銅器の製作技術を熟知していない西村遺跡の工人達が、本資料をそのまま鋳造・再利用しようとしたとは考え難い。おそらく鉛などを加えて錫の含有比率を落とした青銅器を、製作しようとした可能性が高い。その点で、包含層出土資料ながら鉛製水瓶の出土は非常に興味深い。

西村遺跡の青銅溶解炉 SF101 で、どのような製品を鋳造しようとしていたのかは不詳ながら、炉の規模から考えて小型の鋳造製品であったことに間違いはない（森下 2019）。あるいは補修などの作業が中心であった可能性もある。また、炉床内に 78 ｇの青銅粒や銅板片が回収されずに残され、炉周辺の包含層より同時代資料とは断定できないものの小形の青銅金具が出土している点などからは、西村遺跡の工房では、国内外産の銅素材を豊富に所有していた可能性が考えられる。

また、西村遺跡では青銅溶解炉 SF101 に近接して、４基の鉄鍛冶炉と微細鉄滓集中域３箇所などが検出されている。椀形鍛

冶滓 16 点以外に多量の鍛冶滓も出土しており、11 世紀後半段階で、西村遺跡の一部は金属器生産のコンプレックスとして機能していた可能性が高い。

奈良の大仏や銭貨に代表されるように、我が国古代の鋳銅生産は、８世紀に盛期を迎える。その後、「古代銭貨の停廃などに代表されるように、10 世紀後半から 11 世紀にかけて官営の銅・鉛生産が衰退に追いこまれ、私営工房による鉱業生産は継続するであろうが、おそらく官的なバックグランドがないまま全体的な生産量は減少する」と考えられている（高橋 2001）。

そうした中で、上述した西村遺跡の鋳造遺構・遺物は、銅生産の停滞期における具体的な地方における私営工房のあり方を示した点において非常に貴重な資料と評価されよう。上述した『新猿楽記』には積荷のなかに「銅」が掲載されており、おそらくは何らかの製品ではなく、地金として輸入されていた可能性が高く（葉賀・佐々木 1998）、そうした舶載品が西村遺跡の素材の一部を構成していた可能性も想定される。

森下英治氏は、西村遺跡での鉱業生産について、県内の他遺跡での鉄鍛冶や鋳銅関連遺跡・遺物の金属学的分析成果などを踏まえ、「①同一炉・同一地点で鉄器や青銅器の生産を行う段階（古墳時代から古代前半）、②同一地点でありながら個別の炉で鉄器と青銅器の生産を行う段階（古代後半）、③別地点で個別に鉄器生産と青銅器生産を行う段階（中世）の３段階に区分し、西村遺跡では「青銅器生産資料は同時に存した鉄器鍛冶炉とは構造が異なる溶解炉を備え、近接して出土した多数の鉄滓を分析したが…銅粒が混在するものはない。鍛冶関連遺物と鋳銅関連遺物を明確に分けることが可能」とした上で、上記②段階の遺跡として評価した（森下 2019）。

同氏はまた、13 世紀中葉～後半の丸亀市東坂元秋常遺跡第３次調査区６・７区 SX02（香川県教育委員会 2012a）について、「村落の一部に青銅器生産のみを行うエリアが出現していた可能性」を指摘し、③段階の資料として評価する（森下 2019）。しかし、６・７区の同時期の柱穴や溝、遺構検出時の遺物には、少量ながら鉄滓とみられる資料も出土（未報告）しており、さらに東に隣接する第１次調査区（香川県教育委員会 2008b）の 13 世紀後半～ 14 世紀前半代の屋敷地の各遺構からは、鉄滓が若干量出土している。同一遺跡内において、鋳銅生産と鉄鍛冶が場所を違えて行われていた可能性は高く、それは氏が②段階とする内容と共通する。氏が区分する②と③は、時間的な差ではなく遺跡の内容の差である可能性も考えられる。

12 世紀末～ 14 世紀前葉の屋敷地が検出された東かがわ市誉水中筋遺跡（香川県教育委員会ほか 2017a）の各遺構から出土した鉄滓の分析では、微細な銅（Cu）粒や、スパイス（人工的な砒化物）は認められず、鋳造関係の遺構・遺物も認められなかったことから、遺跡内で鍛造鉄器生産のみが行われていたことが明らかとなった（大澤・鈴木 2017a）。こうした事実は、太田原高州遺跡などにみられる製鉄と銅鋳造が未分化な状態（大澤・鈴木 2016・2017b）から、両者が切り離されたことを示していよう。その背景には、上記した『新猿楽記』に記された「銅」のように、中世に「鋳物地金が商品として流通する」ようになったことで、「古代のように製鉄や精錬に関係する工房に寄生した形で、鋳物生産がおこなわれていたのと異なり、鋳型製作工程と溶解工程、鋳込み工程を基本とする鋳造工房が一般的と」なった（五十川 1992）結果、鋳造関係の工人として「鋳物師」や「銅細工」と呼ばれた人々（五十川 1998）が成立したと考えられている。

類似した状況は、古代の官司においては、８世紀中葉から９世紀前葉に既に認められる。「令制の行われた当初に鍛造・鋳造の機能を併せ有していた鍛冶司は、その再置に当って鍛造の機能のみが同司に移り、鋳造の機能は内匠寮に残された」のである（網野 1983）。

銅細工の工人は、「仏具や建築にかかわる装飾品」、つまり「比較的小型で装飾性の高い銅鋳物を生産する職人」で、「必要に応じて需要者にかかわる神社や仏閣あるいはその建設現場に、出職をおこなったとみられ」ており、実際の鋳造遺跡では「小型の炉や坩堝が出土し、その規模は、…鋳物師の工房に比較して小規模なものが多い」とされる。「『松崎天神縁起絵巻』には、西七条の銅細工の家が描かれているが、親方と手伝いの計２名の工人が作業をおこなう程度の小さな作業空間」しかなく、実際の遺跡のありかたと矛盾しないようだ（五十川 1998）。西村遺跡の鋳銅遺構のありかたは、こうした銅細工の工人の工房と共通し、時期的にその萌芽的な状況を示している可能性が高いと考える。

６　三殿北遺跡出土銅碗の評価

以上の検討を踏まえるなら、本遺跡出土銅碗は二元系高錫青銅容器、いわゆる佐波理碗で、西村遺跡の鋳銅遺構から出土した原料と同じ素材であった可能性がある。しかし、本遺跡では鋳銅遺構は検出されておらず、佐波理碗が鋳銅用の原料であったと断定することは困難である。一方、第２次調査区では、中世の遺構などからやや多量の古代後半頃の平・丸瓦片が出土しているものの、仏堂などの遺構は確認されておらず、佐波理碗が仏具として使用されていたとも断定できない。この点は、今後の周辺部の調査の進展に委ねるしかない。

一方、同時に出土した製錬滓からは、西村遺跡とは異なり、より高いレベルの鉄器生産がなされていたことが考えられる。こうした鉄器生産に係る高度な専門技術を有する工人を組織し、またその原料となる砂鉄や舶来の銅製品の入手について、外部と交渉できる人物が、三殿北遺跡の経営主体であったろう。

既に奈良時代には、銅鋳造に関する高い技術を擁する民間の工人の存在が明らかにされ（矢部 1969）、調の鉄・鍬のみならず、私的に生産された鉄や銅は直接交易に回され（註３）、市場に流れたとされる（古尾谷 2011）。金属器生産に関する技術と原料は民間にも存在し、原料を購入し、生産組織を経営・管理しさえすれば、どこにでも製鉄や鋳銅の製作地が成立することは可能

であったと考える。

本遺跡では、これら鉱業生産に関する正確な時期や遺構が不詳なため、歴史資料として評価する上で、現状では困難な点が多い。西村遺跡で確認された銅・鉄の生産工房との比較から、平安時代後期に大内郡内の隣接する二つの郷で、近接した時期に鉱業生産が稼働していた可能性は高いと考えられる。しかし、それぞれが個別に原料の入手や生産組織の管理を行なっていたのか、あるいはより大きな組織の一部として両遺跡が稼働していたのかは、現状では明らかにできない。この点を明らかにすることが、今後の大きな課題と考える。

本文註

1　報告書では銅碗以外に、帯金具の可能性も指摘されている。

2　報告書では、SF101 が検出された 11 世紀前半新相のＡ群と、11 世紀前半古相のＢ群の２群の鍛冶鋳造遺構が確認されたと報告する。Ａ群では、後述するように炉床に残された青銅粒（湯玉）の分析により、純度の高い高錫青銅を用いた鋳造作業がなされており、さらにそうした高錫青銅を用いた鋳造作業以前には、炉内出土の小銅板や周辺出土の青銅金具を溶融して、小形の青銅製品を製作していたことが推測されている。小銅板と高錫青銅を用いた鋳銅作業が、別の作業として前後関係を有する根拠は何なのか。

また、Ｂ群では、土器転用取鍋と羽口に付着した成分組成が類似し、Ａ群の高錫青銅粒とは成分が異なることから、Ａ群とは「別の生産状況（溶解炉）があったと推定」する（森下 2019）。そしてエリア内の柱穴より出土した帯金具を素材と評価する。帯金具は細長孔の巡方で、９世紀前半代の製作の可能性が想定（田中 2003）され、鋳銅遺構群との時間的な開きが大きい。中・四国地方の鋳銅関連遺跡などから出土した腰帯具の各製作時期は、その遺跡の経営期間と時期差を認めない例が多く（蔵本 2018）、その点でもやや異質である。また、そもそも隣接するＡ・Ｂ両群から出土した鋳銅関連遺物の成分組成が異なることのみをもって、Ｂ群に別の生産状況が想定できるのであろうか。

西村遺跡の鋳銅遺構の解釈には、 報告者が想定する素材を含めた鋳造工程の復元案とは、いくつかの点でやや見解の相違を認める。

3　貞観 18 年（876）３月の長門国採銅使兼鋳銭司判官弓削秋佐の解文には、「百姓が私掘した銅で雑器を鋳造し、民間に交易を行っていたこと」が記されている（池田 2004）。

引用・参考文献

網野善彦 1983「中世の鉄器生産と流通」『採鉱と冶金』，日本評論社
池田善文 2004「鉱工業の美祢郡」『美東町史』通史編，美東町
五十川伸矢 1992「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 46 集
五十川伸矢 1998「鋳造遺跡からみた古代・中世の銅鋳物生産」『季刊考古学』第 62 号，雄山閣
大澤正巳・鈴木瑞穂 2016「旧練兵場遺跡出土鍛冶関連遺物の分析調査」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊　旧練兵場遺跡Ⅶ』，香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター
大澤正巳・鈴木瑞穂 2017a「誉水中筋遺跡出土鍛冶関連遺物の分析調査」『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　誉水中筋遺跡』，香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
大澤正巳・鈴木瑞穂 2017b「太田原高州遺跡出土鍛冶関連遺物の分析調査」『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　太田原高州遺跡２』，香川県教育委員会
株式会社イビソク 2018「青銅製丸鞆の科学的調査」『中小規模河川赤山川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　飯野・東二瓦礫遺跡』，香川県教育委員会
株式会社イビソク 2019「香川県東かがわ市西村遺跡から出土した青銅製品の科学的調査」『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　西村遺跡』，香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
河添房江 2014『唐物の文化史　－舶来品からみた日本』，岩波書店
蔵本晋司 2018「飯野・東二瓦礫遺跡出土律令期腰帯具をめぐる諸問題」『中小規模河川赤山川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　飯野・東二瓦礫遺跡』，香川県教育委員会
澤田秀美・齋藤努・長柄毅一・持田大輔 2019「中国四国地方で出土した銅鋺からみた国産銅鉛原材料の産出地と使用開始時期」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 213 集，国立歴史民俗博物館
齋藤努 2019a「讃岐国府跡出土金銅製龍頭の鉛同位体比分析結果」『讃岐国府跡２』，香川県教育委員会
齋藤努 2019b「鉛同位体比からみた日韓青銅資料の原料の産地」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 213 集，国立歴史民俗博物館
清水康二 2010「佐波理伝来　－二元系高錫青銅容器の来た道－」『アジアの高錫青銅器　－製作技術と地域性－』，富山大学芸術文化学部
杉山洋 1994「平等院鐘の製作年代と「空白の二世紀」」『仏教芸術』216 号，
高橋照彦 2001「日本における銭貨生産と原料調達」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 86 集，国立歴史民俗博物館
田中広明 2003『地方豪族と古代の官人　－考古学が解く古代社会の権力構造』，柏書房
田中史生 2016『国際交易の古代列島』，KADOKAWA
魯禮玹・平尾良光 2008「奥白方中落遺跡から出土した古銭に関する鉛同位体比調査」『県道丸亀多度津線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　中東遺跡２・奥白方中落遺跡・奥白方南原遺跡』，香川県教育委員会
葉賀七三男・佐々木稔 1998「古代・中世の銅生産の特徴」『季刊考古学』第 62 号，雄山閣
三船温尚 2010「現代アジアの高錫青銅器製作技術の比較」『アジアの高錫青銅器　－製作技術と地域性－』，富山大学芸術文化学部
平尾良光 2016「八稜鏡鉛同位体比分析」『高松土木事務所新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　多肥松林遺跡』，香川県教育委員会
平尾良光 2017「香川県東かがわ市の誉水中筋遺跡から出土した銅鏡の鉛同位体比」『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　誉水中筋遺跡』，香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
平尾良光 2018「青銅製丸鞆の科学的調査」『中小規模河川赤山川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　飯野・東二瓦礫遺跡』，香川県教育委員会
平尾良光 2019「香川県東かがわ市西村遺跡から出土した青銅製品の科学的調査」『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　西村遺跡』，香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
古尾谷知浩 2011「文献史料からみた古代の鉄生産・流通と鉄製品の生産」『官衙・集落と鉄』，独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
三船温尚 2017「日本海を渡ってきた鋳造技術　－青銅器から高岡銅器まで－」『2017 年度第１回日本海学講座』，日本海学推進機構
毛利光俊彦編 2005『古代東アジアの金属製容器Ⅱ（朝鮮・日本編）』，独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
森下英治 2019「特殊遺構・遺物の検討」『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　西村遺跡』，香川県教育委員会
矢部良明 1969「奈良朝の民間工人の動向」『MUSEUM』216，東京国立博物館
渡邊綾子・隅英彦・鈴木瑞穂 2019「西村遺跡出土鍛冶・鋳銅関連遺物の分析調査」『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　西村遺跡』，香川県教育委員会

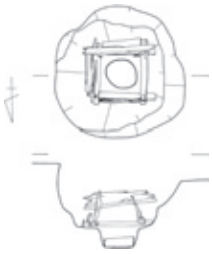
発掘調査報告書については、巻末に一括して掲載する。

第３節　香川県下の井戸についての基礎的検討

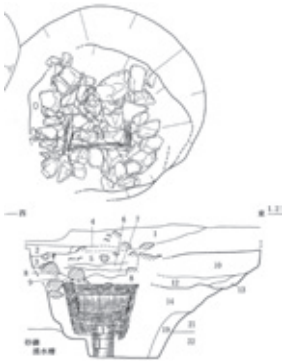
1　はじめに

井戸とは、「用水を得るために、地を掘って地下水を吸い上げ、または汲みとるようにしたもの。」とされる（新村編 2008）。当然、天水を利用した貯水施設は井戸には含まれない。また、降雨量が乏しく広範な扇状地形の発達した本地域の平野部には、「出水」と呼ばれる灌漑施設が存在する。地下水の利用という構造面では井戸と共通するものの、佐藤竜馬氏も指摘するように、その取水方法は相違し（佐藤 1993）、井戸には含めない。

組立て式横板組隅柱型

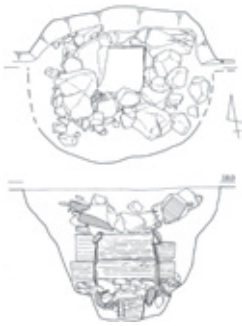


組立て式方形縦板組型Ａ３類



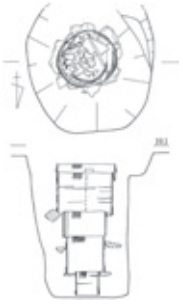
浜ノ町遺跡 SE101

積み上げ式横板組相欠き仕口型



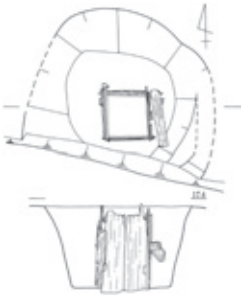
前田東・中村遺跡 H①SE01

積み上げ式曲物組型



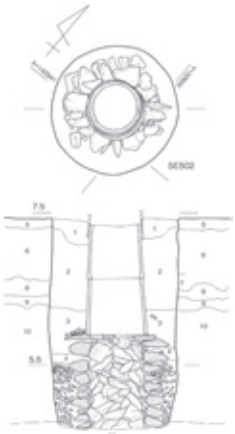
前田東・中村遺跡Ｉ③Sk13

組立て式方形縦板組型 C3 類



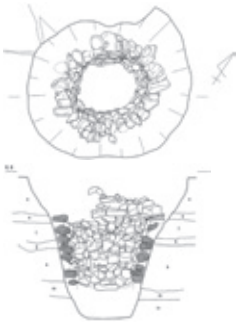
前田東・中村遺跡Ｌ③SE01

積み上げ式陶質枠組型



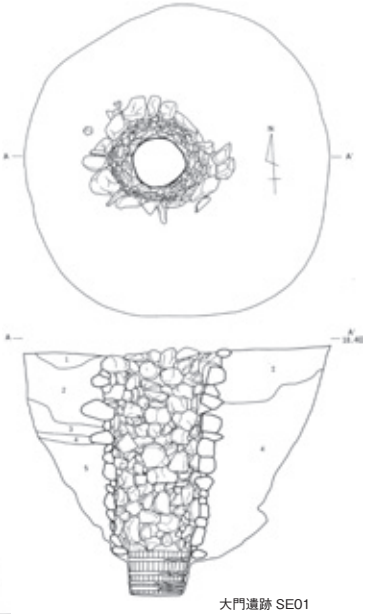
川津昭和遺跡 SE502

乱積み式石組型Ａ型



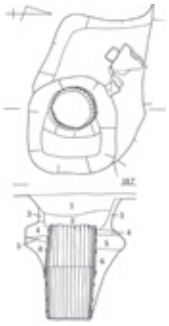
庄八尺遺跡 SE02

乱積み式石組型Ｂ型



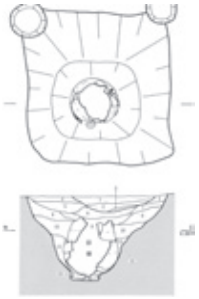
大門遺跡 SE01

積み上げ式結桶組型



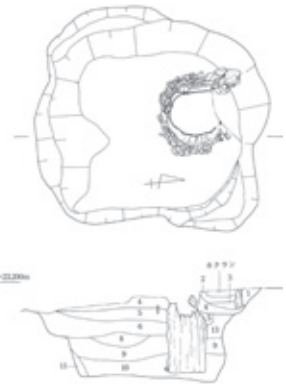
前田東・中村遺跡M③SE01

土器組型



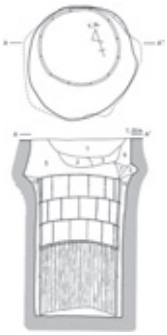
東山崎・水田遺跡Ｄ地区 SE04

円形丸太刳り抜き型



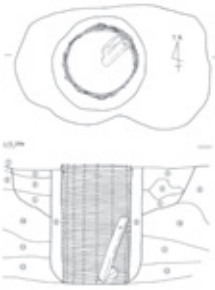
坪井遺跡 SE01

積み上げ式瓦組型



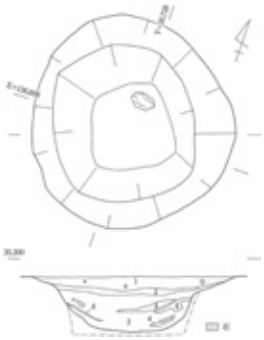
鴨部・川田遺跡 SE01

編物組型



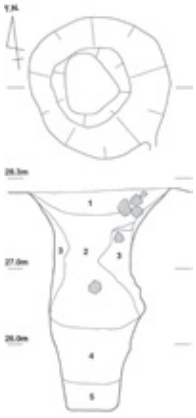
原間遺跡 SEV02

素掘りＢ型



池下遺跡Ⅳ区 SE41

素掘りＡ型



南天枝遺跡 SE02

0　2m
（1/100）

第 95 図　井戸の分類案

三殿北遺跡の調査では、時期や構造が大きく相違する井戸が２基検出された。一方は９世紀後葉～ 10 世紀前葉の曲物井戸、もう一方は 19 世紀前葉の石組み井戸である。両者に直接的な関係は当然存在しないが、近接した地点に構築された井戸という構築物において、その構造は時代の推移により大きく変化するという当たり前の事実を、再認識させるものであった。

以下では、まず発掘調査によって検出された古代以降の県下の井戸を集成し、井戸枠の構造により分類を行い、その時期的な変遷について明らかにする。その過程で、時期や地域的な特徴を抽出し、本遺跡出土の井戸の歴史的な位置付けや評価について考えることとしたい。

２　時期と分類

井戸の時期については、井戸掘り方の出土遺物をもとに、構築時期を井戸の年代とした。しかしながら、一定の時期幅を認める掘り方出土資料の中から、井戸構築時期の資料を特定する作業は困難を伴い、そもそも掘り方から詳細な時期の判断可能な遺物が出土していない井戸もある。一方で、井戸の「製作年代を示す掘方内の遺物と使用期間を示す井側底部の遺物、さらには埋没年代を示す井戸内の一括遺物で…若干の例外を除いては大きな差はみられず…使用期間もそれほど長くはなかった」可能性も指摘されている（小都 1979）。実際には、個々の井戸について個別に検討が必要であろうが、現状では構築時期と使用時期にはさほど大きな時期差は存在しないと仮定し、時期的な変遷については、大まかな流れとして変化の方向性を辿ることで満足することとしたい。

また、井戸各部の名称や井戸枠などの構造については、鐘方正樹氏の分類案（鐘方 2003）を基本的に踏襲した。しかし、井戸枠の構造は、その構築位置での透水層の深さに規制され、さらに地域的・時代的な様々な要因により、多様性が認められる。基本的な部分については、鐘方分類に従いつつも、以下で示すように一部で独自の分類を試みている。

なお、井戸枠を有しない井戸は、素掘り井戸として分類される。しかし、土坑と素掘り井戸との相違は、埋土の堆積状況や透水層との位置関係、集落（屋敷地）内での構築位置などの情報により総合的に判断すべきであり、それでも井戸として積極的に用途を限定することは非常に困難と考える。実際の報告書では、遺構掘削中に湧水がみられたことを根拠とするなど、発掘担当者の経験則的な部分が重視されている例も散見されるようであり、井戸と土坑との峻別に、統一した論拠はあまり明確ではないようだ。また、井戸として開削されたと考えられるものでも、最終的には生活残滓の廃棄坑として埋没した例も一定数認められる。

以下では、素掘り井戸については、報告書の記載に従い、可能な限り集成を試みた。したがって、素掘り井戸以外の土坑などの遺構が含まれている可能性は高く、あるいは逆に素掘り井戸を土坑と誤認して遺漏している例も存在する可能性も想定される。後述するように、集成した井戸総数の中で、素掘り井戸の比率が非常に高い点は、こうした遺構の分類基準の不明瞭さも要因として考えられる。今後の課題としておきたい。

素掘り井戸については、底面が狭小な平坦面をなし、周壁がほぼ垂直に近く掘り込まれ、断面形が筒状ないし箱形を呈するものをＡ型、開口部より緩やかに掘り込まれるものを基本とし、底面径が広く平坦で断面形が逆台形状ないし箱形を呈するものをＢ型として区別する。今回はこの両者の分類にのみ留め、各々の機能差などの考察は稿を改めて行うこととしたい。

３　井戸の変遷

Ⅰ期（８世紀前半）の井戸

県下の古代の井戸として、時期的に最も古く位置付けられるのは、前田東・中村遺跡Ｅ地区 SE01 の組立て式横板組隅柱型井戸と同遺跡Ｈ② SE01 で、いずれも８世紀前半である。Ｅ地区 SE01 は、土居桁を欠き、一部に縦板組が併用され、縦板材の一部は側面に枘を穿ち、楔で連結されており、また横板は隅柱の外側に積み上げられ、枠材背後の地山面と、各隅柱及びそれに枘で組まれた横桟により固定されている。こうした構造は、組立て式方形縦板組型井戸に用いられる技術的特徴であり、一部に縦板組が併用される点からも、縦板組型からの技術上の転用がなされた可能性が高い。この点は、後述するように、８世紀後葉に縦板組型井戸が実際に本地域に構築される点とも矛盾せず、縦板組型井戸の導入が８世紀前半に遡る可能性の傍証とするものかもしれない。また、各隅柱下端には、柱材の不等沈下を防止するため、土居桁ではなく人頭大の石材が配される等、個性的な特徴が認められる。本井戸類型には多様性が認められるとされ（鐘方 2003）、他型式の井戸の技術の一部応用にみられるように、実際の井戸の構築に際しては、柔軟性に富んだものであったと考えられる。

Ｈ② SE01 は、非常に特殊な構造を呈する。おそらく当初は、Ｅ地区 SE01 と同様な組立て式横板組隅柱型井戸として構築されたが、何らかの理由で１辺を残して枠材が撤去され、おそらくは樋管などとして使用されていた半裁された丸太刳り抜き材が、井戸枠材として転用されたとみられる。枠材として縦板材と横板材を併用する点も、Ｅ区 SE01 と共通し、時期的な点から構築当初は類似した構造の井戸であった可能性は高いと考える。

本類型の井戸の構築法は、７世紀に朝鮮半島から導入され、畿内中枢において７世紀後半には定型化がなされたとされる（鐘方 2003）。定型化後の半世紀ほどで、本地域に導入されている事実は重要であろう。前田東・中村遺跡は、近接するエリアの中に、古代寺院の宝寿寺や墨書土器や人形、斎串が多量に出土した律令的祭祀空間（祓所）、大型建物群と陶印や陶硯類が出土した文書行政空間が分節的に配され、郡領氏族層の政治・宗教的な拠点としての性格が想定される（蔵本 2017）。畿内中枢部から直接本遺跡に導入されたものか、讃岐国衙などを経由したものかは不明だが、本遺跡への横板組隅柱型井戸の導入に際し、本遺跡の郡領層が果たした役割には、大きなものがあったと想像される。

なお、Ｅ地区 SE01 は木枠上端まで埋め戻した後に、一定量の赤彩土師器皿を一括して投棄しており、井戸廃絶に際しての祭祀行為の可能性がある。Ｈ② SE01 からも赤彩土師器皿が出土しており、井戸として、特殊な位置付けがなされていた可能性が伺える。

現状では資料数が２基のみと乏しいものの、古代の井戸の導入期として本期を位置付ける。導入当初より、定型化した規格的な井戸ではなく、多様な技術が応用された、多様性と柔軟性を備えたものであったと評価したい。今後の資料数の増加により、より詳細が明らかとなろう。また、本期以降後述するⅥ期段階頃までの、素掘り井戸を除いた何らかの井戸枠を有する井戸は、調査された遺跡は限られ、普遍的な遺構とは必ずしも言い切れない。国・郡などの官衙やその関連施設、有力首長層の政治・経済・宗教的な拠点など、上位の特定の階層がその施工主体者として想定される。日常的な生活用水の確保といった側面も有していたとは思われるが、それ以上に特殊な用途・機能を期待され構築された可能性も指摘しておきたい。

表 13　香川県内検出の井戸（1）

遺跡名	所在地	遺構名	構造	石積み方法	集水施設	浄水施設	時期		備考	報告書
成重遺跡	東かがわ市白鳥	Ⅰ区 SE01	素掘りＡ型（楕円形）？		不明	不明	17 世紀前葉？	Ⅺ期	底面まで掘り下げていないため時期・構造を特定できない	香川県教育委員会ほか 2004a
原間遺跡	東かがわ市白鳥	SE Ⅴ 02	積み上げ式編物組型		無	無	近世		詳細な時期不明	香川県教育委員会ほか 2002a
西村遺跡	東かがわ市西村	SE101	不明		曲物 1	無	12 世紀前半以前	Ⅶ期	掘方の断面形状より、曲物は集水施設の可能性が高く、井戸枠材は抜き取られた可能性が高い。	香川県教育委員会ほか 2019a
誉水中筋遺跡	東かがわ市中筋	SE01	素掘りＡ型（不整楕円形）		無	無	12 世紀後葉～ 13 世紀前葉	Ⅶ期	底面に小ピットが掘り込まれる等、断面形状から井戸枠は抜き取られた可能性も考えられる	香川県教育委員会ほか 2017a
三殿北遺跡	東かがわ市三殿	SE02	積み上げ式曲物組型		無	無	９世紀後葉～ 10 世紀前葉	Ⅳ期	曲物３段残存	本書
		SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	19 世紀前葉	ⅩⅢ期	石組み７段残存	
三殿出口遺跡	東かがわ市三殿	SE01	乱積み式石組型（不明）		結桶	不明	19 世紀	ⅩⅢ期	桶は箍のみ残存し詳細不明	香川県教育委員会ほか 2004c
金毘羅山遺跡	東かがわ市水主	Ⅰ区 SE01	乱積み式石組型（Ａ型）		不明	不明	18 世紀後葉～	ⅩⅢ期		香川県教育委員会ほか 2000a
坪井遺跡	東かがわ市中山	SE01	挿入式円形丸太刳り抜き型		無	無	９世紀前葉	Ⅲ期	時期は井戸枠内出土資料より判断。井戸掘方とされる大型方形土坑は、井戸に先行する遺構の可能性も考えられる。	香川県教育委員会ほか 2002b
寺田・産宮通遺跡	さぬき市大川町富田西	SE01	素掘りＡ型（楕円形）		無	不明	15 世紀後半	Ⅹ期	底面に砂礫層が堆積するが、浄水施設として設置されたものかどうかは判断できない	香川県教育委員会ほか 2003e
		SE02	素掘り（円形）		不明	不明	近世		詳細不明	
		SE03	乱積み式石組型？		無	無	中世	－	削平のため、詳細不明	
石田高校校庭内遺跡	さぬき市寒川町石田東	SK03	乱積み式石組型（Ａ型）		無	無	12 世紀後半以前？	Ⅶ期	石組があまりに小規模であり、井戸以外の可能性を想定したい	香川県教育委員会 2019d
		SK04	乱積み式石組型（Ａ型）		無	無	12 世紀後半？	Ⅶ期	石組があまりに小規模であり、井戸以外の可能性を想定したい	
森広遺跡	さぬき市寒川町石田東	SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		不明	不明	19 世紀	ⅩⅢ期	石組み 10 段以上残存、井戸底の構造は不明	さぬき市教育委員会 2007
本村遺跡	さぬき市寒川町石田東	SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		結桶２	無	17 世紀前半	Ⅻ期	石組み 10 段以上残存	さぬき市教育委員会 2014
尾崎西遺跡	さぬき市長尾町東	SE01	素掘りＡ型（不整楕円）？		不明	不明	16 世紀	Ⅺ期	底面まで掘り下げていないため時期・構造を特定できない	香川県教育委員会 2008c
		SE02	組立て式方形縦板組型 A3 類？		無	無	16 世紀後半	Ⅺ期	井戸枠の細部は不明	
		SE03	素掘りＡ型（不整楕円）		無	無	16 世紀	Ⅺ期		
		SE04	素掘りＡ型（不整楕円）		無	無	17 世紀前葉？	Ⅺ期		
		SE05	素掘りＡ型（不整楕円）？		不明	不明	18 世紀後半	ⅩⅢ期	底面まで掘り下げていないため詳細な時期・構造を特定できない	
陵遺跡	さぬき市長尾町名	SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	18 世紀前半	ⅩⅢ期	石組み７段残存	長尾町教育委員会 1999
		SE02	乱積み式石組型（Ｂ型？）		無	無	17 世紀前葉？	Ⅺ期	写真よりＢ型石組の可能性が高いと判断される	
		SE03	乱積み式石組型（不明）		無	無	不明	不明	石積１～２段のみ残存	
鴨部・川田遺跡	さぬき市鴨部	Ａ区 SE01	円形縦板組＋瓦組型		無	無	18 世紀前半？	ⅩⅢ期	瓦積み３段残存、遺物が乏しく詳細な時期を特定できない	香川県教育委員会ほか 1997a
花池尻北遺跡	さぬき市志度	SE01	素掘りＡ型？（楕円形？）		無	無	13 世紀か？	Ⅷ期	詳細な時期不明	香川県教育委員会 2005b
		SE02	素掘りＡ型（隅丸方形）		無	無	14 世紀中葉	Ⅸ期		
		SE03	素掘りＢ型（円形）？		無	無	不明		詳細は未報告	
八丁地遺跡	さぬき市志度	SE101	組立て式方形縦板組型 B3 類＋積み上げ式陶質枠組型		無	無	近世以降	ⅩⅣ期	陶質枠２段残存、野井戸	香川県教育委員会ほか 2000c
西土居遺跡	木田郡三木町井戸	SE301	乱積み式方形石組型（不明）		不明	不明	中世？		井戸底の詳細な構造や時期は不明	三木町教育委員会 2003
南天枝遺跡	木田郡三木町田中	SE01	乱積み式石組型（Ａ型）		無	無	13 世紀前葉	Ⅷ期	一部垂直積みに近い	香川県教育委員会ほか 2003e
		SE02	素掘り（円形）		不明	不明	18 世紀後葉～	ⅩⅢ期	報告に挿図がなく、詳細不明	
尾端遺跡	木田郡三木町田中	SE01	素掘りＡ型（円形）		不明	不明	19 世紀代か	ⅩⅣ期	井戸底の詳細な構造や時期は不明	香川県教育委員会ほか 2003f
		SE02	素掘りＢ型（円形）		無	無	19 世紀代か	ⅩⅣ期		
十川東・平田遺跡	高松市十川東町	SE01	素掘りＡ型（楕円）		不明	不明	近代以降か？	ⅩⅣ期	井戸底の詳細な構造、時期は不明	香川県教育委員会 2016c
奥の坊遺跡群	高松市高松町	SE51001	積み上げ式結桶組型？		無	無	18 世紀前半	ⅩⅢ期	結桶１基を土坑底に設置。導水施設を備えている可能性があり、井戸ではないが、含めておく。	高松市教育委員会 2007c
小山・南谷遺跡	高松市新田町・高松町	SE701	組立て式方形縦板組型 B1 類		曲物	無	８世紀後葉	Ⅱ期	井戸枠は井戸基底部より構築され、集水施設と未分化	香川県教育委員会ほか 1997d
		SE603	積み上げ式曲物組型		無	無	９世紀末～ 10 世紀前半	Ⅳ期	曲物２段残存	香川県教育委員会 2006b
		SE604	組立て式横板組隅柱型		曲物 1	無	９世紀前半	Ⅲ期	材の腐食等のためやや構造に不明瞭な点がある	
新田本村遺跡	高松市新田町	SE1002	素掘りＢ型（不整隅丸長方形）		無	無	古代か？		埋土等の記録がなく、井戸と断定することは困難	高松市教育委員会 2006a
		SE1003	素掘りＢ型（不整隅丸方形）		無	無	９世紀	Ⅲ期	埋土に明確な滞水層がみられず、井戸とは断定できない	
		SE01	素掘りＢ型（隅丸方形）		無	無	近世		詳細な時期を特定できない	
		SE2001	素掘りＢ型（長楕円形）		無	無	18 世紀後半	ⅩⅢ期		
		SE2002	素掘りＢ型？（隅丸長方形）		無	無	18 世紀前半	ⅩⅢ期		
川南・西遺跡	高松市新田町	SE01	素掘りＢ型（円形）		無	無	16 世紀後葉	Ⅺ期		高松市教育委員会 1999a
前田東・中村遺跡	高松市前田東町	Ａ地区 SE01	積み上げ式曲物組型		無	無	13 世紀中葉	Ⅷ期	曲物２段残存	香川県教育委員会ほか 1995b
		Ｂ地区 SE01	積み上げ式曲物組型		無	無	12 世紀後半	Ⅶ期	曲物２段残存	
		Ｂ地区 SE02	積み上げ式曲物組型？		無？	無	13 世紀前葉	Ⅶ期	腐食等のため詳細な構造不明	
		Ｃ地区 SE02	積み上げ式曲物組型		無	無	不明		曲物１段残存、周辺の横板や積石は井戸埋没後のものと判断	
		Ｃ地区 SE03	横板組型？		無	無	11 世紀後半～ 12 世紀	Ⅵ期	枠材は原形をとどめておらず、詳細な構造は不明	
		Ｃ地区 SE04	乱積み式石組型（Ａ型）？		曲物 3	無	13 世紀末～ 14 世紀前葉	Ⅷ期	石組は乱雑で低く、井戸廃絶時に抜き取られたか曲物の裏込め石であった可能性もある	

表14　香川県内検出の井戸（2）

遺跡名	所在地	遺構名	構造	石積み方法	集水施設	浄水施設	時期		備考	報告書
		E地区SE01	組立て式横板組隅柱型		無	無	8世紀前半	Ⅰ期	土居桁は無く、西側板は縦板を併用する	
		E地区SE02	素掘りA型（円形）		無	無	11世紀中葉	Ⅵ期		
		E地区SE03	積み上げ式横板組相欠き仕口型＋乱積み式石組型（A型）	横積み＋小口	曲物1	無	11世紀後半	Ⅵ期		
		E地区SE04	乱積み式石組（A型）？		曲物1	無	～13世紀前葉	Ⅶ期	石組みは大きく破壊され詳細な構造は不明	
		F地区SE01	積み上げ式曲物組型？		無	無	10世紀前半？	Ⅴ期	曲物1段残存、集水施設の可能性も残る	
		H②SE01	組立て式方形縦板組型（改変）		無	無	8世紀前半？	Ⅰ期	方形縦板組の1辺を残し、他を半裁した丸太刳り抜き材に入れ替えた可能性を想定する	香川県教育委員会ほか2005a
		H①SE01	積み上げ式横板組相欠き仕口型＋乱積み式石組型（A型？）	横積み＋小口	曲物1	無	11世紀後半～12世紀初め	Ⅵ期	石組は木材の腐食によりやや崩落、上面の削平もあり詳細は明らかではない	
		H③SE01	乱積み式石組型（B型）		無	無	不明	不明	石積はⅠ①SE01と近似	
		Ⅰ③SK12	積み上げ式曲物組型		無	無	9～10世紀	Ⅳ期	曲物2段残存	
		Ⅰ③SK13	積み上げ式曲物組型		無	無	10世紀前半	Ⅴ期	曲物5段残存	
		Ⅰ③SK16	積み上げ式曲物組型		無	無	10世紀中～後葉	Ⅴ期	曲物2段残存	
		Ⅰ①SE01	乱積み式石組型（外傾積）		無	無	14世紀以降	Ⅸ期		
		L③SE01	組立て式方形縦板組型C3類		無	無	9世紀後半	Ⅳ期		
		L②東SK03	素掘りB型（楕円形）		無	無	13世紀代	Ⅷ期		
		M③SE01	積上げ式結桶組型		無	無	15世紀代	Ⅹ期	結桶2段残存	
		C地区SE01	挿入式編物型		無	無	16世紀？	Ⅺ期	時期を特定する資料に乏しい	香川県教育委員会ほか1992b
		C地区SE02	素掘りB型（方形）		無	無	19世紀初頭以降	ⅩⅢ期		
		C地区SE03	素掘りB型（長方形）		無	無	18世紀末～19世紀初頭	ⅩⅢ期	貯水遺構の可能性も	
		C地区SE04	挿入式土器型		無	無	16世紀前半	Ⅺ期	土器は乗岡編年6期前半の備前焼大甕を転用	
		C地区SE05	積み上げ式曲物組型		無	無	不明	不明	曲げ物上位に石組が構築されていた可能性がある	
		C地区SE06	素掘りB型（方形）		無	無	16世紀以降	Ⅺ期	時期を特定する資料に乏しい	
		D地区SE01	乱積み式石組型（B型）		無	無	18世紀後半	ⅩⅢ期	石積み4段残存	
		D地区SE02	素掘りB型（楕円形）		無	無	不明	不明	時期を特定する資料に乏しい	
		D地区SE03	素掘りB型（楕円形）		無	無	不明	不明	時期を特定する資料に乏しい	
		D地区SE04	挿入式土器型		無	無	15世紀前半～16世紀	Ⅹ期	土器は乗岡編年中世3期の備前焼大甕を転用	
東山崎・水田遺跡	高松市東山崎町	E地区SE01	素掘りB型（楕円形）		無	無	16世紀末～17世紀前葉	Ⅺ期		
		E地区SE02	素掘りB型（円形）		無	無	16世紀末～17世紀前葉	Ⅺ期		
		E地区SE03	素掘りB型（楕円形）		無	無	17世紀前半	Ⅻ期	下半部はやや垂直に掘り込まれ、A型に近い	
		E地区SE04	素掘りB型（長方形）		無	無	16世紀末～17世紀前葉	Ⅺ期		
		E地区SE05	積み上げ式曲物組型		無	無	14世紀後半？	Ⅸ期	曲物4段残存、時期を特定する資料に乏しい	
		E地区SE06	素掘りB型（不整隅丸方形）		無	無	不明	不明	時期を特定する資料に乏しい	
		E地区SE07	乱積み式石組型（A型）	横積み	曲物1	無	13世紀前半	Ⅷ期	石組みは上位の遺構の攪乱を被る	
		E地区SE08	積み上げ式曲物組型		無	無	13世紀前半	Ⅷ期	曲物2段残存、集水施設の可能性も考えられる	
		SKE02	乱積み式石組型（A型）		無	無	17世紀中葉以降	Ⅻ期	石組み6段残存	香川県教育委員会ほか2004d
		SKG01	積み上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀以降	ⅩⅣ期	陶質枠2段以上残存、底面まで掘り下げていないため詳細な時期・構造を特定できない	
六条・上所遺跡	高松市六条町	SE01	素掘りB型（楕円形？）		無	無	13世紀後半～	Ⅷ期		香川県教育委員会ほか1995c
		SE03	乱積み式石組型（B型）		無	無	19世紀前葉	ⅩⅢ期	石積み10段以上残存	
		SE01	乱積み式石組型（A型）	小口積み	曲物1？	無	13世紀前半	Ⅷ期		香川県教育委員会2009a
		SE02	積上げ式陶質枠組型		無	無	近代？	ⅩⅣ期	陶質枠3段残存	
		SE03	積上げ式陶質枠組型		無	無	近代？	ⅩⅣ期	陶質枠2段残存	
		SE04	積上げ式陶質枠組型		無	無	近代？	ⅩⅣ期	陶質枠3段残存	
		SE05	積上げ式陶質枠組型		無	無	近代？	ⅩⅣ期	陶質枠2段残存	
		SE06	積上げ式陶質枠組型		無	無	近代（昭和4年）	ⅩⅣ期	陶質枠3段残存	
		SE07	挿入式土器型＋乱積み式石組型（不明）		無	無	近代？	ⅩⅣ期	土器は土師質土器風呂の転用、石組の詳細不明	
		SK18	挿入式土器型		無	無	近代？	ⅩⅣ期	土器は土師質土器風呂の転用	
木太中村遺跡	高松市木太町	SE1001	乱積み式石組型（A型）		無	無	18世紀後半	ⅩⅢ期	石積み8段残存	高松市教育委員会2001b
		SE1002	素掘りB型（不整円形）		無	無	近世			
		SE1003	乱積み式石組（B型）＋積み上げ式結桶組型？		不明	不明	近世		結桶は竹製箍のみ残存	
		SE2001	乱積み式石組型（A型）		無	無	近世		石組み5段残存	
		SE2002	方形丸太材組型		不明	不明	近・現代	ⅩⅣ期	底面まで掘り下げていないため、井戸底の構造等は不明	
		SE2003	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀？	ⅩⅣ期	陶質枠数段残存	
		SE3001	積み上げ式結桶組型		無	無	18世紀後半	ⅩⅢ期	結桶2段残存	
		SE4001	乱積み式方形石組型（B型？）		無	無	19世紀？	ⅩⅢ期	石組み3段残存	
		SE4002	乱積み式石組型（B型）		無	無	19世紀？	ⅩⅣ期	石組の上位に陶質枠が設置されていた可能性がある	

表 15　香川県内検出の井戸（3）

遺跡名	所在地	遺構名	構造	石積み方法	集水施設	浄水施設	時期		備考	報告書
木太本村Ⅱ遺跡	高松市木太町	井戸	組立て式方形縦板組型 A1 類		無	礫敷	8 世紀後葉	Ⅱ期		香川県教育委員会 1998b
北山下遺跡	高松市川島東町	SE001	積み上げ式結桶組型？		不明	不明	近世		結桶 1 段残存、野井戸？	高松市教育委員会 2015a
		SE002	素掘り B 型（隅丸方形）		無	無	近世			
川島本町遺跡	高松市川島本町	SE1001	素掘り B 型（不整楕円形）		無	無	不明			高松市教育委員会ほか 2017b
高松城跡（東の丸）	高松市玉藻町	SE01	積上げ式陶質枠組型		無	無	不明	ⅩⅣ期？	報告書中に本遺構に関する記載なし	香川県教育委員会 1987a
		SE02	積上げ式石製枠組型		木製桝形施設	無	近代	ⅩⅣ期	井戸下部は木製樋管と連接	
		SE01	乱積み式石組型？		無	無	近世		石組の詳細不明、井戸と断定は困難	香川県教育委員会ほか 1999d
		SE02	乱積み式石組型？		不明	不明	16 世紀末～ 17 世紀前葉	Ⅺ期	大きく攪乱を被り、石組の詳細不明	
		SE03	乱積み式石組型？		不明	不明	17 世紀前葉？	Ⅺ期	大きく攪乱を被り、石組の詳細不明	
		SE04	乱積み式石組型？		不明	不明	近世		石組の詳細不明、井戸と断定は困難	
		SE05	積上げ式結桶組型		無	無	16 世紀末～ 17 世紀前葉	Ⅺ期	結桶 1 段残存	
		SE06	乱積み式石組型（B 型）		無	無	17 世紀中葉	Ⅻ期	石積み 5 段残存	
		SE07	乱積み式石組型（B 型）		無	無	17 世紀後半？	Ⅻ期	石積み 5 段残存	
		SE08	乱積み式石組型（B 型）		無	無	17 世紀前半	Ⅻ期	石積み 8 段残存	
		SE09	乱積み式石組型（不明）		不明	不明	18 世紀？	ⅩⅢ期	石組みは大きく攪乱を被り、詳細不明	
高松城跡（東町奉行所跡）	高松市鶴屋町	SK3016	素掘り B 型（略円形）		無	無	16 世紀代	Ⅺ期	掘り方は直に掘り込まれ、底面平坦。比較的短期間で廃絶か	高松市教育委員会ほか 2005c
		SK3004	素掘り B 型（隅丸方形）		無	無	16 世紀代	Ⅺ期	報告では井戸枠の抜き取りの可能性を指摘する	
		SK1002	素掘り A 型（隅丸方形）		不明	不明	19 世紀末～	ⅩⅣ期	井戸底の詳細な構造や時期は不明	
高松城跡（厩跡）	高松市内町	SE106	乱積み式石組型（B 型？）		無	無	16 世紀末～ 17 世紀前葉	Ⅺ期	石組 2 ～ 3 段残存	高松市教育委員会ほか 2006b
		SE103	素掘り B 型（不整隅丸方形）		無	無	16 世紀末～ 17 世紀前葉	Ⅺ期		
		SE104	積み上げ式結桶組型		不明	不明	17 世紀末～ 18 世紀前半	Ⅻ期	結桶 1 段残存、井戸底の詳細は不明	
		SE102	素掘り B 型（円形）		無	無	17 世紀後半	Ⅻ期		
		SE101	素掘り B 型（不整円形）		無	無	17 世紀前葉	Ⅺ期		
		SE107	積上げ式結桶組型		無	無	17 世紀中葉	Ⅻ期	結桶 1 段残存	
		SE001	素掘り B 型（円形）		無	無	17 世紀前葉	Ⅺ期		
高松城跡（江戸長屋跡）	高松市丸の内	SE101	積上げ式陶質枠組型		無	無	19 世紀中葉	ⅩⅣ期	陶質枠 2 段残存	高松市教育委員会 2008
		SE102	乱積み式石組型？		不明	不明	16 世紀後半～ 17 世紀後半	Ⅺ期	攪乱により石組の詳細不明	
		SE101	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19 世紀後半～	ⅩⅣ期	底面まで調査されていないため、井戸底の詳細な構造等は不明	高松市教育委員会 2009
高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）	高松市丸の内	SE3004	素掘り B 型（楕円形）		無	無	16 世紀末	Ⅺ期		高松市教育委員会ほか 2004b
		SE3005	素掘り B 型（円形）		無	無	16 世紀末	Ⅺ期		
		SE3002	積上げ式結桶組型		無	無	17 世紀中葉～ 19 世紀前葉	Ⅻ期	結桶 2 段残存	
		SE3003-①	積上げ式結桶組型？		無	無	18 世紀前葉～ 19 世紀前葉	ⅩⅢ期	木樋（上水道）に連接、結桶 1 段のみ	
		SE3003-②	素掘り B 型（楕円形）？		無	無	18 世紀前葉～ 19 世紀前葉	ⅩⅢ期	木樋（上水道）に連接、遺構周囲に木杭打設、出水か？	
		SE3001	積上げ式結桶組型		無	無	17 世紀中葉	Ⅻ期	結桶 1 段残存	
		SE3006	素掘り B 型（隅丸方形）		無	無	17 世紀後半～ 18 世紀前半	Ⅻ期		
		SE3007	素掘り B 型（円形）？		無	無	17 世紀中葉	Ⅻ期		
		SE2001-①	積上げ式結桶組＋陶質枠組型		無	無	19 世紀中葉以降	ⅩⅣ期	結桶 1 段上に陶質枠組 1 段を積み上げる、結桶と陶質枠組の径が異なるため、同時期に設置されたものではない可能性が高い	
		SE2001-②	積上げ式結桶組型		無	無	不明	不明	結桶 1 段のみ残存	
		SE2002	素掘り B 型（不整楕円形）		無	無	18 世紀代以降	ⅩⅢ期		
		SE2003	素掘り B 型（不整楕円形）？		不明	不明	不明	不明	底面まで調査されていないため、井戸底の詳細な構造等は不明	
高松城跡（松平大膳家中屋敷跡）	高松市丸の内	SE101	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19 世紀末～ 20 世紀初頭	ⅩⅣ期	詳細な構造は不明	高松市教育委員会ほか 2002
		SE102	結桶＋積上げ式陶質枠組型		無	無	不明	不明	桶・陶質枠は各 1 段のみ検出	
		SE103	結桶＋積上げ式陶質枠組型		無	無	不明	不明	桶・陶質枠は各 1 段のみ検出	
高松城跡（丸の内）	高松市丸の内	SE01	乱積み式石組型（A 型）		曲物 2	無	13 世紀後半	Ⅷ期		香川県教育委員会ほか 2003c
		SE02	乱積み式石組型（A 型）		曲物 3	無	13 世紀中葉	Ⅷ期	SE01 とほぼ同構造、石組は裏込め石を欠くが、垂直に近く積まれる	
		SE03	積上げ式結桶組型		無	無	16 世紀末～ 17 世紀前葉	Ⅺ期	結桶 1 段残存	
		SE04	積上げ式結桶組型		無	無	19 世紀中葉	ⅩⅣ期	結桶 1 段残存	
		SE05	不明		不明	不明	19 世紀末～ 20 世紀初頭	ⅩⅣ期	詳細な構造は不明	
		SE17	不明		不明	不明	19 世紀前葉以降	ⅩⅢ期	底面まで調査されていないため、井戸底の詳細な構造等は不明	高松市教育委員会ほか 2016b
		SE207	素掘り B 型（円形）		無	無	17 世紀前半	Ⅻ期		
		SE301	挿入式土器型		無	無	17 世紀初頭	Ⅺ期	亀山系瓦質土器甕転用	
		SE401	乱積み式石組型（B 型）		無	無	近代？	ⅩⅣ期	近代にまで下る遺物は出土していないが、掘り込み面より時期を推定、遺物は 18 世紀前半代	高松市教育委員会 2018a
		SE1-1101	素掘り B 型（不整隅丸方形）		無	無	18 世紀前半	ⅩⅢ期		高松市教育委員会 2016a

表16　香川県内検出の井戸（4）

遺跡名	所在地	遺構名	構造	石積み方法	集水施設	浄水施設	時期		備考	報告書
		SE1-2202	素掘りA型（不定形）		無	無	18世紀前半	XⅢ期		
		SE1-3301	積上げ式結桶組型		無	無	17世紀前葉	XⅠ期	結桶1段残存	
		SE2-1101	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀後半以降	XⅣ期	底面まで調査されていないため、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SE2-1102	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀後半以降	XⅣ期	底面まで調査されていないため、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SE2-4401	乱積み式石組型（外傾積）		結桶1	無	14世紀中葉～後葉	Ⅸ期		
		SE4-1101	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀後半以降	XⅣ期	底面まで調査されていないため、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SE4-2201	積上げ式結桶組型		不明	不明	18世紀前半	XⅢ期	結桶1段残存、底面まで調査されていないため、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SE4-2202	素掘りB型（円形）		無	無	18世紀中葉	XⅢ期	中央部が1段落ち込んでおり、集水部に結桶等が据えられていた可能性がある	
		SE4-2204	素掘りB型（不整円形）		無	無	18世紀中葉	XⅢ期		
		SE4-2205	素掘りB型（不整円形）		無	無	18世紀前半	XⅢ期		
		SE4-2203	素掘りB型（円形？）		無	無	17世紀中葉	XⅡ期		
		SE5-1101	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀後半以降	XⅣ期	陶質枠3段残存、底面まで調査されていないため、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SE5-1102	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀後半以降	XⅣ期	陶質枠1段以上残存、底面まで調査されていないため、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SE5-3301	乱積み式石組型（B型？）		無	無	17世紀初頭	XⅠ期	石積み3～4段残存	
		SE101	積上げ式結桶組＋積上げ式陶質枠組型		無	無	19世紀以降	XⅣ期	結桶1段、陶質枠2段残存	高松市教育委員会ほか2015b
		SE202	積上げ式結桶組型		無	無	18世紀前半	XⅢ期	結桶2段残存	
		SE301	積上げ式結桶組型		無	無	17世紀前半	XⅡ期	結桶2段残存	
		SE302	積上げ式結桶組型		不明	不明	不明	不明	結桶3段残存、井戸底の詳細は不明	
		SEb02	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀前葉～後葉	XⅣ期	陶質枠3段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	香川県教育委員会ほか2003a
		SEb03	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀前葉～後葉	XⅣ期	陶質枠5段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEb04	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀前葉～後葉	XⅣ期	陶質枠3段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEb06	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀前葉～後葉	XⅣ期	陶質枠1段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEb07	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀前葉～後葉	XⅣ期	陶質枠2段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEb08	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀前葉～後葉	XⅣ期	陶質枠1段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEb09	積み上げ式結桶組型		不明	不明	18世紀中葉～19世紀前葉	XⅢ期	結桶2段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEb10	積み上げ式結桶組型		無	無	18世紀中葉～19世紀前葉	XⅢ期	結桶1段残存	
		SKb86	積み上げ式結桶組型		不明	不明	18世紀前葉	XⅢ期	結桶1段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEb11	乱積み式石組型（B型）		不明	不明	17世紀前半	XⅡ期	石積み3段以上残存、底面まで掘り下げていないため、井戸底の詳細は不明	
		SEb12	乱積み式石組型（B型）		無	無	17世紀前葉	XⅠ期	石積み4段残存	
		SEb13	乱積み式石組型（不明）		結桶2？	不明	17世紀前半	XⅡ期	上部石積の構造は不明、17世紀前半より後出する可能性あり	
		SEb14	積み上げ式結桶組型		不明	不明	17世紀前半	XⅡ期	17世紀前半より後出する可能性あり	
		SEb15	乱積み式石組型（B型）		無	無	17世紀中葉	XⅡ期	石積み3段残存	
高松城跡（西の丸）	高松市西の丸町	SEb16	乱積み式石組型（B型？）		無	無	17世紀前半	XⅡ期	石積み2段残存	
		SEb17	乱積み式石組型（B型）		無	無	17世紀前半	XⅡ期	石積み10段以上残存	
		SEc01	円形縦板組or結桶組		不明	不明	近代	XⅣ期	調査中に崩落のため詳細不明	香川県教育委員会ほか2003b
		SEc02	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	近代	XⅣ期	陶質枠5段以上残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEc03	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	近代	XⅣ期	陶質枠5段以上残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEc04	積み上げ式結桶組型？		不明	不明	近代	XⅣ期	結桶？1段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEc05	乱積み式石組型（B型）		無	無	16世紀末～17世紀前葉	XⅠ期	石組み4段残存	
		SEc06	乱積み式石組型（B型？）？		無	無	16世紀末～17世紀前葉	XⅠ期		
		SEc07	積上げ式陶質枠組型		無	無	近代	XⅣ期	陶質枠2段残存	
		SEc08	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	近代	XⅣ期	陶質枠2段？残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEc09	積上げ式結桶組＋積上げ式陶質枠組型		不明	不明	近代	XⅣ期	結桶1段、陶質枠1段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEc10	積上げ式陶質枠組型		不明	不明	近代？	XⅣ期	陶質枠2段残存、井戸底等の詳細な構造等は不明	
		SEc11	乱積み式石組型（A型）		無	無	16世紀末～17世紀前葉	XⅠ期	石積み6段残存	
		SEc12	積み上げ式結桶組型		不明	不明	17世紀前葉～中葉	XⅡ期	結桶1段残存、底面まで掘り下げていないため、井戸底の詳細は不明	
		SEc13	乱積み式石組型（B型）		無	無	16世紀末～17世紀前葉	XⅠ期	石積み4段残存	
		SEc14	乱積み式石組型（B型）		無	無	17世紀中葉～18世紀初頭	XⅡ期	石積み10段以上残存	
		SE1201	乱積み式石組型（不明）		無	無	17世紀前半	XⅡ期	攪乱により石組みの詳細不明	高松市教育委員会2007a
高松城跡（寿町一丁目）	高松市寿町・西の丸町	SE1001	積上げ式結桶組＋積上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀	XⅣ期	結桶1段以上、陶質枠3段残存、底面まで掘り下げていないため、井戸底の詳細は不明	
		SE1002	素掘りB型（円形）		無	無	17世紀中葉	XⅡ期		

表 17　香川県内検出の井戸（5）

遺跡名	所在地	遺構名	構造	石積み方法	集水施設	浄水施設	時期		備考	報告書
		SE1003	素掘りＢ型（不整楕円形）		無	無	17 世紀中葉	XII期		
高松城跡（寿町二丁目）	高松市寿町二丁目	SE2001	乱積み式石組型（不明）		無	無	16 世紀末～ 17 世紀初頭	XI期	石積み１段残存	高松市教育委員会ほか 2007b
		SE2002	乱積み式石組型（Ａ型）		無	無	16 世紀末～ 17 世紀初頭	XI期	石積み５段残存	
		SE2003	素掘りＢ型（円形）		無	無	16 世紀末～ 17 世紀初頭	XI期		
		SE2004	乱積み式石組型（不明）		曲物１？	無	16 世紀末～ 17 世紀初頭	XI期	石積み１段残存、挿図では、石組みと曲物との位置関係が不明瞭だが、記載内容より曲物を集水施設と判断した。	
		SE2005	乱積み式石組型（不明）		曲物１	無	16 世紀末～ 17 世紀初頭	XI期	石積み１段残存	
		SES1001	積上げ式陶質枠組型？		不明	不明	19 世紀中葉	XⅣ期	挿図では井戸底の構造は不明。陶質枠組は１段のみ確認	
		SES1002	積み上げ式結桶組型		無	無	17 世紀中葉～ 18 世紀前半	XII期	結桶は１段のみ遺存	
		SES1003	素掘りＢ型（円形）？		無	無	17 世紀中葉	XII期		
		SEN001	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	17 世紀中葉	XII期	石組み７段残存、石組みの一部外傾する	
		SEN002	素掘りＢ型（円形）		無	無	17 世紀中葉以前	XII期		
		SEN003	素掘りＢ型（隅丸方形）？		無	無	17 世紀中葉以降	XII期		
		SEN004	素掘りＢ型（楕円形）？		無	無	17 世紀中葉	XII期		
高松城跡（無量壽院跡）	高松市寿町・西の丸町	SE1301	乱積み式石組型（Ａ型）		曲物１	無	15 世紀	X期	石組は大きく崩壊	高松市教育委員会 2005b
高松城跡（北署）	高松市西内町	SE01	乱積み式石組型（Ｂ型？）？		無	無	17 世紀前半	XII期	石組３段残存	香川県教育委員会 2018b
		SE02	積み上げ式結桶組型		無	無	17 世紀後半～ 18 世紀前半	XII期	結桶２段残存	
		SE03	積み上げ式結桶組型		無	無	18 世紀前半	XⅢ期	結桶２段残存、桶上面に豊島石製井桁残存	
		SE04	積み上げ式結桶組＋積み上げ式陶質枠組型		無	無	19 世紀前葉	XⅢ期	結桶１段、陶質枠１段残存	
		SE05	積み上げ式結桶組型		無	無	18 世紀前半	XⅢ期	結桶３段残存	
		SE06	積み上げ式結桶組型		無	無	18 世紀前半	XⅢ期	結桶１段残存	
		SE07	積み上げ式結桶組型		無	無	18 世紀前半	XⅢ期	結桶１段残存	
浜ノ町遺跡	高松市浜ノ町・錦町	SE101	組立て式方形縦板組 A3 類＋乱積み式石組（Ａ型？）		曲物２	無	14 世紀前半	IX期	縦板や石組の詳細については不明、報告では縦板組横桟支柱型とするが、調査時の写真からは支柱は確認できない	香川県教育委員会ほか 2004e
		SE102	組立て式方形縦板組 A1 類？＋乱積み式石組型（Ａ型？）		曲物２	無	13 世紀末～ 14 世紀前葉	VIII期	写真から隅柱とみられる木製品が確認できるが隅柱とは断定できない、上位に石組がなされていた可能性もある	
		SE303	組立て式方形縦板組 A3 類＋乱積み式方形石組（Ｂ型）		無	無	15 世紀中葉～後半	X期		
		SE304	積み上げ式曲物組型		無	無	15 世紀前葉	X期	曲物２段残存、集水施設の可能性もあるが、掘り方断面形状より井戸枠の可能性を想定する。	
		SE403	円形（多角形）縦板組型		結桶１	無	14 世紀後半？	IX期	井戸枠は縦板組型としたが、「２ケ所にたがらしき痕跡が確認できた」ことから、本資料は大型の結桶である可能性もあるが、「ほぞ」により組み合わせていることから縦板組型としておく	
		SE512	積み上げ式結桶組型		無	無	14 世紀末～ 15 世紀前葉	IX期	結桶２段残存、15 世紀後半には廃絶したとみられる	
		SE514	乱積み式石組型（Ａ型）		曲物２	無	13 世紀後葉～末	VIII期		
		SE520	縦板組＋乱積み式方形石組型（Ｂ型）		無	無	15 世紀初頭～前葉	X期	石組み下部の板材については評価が難しいが、簡略化された縦板組の可能性を想定する	
		SE521	乱積み式石組型（Ａ型）		曲物２～３	無	15 世紀中葉	X期		
		SE602	組立て式横板組隅柱型		結桶１	無	14 世紀初頭	VIII期	土居桁を有することから横板組の井戸枠の可能性が考えられる	
		SE301	積み上げ式結桶組型		無	無	16 世紀末～ 17 世紀初頭	XI期	結桶２段残存	
		SE302	乱積み式石組型（不明）		結桶１	不明	17 世紀後半	XII期	石組は破壊顕著、井戸底の詳細は不明	
		SE516	乱積み式石組型（Ｂ型？）		結桶１	無	18 世紀前半	XⅢ期	石組み２段残存	
		SE519	乱積み式石組型（Ｂ型）		無？	不明	17 世紀後半～ 18 世紀前半	XII期	石積み６段以上残存、井戸底の詳細は不明	
		SE601	積み上げ式結桶組型		無	無	17 世紀後半～ 18 世紀前半	XII期	結桶２段残存	
		SE704	積み上げ式結桶組型？		不明	不明	17 世紀前葉～ 18 世紀後半	XII期	結桶１段残存、詳細な時期を特定できない	
亀井戸跡	高松市鍛冶屋町	井戸１	積み上げ式結桶組型？		無	無	19 世紀前半	XⅢ期	結桶１段残存、木樋連結か	高松市教育委員会ほか 2012a
西ハゼ土居遺跡	高松市西ハゼ町	SE51001	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	～ 17 世紀前半	XI期	石積み６段残存	高松市教育委員会 2005a
		SE61001	乱積み式石組型（Ａ型）		無	無	17 世紀？	XII期	石積み８段残存、外傾度弱く垂直積に近い	
		SE61002	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	16 世紀代	XI期	石積み６段残存	
大灘遺跡	高松市由良町	SE01	不明		不明	無	13 世紀前葉	VII期	廃絶後の井戸枠材抜き取り？のためか構造不明	香川県教育委員会 2008e
		SE02	組立て式方形縦板組型 C1 類		無	礫敷	13 世紀前葉	VII期		
井手東Ⅰ遺跡	高松市伏石町	SE01	積み上げ式陶質枠組型？		不明	不明	19 世紀代？	XⅣ期	陶質枠２段残存、井戸底の詳細な構造や時期は不明	高松市教育委員会ほか 1995
キモンドー遺跡	高松市伏石町	SE03	組立て式縦板組 A3 類＋積上げ式切石組型		無？	不明	近代？	XⅣ期	出水の可能性が高い。井戸底の詳細な構造や時期は不明	高松市教育委員会 1999b
宗高坊城遺跡	高松市林町	Ⅳ区 SE01	乱積み式石組型（Ａ型）		無	無	中世？		遺物より詳細な時期を特定することは困難	高松市教育委員会 2004a
宮西・一角遺跡	高松市林町	SE01	乱積み式石組型（Ａ型）		無	無	13 世紀後半？	VIII期	遺物より詳細な時期を特定することは困難	高松市教育委員会ほか 2018c
一角遺跡	高松市林町	SE201	積み上げ式陶質枠組型？		不明	不明	近代？	XⅣ期	詳細不明	高松市教育委員会 2000a
		SE202	不明		不明	不明	19 世紀後半？	XⅣ期	井戸ではない可能性が高い	
空港跡地遺跡	高松市林町	SEc02	乱積み式石組型（Ａ型）		無	無	不明	不明	石組み３段残存、詳細な時期不明	香川県教育委員会ほか 1996e
		SEc03	乱積み式石組型（不明）		無	無	13 世紀前葉？	VII期	集石土坑の可能性が高い	

表18　香川県内検出の井戸（6）

遺跡名	所在地	遺構名	構造	石積み方法	集水施設	浄水施設	時期		備考	報告書
		SEc04	乱積み式石組型（B型）		無	無	近世		遺物より詳細な時期を特定することは困難	
		SEc05	乱積み式石組型（B型）		無	無	近世		遺物より詳細な時期を特定することは困難	
		SEe01	素掘りB型（楕円形）		無	無	18世紀後半～	XⅢ期	断面袋状	香川県教育委員会ほか1997c
		SEe02	乱積み式石組型（B型）		不明	不明	近世以降	XⅣ期	詳細不明	
		SEf01	乱積み式石組型（A型）	小口積み	無	無	13世紀末～14世紀前葉	Ⅷ期	14世紀中葉に下る可能性もある	香川県教育委員会ほか2000b
		SEf02	乱積み式石組型（A型）		曲物1	無	15世紀後葉～16世紀中葉	X期		
		SEf03	乱積み式石組型（B型）		不明	不明	近世		井戸底の詳細な構造や時期は不明	
		SEi01	乱積み式石組（不明）＋積み上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀中葉～	XⅣ期	詳細不明	香川県教育委員会ほか1998a
		SEi02	乱積み式石組型（不明）		不明	不明	近世？		詳細不明	
		SEi03	素掘りA型（円形）		無	無	近世？		詳細不明	
		SEi04	乱積み式石組（B型）＋積み上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀後葉～近代	XⅣ期	詳細不明	
		SEi05	素掘りA型（円形）		不明	不明	19世紀後葉～	XⅣ期	詳細不明	
		SEi06	乱積み式石組（不明）＋積み上げ式陶質枠組型		不明	不明	近代以降か？	XⅣ期	詳細不明	
		SEi07	乱積み式石組型（不明）		不明	不明	19世紀前半？	XⅢ期	詳細不明	
		SEi08	乱積み式石組型（不明）		不明	不明	近世？		詳細不明	
		SEi09	素掘りA型（円形）		不明	不明	近世？		詳細不明	
		SEa02	乱積み式石組型（B型）		曲物？	不明	中世？		詳細不明	香川県教育委員会ほか2002d
		SEg01	積み上げ式陶質枠組型		不明	不明	19世紀中葉～	XⅣ期	陶質枠2段残存、井戸底の詳細な構造や時期は不明	香川県教育委員会ほか2003d
		SEg02	乱積み式石組型（B型）		無	無	不明	不明		
		SEg03	素掘りB型（円形）		不明	不明	19世紀末～20世紀初頭	XⅣ期		
		SEg04	素掘りA型（円形）		不明	不明	18世紀中葉	XⅢ期		
		SEg05	積み上げ式陶質枠組型		無	無	19世紀後葉	XⅣ期	陶質枠2段残存	
		SEg06	積み上げ式陶質枠組型		無	無	19世紀後葉	XⅣ期	陶質枠2段残存	
		SEg07	素掘りB型（楕円形）		無	無	13世紀代	Ⅷ期	出水の可能性もある。	
		SEg08	素掘りA型（円形）		不明	不明	不明	不明		
		SEg09	素掘りA型（方形）		無	無	19世紀前半	XⅢ期		
		SEg11	素掘りB型（円形）		不明	不明	18世紀中葉	XⅢ期		
		SEg12	素掘りB型（円形）		無	礫敷？	18世紀前半	XⅢ期		
		SEd01	乱積み式石組型（A型）	小口積み	曲物2	無	13世紀後半	Ⅷ期		香川県教育委員会ほか2004f
		SEh01	乱積み式石組型（B型）		無	土器片	18世紀後半	XⅢ期	石積底部に土師質土器底部片が据え置かれていた	香川県教育委員会ほか2004g
		SEl02	乱積み式石組型（A型）		無？	無	14世紀前半？	Ⅸ期	遺物乏しく時期の確定が困難	
		SEj01	乱積み式石組型（B型）		無	無	18世紀後葉	XⅢ期	石積み10段以上残存	香川県教育委員会ほか1997b
		SEb01	乱積み式石組型（B型）		不明	不明	13世紀以降	Ⅷ期	石組み10段以上残存、井戸底は未調査であり、遺物も乏しく、近世以降に下る可能性を想定する	香川県教育委員会2007b
		SEb02	乱積み式石組型（B型）		無	無	中世後半以降	不明	石組み7段残存	
上林遺跡	高松市上林町	SE01	乱積み式石組型（B型？）		不明	不明	18世紀中葉以前	XⅢ期	石組み3段残存、井戸底の詳細な構造や時期は不明	香川県教育委員会2019c
		SE02	素掘りA型（不整隅丸方形）		不明	不明	18世紀前半か	XⅢ期	井戸底の詳細な構造や時期は不明	
多肥松林遺跡	高松市多肥上町・下町	Ⅱ区SE01	素掘りB型（不整楕円形）		無	無	11世紀後半？	Ⅵ期		香川県教育委員会ほか1999c
横内東遺跡	高松市三谷町	SE1	素掘りB型（円形）		無	無	13世紀後半	Ⅷ期		高松市教育委員会2012b
西打遺跡	高松市香西南町	D区SE01	素掘りB型（楕円形）		無	無	14世紀後半？	Ⅸ期		香川県教育委員会ほか2000d
		D区SE02	素掘りB型（円形）		無	無	13世紀前半？	Ⅷ期	遺物が乏しく時期の確定が困難	
		B3区SE01	乱積み式石組型（A型？）	小口積み	不明	不明	13世紀後半～14世紀前葉	Ⅷ期	井戸底の構造は報告書からは判断できない	香川県教育委員会ほか2002e
		C区SE01	乱積み式石組型（A型）？		曲物1	無	13世紀前半	Ⅷ期	石組は報告書で指摘されているように、井戸廃絶時に一定度の攪乱を被っている可能性が高い	
		C区SE02	素掘りB型（楕円形）		無	無	13世紀前半	Ⅷ期		
		C区SE03	素掘りB型（円形）		無	無	11世紀後半～12世紀前半	Ⅵ期		
香西南西打遺跡	高松市香西南町	SE01	素掘りB型（円形）		無	無	15世紀後半？	X期		高松市教育委員会2000b
		SE201	素掘りB型（隅丸長方形）？		無	無	18世紀以降	XⅢ期	出土遺物が乏しく、時期を特定できない	高松市教育委員会2000c
鬼無藤井遺跡	高松市鬼無町	SE-B1-01	素掘りB型（円形）		無	無	中・近世		遺物なし	高松市教育委員会2001a
		SE-B3-01	乱積み式石組型（B型？）		無？	無	近世？		詳細不明	
		SE-C1-01	乱積み式石組型（B型）		無	無	19世紀後半	XⅣ期	石積み10段残存	
		SE-E2-201	素掘りA型（不整楕円形）		無	無	14世紀中葉～後葉	Ⅸ期		
		SE-E2-202	素掘り不明（円形）		不明	不明	不明	不明	詳細な構造は不明	
筑城城跡	高松市鶴市町	SE01	組立て式方形縦板組A1類＋乱積み式方形石組型（B型）		無？	無？	16世紀前葉？	X期	井戸底の構造については、井戸が保存されることになったため、不明な点がある	高松市教育委員会1999c
中森遺跡	高松市檀紙町中森	Eトレンチ1号井戸	素掘りB型（円形）		無	無	14世紀末～15世紀前葉	Ⅸ期		香川県教育委員会ほか2004d

表 19　香川県内検出の井戸（7）

遺跡名	所在地	遺構名	構造	石積み方法	集水施設	浄水施設	時期		備考	報告書
		G1 トレンチ 1 号井戸	不明		不明	不明	14 世紀以前	Ⅷ期	検出範囲が狭く詳細不明	
		G1 トレンチ 2 号井戸	乱積み式石組型（A 型）		曲物 1 以上	不明	14 世紀中葉～	Ⅸ期	調査区の関係から底面まで調査ができず、井戸底の詳細は不明	
八幡遺跡	高松市檀紙町八幡	SE01	素掘りA型（円形）		無	無	18 世紀後半～ 19 世紀初頭	ⅩⅢ期		香川県教育委員会ほか 2004b
正箱遺跡	高松市檀紙町正箱	SE01	組立て式横板組隅柱型		無	無	10 世紀前半	Ⅴ期	構築時期は 9 世紀後半に遡る可能性あり	香川県教育委員会ほか 1994c
		SE02	素掘りA型（方形）		無	無	9 世紀中葉？	Ⅲ期		
薬王寺遺跡	高松市檀紙町薬王寺	SE03	素掘りB型（長方形）		無	無	13 世紀後半～ 14 世紀前葉	Ⅷ期		
		SE04	乱積み式石組型（B 型）	小口積み	無	無	19 世紀末	ⅩⅣ期		
中間・西井坪遺跡	高松市中間町	SE Ⅱ 01	乱積み式石組型（B 型）	横積み＋小口	不明	不明	18 世紀後葉～	ⅩⅢ期	井戸底の詳細な構造や時期は不明	香川県教育委員会ほか 1999a
讃岐国分寺跡	高松市国分寺町国分	SE6019	素掘り（円形）		不明		中世		底面まで完掘していないため詳細な構造は不明	高松市教育委員会 2018b
讃岐国府跡	坂出市府中町	SE01	組立て式方形縦板組型 A3 類		無？	無	12 世紀後半	Ⅶ期	方形縦板組井戸枠を 2 段に重ねていることから、積み上げ式に分類。報告では「底部に曲物を使用」とあるが、底板を有することと、井戸枠に対して小さなものであることから、後に投棄されたものと判断した。	坂出市教育委員会 1993
		SE77001	乱積み式石組型（B 型）		不明	不明	中世末？	Ⅺ期	井戸底まで調査されたか不明で、出土遺物乏しく明確な時期を特定できない	香川県教育委員会 2016d
		SE78001	乱積み式石組型（垂直積）		無	無	近世		詳細な時期を特定できない	
		SE79001	組立て式方形縦板組型 B3 類		曲物 1	無	12 世紀	Ⅶ期		
		SE80001	積み上げ式曲物組型		無	無	13 世紀前葉～中葉	Ⅷ期	報告では、曲物上位より出土した板材を横板組の井戸枠材の可能性を指摘するが、断定が困難なため、曲物組型とのみしておく	
		SE2003	素掘りA型（隅丸方形）？		不明	不明	11 世紀末～ 12 世紀初頭	Ⅵ期	底面まで完掘していない、報告では埋土の堆積状況より、井戸枠が抜き取られた可能性を指摘する	香川県教育委員会 2019e
		SE3088	素掘りA型（不整円形）？		不明	不明	11 世紀末	Ⅵ期	底面まで完掘していない、報告では埋土の堆積状況より、井戸枠が抜き取られた可能性を指摘する	
横山廃寺	坂出市府中町笹谷	井戸	乱積み式石組型（外傾積？）		不明	不明	中世	不明	底面まで完掘していないため詳細な時期・構造等は不明	坂出市教育委員会 1994
下川津遺跡	坂出市川津町	SE Ⅲ 01	積み上げ式横板組相欠き仕口型		無	無	9 世紀後半	Ⅳ期		香川県教育委員会ほか 1990a
		SE Ⅲ 02	不明		曲物？	無	8 世紀後葉か	Ⅱ期	SE Ⅲ 03 に先行、出土遺物が乏しく時期を確定できない。	
		SE Ⅲ 03	乱積み式石組型（A 型）	横積み	無	無	9 世紀後葉～ 10 世紀前葉	Ⅳ期		
		SE Ⅲ 04	組立て式方形縦板組型 B1 類？		曲物 2	無	10 世紀前半	Ⅴ期	木枠は腐食等により構造に不明瞭な点が多い	
		SE Ⅲ 05	乱積み式石組型（A 型）	横積み	曲物 2	無	13 世紀中葉	Ⅷ期		
		SE Ⅲ 06	編物組型？		無	無	不明	不明	出土遺物がなく時期不明	
川津中塚遺跡	坂出市川津町	SE Ⅱ 01	乱積み式石組型（A 型？）	横積み＋小口	無	無	10 世紀中葉？	Ⅴ期	石組は残存高が乏しく積み方の詳細は不明	香川県教育委員会ほか 1994b
		SE Ⅱ 02	素掘りA型（略円形）		無	無	11 世紀後半	Ⅵ期		
		SE Ⅱ 03 古	素掘りA型（長楕円形）		無	無	近世			
		SE Ⅱ 03 新	乱積み式石組型（不明）		無	無	近世		石積みの詳細については残存状況が悪く明らかにできない	
川津東山田遺跡	坂出市川津町	Ⅰ区 SE01	不明		曲物 1	無	10 世紀前半？	Ⅴ期	曲物は設置位置より集水施設の可能性が高く、井戸枠材は廃絶時に抜き取られた可能性を想定する	香川県教育委員会ほか 2001
		Ⅱ　区 SE01・SE02	不明		曲物	無	10 世紀前半？	Ⅴ期	報告書では 2 基の井戸とされるが 3 基の井戸が同一場所で重複している可能性が高い。また報告書中で井戸とされる SE03 ～ SE05 は井戸と断定できない。出土した曲物は集水施設の可能性を想定したが、詳細な出土状況が不明なため井戸枠材の可能性も残る。	香川県教育委員会ほか 2002c
川津昭和遺跡	坂出市川津町	SE501	乱積み式石組（垂直積）＋積み上げ式陶質枠組型		無	無	近代	ⅩⅣ期	陶質枠 3 段残存	香川県教育委員会 2014
		SE502	乱積み式石組（垂直積）＋積み上げ式陶質枠組型		無	無	近代	ⅩⅣ期	陶質枠 3 段残存	
		SE503	乱積み式石組（垂直積）＋積み上げ式陶質枠組型		不明	不明	近代	ⅩⅣ期	陶質枠 2 段残存	
岸の上遺跡	丸亀市飯山町川原	SE4001	乱積み式石組型（A 型）		無	無	16 世紀後半～ 17 世紀前葉	Ⅺ期	石積み 11 段残存	香川県教育委員会 2019b
		SE6001	積み上げ式曲物組型？		無？		中世前半		曲物は 1 段のみ、詳細不明	
西末則遺跡	綾歌郡綾川町北・山田下	SEf02	組立て式方形縦板組型 A1 類		曲物 2	無	12 世紀後葉	Ⅶ期		香川県教育委員会 2007c
		SEf03	乱積み式石組型（B 型）		無	無	18 世紀後半	ⅩⅢ期	石積み 10 段以上残存	
		SEf04	素掘りB型（不整楕円形）		無	無	12 世紀後葉	Ⅶ期	埋土の堆積状況から複数の改修の可能性が伺える	
		SEf05	素掘りB型（不整隅丸方形）		無	無	13 世紀前葉	Ⅷ期		
		SEf06	組立て式方形縦板組型 A1 類		無	無	12 世紀後葉	Ⅶ期		
		SEf07	素掘りB型（楕円形）		無	無	12 世紀末～ 13 世紀前葉	Ⅶ期	透水層との関係は不明なため井戸としてよいか判断できない	
		SEd01	組立て式方形縦板組型 C3 類		不明	不明	12 世紀後葉	Ⅶ期	調査中に崩落し、下部構造の詳細不明	香川県教育委員会 2012b
		SEd02	積み上げ式陶質枠組型		無	無	近世以降	ⅩⅣ期	陶質枠 1 段残存	
		SEe01	不明		不明	不明	12 世紀後半？	Ⅶ期	調査途中で崩落のため詳細不明	香川県教育委員会 2015b
		SEc01	乱積み式石組型（A 型）		曲物 4 ～ 5	無	13 世紀後半～末	Ⅷ期	底面の形状は不明瞭	
佐古川・窪田遺跡	丸亀市綾歌町栗熊	SE02	組立て式方形縦板組型 B1 類		曲物 1	無	12 世紀後半	Ⅶ期		香川県教育委員会ほか 2006a

表 20　香川県内検出の井戸（8）

遺跡名	所在地	遺構名	構造	石積み方法	集水施設	浄水施設	時期		備考	報告書
池下遺跡	丸亀市綾歌町栗熊	Ⅳ区 SE41	素掘りＢ型（楕円形）		無	無	13 世紀後半	Ⅷ期		香川県教育委員会ほか 2008a
		Ⅰ区 SE11	積み上げ式結桶組＋積み上げ式陶質枠組型？		無	無	19 世紀以降	ⅩⅣ期	結桶１段残存、陶質枠は破片で出土	
丸亀城跡（大手町地区）	丸亀市大手町	SE1117	積み上げ式結桶組？		不明	不明	～ 15 世紀後半	Ⅹ期	結桶１段残存、井戸底の詳細な構造は不明	丸亀市教育委員会 2018
		SE040	乱積み式石組型（Ｂ型）		不明	不明	19 世紀代	ⅩⅢ期	石組み 10 段以上残存、井戸底の詳細な構造や時期は不明	
		SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	18 世紀前半	ⅩⅢ期	石組み 10 段以上残存	丸亀市教育委員会ほか 2008b
		SE2166	乱積み式石組型（Ｂ型）		不明	不明	19 世紀前半	ⅩⅢ期	石積み７段以上残存、井戸底の詳細な構造や時期は不明	香川県教育委員会ほか 2018a
川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町北	SE01	乱積み式方形石組型（Ｂ型）		無？	不明	18 世紀後半～	ⅩⅢ期	出水の可能性、構造の詳細不明	香川県教育委員会ほか 1996b
		SE02	乱積み式石組型（Ｂ型）		無？	不明	18 世紀後半～	ⅩⅢ期	構造の詳細不明	
郡家田代遺跡	丸亀市郡家町田代	SE01	積み上げ式結桶組型？		無	無	18 世紀後半～	ⅩⅢ期	遺構の残存不良	香川県教育委員会ほか 1996d
郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	Ⅳ区 SE01	挿入式円形丸太刳り抜き型		無	無	弥生時代中期後葉以降		井戸枠設置時の掘り方は不明で、時期を特定できない	香川県教育委員会ほか 1993a
		Ⅱ区 SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		無？	無？	19 世紀～	ⅩⅢ期	井戸底の詳細な構造や時期は不明	
郡家原遺跡	丸亀市郡家町・三条町	SE04	素掘りＢ型（長方形）		無	無	13 世紀中葉	Ⅷ期		香川県教育委員会ほか 1993b
三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	SE01	素掘りＢ型（円形）		無	無	近世			香川県教育委員会ほか 1992a
龍川四条遺跡	善通寺市原田町・木徳町	SE05	積み上げ式曲物組型		曲物１	無	12 世紀後半	Ⅶ期	曲物１段残存、曲物上位に石積の可能性あるが、出土状況から裏込土内への石材の混入の可能性が高い、掘り方の断面形状から、下段の曲物については、集水施設の可能性を想定する	香川県教育委員会ほか 1995a
龍川五条遺跡	善通寺市原田町	SE01	組立て式方形縦板組 A2 類？＋方形乱積み式石組型		不明	不明	近世		井戸ではなく出水の可能性が高い	香川県教育委員会ほか 1996c
		SE02	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	18 世紀後半～	ⅩⅢ期	石組み 10 段以上残存	
平池東遺跡	丸亀市金倉町	SE301	素掘りＢ型（隅丸長方形）		無	無	近世以降	ⅩⅣ期		丸亀市教育委員会ほか 2008a
		SE318	積み上げ式結桶組型		無	無	19 世紀代以前	ⅩⅢ期	結桶１段残存	
平池南遺跡	丸亀市金倉町・原田町	SE Ⅳ 01	素掘りＢ型（不整円形）		無	無	18 世紀前半	ⅩⅢ期		香川県教育委員会 2018d
		SE Ⅳ 02	乱積み式石組型（不明）		不明	不明	近世		未報告のため詳細不明	
庄八尺遺跡	仲多度郡多度津町庄	SE01	素掘りＡ型（楕円形）		不明	不明	近世？		未完掘のため詳細不明	香川県教育委員会 2009b
		SE02	乱積み式石組型（Ａ型）		無？	不明	15 世紀代	Ⅹ期	井戸底の構造についてはやや不明な点がある	
		SE03	積み上げ式曲物組型		無	無	12 世紀末～ 13 世紀前半	Ⅶ期	曲物３段残存	
奥白方中落遺跡	仲多度郡多度津町奥白方	SE01	素掘りＢ型（不整楕円形）		無	無	13 世紀末～ 14 世紀前半	Ⅷ期		香川県教育委員会 2008d
奥白方南原遺跡	仲多度郡多度津町奥白方	SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	近世		報告書では 15 世紀以降とするが、石臼の年代から近世と考える	香川県教育委員会 2008d
		SE02	乱積み式石組型（Ａ型？）		曲物１	無	13 世紀代	Ⅷ期	井戸廃絶後、石組みは一部抜き取られ、出土遺物が乏しい	
永井遺跡	善通寺市中村町・下吉田町	SE001	不明		不明	不明	12 世紀後葉～	Ⅶ期	遺物のみ報告され構造等は不明	香川県教育委員会ほか 1990d
旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	7-7 区 SX03	乱積み式石組型		無	無	９世紀後半～ 10 世紀	Ⅳ期	石組は大きく崩されており、詳細は不明	香川県教育委員会ほか 2015a
		7-8 区 SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	14 世紀代	Ⅸ期		
上一坊遺跡	善通寺市吉原町	SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	17 世紀前半	ⅩⅡ期	石積み８段残存、遺物が乏しく時期の確定が困難	香川県教育委員会ほか 1987b
		SE02	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	近世後半		石組み 10 段以上残存	
		SE03	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	近世後半		石積み６段残存	
		SK04	積み上げ式結桶組型？		無	無	近世		結桶１段残存	
矢ノ塚遺跡	善通寺市吉原町矢ノ塚ほか	SE001	素掘りＢ型（不整隅丸方形）		無	無	15 ～ 16 世紀代	Ⅹ期		香川県教育委員会ほか 1987d
		SE002	素掘りＢ型（不整楕円形）		無	無	15 ～ 16 世紀代	Ⅹ期		
西原遺跡	善通寺市与北町	SE01	乱積み式方形石組型（Ｂ型）		無	無	18 世紀前半	ⅩⅢ期	石積み７段残存	香川県教育委員会ほか 2007a
山南遺跡	善通寺市生野町山南	SE03	素掘りＢ型（略円形？）		無	無	13 世紀後半	Ⅷ期		香川県教育委員会ほか 2003h
		SE04	素掘りＢ型（楕円形）		無	無	14 世紀前半	Ⅸ期		
本村中遺跡	三豊市詫間町詫間	SE101	素掘りＢ型（不整楕円形？）		無	無	18 世紀前半	ⅩⅢ期		香川県教育委員会 2017c
利生寺遺跡	三豊市高瀬町上勝間砂古	SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	18 世紀後半	ⅩⅢ期	出土遺物は乏しく、井戸構築時期の下限を示す	香川県教育委員会ほか 1987c
大門遺跡	三豊市高瀬町上勝間砂古	SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		結桶１	無	16 世紀後半以降	Ⅺ期	出土遺物は乏しく、時期を特定することは困難	香川県教育委員会ほか 1987c
延命遺跡	観音寺市豊中町上高野	SE01 新	積み上げ式曲物組型		無	無	13 世紀前葉	Ⅶ期	曲物３段残存、遺物の細かな出土層位が不明なため、時期を特定できない	香川県教育委員会ほか 1990c
		SE01 古	積み上げ式曲物組型？		編物	無	13 世紀前葉	Ⅶ期	曲物１段残存、SE01 新に攪乱され詳細は不明	
		SE02	積み上げ式曲物組型？		無	無	12 世紀末～ 13 世紀前葉	Ⅶ期	曲物１段残存、曲物周囲に棒状石材の裏込めを施す	
		SE03	積み上げ式曲物組型？		無	無	12 世紀後半	Ⅶ期	曲物１段残存	
		SE04	乱積み式石組型（Ａ型？）		丸太刳り抜き１	無	12 世紀末～ 13 世紀前葉	Ⅶ期	石組の多くが抜き取られており、積み方の詳細は不明	
		SE05	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	18 世紀末～	ⅩⅢ期	石積み 10 段残存	
一の谷遺跡群平塚地区	観音寺市本大町	SE101	乱積み式石組型（Ｂ型）		不明	不明	18 世紀後半	ⅩⅢ期	井戸底の詳細な構造や時期は不明	香川県教育委員会ほか 1990b
柞田八丁遺跡	観音寺市柞田町	SE01	乱積み式石組型（Ｂ型）		無	無	近世		石積み９段残存	香川県教育委員会ほか 1988

Ⅱ期（８世紀後半）の井戸

８世紀後半代をⅡ期とする。小山・南谷遺跡 SE701 の組立て式方形縦板組型 B1 類と木太中村Ⅱ遺跡井戸の組立て式方形縦板組型 A1 類があり、下川津遺跡 SE Ⅲ 02 も当該期に位置付けられる可能性が高い。

小山・南谷遺跡 SE701 では、集水施設として曲物が使用されており、また木太中村Ⅱ遺跡井戸では底面に拳大の円礫の礫敷が施され、浄水施設と評価できる。

一方、下川津遺跡 SE Ⅲ 02 は、重複する井戸に大きく攪乱を被り、井戸底から曲物１段分の破片が出土したのみで、井戸枠の構造は正確には不詳である。曲物の復元内径は 0.36 ｍと小形であり、上述した小山・南谷遺跡 SE701 と同様に集水施設の可能性を想定したい。

本期の特徴として、集水施設や浄水施設といった付帯施設の整備があげられる。井戸底にこれら施設を整備することにより、透水層の浸食を防ぎつつ安定して湧水を確保することが可能となる。より構造的に複雑化し、機能的に進化したことが伺えるが、こうした技術が井戸導入期ではなく、やや遅れて入ってきたことにも注意が必要であろう。井戸が、一つのパッケージ化された構造物ではなく、分割されたパーツの集合体であり、その選択は構築者の裁量の範囲であったと評価される。そうした意識は、後の木組と石組や、結桶と陶質枠との併用といった点とも通底し、伝統的に受け継がれ、井戸の構造に多様性を創出する基礎となったと考える。

また、本期を嚆矢として、井戸の枠材として曲物の使用が始まる。本期では、集水施設の枠材としてのみ使用されている点で共通し、井戸枠材としての使用はやや遅れるようだ。

Ⅲ期（９世紀前半）の井戸

９世紀前半代をⅢ期とする。坪井遺跡 SE01 の挿入式円形丸太刳り抜き型と、小山・南谷遺跡 SE604 の組立て式横板組隅柱型、正箱遺跡 SE02 の素掘り井戸が本期に属する井戸としてあげられる。

小山・南谷遺跡 SE604 では、井戸底に整地土を敷いて、土居桁と隅柱を設置する等、規格性は伺えるものの、横板は隅柱の外側に積み上げており、Ⅰ期の前田東・中村遺跡Ｅ地区 SE01 の構造に近い。また、本例でも曲物を集水施設として利用する。

挿入式円形丸太刳り抜き型の井戸は、「もっとも原始的な井戸枠形態の一つ」とされる（鐘方 2003）ものの、本県での確実な出土例は、本例と時期不詳の郡家一里屋遺跡Ⅳ区 SE01 の２例のみであり、古代以降にあっては盛行する井戸形態ではないようだ。坪井遺跡例では一木をそのまま刳り抜くＡ類とみられ、樹種不詳の径 0.8 ｍ程度の大型の材が使用されている。

郡家一里屋遺跡Ⅳ区 SE01 例も、径 0.33 ｍの小型のクスノキ材を使用するＡ型で、調査では詳細な時期を特定できていないが、周辺の遺構などより判断して、坪井遺跡例と大差ない時期の可能性が高い。

正箱遺跡 SE02 の素掘り井戸Ａ型は、古代以降の素掘り井戸としては本県下では時期的に最も遡る資料である。本期以降継続して近世段階まで開削され続け、井戸としてよいか課題の残る資料も含めると、現状で 29 基を集成した。構造面から恒久的な施設とは考えられず、突発・緊急的な水需要に対応した仮設的な井戸であった可能性を想定したい。

本期には、挿入式円形丸太刳り抜き型井戸や素掘り井戸といった新たな型式の井戸が導入されるが、前者は本地域に定着しなかったようだ。その要因は想像でしかないが、適した樹径を有する材の枯渇や製作コストに課題があった可能性が考えられる。多様な構造の井戸が、継続的に導入される環境下にあったと考えられるが、地域の実情に応じて選別されていたのであろう。

Ⅳ期（９世紀後半～ 10 世紀初頭）の井戸

９世紀後半～ 10 世紀初頭をⅣ期とする。三殿北遺跡 SE02 や小山・南谷遺跡 SE603、前田東・中村遺跡Ⅰ③ SK12 の積み上げ式曲物組型、前田東・中村遺跡Ｌ③ SE01 の組立て式縦板組型 C3 類、下川津遺跡 SE Ⅲ 01 の積上げ式横板組相欠き仕口型、同遺跡 SE Ⅲ 03 と旧練兵場遺跡 7-7 区 SX03 の乱積み式石組型が、本期に属する井戸として挙げられる。

遺跡数は大きく増加し、同一遺跡で型式の異なる井戸が複数検出される点からは、井戸の一定度の普及と同一遺跡内での用途・目的による選択的な井戸利用の可能性が想定される。また、積み上げ式曲物組型と乱積み式石組型といった、中世以降に普遍化する２つの井戸型式が本期に合わせて登場する点も大きな特徴であろう。

曲物組型の出現は、８世紀中頃が最古とされ（鐘方 2003）、本地域への導入は約１世紀遅れる。曲物自体の井戸への利用は、既述したようにⅡ期に遡り、今後の資料数の増加により、本地域での曲物組型の出現は遡る可能性も想定される。

石組型は、畿内地域では７世紀前半に出現し、７世紀後半～８世紀初頭に複数例が確認されているが、８世紀前半～ 12 世紀後半にかけて、その確認例は大きく減少するとされる。鐘方氏はその要因として、この間における安定した「木材資源の再利用サイクル」の存在と、12 世紀後半以降の武家の台頭による、戦乱や大火による建物復興のための木材資源の枯渇という政治・経済的な背景を指摘する。また、大火や戦乱を免れた地方都市では、広島県草戸千軒町遺跡の例を参考に、12 世紀以降も木組井戸が構築され、石組み井戸が主流となるのは、中世末以降とされる（鐘方 2003）。

さて、乱積み式石組型井戸については、逆台形の掘り方を有し、石材を掘り方壁面に沿うように上開きに積み上げて、背後に裏込めをあまり積まないもの（Ａ型）と、掘り方周壁が垂直に近い箱形ないし逆台形を呈し、掘り方中央に専ら小口積みを主体にして垂直に近く石材を積み上げ、掘り方との間に相当の裏込めを充填するもの（Ｂ型）に大別する。実際には若干の個体差が認められ、両者に截然と分類できない資料も認めるが、それらについては個別に検討することとしたい。また、平面形に関して円形と方形があり、表 13 ～ 20 には方形のもののみ「方形」と記載し、形状が無記載のものは全て円形井戸である。

本地域での石組み井戸は、後述するように本期以降も少数だが一定数構築されており、他地域とはやや異なる、本地域独自の様相として評価できる可能性がある。その要因は明らかではないが、本期の石組み井戸は、石材の大きさは不統一で、横積みを基本とし、残存高も１ｍ程度と低いＡ型である。石材も遺跡周辺で入手可能なものであり、石積み構築に、特殊で高度な技術を必要とするものとは思えない。木組井戸を補完する井戸として構築された可能性を想定したい。

なお、後述するようにⅧ期以降に石組み井戸は、小口積みを主体に螺旋状に積み上げるＡ型井戸として定型化をし、急速に築造数が増加する。この点については、上述した草戸千軒町遺跡の状況とは異なり、おそらくは京都を中心とした畿内の流行を模倣した可能性が高い。本地域独自の自立的な井戸構造の変化の方向性と、他地域からの影響による変化といった多重性が伺える。

Ⅴ期（10 世紀）の井戸

10 世紀代をⅤ期とする。前田東・中村遺跡Ｆ地区 SE01・Ⅰ③ SK13・Ⅰ③ SK16 の積み上げ式曲物組型、正箱遺跡 SE01 の組立て式横板組隅柱型、下川津遺跡 SE Ⅲ 04 の組立て式方形縦板組 B1 類、川津中塚遺跡 SE Ⅱ 01 の乱積み式石組型Ａ型、井戸の詳細は不明だが川津東山田遺跡Ⅰ区 SE01、同Ⅱ区 SE01・SE02 が、本期に属する井戸として挙げられる。

前田東・中村遺跡でのみ３基の曲物組型井戸が構築され、その他は木組型と石組型井戸が少数継続し、遺跡（地域）により井戸型式に伝統性や偏在性が伺える。資料数が乏しい現状では評価が困難だが、前田東・中村遺跡では伝統的に曲物組型井戸に固執する、何らかの契機があったことは確かであろう。川津中塚遺跡の石組み井戸は、残存深 1.14 mと浅く、その底部付近に高さ 0.47 mの石組が積み上げられていた。石積み上位の状況が不明だが、石積みの構築は湧水部の壁面崩落の保護を目的としたものと考えられる。

Ⅵ期（11 世紀～ 12 世紀初頭）の井戸

11 世紀～ 12 世紀初頭をⅥ期とする。９基の井戸が本期に属するが、約半数の４基が前田東・中村遺跡で占められ、また６基が素掘り井戸である。出土遺跡や構造に偏りがみられ、今後の資料数の増加に期待したい。

前田東・中村遺跡Ｃ地区 SE03 は、横板組の木組井戸であることは確実だが、残存状況が悪く詳細な構造は不明である。同遺跡Ｅ地区 SE03 とＨ① SE01 は全く同じ構造の井戸で、集水施設に曲物１段を据え、井戸枠として横板組相欠き仕口型の枠材２段を積み、その上位にＡ型石組数段を積み上げる。上面の削平を考慮しても、石組の高さは１m程度と想像され、井戸枠の主体をなすものではない。

しかしながら、集水施設を除いて、いわゆる井戸枠を構造の異なる複数の型式の枠材で構築したことには、何らかの意図があったと考えたい。特に上位を石積みとすることは、本期以降の井戸の多くで採用されており、その要因として地上部分の井桁構築時の安定した支持基盤としたことが想像される。

集水施設として曲物を設置する例はⅡ期に遡る。Ⅳ期に出現した石組井戸は、本期以降に徐々に数を増して普及するとともに、集水施設に曲物を頻用し、定型化する。上述した前田東・中村遺跡Ｃ地区 SE03 例では、石組下部に木組を伴い、石組のみで井戸枠を構成しない。石組と木組を併用する井戸は、Ⅷ期の浜ノ町遺跡 SE102 など一定期間継続し、徐々に井戸枠が石組単体で構築されるものへと移行するようであり、定型化の過程での過渡期的様相と評価されよう。

なお、既述したように、Ⅳ期からⅤ期にかけて前田東・中村遺跡で相次いで４基の曲物組型井戸が構築されたが、本期には同型式の井戸は確認されない。しかし、後述するⅦ期には再び復活することから、調査地外で同型式の井戸が構築されている可能性が高く、前田東・中村遺跡における井戸型式選択の伝統性として評価できよう。

素掘り井戸は、Ａ型とＢ型の双方が認められる。Ａ型のうち、讃岐国府跡 SE2003 と SE3008 では、埋土の詳細な観察から井戸枠材の抜き取りの可能性が指摘されており、本来的に素掘り井戸として開削・利用された井戸以外に、抜き取りなどにより結果として素掘り井戸として調査された事例も多くあったことは確実であろう。

なお、本期には曲物組型の井戸は確認されていないが、この理由については現状では明らかにはできない。

Ⅶ期（12 世紀～ 13 世紀前葉）の井戸

12 世紀～ 13 世紀前葉をⅦ期とする。本期に属する井戸の調査例は、14 遺跡 29 基と前期と比して著しく増加するが、その背景として 12 世紀代における中世屋敷地の成立が大きく関係しよう。井戸を構築する階層がより拡大した可能性を示している。

そのうち木組井戸は、すべて組立て式方形縦板組型で、４遺跡から７基が確認された。西末則遺跡 SEf02 と SEf06 が A1 類、讃岐国府跡 SE01 が A3 類、佐古川・窪田遺跡Ⅲ区 SE02 が B1 類、讃岐国府跡 SE79001 が B3 類、大灘遺跡 SE02 が C1 類、西末則遺跡 SEd01 が C3 類にそれぞれ分類され、遺跡により若干構造が異なるようだ。地域や遺跡単位で、柔軟に構造の選択がなされたと考えられる。

曲物組型井戸は、前田東・中村遺跡Ｂ地区 SE01・SE02、龍川四条遺跡 SE05、庄八尺遺跡 SE03、延命遺跡 SE01 新・SE01 古・SE02・SE03 がある。前田東・中村遺跡での曲物組型井戸の構築は本期において復活し、古代以来の伝統性が伺える。

延命遺跡 SE01 古は、井戸底に竹製の網籠を集水施設として設置した、曲物組型の井戸の可能性を想定した。しかし、曲物は網籠上位の 16 層より１段のみが出土しただけで、間に 17 層の堆積が層厚 0.2 mあり、竹製網籠は曲物よりも古い別の井戸に伴う可能性も考えられる。いずれにせよ、重複する SE01 新は曲物３段が残存する曲物組型井戸であり、同一地点で同型式の井戸を少なくとも２基以上連続して構築していることが認められるほか、本遺跡でも前田東・中村遺跡と同様に、曲物組型井戸への傾斜が確認できる。

石組井戸としては、石田高校校庭内遺跡 SK03・SK04、南天枝遺跡 SE01、前田東・中村遺跡Ｅ地区 SE04、空港跡地遺跡 SEc03、延命遺跡 SE04 がある。そのうち空港跡地遺跡例は近世の集石土坑の可能性が高いため検討から除外する。また、石田高校校庭内遺跡の２基の井戸も、石組内径が 0.2 m前後と小形で、井戸以外の可能性を想定したい。南天枝遺跡 SE01 例では、やや大型の石材を、小口積みを主体に垂直に近く積み上げており、当該期に一般的な井戸とはやや異なるＢ型の特徴が目立ち、時期的に後出する可能性も考えられる。類例の増加を待ちたい。

前田東・中村遺跡Ｅ地区 SE04 は、前期に成立した集水施設に曲物を伴う石組み井戸で、延命遺跡 SE04 では、曲物ではなくクスノキの刳り抜き材が使用されており、桶などの刳り物を転用した可能性がある。

素掘り井戸は、Ａ型とＢ型が認められ、そのうちＡ型の誉水中筋遺跡 SE01 は、井戸枠材が再利用された可能性が考えられる。なお、誉水中筋遺跡例以外はすべてＢ型である。

Ⅷ期（13 世紀～ 14 世紀前葉）の井戸

13 世紀～ 14 世紀前葉をⅧ期とする。本期に属する井戸も多く、21 遺跡 33 基（うち１基は時期的に近世以降に下る可能性が高く、もう１基は残念ながら井戸の構造が不明である）の資料を集成した。

正安元年（1299）成立の『一遍聖絵』第７巻には、関寺まえの民家の庭先に方形の井戸が描かれており、「この時代の井戸は上層階級をのぞいては一般には共同井戸が用いられていたと推定せられるがこの家は個人で井戸をもっている。井戸の個人所有もすでに見られはじめていたこと」が指摘されている（渋澤ほか編 1984）。関寺まえの民家が、具体的にどのような階層の屋敷であったのかは不詳だが、一方で、12 世紀末頃に成立したとされる『信貴山縁起』や、応永三十年（1423）完成の『融通念仏縁起』等には、共同井戸が多く描かれており、個人所有

の井戸は普遍的なものではなかった可能性が高い。遺跡でのあり方からすれば、名主や富農層と呼ばれる人々が所有したことまでは実証できようか。

木組井戸は浜ノ町遺跡 SE102 の組立て式方形縦板組型 A1 類と同遺跡 SE602 の組立て式横板組隅柱型の２基のみと減少する。横板組型は本期以降には認められず、本期をもって終焉するとみられる。曲物組型井戸も、前田東・中村遺跡Ａ地区 SE01、東山崎・水田遺跡Ｅ地区 SE08、讃岐国府跡 SE80001 の３基へと減少する。

それらとは対照的に、石組井戸は、構造面から近世以降の可能性が想定される空港跡地遺跡 SEb01 例を除いて、11 遺跡 14 基と大きく増加し半数近くを占める。全てＡ型井戸で、本期には小口積みを多用して、螺旋状に積み上げるものがみられるようになる。また､14 基中 11 基が曲物による集水施設を具備する。こうした構造が本地域で定形化し、一定の地域的な広がりを有して共有された点は、畿内地域からの影響とともに、構造面での一定の様式化が顕在化したものと評価できよう。

素掘り井戸は、11 遺跡で 12 基が確認され、花池尻北遺跡のＡ型を除いてすべてＢ型で占められる。Ｂ型が主体となる点は、Ⅶ期より継続する。

さて、本期に井戸の構築材として結桶が登場する。浜ノ町遺跡 SE602 で、横板組隅柱型井戸の集水施設に結桶が使用されており、「全国的にみても結物受容の早い段階」と評価されている（乗松 2004）。1994 年の集成では、14 世紀の結桶は、「広島県…佐賀県・大阪府・京都府・奈良県・滋賀県・愛知県・神奈川県」で確認され（鈴木 2000a）ており、西日本から東日本の一部にまで、まだ点的だが広く普及していたと考えられる。また、結桶を井戸枠材として使用したのではなく、あくまでも集水施設へ使用したことは、曲物の使用方法と共通する。Ⅶ期に延命遺跡で刳り物容器と考えられる丸太材が集水施設に利用されたこととも合わせ、常時水没した環境にあり、腐食などによる劣化の可能性が乏しく、集水施設への木製品の利用は合理的なものであったと考えられる。

Ⅸ期（14 世紀～ 15 世紀前葉）の井戸

14 世紀～ 15 世紀前葉をⅨ期とする。11 遺跡 14 基の井戸を集成した。前期より井戸構築数は大きく減少する。この要因については、明らかにはできないが、当該期の調査された遺跡数の減少も大きく影響している可能性もある。

木組井戸は、浜ノ町遺跡 SE101 の組立て式方形縦板組 A3 類と､同遺跡 SE403 の円形（多角形）縦板組型の２基のみとなる。曲物組型井戸は、東山崎・水田遺跡Ｅ地区 SE05 と浜ノ町遺跡 SE304 の２基のみとなり、Ｘ期以降には認められず､本期をもって終焉するとみられる。ただし、集水施設への曲物の利用は、既述したような理由から、以後も継続する。曲物組型と入れ替わるように、本期に結桶組型が浜ノ町遺跡 SE512 で出現する。木製容器転用の井戸枠材として、曲物よりもより強度に優れた結桶へと、素材の転換がなされたと考える。

石組井戸は、５遺跡５基と本期においても多数を占める。集水施設を省略するものが５基中３基と、やや多数を占めるようだが、全体的な傾向としては、簡略化の方向にはないとみたい。また、Ａ型井戸が主体を占めるものの、旧練兵場遺跡 7-8 区 SE01 は、石組高約 3.0 ｍのＢ型井戸で、同時期のＡ型井戸と比してやや相違点が大きい。本資料については、機会があれば再論したいと思う。中森遺跡 SE02 も、下半部は掘方際に石を積み上げるものの、上半部は裏込めを大きくとり、垂直に近く石材を積み上げる。石組高約 1.2 ｍと上面の削平を考慮しても低く、Ｂ型井戸出現期の様相とみたい。

素掘り井戸は、５遺跡５基があり、内訳はＡ型２基、Ｂ型３基である。

Ⅹ期（15 世紀～ 16 世紀前葉）の井戸

15 世紀～ 16 世紀前葉をⅩ期とする。本期に属する井戸として、11 遺跡 14 基の井戸を集成したが、本期もⅨ期同様資料数は乏しい。

木組井戸は、浜ノ町遺跡 SE303 と筑城城跡 SE01 で方形縦板組型各１基があり、浜ノ町遺跡 SE520 も方形縦板組型井戸を簡略化したものと考えられる。また、これら３基の井戸の木組の上位には方形石組Ｂ型が築かれており、確実な石組Ｂ型の出現期として評価したい。ただし石組の残存高は１ｍ程度と低く、後に出現するような深井戸とは系譜が異なる可能性も考えられる。なお、Ⅵ期以降継続してきた木組の上位に石組を施す井戸は、本期をもって終焉する。それは、古代以来の木組井戸の終焉を示すものであり、一つの画期として捉えられよう。一方、Ａ型石組井戸は本期にも継続し、４遺跡４基を認める。そのうち集水施設を有するものは３基を数え、その全てに曲物を使用する。

積上げ式結桶組型は、前田東・中村遺跡Ｍ③ SE01、丸亀城跡 SE1117 にあり、高松・丸亀平野において分布を認める。

東山崎・水田遺跡Ｄ地区 SE04 は、挿入式土器型に分類されるもので、乗岡編年３期の備前焼大甕の底部を打ち欠いて、口縁部を下に埋めて井戸枠に転用したものである。土器自体の年代から本期に位置付けたが、屋敷地の経営期間を考慮すると次のⅪ期とするのが妥当のようにも思われる。本期では、専用の陶質枠は出現しておらず、後述するⅪ期にかけて大型の陶器を井戸枠に転用した例が少数認められる。

素掘り井戸は３遺跡４基があり、Ｂ型が多数を占める点はⅨ期以前と変わらない。

Ⅺ期（16 世紀 ~17 世紀前葉）の井戸

16 世紀～ 17 世紀前葉をⅪ期とする。本期に属する井戸として、18 遺跡 45 基を集成した。高松城下の調査が進み、資料数は大きく増加した。

木組井戸は、尾崎西遺跡 SE02 の組立て式方形縦板組型のみで、木組井戸としては最も後出する資料である。積上げ式結桶組型井戸は、高松城跡（東の丸）SE05、同（丸の内）SE03・SE1-3301、浜ノ町遺跡 SE301 があり、高松城下武家地で多く認める。

挿入式土器型は、上述したように東山崎・水田遺跡Ｃ地区 SE04 と高松城跡（丸の内）SE301 があり、おそらく後には継続しない。後述するように、当該期には堺や大坂で専用の陶質枠が成立していたが、今のところ本地域に導入された形跡はない。土器の転用例が少数確認されるのみであり、県内で転用可能な大型甕は本段階には生産されておらず、いずれも備前焼や亀山焼といった瀬戸内対岸の近接地の焼き物が使用されている。また、透水層が比較的浅い位置にある場所が選択され、甕１個体を据えて井戸枠とすることでも共通する。東山崎・水田遺跡は、堀状の区画施設を有する富農層の屋敷地で、高松城例は城内堀に面する上級武士の屋敷地内に相当し、こうした階層に採用された井戸型式であったと考えられる。

また、挿入式編物型は、東山崎･水田遺跡Ｃ地区 SE01 があり、竹製の網籠を井戸枠として転用していた。網籠を井戸枠に転用した例として、詳細な時期が不詳な原間遺跡 SE Ⅴ 02 や下川津遺跡 SE Ⅲ 06、ⅩⅣ期の北山下遺跡 SE001 があり、数は限られ

るが、時期幅をもちながら一定の地域的な広がりを有して構築されたようだ。

素掘り井戸は、17 基が確認され、東山崎・水田遺跡Ｅ地区 SE02 などのように、径 4.6 ｍの規模の大きなものがみられるようになる。

本期で最も主体を占めるのは、石組井戸で 20 基を確認した。後世の攪乱により詳細な石積み構造が不明となった資料は多いが、確実なものでＡ型３基、Ｂ型ないしその可能性が高いもの 11 基を数え、Ｂ型井戸の比重が増加しつつある状況が伺える。Ｂ型井戸は、高松城下の武家地以外にも、陵遺跡や西ハゼ土居遺跡、讃岐国府跡、大門遺跡といった農村部でも構築されており、本期には地域的な広がりをみせる。

Ａ型井戸は、擂鉢状の掘り方にもたせ掛けるように石を積み上げるため、裏込めなどは乏しく、構築技術の点でＢ型井戸よりも簡易である反面、深い井戸の構築には不向きで、また上面内径が１ｍを超えるものが多く、井桁や上屋の規模を大きくする必要があった。対してＢ型は、控え積みを用いて垂直に積み上げるため、Ａ型と比して堅牢であり、深井戸の構築にも適していたと考えられる。上面内径もＡ型より小規模に構築することが可能である。こうした点から、Ｂ型井戸が主流を占めるようになったと考えられるが、専門性の高い井戸構築技術を必要とし、城郭などにおける石垣構築技術が、一部転用された可能性も考えられる。

Ⅻ期（17 世紀～ 18 世紀前葉）の井戸

17 世紀～ 18 世紀前葉をⅫ期とする。本期に属する井戸として、13 遺跡 41 基を集成したが、そのうち４遺跡５基の資料を除く大半が、高松城下武家屋敷地の資料であり、資料的な偏在が著しく、全体的な傾向については今後の資料の増加を待つとして、以下では現状での整理を行う。

井戸の型式は、結桶組型と石組型があり、前者が 11 基、後者が 18 基で、やや石組型が多い。石組型はＡ型が東山崎・水田遺跡と西ハゼ土居遺跡でみられる以外は、型式不明な数基を除いて全てＢ型で占められ、Ｂ型が急速に普及した状況が伺える。また、本村遺跡では、Ｂ型石組井戸の集水施設に結桶２段を用いており、資料数は乏しいものの結桶の利用が農村部にも広がっていた可能性も考えられる。

11 基の結桶組型は、浜ノ町遺跡の２基を除いてすべてが高松城下の武家屋敷地での資料である。町人地の調査例が乏しいため、直接比較はできないが、武家地において結桶組型の井戸が急増したことは確実であろう。

本期における画期の一つに、高松城下への上水道の設置があげられる。上水道の整備は、都市計画の主要な柱の一つとされ、日本においては近世の城下町の成立により、上水道整備の必要性が認識され、急速に普及したとされる（伊藤 2010）。

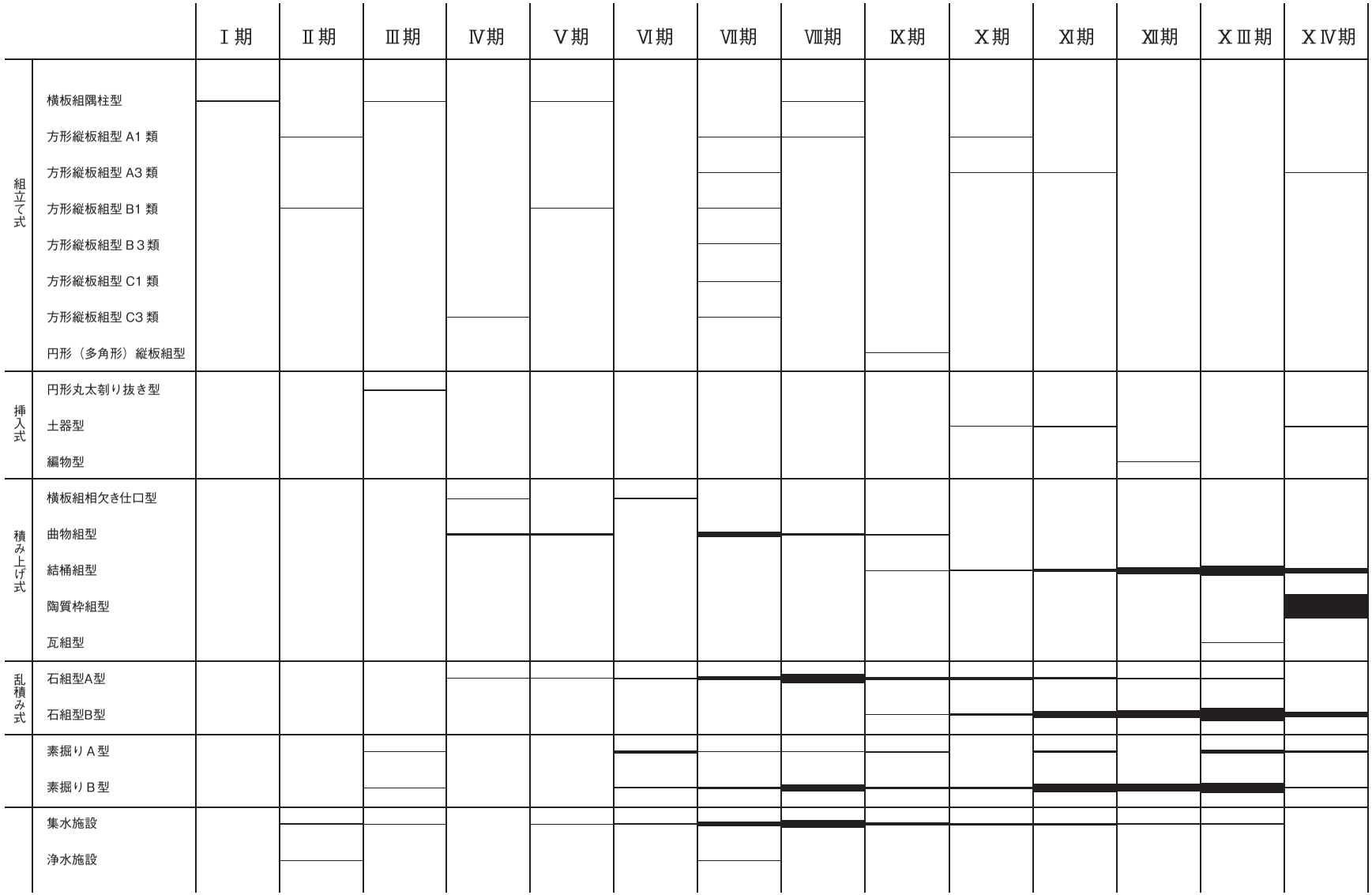
高松城下においては、正保元年（1644）に暗渠施設が設置されたことが、『高松藩記』や『讃岐国大日記』に見え、上水道の整備に係る記載と考えられている。この時に整備されたのは、新井戸を水源とする町人地の上水道で、後に大井戸、今井戸など、町人地の拡張にあわせて順次水源が増設され、上水道網が整備されていった。一方、武家地については、町人地とは接続しない独自の番丁の系統が敷設された（波多野 1984）。番丁の系統は「部分的な図面は残っているが､年代は不明」とされ（高松市水道局 1990）るが、「『高松藩記』に「士民患」之」と記されていることから、創設時代に少なくとも武家屋敷にも別の系統が作られた」可能性が説かれている（神吉 1985）。

19 世紀前半に執筆された喜多川守貞の『守貞漫稿』に、京坂井として積み上げ式瓦組型の井戸枠が、江戸井として積み上げ式結桶組型の井戸枠がそれぞれ描かれている。上方と江戸の当時の代表的な井戸枠を描いたものと考えられ、実際に堺で 16 世紀に製作され始めた井戸瓦は、大阪を中心に近世に盛行する（川口 1999･鐘方 2003）。しかし､大坂城下や堺の発掘調査によって、少数例だが近世の結桶組型の資料も報告されており（例えば、大阪市文化財協会 2003･2006、堺市教育委員会 1989 など）、さらに農村部では、例えば大阪府池島・福万寺遺跡では近世から近代にかけて、結桶組型の野井戸が多数調査されている（亀井 2002）。中世からの伝統や井戸の使用目的、地下の透水層との関係など、様々な要因により井戸の型式は選択されたと考えられる。

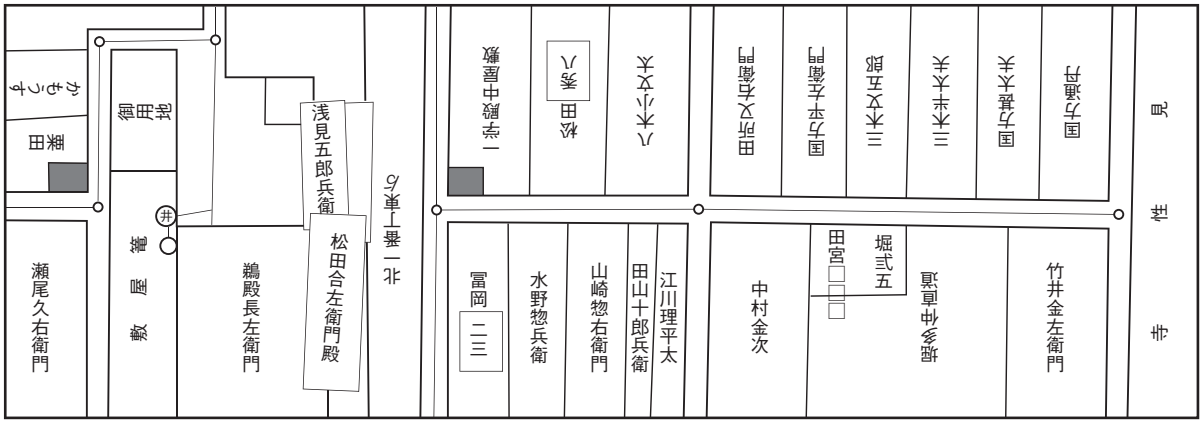
一方、江戸井として描かれた結桶組型の上水井戸は、後述するように各地の城下町の発掘調査で同井戸が調査されていることからも、列島各地の上水道整備に伴い、上水井戸のフォームとして各地の井戸に影響を与えた可能性が考えられる。高松城下への上水道整備についても、上述したように、遅くとも 17 世紀中葉には開始され、武家地において同時期に結桶組型の井戸の検出例が増加することは、こうした上水道の整備と相関した説明が可能と考える。上水管を接続する際に、結桶組の井戸では桶側面に孔を穿ち容易に連接することが可能で、漏水などの可能性も低く、石組井戸よりも構造面で上水井戸として適していたと考えられる。また、こうした結桶組型の上水井戸の場合、最下部の井戸枠には底を付けていたようである（伊藤 2010）。掘抜井戸と上水井戸は、底の有無により区別できるが、井戸底まで詳細な調査が行われた例に乏しく、後述するように、高松城下では相当数の上水井戸が設置されていたと考えられることから、城下で調査された結桶組型井戸の多くが上水井戸であった可能性は高いと考えられる。

高松城下での桶屋町の設置は、寛永 15 ～ 16 年（1638 ～ 39）の「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」（高松市歴史資料館所蔵）には町名として記載は認められないが、享保年間（1716 ～ 36）の「享保年間高松城下図」（高松市歴史資料館所蔵）に初見する。おそらくは上水道の整備などに伴い、結桶の需要が急増する 17 世紀後半以降に、多数の結桶職人が城下に集められ、その製作を担ったと考えられ、桶屋町の設置は 17 世紀後半代に遡る可能性が高い。町人地への配水を示した、文政４年（1821）改、天保 14 年（1843）再改の「新井戸水源並水掛丁々辻井戸軒別内井戸惣絵図」では、内井戸 447 基（内、23 基は給水樋の記入なし）と、辻井戸 23 基（同５基）が記載されている（神吉 1985）。全てが結桶井戸かどうかは不詳だが、新井戸水源のみでこれだけの数の井戸が掘られており、これに武家地の井戸や他の水源の井戸を含めると、19 世紀前半の高松城下には、膨大な数の上水井戸が設置されていたことは間違いない。

こうした水源や上水管の管理には、各町から納められる上納金で賄われ、大規模な改修工事には、臨時に高松藩からの借入金が充当された（高松市水道局 1990）。また､井戸についても『源襄様御代御令條之内書抜』文化 10 年（1813）５月８日条に､「御長屋住居之面々」に対して、「井戸幷水道樋之分ハ是迄之通御修覆被下候、尤自分失却ニ而呼井戸等致候分ハ銘々修覆ハ勿論之事ニ候、右呼井戸之樋修覆之節、其段支配頭等より奉行所江可申出候、作事方見分之上樋居方指図在之義と候間、其旨相心得可申候事」（香川県立文書館 1999）として、呼井戸（溜枡のことか）などを破損した場合、その本人が修繕費を負担し、なお且つその工事は支配頭より奉行所に届け出て、作事方の見分を必要とするなど、厳しい管理がなされていたようだ。公共性の高い施設ではあるが、その維持・管理には受益者負担が重く



第 96 図　香川県における井戸の変遷



高松市水道局水道史編纂室 1990『高松市水道史』に掲載の写真をトレース・翻刻

第 97 図　武家屋敷井戸分布図

のしかかっていたと考えられる。

なお、本県周辺では兵庫県姫路城（姫路市教育委員会 2002・2003）や岡山県岡山城（中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会 1998）、広島県広島城（国土交通省中国地方整備局 2010、財団法人広島市文化財団 1999a・1999 b・2007a・2007b・2010）、山口県萩城（山口県埋蔵文化財センター 2004）、徳島県徳島城（国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 2005、徳島県教育委員会 1998・2000a・2000b・2002・2004、徳島市教育委員会 2004・2008・2009・2010）、愛媛県松山城（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000）、高知県高知城（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002、高知市教育委員会 2013・2017）など、各地の城内や城下町で結桶組型の井戸が検出されている。すべてが上水井戸かどうかは検討が必要だが、徳島城下町では上水施設が検出されており、おそらく各都市で、上水道が整備された可能性が考えられる。

さて、上述した番丁系統の絵図の製作年代について、以下やや長くなるが検討してみたい。同絵図は、『高松市水道史』（高松市水道局水道史編纂室 1990）に「武家屋敷井戸分布」として、その写真が掲載されている。これをトレースして翻刻したのが第 97 図である。印刷物に掲載された写真からの翻刻のため、読み間違いを恐れるが、原図にあたる時間的余裕もなく、限られた情報ではあるが、一定度の年代の絞り込みが可能と判断した。絵図には辻ごとに小さな丸印が描かれており、それを直線が連結している。一部の丸印は、昭和 10・11 年に調査された武家地の水道の木桝の場所と一致する（波多野 1984 の図３）ことから、上水道の位置を示した図であることは間違いない。また、一学殿中屋敷と粟田家の屋敷の隅角におそらく着色された四角地が記されており、上述の享保年間絵図ではそれを「海面及び井手」と凡例に記されており、辻井戸の可能性が考えられる。武家地にも辻井戸が整備されていたことが知られるが、生活用水以外に防火用水などとして利用された可能性も考えられる。

さて、図の右端には「見性寺」があり、その前面に通りがあって、その左手には中央に通りを挟んで向かい合う武家屋敷地が描かれている。高松市歴史資料館所蔵「享保年間高松城下図」や鎌田共済会郷土博物館所蔵「元文五申年六月讃岐国高松図」と比較すると、「見性寺」周辺の地割が微妙に異なる。また、図には「一学殿中屋敷」が描かれており、これは松平高松藩大老職にあった大久保主計家の中屋敷で、他の絵図を参考に「見性寺」との位置関係から、上述した「北一番丁東ゟ」の右側の部分は、浜ノ町周辺を描いたもので、図下が北となることがわかる。一方、図左半部の「北一番丁東ゟ」の左側のエリアは、上記した他の絵図の地割と大きく異なり、同様な地割は、むしろ城の外曲輪南東部にみられ、町奉行所の所在地周辺に相当する。「篭屋敷」や「御用地」の書かれた一角が奉行所であり、鵜殿長左衛門や浅見五郎兵衛、松田合左衛門殿は、後二者が貼紙に書かれていることから、三代の町奉行と考えられる（註３）。なお、天明七年（1787）の分限帳には、松田合左衛門と朝倉十左衛門、熊岡孫三郎、瀬尾久右衛門の四人の奉行（頭一人と与力三人）の名前が見える。つまり、写真の絵図は、異なる場所の図をおそらく南北を逆にして、貼り合わせたものである可能性が高い。しかし、「左衛門」の筆致などが共通し、同一人物の筆跡の可能性が高く、後述するように記載された藩士名の時期も概ね一致することから、一枚の絵図を切り抜き、貼り合わせたのであろう。なお、同様な図幅の絵図は、「延享寅年（1746）御家中分限並屋敷割帳」（香川県立ミュージアム所蔵）にみられ、同屋敷割帳と比較的近接した時期に、描かれた可能性が考えられる。

では、本絵図の具体的な製作年代について考察を加えてみたい。図に描かれた各住人を一覧表にしたものが表 21・22 である。表は、占部日出明氏が作成された表（占部 2011）をベースに、「讃岐松平藩士由緒録」（井下 2002）や「天明七未年十一月廿七改　讃岐高松藩分限帳」（石清尾文化会 1965）などを参考に、絵図に記載された藩士等を抜き出して作成したものである。このうち、名前の相伝の見当たらない人物（水野惣兵衛、冨岡二三、松田秀八など）を中心に、襲名もしくは藩士として禄高を召した年代が、比較的近接している住人を抽出した結果、絵図は安永から寛政年間（1772 ～ 1801）に描かれた可能性が考えられる。さらに、「松田秀八」は、紙を貼った上に書かれているようにも見え、絵図の製作時期は上述した年代幅の中で、やや古く位置付けられる可能性がある。同様に、「冨岡二三」の「二三」の部分も貼り紙の可能性が高い。また、「一学殿中屋敷」について、上記の年代の近接期間に、大久保家で「一学」が使われる時期は限られており、田中健二氏の研究（田中 2016）を参考にすると、それは寛延元年～天明七年（1748 ～ 1787）の間とされる。以上の検討より、本絵図は 18 世紀後葉に製作されたものである可能性が高いと考える。なお、「小神野筆帖」仁には、「大勢の御家中故、新ニ…北一番丁…濱の丁を侍屋しきに」被仰付。」と記されており、「濱の丁」の一角が武家屋敷となった年代と絵図の年代に矛盾はない。また、新

表 21　武家屋敷井戸分布図記載の居住者（１）

No	居住者名	代	出自・職歴	俸禄	年号	居所	文献
1	見性寺						
2	竹井 (玄信 蔡庵) 金左衛門（西庵）	初	儒医 寺社奉行兼帯 満濃池築役方	三百石	寛文	－	6、9、10
	竹井 八郎兵衛	2	養子 書院番頭	二百石	－	－	10
	竹井 (八郎兵衛 定主) 金左衛門	3	横目 断絶	－	宝永	－	5、10
	竹井 金左衛門 (定知）	4	蔡庵実子	二百石	享保	浜ノ丁	10
	竹井 金左衛門	5	鎗奉行 持弓頭 徒士頭 物頭 書院番組与頭	二百五十石	延享	浜ノ丁	10
	竹井卯 (右) 内	6	使番 大番組与頭	二百五十石	天明	浜ノ丁	10
3	堀（蔵人直美）多仲（休焉）	3	側小姓 側用達 江府年寄 隠居	五百石	延享	浜ノ丁	10
	堀 多仲直道（蔵人）	4	側小姓 奉行 側用達 奉行 馬廻番頭格 年寄	五百石	天明	浜ノ丁	10
4	堀 三吾	2	次小姓 大番組	－	寛政	浜ノ丁	10
5	田宮 □□□（喜太郎？）	－	大番組	二百五十石	天明	－	4
6	中村 金次 (佐六郎）	4	嫡孫承祖 書院番組 門番頭 使番	百五十俵	安永	浜ノ丁	10
	中村 金次		平次郎子 江府徒士 新組	五石二人	文久	－	1・7
7	江川 理平太 (辰五郎)	初	舎人次男 江府側小姓 用人	七十俵四人	天明	－	10
	江川 (喜惣太 喜伝太) 理平太	2	使番並奥目附 奥横目 旗奉行	百石	文化	浜ノ丁	8
8	田山十郎兵衛	初	吟味人 奉行所手代 勘定奉行 使番並	百俵四人	天明	浜ノ丁	10
	田山 (又十郎）十郎兵衛	2	馬廻番組 元締 使番並勘定奉行	百五十俵四人	文政	浜ノ丁	3
9	山崎 惣右衛門 (勝輿)	2	奥附物書 群奉行 勘定奉行 元締役	百俵四人	享保	天神前	10
	山崎 新十郎	3	井上宗順子 大番組 馬廻番組 書院番組	百俵	宝暦	番町	10
	山崎 惣右衛門（弁吾）	4	吉川太作末弟 書院番組 隠居	百俵	天明	浜ノ丁	10
	山崎 惣右衛門	5	使番並奥目附	百俵四人	文化	浜ノ丁	8
10	水野 惣兵衛	6	惣領組 門番頭 奥目附	五十俵四人	安永	浜ノ丁	10
11	冨岡 (与左衛門) 二三	7	大石弥兵衛次男 大番組 小姓	百石	寛政	浜ノ丁	10
12	一学殿中屋敷						
	大久保 一学（主計公忠）	初	清右衛門次男実頼房公子 下館 小姓	十両			10
	大久保 一学（主計公忠）	初	高松 小姓衆 大老 後西天皇即位参加	三千石	寛永	－	10
	大久保 主計公卓	2	大老 若死子無く	三千石	寛文	－	10
	大久保 飛驒公羨（隼人 主膳 主計）	3	弟 老中 大老	三千石	元禄	内町	10
	大久保 主計公敦 飛驒	4	大老 詩を能す	三千石	元文	－	2・10
	大久保 新蔵公明	5	公敦子幼少死し血脈絶	三千石	延享	内町	10
	大久保一学頼辰（頼起）	6	松平より後復公子 大老	三千石	明和	－	8
	大久保主計頼裕	7	松平より後復公子	－	－	－	8
	大久保飛驒黄之助 頼郁	8	大老	三千石	天明	内町	8
	大久保一学公純	9	大老	三千石	文政	－	8
13	松田 庄左衛門	2	－	百石	享保	浜ノ丁	10
	松田庄左衛門 庄蔵	3	大番組	百石	延享	浜ノ丁	10
	松田 (庄左衛門）秀八	4	書院番組 門番頭	百石	天明	浜ノ丁	10
14	八木 弥五左衛門	3	惣領組頭 寺社奉行 馬廻番頭 書院番頭	三百石	延享	浜ノ丁	10
	八木 小文太 (弥五左衛門）	4	惣領組頭 小姓頭 書院番頭 大寄合	三百石	安永	番町	10
15	田所 半蔵	3	書院番組 馬廻番組	百石	安永	－	10
	田所 又右衛門（甚兵衛)	4	山崎弥次郎三男 雄丸様附江府小性 中寄合 切支丹奉行	百石	天明	浜ノ丁	10
16	国方 平左衛門	初	手代 賄頭並 定大阪蔵奉行	九石三人	天明	浜ノ丁	10
17	三木 弥平	初	徒士 伯楽	十石三人	享保	浜ノ丁	10
	三木 文五郎	2	瀬尾孫太夫子 徒士 伯楽	十五石三人	天明	浜ノ丁	10
18	三木 半太夫（安門）	初	祖三木郡平木城主 鉄砲薬込 鉄砲奉行 代々外記流砲術指南	百俵五人	慶安	－	10
	三木 弥太郎 嘉武	2	－	百俵	享保	浜ノ丁	10
	三木 伴太夫 嘉利（弥惣左衛門 彈蔵）	3	惣領組 留守居番組 奥横目 測量術伝え	五十俵四人	延享	浜ノ丁	10
19	国方 甚太夫	初	手代 寺社取次 留守居番組	－	－	－	10
	国方 甚太夫 (清助）	2	徒士小頭 留守居寄合並	八両四人	天明	－	10
20	国方 通丹	初	薬坊主格 奥医師針立	百俵四人	安永	浜ノ丁	8
	国方 通丹	?	茶坊主 薬坊主	三人	文政	－	3
	北一番丁 東*ら*						
21	鵜殿 長左衛門（九郎兵衛）	2	鎗奉行	二百五十石	享保	古馬場	10
	鵜殿 長左衛門（九郎兵衛）	3	横目 旗奉行 寺社奉行 馬廻番頭格 町奉行	二百五十石	延享	番町	10
	鵜殿 長左衛門（藤八 与山）	4	留守居番頭 隠居	二百五十石	天明	番町	10
22	浅見 五郎兵衛	2	高松 旗奉行	－	寛永	－	9・10
	浅見 五郎兵衛 (多仲)	4	留守居番頭 歩行頭 小姓組	二百五十石	享保	番町	10
	浅見 卯 (宇) 左衛門	5	旗奉行 使番	二百五十石	宝暦	－	10
	浅見 五郎兵衛	6	佐久間次郎太夫三男 書院番組 横目 町奉行	二百五十石	安永	番町	10
	浅見 (兵馬) 五郎兵衛 (宇平)	7	書院番組 大番組 門番頭 足軽頭	二百五十石	文化	天神前	8
23	松田 合左衛門	初	水戸 肥田和泉与力	－	－	－	10
	松田 合左衛門	初	高松 大番衆 使番	二百石	寛永	－	10
	松田 合左衛門	2	齋藤勘兵衛末子	－	享保	番町	10
	松田 合左衛門	3	小姓組 書院番組 旗奉行	二百石	延享	番町	10
	松田 合左衛門 (勘蔵)	4	使番 書院番組 足軽頭	二百石	宝暦	番町	10
	松田 合左衛門	5	馬廻番組 横目 町奉行 奉行 小姓頭	二百石	天明	内町	10
	松田 (合助）合左衛門	6	書院番組 使番 中寄合 足軽頭	二百石	文化	番町	8
	松田 合左衛門	7	小姓 徒頭 中寄合 書院番組	二百石	安政	－	7

表 22　武家屋敷井戸分布図記載の居住者（2）

No	居住者名	代	出自・職歴	俸禄	年号	居所	文献
24	篭屋敷						
25	御用地						
26	瀬尾 善兵衛 (儀兵衛)	2	代々町与力	－	享保	内町	8
	瀬尾 久右衛門 (安右衛門)	2	町与力	百石	延享	内町	10
	瀬尾 久右衛門	3	町与力	百石	天明	内町	8
	瀬尾 久右衛門 (安右衛門)	4	代官並町与力	百石	文化	内町	8
	瀬尾 久右衛門	?	町与力	百石	安政	内町	7
27	栗田（佐左衛門？）	初	水戸 栗田八兵衛弟 下館 彦坂織部与力	二百石	－	－	2・10
	栗田（佐左衛門？）	初	高松 大番衆 旗奉行 後西天皇即位参加	二百石	寛永	－	9
	栗田（佐左衛門？）	2	鎗奉行	－	享保	古馬場	10
	栗田（佐左衛門？）	3	元木孫右衛門弟与一郎養子不縁差戻	二百石	延享	古馬場	10
	栗田（佐左衛門？）	3	横目 書院番組小頭 馬廻番組小頭 奉行頭 旗奉行	〃	〃	〃	10
	栗田（佐左衛門？）七太夫	4	与一郎子 大番組	百石	安永	－	10
	栗田（佐左衛門？）三之助	5	養子実は佐左衛門子 馬廻番組 書院番組	百石	天明	古馬場	10
	栗田（佐左衛門？）(嘉伝次 清輔 三右衛門)	6	新居平八次男 書院番組	－	文化	天神前	10
	栗田（佐左衛門？）(七太夫 三右衛門)	7	大番組 書院番組	百石	文政	天神前	8
28	かもうす (加茂宇須) →蒲生佐左衛門？	2	門番頭	百俵五人	－	－	10
	かもうす (加茂宇須) →蒲生佐左衛門？	3	渡辺半右衛門次男 切支丹奉行	百俵五人	延享	－	10
	かもうす (加茂宇須) →蒲生佐左衛門？	4	馬廻番組 門番頭 小納戸	百俵五人	宝暦	浜ノ丁	10
	かもうす (加茂宇須) →蒲生佐左衛門？（喜太夫）	5	川西孫八次男 馬廻番組 膳番 足軽頭	百俵五人	天明	浜ノ丁	10
	かもうす (加茂宇須) →蒲生佐左衛門？ (与平太 喜太夫)	?	小納戸 膳番 門番頭	百俵四人	文化	内町	3

※表中の年号は、襲名もしくは藩士として禄高を召した年代を指す。

文献
1　『旧高松藩士族名簿（明治 6 年頃）』（香川県立図書館蔵）
2　梶原猪之松 1928『讃岐人名辞書』，高松製版印刷所
3　香川県立図書館 1961「文政年間讃岐高松藩分限録」『香川県立図書館郷土史料　第 2 集』
4　石清尾文化会 1965『天明 7 年高松藩士分限帳』
5　香川県教育委員会 1979「小神野夜話」『新編香川叢書　史料篇（一）』，新編香川叢書刊行企画委員会
6　香川県教育委員会 1979「古老伝旧記」『新編香川叢書　史料篇（一）』，新編香川叢書刊行企画委員会
7　柴田勒夫 1979『高松藩末期分限比較表（嘉永－慶応）』
8　柴田勒夫 1980『高松城下武家屋敷住人録上下（自享保中期－明治初年）』，五星文庫
9　香川県立文書館 1998『高松藩御令條之内書抜　上・下巻』
10　井下香泉 2002『讃岐松平藩士由緒録』，高松大学出版会

井戸系統の絵図には、天保十四年（1843）のものが残されており、おそらくは樋管や井戸の新設や廃絶に伴い、同様な絵図は一定期間ごとに新調されたと考えられる。

XⅢ期（18 世紀～ 19 世紀前半）の井戸

18 世紀～ 19 世紀前半をXⅢ期とする。本期に属する井戸として、38 遺跡 68 基を集成した。時期幅が若干異なるため、他の時期と直接比較することは困難だが、遺跡数、井戸検出数とも大きく増加したとみて大過はないだろう。また、出土遺物より詳細な時期が特定できず、近世とのみ判断される資料についても、その多くは本期に属する可能性は高い。さらに、先のXⅡ期が高松城下の資料に偏っていたのに対して、本期では農村部の資料が多数を占める点でも、多様な階層における井戸のあり方を考察する上で、充実した内容を有するものと評価される。

木組井戸としては、鴨部・川田遺跡Ａ区 SE01 の円形縦板組があるが、これは径約 1 ｍの大型の結桶を転用したものと考えられ、同様な例に、Ⅸ期の浜ノ町遺跡 SE403 例がある。通常、井戸に転用される結桶の口径は 0.6 ｍ前後であり、あえて大型品を利用したのであろう。鴨部・川田遺跡例では、上位に本県では確認例の少ない瓦組型を採用しており、上述したように、こうした型式の井戸は大阪府の野井戸にしばしば認められ、畿内地域からの技術導入により構築されたと考えられる。その他、後述するXⅣ期の八丁地遺跡 SE101 下層井戸の方形縦板組型 B3 類（註 1）も、奈良盆地で野井戸として普遍的な形態である（鐘方 2003）。鴨部・川田遺跡や八丁地遺跡例は、内井戸ではなく野井戸の可能性が高く、ため池や出水による灌漑が普遍的な本地域で、資料数は非常に限られるものの、一部に野井戸と考えられる井戸が導入されていることは事実であり、その経緯については今後の検討課題としたい。

一方、結桶を転用した井戸は、9 遺跡 16 基を集成し、上水井戸の可能性が高い高松城下を中心に、奥の坊遺跡群 SE51001、木太中村遺跡 SE3001、郡家田代遺跡 SE01、平池東遺跡 SE318 等のほか、詳細な時期を特定できないが北山下遺跡 SE001 や上一坊遺跡 SK04 などがあり、本期には農村部にも一定数普及していた可能性が考えられる。木太中村遺跡 SE1003 では、Ｂ型石組上位に結桶とみられる木製枠材の痕跡が認められ、石組上部が崩落し、その部分に結桶を設置した改修の可能性が考えられる。詳細な時期は不詳だが、井戸の敷設時期は本期前後の可能性を想定する。農村部でのこうした結桶組型井戸の導入には、富農層の間で都市部の上水井戸である結桶を、ステイタスシンボル的な意図をもって、積極的に導入しようとした可能性も考えられる。なお、高松城跡（北署）SE04 では、結桶の上位に後述するXⅣ期に出現する陶質枠が組まれていたが、これは本来上位の井戸枠も結桶であったものが、腐食等のため 19 世紀後半以降に陶質枠に置き換えられたと考えられ、井戸構築当初のものではないだろう。

また、同遺跡 SE03 では豊島石製の井桁が出土しており、井桁の構造が判明する良好な資料である。寛政 11 年（1799）に大坂で刊行された『日本山海名産図絵』には、「豊島石」として、「器物の大抵を山中に製して擔出せり／水筒、水走、火爐、一ツ竈などの類にて、格別大なる物ハなし。」と紹介する。「水筒（ゐづつ）」は井桁（井筒）のことと解される。また、既述した『守貞漫稿』に、「京坂井／地上ニ出ル井筒／俗ニ井戸側ト云／豊島石ノ全石ヲ／穿チ貫キテ制ス」とあり、豊島石製井桁が京・大坂などに広く流通・使用されていたことが知られる。調査資料では、17 世紀代には大坂城下町人地を中心に、豊島石製品の出土が知られ、井桁としては大坂城跡 12 次 SE114 出土の 18 世紀前半の資料が最も古いとされる（吉田 2015）。その他、兵庫

県赤穂城下町では、上水道の枡に豊島石製品が使用されていることが報告されている（赤穂市教育委員会 2007）。

石組井戸は、22 遺跡 27 基を集成し、数の上では結桶転用井戸を凌駕する。しかし、詳細に遺跡内容を確認すると、高松城下周辺での構築数は、高松城跡（東の丸）SE09 と浜ノ町遺跡 SE516 の２基のみであり、農村部での比重が圧倒的に高い。上述したように、農村部にも結桶井戸が構築されるものの、主体となるのは石組井戸であり、都市部と農村部で構築された井戸の型式が、鮮やかに相違する。農村部では上水道は整備されず、中世以来の伝統的な石組井戸が継続して構築されたことを示していよう。また、石組井戸の型式は、Ａ型井戸は金毘羅山遺跡Ⅰ区 SE01 と木太中村遺跡 SE1001 の２基のみであり、とくに金毘羅山遺跡例は裏込め土を多く伴いその点でＢ型に近い。農村部にもＢ型井戸が大きく普及した状況が読み取れ、とくに 18 世紀後半以降に井戸を所有する階層が、大きく拡大した可能性が考えられる。この時期には農村部にも貨幣経済が浸透し、結果として本百姓の間で階層分化が生じたことが背景として考えられる。地主層の間で、自らの屋敷地内に生活用水を確保するため、井戸が掘削されたのであろう。

素掘り井戸は、22 基集成され、内訳はＡ型６基、Ｂ型 16 基とＢ型が優勢である。

ⅩⅣ期（19 世紀中葉以降）の井戸

19 世紀中葉以降をⅩⅣ期とする。本期に属する井戸として、24 遺跡 60 基を集成した。うち高松城下の遺跡が 10 遺跡 32 遺跡と多数を占める。

本期を代表するのは、専用の土製井戸枠（陶質枠）の登場である。今回 41 基を集成し、出水の可能性の高いキモンドー遺跡 SE03、陶質枠の代わりに同様なサイズの土師質土器風呂を転用した木太中村遺跡 SE07 と SK18 を除き、石組の上位に陶質枠が使用されていた可能性の高い木太中村遺跡 SE4002 を加えると、陶質枠の使用頻度は７割を超える。非常に短期間で、各地域・各階層間に普及したことを読み取ることが可能だ。

陶質枠は、径 0.6 ～ 0.7 m、高さ 0.6 ～ 0.8 mの円筒形を呈し、口縁部は逆Ｌ字ないしＴ字状に肥厚して、口縁部下外面に１条の突帯が貼付され、上面に格子状などの線刻が施される。突帯は結桶の箍を模したものであり、大きさの点からも結桶を模倣したものであることは間違いない（乗松 2004）。出現時期は 19 世紀中葉以上に、細かく絞り込むことは現状では困難だが、高松城下のみならず農村部にも急速に普及する。胎土中に、角閃石や雲母粒を多量に含むことが特徴としてあり、高松市御厩周辺で焼成されたと考えられる。

結桶と比して耐久性や施工の容易さ、おそらくは結桶よりも安価であったと考えられること（註2）から、上述したように井戸枠材として地域を選ばず広く普及したと考えられる。最も後出する例として、陶質枠に昭和４年（1929）の新聞が巻き付けられていた木太中村遺跡 SE06 がある。

陶質枠が一般化するのは、大阪府大坂城下（大阪市文化財協会 2004 など）や堺環濠都市遺跡（堺市教育委員会 1989・1998 など）、奈良県秋篠・山陵遺跡（奈良大学文学部 1998）などでの、14 ～ 15 世紀代の土師質や瓦質のものが早い例で、これらの地域では 16 世紀代まで使用が確認できる。上述したように、その後大坂では瓦組型へと移行する。一方、北九州では福岡県野多目Ａ遺跡で 17 世紀前半代の土師質のものが出土している。近世の博多では、瓦組型の井戸が多く確認されており（例えば、福岡市教育委員会 1991・1993・2006・2009a・2009 b・2010 など）、野多目Ａ遺跡の陶質枠組型井戸も、堺や大坂より導入された可能性が高い。近世の素焼きの陶質枠は、福岡県筑後市水田焼で焼成されていたようだ。

同様な陶質枠は、本県以外に愛知県清州城下（愛知県埋蔵文化財センター 1995）や長野北浦遺跡（愛知県埋蔵文化財センター 2012）、広島県福山城下（福山市教育委員会 2007）、徳島県徳島城下（徳島市教育委員会 2009・2010）などにあり、いずれも近世末～近代の時期の遺構とされる。九州例以降の 17 世紀後半から 19 世紀前半の陶質枠組型井戸の動向については不詳であり、今後の課題としたい。

石組井戸は、高松城下で１例のほか、農村部で７例（うち３例は、上部に陶質枠組を構築する。）があり、不明の１例を除いていずれもＢ型である。上記した陶質枠組型の普及により、石組型は激減するようだ。川津昭和遺跡の３基の井戸はほぼ同じ構造を有し、石積みは板状の石材を谷積みとしており、近代以降の構築と考えられる。また、切石組がキモンドー遺跡にあり、県下では現状で唯一の調査例である。

４　三殿北遺跡の井戸の位置付け

以上、長々と県下で検出された古代以降の井戸について、分類を行い、時期ごとにその変遷と背景について若干の考察を行ってきた。時期的なあるいは地域的な資料の偏りは大きく、今後の資料の追加により、訂正や深化が見込まれるものと思う。

さて、本遺跡で検出された SE02 は、既述したように本地域の出現期の積み上げ式曲物組型井戸の１例として位置付けられる。同時期の曲物組型の遺跡として、小山・南谷遺跡と前田東・中村遺跡があり、いずれも遺構や出土遺物の内容から、郡領氏族層の経済・宗教的拠点としての性格が想定される。本遺跡も、両遺跡ほど明確ではないが、陶硯、律令祭祀具、緑釉陶器、鋳銅・製鉄関係遺物などの出土がみられ、官衙的な性格を認めることができよう。

また、本期には、組立て式縦板組型や積み上げ式横板組、乱積み式石組型などの構造の異なる井戸が構築されており、多様性が認められる。それには当然理由があるのであろうが、具体的な要因までには立ち入ることができなかった。系譜関係を詳細に検討すれば、見えてくる背景もあるのかもしれない。残された課題は大きい。

一方、SE01 は、19 世紀前葉の農村部における乱積み式石組型Ｂ型井戸として、最も普遍的な井戸型式が採用されている。

さて、高松市に限れば、大正 10 年（1921）の近代上水道の完成とその後の複数次にわたる拡張事業、及び昭和 11 年（1936）頃以降の下水道敷設工事により、井戸の利用は大きく低下し、江戸時代以降に整備された近世上水井戸は廃毀や改造する家が多くあったとされる（高松市水道局 1990）。農村部では、近世に築造された井戸を現在も使用しているところもあるだろうが、それは本来の使用形態とは大きく異なるものへと変化していよう。

人間の生命維持に必要な水の獲得方法は、上述したように香川県内を例としても、多くの画期を経て、近・現代には井戸というおそらくは 2,000 年以上にわたる長期に利用してきた構造物を放棄するに至った。さらにまた、新たな変化を迎えようとしているのかもしれない。

今回の検討では、井戸の構造的な側面について素描したに過ぎない。井戸の有する祭祀的な側面をはじめ、他地域との比較など、多くの課題は未検討のまま残されている。

本文註

1　その他にもⅩⅣ期の木太中村遺跡 SE2002 も、野井戸の可能性が考えら

れるが、詳細が不明なため断定はできない。

２　結桶や陶質枠の当時の価格差については不詳だが、江戸の町内会が宝永２年（1705）に火の用心として、水溜桶と手桶を入札注文した記録が残されている（小野編著 1979）。それによると、「水溜桶　差渡し二尺五寸／輪厚一寸、高さ三尺、底厚さ一寸五分、たが五筋、内二筋は組たが。／一つに付、十五匁二分づつ落札」したことが記され、この時に購入された水溜桶は計５個であった。大きさは井戸に使用されているものとほぼ同じと思われる。

３　浅見五郎兵衛の貼紙の下にも、別の貼紙の痕跡が認められ、さらに１人の人物が記載されていたようだ。

引用文献

石村真一 1997『桶・樽Ⅰ』，法政大学出版局

伊藤好一 2010『江戸上水道の歴史』，吉川弘文館

井上香泉訳・編 2002『讃岐松平藩士由緒録』，高松大学出版会

岩井宏實 1994『曲物』，法政大学出版局

宇野隆夫 1982「井戸考」『史林』第 65 巻第５号，

占部日出明 2011『高松藩藩士録　－藩士から牢人まで－』

大三輪龍彦 1989「井戸と水売り　－都市鎌倉の水事情－」『よみがえる中世３　武士の都鎌倉』，平凡社

岡田唯吉 1978「旧高松城下町西部地方ノ水道管発見ニ就テノ考察」『讃岐史談』上，歴史図書社

岡田文男 2002「長岡京の井戸の側板に用いられた古代の樽について」『田辺昭三先生古稀記念論文集』

小都隆 1979「草戸千軒の井戸」『考古学研究』第 26 巻第３号，考古学研究会

香川県立文書館 1999『香川県立文書館史料集２　高松藩御令條之内書抜下巻』

鐘方正樹 2003『井戸の考古学』，(株) 同成社

兼康保明 1980「井戸における斎串使用の一例　－滋賀県高島郡高島町鴨遺跡の井戸－」『古代研究』19，元興寺文化財研究所考古学研究室

亀井聡 2002「池島・福万寺遺跡における近現代の井戸」『大阪文化財論集Ⅱ』，財団法人大阪府文化財センター

川口宏海 1999「有岡城跡・伊丹郷町遺跡の井戸について」『史学論集　－佛教大学文学部史学科創設三十周年記念－』

神吉和夫 1985「高松水道の研究」『第５回日本土木史研究発表会論文集』，土木学会

北田裕行 2000「古代都城における井戸祭祀」『考古学研究』第 47 巻第１号，考古学研究会

久世康博 2001「井戸はどうして埋められたのか（序論）」『西田弘先生米寿記念論集　近江の考古と歴史』

久世康博 2001「井戸はどうして埋められたのか（石を入れる）」『考古学論集』第５集

久世康博 2002「井戸はどうして埋められたのか　－木を入れる－」『田辺昭三先生古稀記念論文集』

久保正弘 1993「横板組井戸について」『加茂遺跡』，社団法人石川県埋蔵文化財保存協会

蔵本晋司 2017「古代の多肥松林遺跡」『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　多肥松林遺跡』，香川県教育委員会

黒崎直 1976「平城宮の井戸」『月刊文化財』昭和 51 年４月号

黒崎直 1995「藤原宮の井戸」『文化財論叢Ⅱ』，同朋舎

小池伸彦 1996「井戸と釣瓶」『考古学による日本歴史 15　家族と住まい』

河野真知郎 1989「井戸を埋める儀礼」『よみがえる中世３　武士の都鎌倉』，平凡社

小林善也 2002「山口県の井戸跡についての覚書」『陶塤』第 14 号，財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター

鶴見和夫 1992「井戸をめぐる祭祀　－地域的事例の検討から－」『考古学雑誌』第 77 巻第４号

斎木秀雄 1989「井戸の発掘」『よみがえる中世３　武士の都鎌倉』，平凡社

佐藤竜馬 1993「出水状遺構について」『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成４年度，香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

篠原豊一 1991「平城京の井戸とその祭祀」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1990』，奈良市教育委員会

渋澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編 1984『日本常民生活絵引』第２巻，平凡社

鈴木孝之 1990「古代～中近世の井戸跡について（１）　－埼玉県における形態分類を中心として－」『研究紀要』第７号，財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

鈴木孝之 1991「石組みの井戸跡について　－古代～中近世の井戸跡について（２）－」『埼玉考古学論集　－設立 10 周年記念論文集－』，財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

鈴木正貴 2000a「出土遺物からみた結物」『桶と樽　脇役の日本史』，法政大学出版局

鈴木正貴 2000b「井戸桶と早桶」『桶と樽　脇役の日本史』，法政大学出版局

高松市水道局水道史編纂室 1990『高松市水道史』

徳網克己 1995「井戸の埋没について」『平成５年度　中主町内遺跡発掘調査年報』，中主町教育委員会

戸谷邦隆 1999「「掘り方」からみた中近世の石組み井戸」『富山考古学研究』第２号

中島弘二 2003「愛媛県内の井戸遺構について（１）　－集成･分類を中心に－」『紀要愛媛』第３号，財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

成田寿一郎 1990『日本木工技術史の研究』法政大学出版局

新村出編 2008『広辞苑』第六版，岩波書店

波多野純 1984「讃州高松城下町における高松水道について　－都市施設としての用水を通して見た城下町設計方法の研究９－」『昭和 59 年度大会（関東）学術講演梗概集＜計画系＞』，社団法人日本建築学会

堀大介 1999「井戸の成立とその背景」『古代学研究』146 号

水谷豊 1999「石組井戸と木組井戸　－三重県内の資料から見たその使い分け－」『研究紀要』第８号，三重県埋蔵文化財センター

山本博 1977「中世の井戸の成立と構造」『歴史手帖』第５巻第４号

横田賢次郎 1977「大宰府検出の井戸　－とくに形態分類を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』３，九州歴史資料館

吉田悠歩 2015「大阪市内の火山礫凝灰岩Ｂ類製石製品」『大阪市北区中之島蔵屋敷跡発掘調査報告Ⅱ』，公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所

発掘調査報告書は、巻末に一括して掲載する。

第４節　三殿北遺跡出土の陶硯について

１　はじめに

本遺跡からは、11 点の陶硯が出土した。うち１点は須恵器杯（**304**）を転用した杯蓋硯であり、残りはすべて須恵器猿面硯（**360** ～ **362**・**414**・**471** ～ **476**）である。前者は県内でも出土例の乏しい朱墨硯であり、後者も讃岐国府跡や讃岐国分寺跡に次いで３例目の出土となる。本遺跡が、古代の地方末端の文書行政に関与した可能性を具体的に示唆する資料であり、かつ類例の乏しい特殊な資料として評価される。

本遺跡の性格を明らかにするためにも、以下では須恵器杯蓋硯について検討を行うこととしたい。なお、猿面硯については別稿を用意している。

２　陶硯の分類

陶硯については、長い研究の歴史があり、先学諸氏により詳細な分類や編年がなされている。しかし、各分類案により、細かな点でその基準や用語等が相違し、確立したものではないのが現状のようである。そもそも円面硯などを中心に個体差の顕著な遺物であり、系統立った細かな分類には、やや不向きな面があるのは確かであろう。以下では、香川県内出土資料を基に、陶硯を円面硯、風字硯、杯蓋硯、猿面硯、方形硯、転用硯の６種類に大別するにとどめたい。このうち小稿に関係するのは、円面硯と杯蓋硯、猿面硯、転用硯の４種類である。

円面硯のうち、最も普遍的に出土するのは圏足硯で , 獣脚硯を少数認める。風字硯は、底面に柱状もしくは板状の脚部を有する机上で使用する硯で、単面のものと硯面中央に堤を貼付して硯面を左右に分割する二面硯がある。杯蓋硯は、一般に須恵器杯や蓋を硯に転用した転用硯として分類される場合が多いが、ここでは転用硯から独立して分類する（註1）。個体差が大きく、装飾性の高い個人使用の特注品と考えられる円面硯を、補

表 23　県内出土杯蓋硯（１）

遺跡名	所在地	遺物番号	遺構名	層位	遺物種類	硯面部位	時期	備考	報告書
仲戸東遺跡	東かがわ市川東	308	SR04		須恵器・皿	内面	９世紀後半？		香川県教育委員会ほか 2016a
小僧遺跡	東かがわ市川東	40	Ⅰ区 SR02	中層	須恵器・杯	内面	９世紀中葉？		香川県教育委員会 2018c
西村遺跡	東かがわ市西村	579	１区包含層		須恵器・杯	内面	９世紀中葉		香川県教育委員会ほか 2019a
		580	１区包含層		須恵器・杯	内面	９世紀後半		
三殿北遺跡	東かがわ市三殿	304	SD161	中層	須恵器・杯	内面	９世紀後半	朱墨（水銀朱）	本書
坪井遺跡	東かがわ市中山	186	SD41		須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉	マメツ痕乏しい	香川県教育委員会ほか 2002b
		251	SD44		須恵器・杯蓋	内面	８世紀中葉		
		630	SR01		須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉	マメツ痕乏しい	
		665	SR03		須恵器・杯	内面	８世紀中葉？		
		685	SR03		須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉？		
南天枝遺跡	木田郡三木町田中	79	SP026		須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉		香川県教育委員会ほか 2003e
小山・南谷遺跡	高松市新田町	8	SE701	上層	須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉		香川県教育委員会ほか 1997d
新田本村遺跡	高松市新田町	116	SD1006	上層	須恵器・杯？	内面	８世紀前葉？	大型杯か？	高松市教育委員会 2006a
		1305	３工区包含層		須恵器・杯	内面	９世紀中葉？		
前田東・中村遺跡	高松市前田東町	580	G 区 SR02		須恵器・杯蓋	内面	モノ見ないとわからない		香川県教育委員会ほか 1995b
		1015	L ③ SE01		須恵器・皿	内外面	９世紀後葉	朱墨	香川県教育委員会ほか 2005a
		1024	L ③ SE01		須恵器・杯	内外面	９世紀後葉		
浴・長池遺跡	高松市林町	第 112 図 20	２・４区 SR01 内水田		須恵器・杯	内面	９世紀前半		高松市教育委員会ほか 1993
上林遺跡	高松市上林町	359	包含層等		須恵器・杯蓋	内面	９世紀中葉		香川県教育委員会 2019c
多肥松林遺跡	高松市多肥上町	151	SR03		須恵器・皿	内面	９世紀後半		香川県教育委員会 2016b
		156	SR03		須恵器・皿	内面	９世紀後半		香川県教育委員会 2017d
		231	SR01	最上層	須恵器・杯	内面	９世紀中葉？		
		245	SR01	最上層	須恵器・杯	内面	８世紀末～９世紀前葉？		
讃岐国分寺跡	高松市国分寺町国分	83051	SK5803	第４層	須恵器・杯		８世紀中葉？	朱墨？（外面水銀朱？内面ベンガラ？）付着、硯面部が出土していないため、硯とは断定できない	高松市教育委員会 2019
		85012	礎石７- ロ		須恵器・杯蓋	内面	９世紀中葉		
		86009	SB6101	P14 掘形	須恵器・杯蓋	内面	８世紀末～９世紀前葉	マメツ痕乏しい	
讃岐国府跡	坂出市府中町本村	図 15-331	段状遺構	８～６層	須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉		香川県教育委員会 2016d
		図 15-332	段状遺構	８～６層	須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉		
		図 15-333	段状遺構	８～６層	須恵器・皿	内面	８世紀後葉		
		図 17-375	段状遺構	５層	須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉		
		図 19-632	包含層	不明	須恵器・杯蓋	内面	９世紀中葉		
		図 21-6	SD78001		須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 27-11	包含層	３層	須恵器・杯	内面	８世紀後葉？		
		図 32-101	包含層	６層	灰釉陶器・碗	内面	10 世紀	墨・朱墨（ベンガラ？）付着	
		図 33-122	包含層	６層	須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉		
		図 33-163	包含層	７層	須恵器・杯	内・外底面	８世紀中葉？		
		図 33-164	包含層	７層	須恵器・杯蓋	内面	９世紀中葉		
		図 41-311	SP79112		須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 32-156	29-2Tr	５層	須恵器・杯蓋	内面	９世紀中葉？		香川県教育委員会 2019e
		図 37-223	SX2010		須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉？		
		図 53-23	30-1Tr	２層	須恵器・杯	外底面	９世紀中葉？		
		図 53-24	30-1Tr	２層	須恵器・皿	内面	不明		
		図 53-26	30-1Tr	２層	須恵器・皿	内面	不明		
		図 54-43	30-1Tr	３層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 55-88	30-1Tr	遺構面	須恵器・杯蓋	内面	８世紀末～９世紀前葉		
		図 56-120	SX1054（低地帯整地土）	４層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 56-121	SX1054（低地帯整地土）	４層	須恵器・杯蓋	内面	９世紀中葉？		
		図 67-215	SP1057		須恵器・皿	内面	不明		
		図 68-262	SD1002		須恵器・杯蓋	内面	８世紀末～９世紀前葉		
		図 72-305	SD1040		須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉？		
		図 82-382	30-3Tr	２層	灰釉陶器・碗	内面	９世紀後半	朱墨（水銀朱）	
		図 87-11	31-1Tr	２層	須恵器・杯	内面	９世紀中葉？		
		図 87-12	31-1Tr	２層	須恵器・皿	内面	不明		
		図 88-38	31-5Tr	遺構面	須恵器・杯蓋	内面	９世紀中葉		
		図 100-121	SD1001		須恵器・杯蓋	内面	８世紀中葉		

表 24　県内出土杯蓋硯（2）

遺跡名	所在地	遺物番号	遺構名	層位	遺物種類	硯面部位	時期	備考	報告書
讃岐国府跡	坂出市府中町本村	図 107-173	SX1007	下層	須恵器・杯蓋	内面	不明		香川県教育委員会 2019e
		図 121-77	32-4Tr	3 層	須恵器・杯	内面	8 世紀中葉？		
		図 136-147	SK1003 北半	下位	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 152-305	SK4002	上層	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀中葉？		
		図 153-336	SK4002	中層	須恵器・杯蓋		8 世紀後葉？		
		図 154-376	SK4002	下層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 157-440	SD4009		須恵器・杯	内面	8 世紀中葉？	朱墨（ベンガラ）	
		図 158-441	SD4009		須恵器・杯蓋	内面	8 世紀末～ 9 世紀前葉		
		図 161-478	SX5001	上層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 167-49	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 167-50	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀後葉		
		図 167-51	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀後葉		
		図 167-52	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 167-53	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 167-54	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 167-55	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀末～ 9 世紀前葉？		
		図 167-56	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀末～ 9 世紀前葉	朱墨（ベンガラ）	
		図 167-57	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 167-58	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀末～ 9 世紀前葉？		
		図 167-59	33-1Tr	3 層	須恵器・杯	内面	9 世紀後半？		
		図 167-60	33-1Tr	3 層	須恵器・杯	内面	9 世紀中葉		
		図 167-61	33-1Tr	3 層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 167-62	33-1Tr_	3 層	須恵器・皿	内面	不明		
		図 171-132	33-1Tr	2b 層	須恵器・杯	内面	9 世紀中葉		
		図 189-216	SK1009	上位	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀後葉		
		図 189-217	SK1009	上位	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀後葉		
		図 189-218	SK1009	上位	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀後葉？	内面に墨書？	
		図 197-290	SD1001		須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 197-291	SD1001		須恵器・杯蓋	内面	8 世紀末～ 9 世紀前葉？		
		図 200-303	33-2Tr	2 層・遺構面	須恵器・皿	内面	不明		
		図 209-323	SP2016		須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 227-434	SD2100	下層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 246-15	34-1Tr	遺構面土	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀中葉？		
		図 246-17	34-1Tr	遺構面土	須恵器・杯蓋？	内面	不明		
		図 246-18	34-1Tr	遺構面土	須恵器・杯	内面	不明		
		図 246-19	34-1Tr	遺構面土	須恵器・杯？	内面	不明		
		図 252-65	SP1030	抜き取り上層	須恵器・杯	内面	8 世紀中葉？	朱墨（水銀朱？）、筆漬杯か？	
		図 274-229	SX1002	土器溜まり 3-4	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 282-313	34-2Tr　精査		須恵器・杯蓋	内面	8 世紀中葉		
		図 282-332	34-2Tr　機械掘削	3 層上位	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀末～ 9 世紀前葉？		
		図 294-475	SP2016 全体掘り下げ		須恵器・杯	内面	8 世紀前葉？	朱墨（ベンガラ）、筆漬杯か？	
		図 302-511	SP2011	裏込め土	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 312-623	SP4006	抜き取り掘り下げ	須恵器・杯	内面	不明		
		図 323-710	SD2132 ①		須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 329-798	SK4002	崩落土埋土	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀後葉		
		図 357-1104	SK3009		須恵器・杯	内面	不明	朱墨(ベンガラ？)	
		図 369-1270	SX3001	下層	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 373-34	35-1Tr_ 遺構面掘り下げ	3 層下位	須恵器・杯蓋	内面	不明		
		図 382-81	SP1021		須恵器・杯	内面	不明	報告書では赤色顔料付着とするが確認できない	
		図 396-203	SX1138B	1 層（最上層・瓦溜り）	須恵器・杯蓋	内面	8 世紀後葉？		
		図 399-258	SX1138B　トレンチ 1	10 層上位	須恵器・杯	内面	不明		

表 25　県内出土杯蓋硯（３）

遺跡名	所在地	遺物番号	遺構名	層位	遺物種類	硯面部位	時期	備考	報告書
下川津遺跡	坂出市川津町	第 448 図 25	SE Ⅲ 02	曲物内	須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉		香川県教育委員会ほか 1990a
北岸南遺跡	丸亀市飯山町東坂元	61	包含層Ⅱ		須恵器・杯	内面	９世紀後半～ 10 世紀前葉		香川県教育委員会 2017b
田村遺跡	丸亀市田村町	95	SD16 瓦堆積		須恵器・杯蓋	内面	８世紀後葉		丸亀市教育委員会ほか 2002
金蔵寺下所遺跡	善通寺市金蔵寺町	264	SD10		須恵器・杯蓋	内面	８世紀末～９世紀前葉		香川県教育委員会ほか 1994a
旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	1183	A 区 SD01		須恵器・杯蓋		８世紀後葉		香川県教育委員会ほか 2011
		1378	B 区 SD17		須恵器・杯	内面	８世紀中葉？		
		図 784-7	V 区 SK6001		須恵器・皿	内面	８世紀末～９世紀前葉		香川県教育委員会ほか 2013
生野南口遺跡	善通寺市生野町	1	SP01		須恵器・杯蓋	内面	８世紀前葉～中葉		香川県教育委員会 2003g
本村中遺跡	三豊市詫間町詫間	1040	SR201		須恵器・皿	内面	８世紀中葉～後葉？		香川県教育委員会 2017c

完する硯と位置付けたい。猿面硯は、底面に脚を持たず、手持ちもしくは専用の木製容器に嵌め込んで使用する。硯面に螺旋状の線刻や当て具痕を有し、周囲をケズリ調整等により加工して、当初より硯として製作されたものを分類する(註２)。転用硯は、壺や甕の胴部を打ち欠いて硯としたもので、破断面に特別な加工を施さないものを分類する。

なお、硯の各部名称や用語は「陶硯関係文献目録」（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 1983）に従う。

２　須恵器杯蓋硯

本遺跡の須恵器杯蓋硯は、中世前期に開削された灌漑水路 SD161 中層より出土しており、共伴する遺物の年代は 12 世紀後半～ 13 世紀前半を示す。須恵器杯自体の製作は９世紀後半代と考えられ、硯の耐用年数の具体的な数字は明らかではないが、半世紀を超える長期の使用は想像しがたく、混入の可能性が高い。

本文中にも記したとおり、硯は破片となり、大きく欠損するものの、ほぼ全形を窺うことが可能で、内面底部を中心に墨痕を有し、体部下端部にも墨が付着することから、完形の状態で硯に転用されたと考えられる。破断面の観察からは、使用中に破損したため、投棄した可能性が想像される。口径 13.7㎝、深さ 3.5㎝程度に復元され、墨を磨るのに支障はなく、実際に内底面は磨滅が顕著に認められた。墨は朱墨であり、原料には水銀朱が用いられていたことが、第４章に記載した理化学的分析から明らかとなっている。

表 22 ～ 25 に、香川県内より出土した杯蓋硯を集成した。既刊の報告書に掲載された資料を集成したが、見落とした資料も存在すると思われる。また、注意深く観察しない限り、硯と認識できない資料も多いと考えられ、実数はさらに増えることは容易に想像される。今回 21 遺跡から 117 点を集計した。一見して明らかなように、資料の大半は讃岐国府跡出土資料で 82 点、全出土資料の約７割を占める。他の遺跡では、多くて多肥松林遺跡や坪井遺跡(註３)の５点が最高で、本遺跡を含め１点のみ出土した遺跡が多く、表には現れないが圧倒的多数を占めるのは出土が確認できない遺跡である。出土資料の多寡、偏在については、主体となる遺跡の時期、調査面積、調査精度、担当者の認識など、様々な要因が想像され、必ずしも実態を反映していない可能性は高い。しかし、不掲載を含めた膨大な資料を、再度チェックすることは現実的に不可能に近く、現状では集成資料を基に検討を行うこととしたい。

出土遺跡は、官衙もしくは官衙関連遺跡（坪井、小山・南谷、新田本村、前田東・中村、多肥松林、讃岐国府跡、下川津、金蔵寺下所、生野南口）、寺院もしくは寺院近接地（讃岐国分寺跡、田村）、村落・その他（仲戸東、小僧、西村、三殿北、南天枝、谷・長池、上林、北岸南、旧練兵場、本村中）に分類される。村落・その他に属する遺跡には、おそらくは調査面積や調査位置の関係で、当該期の遺構内容や出土遺物が乏しく、遺跡の評価を行えない遺跡が多く含まれ、将来調査が進展し遺跡内容が明らかとなれば、官衙などに再分類される可能性も考えられる。

出土遺構も、建物柱穴、土坑、井戸、溝、自然河川、包含層などと多彩で、多くは小片化していることから、使用時に破損したものを中心として廃棄したことが想像され、また、建物柱穴や井戸出土例にその可能性が想定される資料が含まれる可能性はあるものの、いずれも小片化していることから、人為的に何らかの目的をもって確実に埋納したと考えられる例は現状では皆無である。

器種別では、杯 30 点（約 26%）、杯蓋 70 点（約 60%）、皿 15 点（約 13%）、碗２点（約１％）と、蓋が最も多く過半数以上を占める。これは、大宰府政庁でのあり方とも共通する（小田 2018）。また、宝亀三年（772）三月三十日「奉写一切経所告朔解」（正倉院文書続修別集 13『大日本古文書』（編年文書）６巻）などには、奉写一切経所より「硯幷筆漬料」として「陶碗廿合」を請求したことがみえる。つまり、「合」とあることから、杯と蓋一組セットで「硯」と「筆漬」として扱われたと考えられ、形状より判断して、蓋が「杯蓋硯」、杯が「筆漬杯」となる（古尾谷 2004）。つまり、古代において蓋を硯として使用する慣習が広く共有されていたことを示しており、実際の出土例とも整合的である。蓋天井部の摘みを打ち欠いて硯として利用している資料もあるが、摘みを残したまま硯として使用したものは、杯の上に置き重ねて使用したことが想像され、実際に蓋を硯とした出土資料が多いことは、セットで使用されていた可能性を示しているものと考えられる。

杯蓋硯は、既述したように長期の使用は想定できないことから、製作時の年代を基準に考えるなら、８世紀前葉～ 10 世紀前葉までの期間が想定され、そのうち９世紀前半代までが多数を占める。これは円面硯の使用期間に近く、既述した円面硯を補完する硯とした想定の根拠の一つでもある。

３　朱墨硯

次に、本遺跡の杯蓋硯にみられる朱墨に注目したい。現在、朱墨を用いた硯は、香川県内からは本遺跡例を含め 13 点の資料が出土している（表 23・24）。2003 年の集成での多賀城跡 50 点（生田 2003）、2018 年での大宰府政庁２点（小田 2018）などと、遺跡による出土数の多寡は大きく、それは遺跡内での朱墨の使用場所と直接関係するとみるのが自然であろう。この点は、後述したい。

表 26　県内出土朱墨硯

遺跡名	所在地	遺物番号	遺構名	層位	硯種	硯面部位	時期	備考	報告書
三殿北遺跡	東かがわ市三殿	304	SD161	中層	須恵器･杯蓋硯（杯）	内面	9 世紀後半	朱墨（水銀朱）	本書
前田東・中村遺跡	高松市前田東町	1015	L ③ SE01		須恵器･杯蓋硯（皿）	内外面	9 世紀後葉	朱墨	香川県教育委員会ほか 2005a
讃岐国分寺跡	高松市国分寺町国分	83051	SK5803	第 4 層	須恵器･杯蓋硯（杯）	内外面	8 世紀中葉？	朱墨？（外面水銀朱？内面ベンガラ？）付着、底部が出土していないため、硯とは断定できない	高松市教育委員会 2019
		85557		第 2 層	須恵器・猿面硯	－	8 世紀～ 17 世紀	朱墨？（ベンガラ？）	
讃岐国府跡	坂出市府中町本村	図 32-101	包含層	6 層	灰釉陶器・杯蓋硯（碗）	内面	10 世紀	墨・朱墨（ベンガラ？）付着	香川県教育委員会 2016d
		図 30-64	29-1Tr	5 層	須恵器･転用硯（甕）	体部内面	－	朱墨（水銀朱？）、小片のため硯と断定困難	香川県教育委員会 2019e
		図 82-382	30-3Tr	2 層	灰釉陶器・杯蓋硯（碗）	内面	9 世紀後半	朱墨（水銀朱）	
		図 157-440	SD4009		須恵器･杯蓋硯（杯）	内面	8 世紀中葉？	朱墨（ベンガラ）	
		図 167-56	33-1Tr	33-1Tr	須恵器・杯蓋硯（杯蓋）	内面	8 世紀末～ 9 世紀前葉	朱墨（ベンガラ）	
		図 252-65	SP1030	抜き取り上層	須恵器･杯蓋硯（杯）	内面	8 世紀中葉？	朱墨（水銀朱？）、筆漬杯か？	
		図 294-475	SP2016	全体掘り下げ	須恵器･杯蓋硯（杯）	内面	8 世紀前葉？	朱墨（ベンガラ）、筆漬杯か？	
		図 329-835	SK2002		須恵器･転用硯（甕）	体部内面	10 世紀中葉	朱墨（水銀朱？）	
		図 357-1104	SK3009		須恵器･杯蓋硯（杯）	内面	不明	朱墨（ベンガラ？）	

香川県内出土例は、いずれも杯蓋硯を主体に猿面硯と転用硯のみで、他の硯種は認められない。出土遺跡は、讃岐国府跡９点（杯蓋硯７点・転用硯２点）(註4)、讃岐国分寺跡２点（杯蓋硯１点・猿面硯１点）(註5)、前田東・中村遺跡１点（杯蓋硯）、三殿北遺跡１点（杯蓋硯）である。国府跡出土数が突出して多い点は、杯蓋硯の出土傾向と比例し、本遺跡を除くと、国・郡関連の官衙（関連施設）・寺院から出土しているといえる。

硯種は、須恵器杯が最も多く６点、灰釉陶器碗と転用硯が各２点、須恵器杯蓋と同皿、猿面硯が各１点である。定形硯で朱墨を使用した硯は皆無で、後述するように宮城県多賀城跡の様相（生田 2003）と同じとみてよい。杯には、底部のマメツ痕が乏しく、筆漬杯の可能性のあるものが少数だが含まれる。朱墨の原料となる赤色顔料には水銀朱とベンガラの２種があり、理化学的な分析により原料が確定しているものは水銀朱３点、ベンガラ３点のみで、半数以上の資料は分析が実施されていない。表中には、筆者の肉眼観察の結果を「？」付きで記載したが、理化学的な分析を経たものではないため、誤認の可能性もある。全体的な傾向としては、水銀朱とベンガラのどちらかに大きく偏ることはないように思われる。おそらく水銀朱を原料とする朱墨と、ベンガラを原料とするそれとでは、色調が大きく異なっていた可能性は高く、何らかの使い分けがなされていた可能性も考えられる。その可能性については、理化学的な分析が不足しており、判断は保留したい。なお、大宰府においても、ベンガラを原料とした朱墨硯が出土しており（小田 2018）、水銀朱に限らず、ベンガラも朱墨として広く使用されていた可能性は高い。一般にベンガラより水銀朱が希少な鉱物であることを考慮するなら、本遺跡出土の朱墨に水銀朱が使用されていた意味は重要であろう。

上述したように、多賀城跡出土の朱墨硯は、政庁地区を中心に出土しており、「各曹司地区から提出された文書を繕写・勘書したり、検校する作業がおこなわれていたことを反映」し、朱墨硯には定形硯の利用率は低く、杯蓋硯や転用硯が多く利用されたことが明らかにされている（生田 2003）。また、大宰府出土の陶硯について、政庁跡を含めた各官衙跡出土の陶硯について詳細な検討を行った小田和利氏は、「定形硯は使用する場所及び人物が限られた特別な物品であり、定形硯を使用できる人物と転用硯しか使用できない人物とには、格差の存在が認められる」とする（小田 2018）。

讃岐国府跡では、開法寺東方地区及びその隣接区を中心に朱墨硯が出土している。開法寺東方地区で朱墨硯が出土するのは、概ね８世紀前葉から９世紀後葉とみられ、報告書では３期から4-2 期とされる時期に該当する。３期には周辺で鍛錬鍛冶や鋳銅作業が行われた金属加工の作業空間を含む区域と考えられており、４期には計画的に配置された大型建物群が建てられ、長期にわたりその建物配置が維持されるなど、３期から４期にかけて当該区の土地利用には､大きな変化が認められるようだ（松本 2019）。当該区の陶硯の硯種別の出土点数は、円面硯 14 点に対して、杯蓋硯 63 点、転用硯７点を数え、各硯の使用期間の幅を考慮する必要があるものの、円面硯の出土頻度は概ね 17% を占めるに過ぎない。大型建物群が８世紀後葉以降配置されるものの、出土陶硯からみると、本地区でもっぱら文書行政を担っていたのは、雑任と呼ばれた下級の実務官吏であったと思われる。一方、讃岐国分寺跡では、寺域北東部の築地と重複する土坑より１点、僧房跡の包含層より１点がそれぞれ出土している。出土点数が少ないため、評価は困難だが、後者は猿面硯で、僧房内で使用された可能性が高いと考えられる。前田東・中村遺跡では、調査区中央部西側の９～ 10 世紀代の建物群が分布するエリア周辺の井戸から１点出土している。本遺跡は、郡領クラスの氏族の行政・宗教的な拠点と評価され（蔵本 2017）、その下で文書行政の実務を担った下級の郡雑任などの存在が想定される。

4　三殿北遺跡の位置

上述した検討より、９世紀後半、本遺跡でも下級の実務官吏が、物品管理の検校などに携わっていた可能性が想定される。しかしながら、遺跡の情報量が乏しく、これ以上踏み込んだ具体的な遺跡の様相を明らかにはできない。

９世紀後半以降郡衙遺跡が消滅していくなかで、「上野国交替実録帳」に記載されているように、正倉や正倉別院などの郡衙出先施設の一部は、11 世紀前半にも存在していた。郡衙出先

施設の機能には、「物資収納・保管・管理」、「徴税実務」、「交通施設」、「物品製作」があり、郷長や郡雑任などが郡司の指揮下に郡衙機構の機能の一部を分掌した場であったとされる（山中 1998）。

繰り返すように、三殿北遺跡の調査内容から、遺跡の性格を評価することはかなり困難な作業である。しかし、上述した出土遺物の評価や、前節に述べた製鉄施設の可能性などを踏まえるなら、本遺跡が９世紀後半以降、大内郡衙の出先施設として成立・経営されていた可能性は高いと考えられるのではなかろうか。

本文註

1　文献史料にみえる「杯蓋硯（硯）」が、須恵器杯や杯蓋を硯などとして使用したものであることに異論はない（古尾谷 2004 等）。字義通りに解釈すれば杯と杯蓋であるが、同じ供膳具である皿や碗も、杯と同様に平坦な机上での使用が想定され、多くは内面見込み部分を硯面として利用している点で共通し、杯蓋硯に含めて呼称されていた可能性は高いと考え、集成に含めた。碗は、灰釉陶器にしか例がなく、具体的な出土例も讃岐国府跡にみられるのみで、やや特殊な位置付けではある。また、文献上に「筆洗杯」や「筆漬杯」と記されている筆を洗う杯または墨入れとして用いられた杯（古尾谷 2004）も、厳密には硯ではないが、杯蓋硯に含めた。これらは、硯面に墨の付着が認められるものの、墨をすった痕跡が認められない点で硯とは区別可能と思われる。

2　楢崎彰一氏は、猿面硯に無脚のものと有脚のものの２者が存在することを指摘する（楢崎 1982）が、本遺跡例を含めて、脚を有する確実な猿面硯は県内では出土していない。

3　坪井遺跡例など、表中にも記載したとおり、一部に摩滅痕の乏しい資料もあり、すべてを硯としてよいかは疑問である。

4　報告書では、SP1021 出土資料（図 382-91）に赤色顔料の付着が記録されている。しかし、実際に観察した結果、顔料の付着が確認できなかったことから、今回の集計からは除外した。また、本例が筆者の誤認としても、論旨に大きな影響はないと思われる。

5　杯蓋硯としたSK5803 第４層出土資料（83051）は、口縁部のみの小片で、硯面部が出土していないため、厳密には硯とは断定できない。須恵器杯に赤色顔料が付着する可能性が最も高いのは、朱墨硯と思われることから、集計に含めた。

引用・参考文献

生田和宏 2003「城柵官衙遺跡における陶硯の様相　－多賀城跡を中心として－」『古代の陶硯をめぐる諸問題　－地方における文書行政をめぐって－』，独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

小田和利 2018「大宰府出土の陶硯について」『大宰府の研究』，高志書院

片桐孝浩 1995「香川県出土古代陶硯についての一考察」『香川考古』第４号，香川考古刊行会

蔵本晋司 2017「古代の多肥松林遺跡」『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　多肥松林遺跡』，香川県教育委員会

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 1983「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』41

楢崎彰一 1982「日本古代の陶硯　－とくに分類について－」『小林行雄博士古稀記念論文集　考古学論考』，平凡社

古尾谷知浩 2004「杯蓋硯考　－「転用」概念の再検討－」『名古屋大学文学部研究論集．史学』50

松本和彦 2019「讃岐国府跡跡の検討」『讃岐国府跡』２，香川県教育委員会

森浩一 1968「南海道の古代窯業遺跡とその問題」『日本歴史』第 237 号，日本歴史学会

森下英治 2019「特殊遺構・遺物の検討」『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　西村遺跡』，香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局

発掘調査報告書

【愛知県】

財団法人愛知県埋蔵文化財センター『清州城下町遺跡Ⅴ』

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2012『長野北浦遺跡・塔の越遺跡』

【愛媛県】

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000『史跡「松山城跡」内県民館跡地　－愛媛県美術館の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』

【大阪府】

財団法人大阪市文化財協会 2003『広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅰ　大阪市教育委員会による大阪市立近代美術館（仮称）建設工事に伴う発掘調査報告書』

財団法人大阪市文化財協会 2004『大坂城下町跡Ⅱ』

財団法人大阪市文化財協会 2006『堂島蔵屋敷跡Ⅱ　福島１丁目所在遺跡発掘調査報告書』

堺市教育委員会 1989『堺環濠都市遺跡発掘調査報告　－大町東１丁　SKT112 地点－』

堺市教育委員会 1998『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告　－ SKT590 地点・材木町東１丁－、－ SKT573 地点・大町西１丁－』

【岡山県】

中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会 1998『岡山城二の丸跡　中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告』

【香川県】

香川県教育委員会 1982『西村遺跡Ⅲ　－国道 32 号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査－』

香川県教育委員会 1987 a『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』

香川県教育委員会・日本道路公団 1987b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　中村遺跡・乾遺跡・上一坊遺跡』

香川県教育委員会・日本道路公団 1987c『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　大門遺跡・矢ノ岡遺跡・利生寺遺跡・利生寺古墳・北条遺跡・道免窯跡』

香川県教育委員会・日本道路公団 1987d『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　矢ノ塚遺跡』

香川県教育委員会・日本道路公団 1988『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　石田遺跡・長砂古遺跡・柞田八丁遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団 1990 a『瀬戸大橋道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1990b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊　一の谷遺跡群』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1990c『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第８冊　延命遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1990d『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第９冊　永井遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1992 a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 11 冊　三条番ノ原遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1992b『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　東山崎・水田遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1993 a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 12 冊　郡家一里屋遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1993b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 13 冊　郡家原遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1994a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 10 冊　金蔵寺下所遺跡・西碑殿遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1994b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 14 冊　川津中塚遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1994c『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1995a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 15 冊　龍川四条遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1995b『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　前田東・中村遺跡』

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1995c『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 5 冊　六条・上所遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1996a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 21 冊　川津下樋遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1996b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 22 冊　川西北・七条Ⅱ遺跡、川西北・鍛冶屋遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1996c『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 23 冊　龍川五条遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1996d『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 24 冊　郡家田代遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社 1996e『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　空港跡地遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1997a『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 7 冊　鴨部・川田遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省中国地方建設局 1997b『四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　空港跡地遺跡（Ｊ地区）』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社 1997c『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊　空港跡地遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997d『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小山・南谷遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社 1998a『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊　空港跡地遺跡Ⅲ』
香川県教育委員会 1998b『宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　木太本村Ⅱ遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1999a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 32 冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 1999b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 33 冊　川津川西遺跡・飯山一本松遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1999c『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　多肥松林遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1999d『香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団・香川県土木部 2000a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 36 冊　金毘羅山遺跡Ⅰ・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社 2000b『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊　空港跡地遺跡Ⅳ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2000c『県道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　八丁地遺跡、本村・横内遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2000d『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　西打遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 2001『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 38 冊　川津東山田遺跡Ⅰ区』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団・香川県土木部 2002a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 39 冊　原間遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団・香川県土木部 2002b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 40 冊　坪井遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団・香川県土木部 2002c『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 41 冊　川津東山田遺跡Ⅱ区』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社 2002d『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 5 冊　空港跡地遺跡Ⅴ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2002e『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊　西打遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2003a『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2003b『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 5 冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2003c『高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡（丸の内地区）』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社 2003d『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 6 冊　空港跡地遺跡Ⅵ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2003e『県道富田西志度線道路改良事業及び県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　寺田・産宮通遺跡、南天枝遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2003f『県道高松長尾大内線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　尾端遺跡』
香川県教育委員会 2003g『県道岡田善通寺道路環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　生野南口遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2003h『県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　山南遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団・香川県土木部 2004a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 47 冊　成重遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団 2004b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 49 冊　中間東井坪遺跡・正箱遺跡・八幡遺跡』
香川県教育委員会・日本道路公団 2004c『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 51 冊　川北遺跡・三殿出口遺跡』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局・日本道路公団 2004d『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 53 冊　中森遺跡、林・坊城遺跡Ⅱ、東山崎・水田遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2004e『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 6 冊　浜ノ町遺跡』
香川県教育委員会・香川県土地開発公社 2004f『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 7 冊　空港跡地遺跡Ⅶ』
香川県教育委員会・香川県土地開発公社 2004g『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 8 冊　空港跡地遺跡Ⅷ』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局・西日本高速道路株式会社 2005a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 55 冊　前田東・中村遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会 2005b『県道高松志度線及び県道丸亀詫間豊浜線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　花池尻北遺跡・西久保谷遺跡』
香川県教育委員会 2005c『県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　原間遺跡』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局 2006a『一般国道 32 号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　佐古川・窪田遺跡』
香川県教育委員会 2006b『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小山・南谷遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局 2007a『一般国道 319 号善通寺バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊　西原遺跡』
香川県教育委員会 2007b『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 9 冊　空港跡地遺跡Ⅸ（県立図書館・文書館建設事業）』
香川県教育委員会 2007c『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊　西末則遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局 2008a『一般国道 32 号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊　住吉遺跡・渡池跡・北内遺跡・池下遺跡』
香川県教育委員会 2008b『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　東坂元秋常遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会 2008c『県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　尾崎西遺跡』
香川県教育委員会 2008d『県道丸亀多度津線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　中東遺跡２・奥白方中落遺跡・奥白方南原遺跡』
香川県教育委員会 2008e『春日川河川激甚災害対策特別緊急工事に伴う埋蔵

文化財発掘調査報告　大灘遺跡』
香川県教育委員会 2009a『都市計画道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　木太中村遺跡・文京町二丁目西遺跡』
香川県教育委員会 2009b『県道多度津丸亀線道路改築事業（多度津工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　庄八尺遺跡』
香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2011『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　旧練兵場遺跡Ⅱ（第 19 次調査）』
香川県教育委員会 2012a『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　東坂元秋常遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会 2012b『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　西末則遺跡Ⅲ』
香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2013『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　旧練兵場遺跡Ⅲ』
香川県教育委員会 2014『国道 438 号道路改良工事・県道富熊宇多津線道路改良工事・城山川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津六反地遺跡・川津昭和遺跡』
香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院 2015a『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　旧練兵場遺跡Ⅴ』
香川県教育委員会 2015b『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　西末則遺跡Ⅴ』
香川県教育委員会 2015c『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　多肥北原西遺跡』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局 2016a『国道 11 号バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　仲戸遺跡・仲戸東遺跡』
香川県教育委員会 2016b『高松土木事務所新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　多肥松林遺跡』
香川県教育委員会 2016c『県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　十川東・平田遺跡』
香川県教育委員会 2016d『讃岐国府跡１』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局 2017a『国道 11 号バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　誉水中筋遺跡』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局 2017b『国道 11 号バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　田中遺跡』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局 2017c『国道 11 号バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　城泉遺跡』
香川県教育委員会 2017d『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　北岸南遺跡』
香川県教育委員会 2017e『県道紫雲出山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　本村中遺跡』
香川県教育委員会 2017f『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　多肥松林遺跡』
香川県教育委員会・最高裁判所 2018a『高松地家裁丸亀支部庁舎新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　丸亀城跡（大手町地区）』
香川県教育委員会 2018b『香川県警察高松北警察署建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡』
香川県教育委員会 2018c『中小規模河川古川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小僧遺跡』
香川県教育委員会 2018d『香川県立丸亀競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　平池南遺跡』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局 2019a『国道 11 号バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　西村遺跡』
香川県教育委員会 2019b『国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　岸の上遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会 2019c『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　上林遺跡』
香川県教育委員会 2019d『県立石田高校造園実習棟新築等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　石田高校校庭内遺跡』
香川県教育委員会 2019e『讃岐国府跡２』
さぬき市教育委員会 2007『ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　森広遺跡』
さぬき市教育委員会 2014『大型店舗建設に伴う発掘調査事業報告書　本村遺跡発掘調査報告書』
長尾町教育委員会 1999『県住宅供給公社による宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　陵遺跡』
三木町教育委員会 2003『西土居遺跡群』
高松市教育委員会・建設省四国地方建設局 1993『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　浴・長池遺跡』
高松市教育委員会・建設省四国地方建設局 1995『一般国道 11 号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　井手東Ⅰ遺跡』
高松市教育委員会 1999a『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第１冊　川南・西遺跡』
高松市教育委員会 1999b『太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２冊　キモンドー遺跡』
高松市教育委員会 1999c『高松市立弦打公民館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　筑城城跡』
高松市教育委員会 2000a『特別養護老人ホームさくら荘建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　一角遺跡』
高松市教育委員会 2000b『高松市ふれあい福祉センター勝賀建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　香西南西打遺跡』
高松市教育委員会 2000c『高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　香西南西打遺跡』
高松市教育委員会 2001a『高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　鬼無藤井遺跡』
高松市教育委員会 2001b『都市計画道路福岡三谷線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　木太中村遺跡』
高松市教育委員会・香川県弁護士会 2002『香川県弁護士会会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡（松平大膳家中屋敷跡）』
高松市教育委員会 2004a『都市計画道路福岡三谷線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　宗高坊城遺跡』
高松市教育委員会・四電ビジネス株式会社 2004b『新ヨンデンビル別館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）』
高松市教育委員会 2005a『都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊　西ハゼ土居遺跡』
高松市教育委員会 2005b『市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊　高松城跡（無量壽院跡）』
高松市教育委員会・高松琴平電気鉄道株式会社 2005c『共同住宅建設（コトデン片原町パーキング跡地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡（東町奉行所跡）』
高松市教育委員会 2006a『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書　第３冊　新田本村遺跡』
高松市教育委員会・高松丸亀町商店街Ａ街区市街地開発組合 2006b『高松丸亀町商店街Ａ街区第一種市街地再開発事業に係る隔地駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡（厩跡）』
高松市教育委員会 2007a『市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊　高松城跡（寿町一丁目）』
高松市教育委員会・香川トヨタ自動車株式会社 2007b『寿町二丁目テナントビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡（寿町二丁目地区）』
高松市教育委員会 2007c『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第６冊　奥の坊遺跡群Ⅵ（奥の坊遺跡Ⅴ区）』
高松市教育委員会 2008『高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１冊　高松城跡（江戸長屋跡Ⅰ）』
高松市教育委員会 2009『高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊　高松城跡（江戸長屋跡Ⅱ）』
高松市教育委員会・高松丸亀町商店街Ｇ街区市街地再開発組合 2012a『高松丸亀町商店街Ｇ街区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　亀井戸跡　－高松城下における上水施設の調査－』
高松市教育委員会 2012b『三谷コミュニティセンター整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　横内東遺跡』
高松市教育委員会 2015a『高松市立山田中学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　北山下遺跡』
高松市教育委員会・穴吹興産株式会社 2015b『丸の内共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡（丸の内地区）』
高松市教育委員会 2016a『都市計画道路高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊　高松城跡（丸の内地区）』
高松市教育委員会・有限会社都市企画設計 2016b『丸の内町共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　高松城跡（丸の内地区）』
高松市教育委員会 2017a『史跡讃岐国分尼寺跡　－第７～14 次確認調査－』
高松市教育委員会・株式会社ベルモニー 2017b『川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　川島本町遺跡』
高松市教育委員会 2018a『都市計画道路高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第４冊　高松城跡（丸の内地区）』
高松市教育委員会 2018b『保存整備事業に伴う発掘調査報告書　特別史跡讃岐国分寺跡Ⅰ　遺構編』
高松市教育委員会・有限会社 KAZU 空調 2018c『林町事務所兼倉庫建設工事

三殿北遺跡 (香川県教育委員会　2019 年)
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　宮西・一角遺跡（第７次調査)』
高松市教育委員会 2019『保存整備事業に伴う発掘調査報告書　特別史跡讃岐国分寺跡Ⅰ　遺物編１』
坂出市教育委員会 1993『坂出市内遺跡発掘調査報告書　－平成４年度国庫補助事業報告書－』
坂出市教育委員会 1994『坂出市内遺跡発掘調査報告書　－平成５年度国庫補助事業報告書－』
丸亀市教育委員会・株式会社百十四銀行 2002『株式会社百十四銀行城西支店建設に伴う丸亀市田村町所在の古代寺院跡の調査　田村遺跡発掘調査報告書』
丸亀市教育委員会・財団法人元興寺文化財研究所 2008a『総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中の池遺跡第 13 次調査・平池東遺跡第３次調査』
丸亀市教育委員会・株式会社和田コーポレーション 2008b『ロイヤルガーデン大手町建設に伴う埋蔵文化財発掘調査　第２次丸亀城大手町地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
丸亀市教育委員会 2018『丸亀城跡発掘調査報告書　－大手町地区第３次・第４次調査－』

【高知県】
財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『高知城伝下屋敷跡　高知地家裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』
高知市教育委員会 2013『史跡高知城跡・高知城跡　－内堀跡西側地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』
高知市教育委員会 2017『帯屋町遺跡　－高知県自治会館新庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

【徳島県】
国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 2005『常三島遺跡１　－工学部電気電子棟地点－』
徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 1998『新蔵町１丁目遺跡　合同庁舎地点（旧知事公舎）　－徳島合同庁舎建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2000a『新蔵町１丁目遺跡　企業局総合管理事務所地点Ⅱ　－徳島企業局総合管理事務所駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2000b『新蔵町３丁目遺跡　徳島保健所地点　－徳島保健所改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2002『南前川町１丁目遺跡　－鳴門教育大学（附小）校舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書－』
徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2004『徳島城下町遺跡中徳島町１丁目地点　徳島県立城東高等学校校舎改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書』
徳島市教育委員会 2004『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 14』
徳島市教育委員会 2008『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 18』
徳島市教育委員会 2009『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 19』
徳島市教育委員会 2010『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 20』

【奈良県】
奈良大学文学部考古学研究室 1998『秋篠・山陵遺跡　－奈良大学附属高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

【兵庫県】
赤穂市教育委員会 2007『発掘された赤穂城下町２　－赤穂駅前大石神社線街路整備事業に伴う赤穂城下町跡発掘調査報告書２－』
姫路市教育委員会 2002『特別史跡姫路城跡　－お城本町地区市街地再開発事業に伴う発掘調査概報－』
姫路市教育委員会 2003『特別史跡姫路城跡Ⅱ　－国立姫路病院更新整備工事に伴う発掘調査報告②－』

【広島県】
国土交通省中国地方整備局・株式会社パスコ 2010『広島城跡上八丁堀地点　－広島合同５号館埋蔵文化財にかかる発掘調査報告書－』
財団法人広島市文化財団 1999a『広島城外堀跡　紙屋町・大手町地点』
財団法人広島市文化財団 1999b『広島城遺跡　基町高校グラウンド地点』
財団法人広島市文化財団・株式会社島田組 2007a『広島城跡国保会館地点』
財団法人広島市文化財団・株式会社パスコ 2007b『広島城跡　司法書士会館新築地点発掘調査報告書』
財団法人広島市文化財団・株式会社パスコ 2010『広島城跡　八丁堀地点発掘調査報告書』
福山市教育委員会 2007『福山城跡　－福山駅前広場整備工事（地下送迎場）に伴う第１次発掘調査報告書－』

【福岡県】
福岡市教育委員会 1991『博多 20　－第 45 次調査－』
福岡市教育委員会 1993『博多 34　－博多遺跡群第 56 次調査報告－』
福岡市教育委員会 1997『野多目Ａ遺跡４　－野多目Ａ遺跡群第４次調査報告－』
福岡市教育委員会 2006『住吉神社遺跡１　－住吉神社遺跡第１次調査報告－』
福岡市教育委員会 2009a『博多 130　－博多遺跡群第 173 次調査報告－』
福岡市教育委員会 2009b『博多 134　－博多遺跡群第 175 次調査の報告－』
福岡市教育委員会 2010『博多 140　－博多遺跡群第 187 次調査報告－』

【山口県】
財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 2004『萩城跡（外堀地区）Ⅱ』

遺物番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面・釉	内面・胎		石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
1	2区	不明遺構		黒色土器	碗	体部：マメツ、底部：回転ヘラ切後高台貼付後ナデ	体～底部：マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙	5Y4/1 灰	やや軟	中・少						(7.0)		7/8	
2	5区	SR01		弥生土器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁：ヨコナデ・マメツ、体部：指オサエ・ナデ・マメツ	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	良好	中・多				(11.2)				1/8 未満	
3	7区	SR01		弥生土器	小形鉢	口縁～体部：タタキ後指オサエ・ナデ、底部：ナデ？マメツ	口縁～底部：板ナデ？後指オサエ・ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR4/4 にぶい赤褐	良好	中・並				(6.4)	4.1	2.7		8/8	
5	4区	SR02		縄文土器	深鉢	口縁：沈線文・マメツ	口縁：ナデ・マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	粗・多								1/8 未満	
6	4区	SR02		弥生土器	甕	口縁：指オサエ後ヨコナデ・刻目、体部：ヘラ描沈線3・マメツ	口縁：板ナデ・ナデ、体部：ナデ？マメツ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	良好	中・並								1/8 未満	
7	3区	SR02		弥生土器	甕	口縁：刻目・指オサエ・ナデ、体部：ヘラ描沈線3・マメツ	口縁：ヨコナデ？指オサエ、体部：マメツ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	良好	中・並								1/8 未満	
8	4区	SR02	下層	弥生土器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後櫛描直線文14・刺突文	口縁：ヨコナデ・体部：指オサエ・ナデ	2.5Y4/2 暗灰黄	2.5Y5/1 黄灰	良好	中・多				(42.0)				1/8 未満	
9	3区	SR02		弥生土器	壺	頸部：ヨコナデ後ミガキ・刻目突帯貼付、体部：ヨコナデ後ミガキ	頸部：ヨコナデ後ミガキ、体部：ハクリ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	良好	粗・並								8/8	
10	3区	SR02		弥生土器	甕	体部：ハケ・マメツ、底部：マメツ	体～底部：板ナデ・ナデ・マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y6/2 灰黄	良好	粗・並		中・少				(5.7)		4/8	
11	4区	SR02	下層	弥生土器	鉢	体部：ミガキ、底部：ミガキ？マメツ	体～底部：ナデ？マメツ	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並			中・少			(7.0)		2/8	阿波産搬入
12	3区	SR02		弥生土器	壺	体部：ハケ・指オサエ・ナデ、底部：ミガキ？マメツ	体～底部：指オサエ後ミガキ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/1 灰白	良好	粗・並						10.4		8/8	
13	4区	SR02		弥生土器	鉢	口縁～体部：ヨコナデ・ミガキ？マメツ	口縁～体部：ヨコナデ・ハケ・マメツ	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y3/1 黒褐	良好	中・並				(14.0)				1/8	
15	4区	SR03		古式土師器	壺	口縁～頸部：ヨコナデ・マメツ	口縁～頸部：ヨコナデ・マメツ	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	良好	粗・並				(19.3)				2/8	
16	3区	SR03		古式土師器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ・マメツ	口縁～頸部：ヨコナデ・マメツ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	粗・並				(13.7)				2/8	
17	4区	SR03		弥生土器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ・マメツ、体部：マメツ	口縁～頸部：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	中・並	細・多	細・少		(15.3)				1/8 未満	下川津B類土器
18	4区	SR03		弥生土器	壺	体部：マメツ、底部：ナデ	体～底部：板ナデ・マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良好	中・多						(4.0)		4/8	
19	3区	SR03		弥生土器	甕	体部：ハケ、底部：ミガキ？マメツ	体～底部：ケズリ後ナデ？マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・多		細・並				(4.4)		1/8	
20	3区	SR03		弥生土器	甕	体部：ハケ、底部：マメツ	体～底部：ケズリ後一部指オサエ・ナデ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	良好	粗・並		細・少				4.4		8/8	
21	3区	SR03		弥生土器	壺	体部：タタキ後ハケ、底部：ナデ・マメツ	体～底部：ハケ後一部ナデ	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y7/3 浅黄	良好	中・並		細・少				(3.2)		4/8	
22	4区	SR03		弥生土器	甕	体部：ハケ、底部：マメツ	体部：ケズリ・マメツ、底部：指オサエ・マメツ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	やや軟	中・並						3.2		8/8	体部外面炭化物付着
23	3区	SR03		弥生土器	小形鉢	口縁：ヨコナデ、体部：ナデ・マメツ	口縁：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y7/3 浅黄	良好	中・多				(5.9)				1/8	
24	4区	SR03		弥生土器	底部穿孔鉢	体部：板ナデ？マメツ、底部：マメツ	体～底部：ケズリ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	中・多						(3.6)		7/8	
25	4区	SR03		弥生土器	底部穿孔鉢	体部：タタキ後ハケ・マメツ、底部：ナデ？マメツ	体部：ケズリ、底部：ケズリ後指オサエ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	良好	中・並		細・並				(3.1)		4/8	
33	3区	SE02	掘方	土師質土器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：ミガキ・マメツ	2.5Y7/3 浅黄	7.5YR6/6 橙	良好	中・並	細・少	細・並				(7.2)		1/8	
37	2区	SX01	4層	須恵器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ	N6/1 灰	N6/1 灰	良好	細・少						(6.2)		4/8	
38	2区	SX01		須恵器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	良好	中・少						(7.1)		1/8	
39	2区	SX01		須恵器	壺	口縁～頸部：回転ナデ	口縁～頸部：回転ナデ	N4/0 灰	N4/0 灰	良好	細・少				(8.4)				1/8	
40	2区	SX01		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ・マメツ	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	良好	中・並				(10.9)				2/8	
41	2区	SX01		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：マメツ	口縁～底部：回転ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	粗・並				(12.2)	3.3	(8.6)		3/8	
42	3区	SX01	4層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：ナデ？マメツ	体～底部：回転ナデ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	良好	中・並	細・少					(8.0)		1/8	
43	3区	SX01	2層	緑釉陶器	碗	口縁～体部：回転ナデ・施釉	口縁～体部：回転ナデ・施釉	7.5Y6/3 オリーブ黄（釉）	2.5Y7/2 灰黄（胎）	軟質（良好）	細・少				(14.7)				1/8 未満	畿内産
44	2区	SX01		土師質土器	碗	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：ミガキ・マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	やや軟	中・並	細・少	細・並		(14.4)				2/8	
45	2区	SX01	4層	土師質土器	碗	口縁～体部：マメツ	口縁～体部：ハケ後ミガキ・マメツ	5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰	やや軟	粗・少				(15.2)				2/8	
46	2区	SX01		土師質土器	台付杯	体部：ハケ？、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：板ナデ・ナデ？	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並	細・並	細・少				(10.2)		7/8	内外面被熱？底部焼成後穿孔？
47	2区	SX01		黒色土器	碗	口縁～体部：ナデ後ミガキ・マメツ	口縁～体部：ハケ？後ミガキ	5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	中・並	細・並			(15.6)				2/8	
48	2区	SX01		黒色土器	碗	口縁～体部：マメツ	口縁～体部：ミガキ・マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y4/1 黄灰	やや軟	中・並		細・少		(14.6)				1/8 未満	
49	3区	SX01	4層	黒色土器	碗	口縁～体部：ミガキ・マメツ	口縁～体部：ミガキ	10YR8/3 浅黄橙	10YR2/1 黒	良好	中・少	細・少			(17.6)				1/8	
50	3区	SX01	2・3層	黒色土器	碗	体部：ナデ？、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：ミガキ	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y5/1 黄灰	良好	中・少		細・並				(6.7)		2/8	
51	2区	SX01	4層	黒色土器	碗	体部：マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：板ナデ後ミガキ	5YR7/4 にぶい橙	2.5Y3/1 黒褐	やや軟	中・並						(8.6)		1/8	
52	2区	SX01		黒色土器	碗	体部：マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：ミガキ・マメツ	10YR6/2 灰黄褐	N3/0 暗灰	良好	中・並		細・並				(6.4)		2/8	
53	2区	SX01	4層	黒色土器	碗	体部：ミガキ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：ミガキ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	良好	中・並						(7.0)		3/8	
54	2区	SX01	4層	黒色土器	碗	口縁～体部：マメツ、底部：回転ヘラ切？後高台貼付後ナデ・マメツ	口縁～底部：ミガキ・マメツ	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5Y6/2 灰黄	良好	中・並		細・並		(14.0)	4.5	(7.6)		2/8	
55	2区	SX01		黒色土器	碗	口縁～体部：ナデ後ミガキ、底部：高台貼付後ナデ	口縁～底部：板ナデ？後ミガキ	2.5Y7/2 灰黄	N3/0 暗灰	良好	中・少	細・並	細・並		(12.6)	4.7	(6.8)		5/8	外底面に墨書「上井」
56	2区	SX01		黒色土器	碗	口縁～体部：マメツ、底部：高台貼付後ナデ	口縁～底部：ミガキ・マメツ	10YR8/2 灰白	N3/0 暗灰	やや軟	中・並	細・少			(17.2)	5.1	(7.6)		2/8	
57	3区	SX01	4層	黒色土器	碗	口縁～体部：ミガキ、底部：ケズリ後高台貼付後ナデ	口縁～底部：板ナデ？後ミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	N3/0 暗灰	やや軟	中・並				(17.4)	5.6	(7.6)		2/8	
58	2区	SX01		土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後一部ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	中・多	細・少	中・並		(20.6)				1/8	
59	3区	SX01	4層	土師器	甕	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	中・並	細・少	細・並		(18.6)				4/8	
60	3区	SX01	4層	土師器	甕	口縁：ハケ後ヨコナデ・マメツ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	中・並	中・少	細・少		(23.8)				1/8 未満	外面炭化物付着

表 27　土器観察表（1）

遺物番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面・釉	内面・胎		石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
61	2区	SX01		土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y6/2 灰黄	良好	中・並	細・少	細・多		(24.6)				1/8 未満	
62	3区	SX01	4層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	中・並	細・少	細・並		(23.4)				1/8	
63	3区	SX01	4層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	良好	中・並	細・少	中・多		(24.0)				1/8 未満	外面炭化物付着
64	2区	SX01		土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	良好	中・並	細・少	細・多		(21.6)				1/8	
65	3区	SX01	4層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ・沈線1、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後指オサエ・ナデ	2.5Y6/2 灰黄	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	中・並	細・少	細・少		(25.4)				1/8	
66	2区	SX01	4層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ナデ、体部：ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	良好	中・多		細・少		(27.3)				1/8 未満	
67	2区	SX01		土師質土器	鍋	口縁：ヨコナデ、体～底部：ナデ後ハケ	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ、底部：指オサエ・板ナデ？マメツ	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐	良好	中・多	細・並	細・並		(40.8)				2/8	体～底部内外面炭化物付着
75	2区	SX02	上層	須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	良好	中・少				(12.5)		(8.3)		5/8	
76	2区	SX03		須恵器	壺	口縁～頸部：回転ナデ	口縁～頸部：回転ナデ	5PB4/1 暗青灰	5PB6/1 青灰	良好	中・少				(10.0)				1/8	
77	2区	SX03	下層	須恵器	皿	体部：回転ナデ、底部：ナデ	体～底部：回転ナデ	N8/0 灰白	N8/0 灰白	やや軟	中・少						(6.9)		1/8	
78	2区	SX03	下層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ・マメツ、底部：マメツ	体～底部：マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/4 にぶい黄褐	やや軟	中・少	細・少					(7.8)		1/8 未満	
79	2区	SX03	下層	須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	10YR4/1 褐灰	N2/0 黒	良好	中・少				(14.9)		(7.1)		2/8	内外面火襷
80	2区	SX03	下層	土師質土器	碗	体部：マメツ、底部：回転ヘラ切後高台貼付後ナデ	体～底部：ハケ後回転ナデ？マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	良好	粗・並		細・少				6.4		8/8	外面一部炭化物付着
81	2区	SX03	下層	土師質土器	碗	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後高台貼付・ナデ	口縁～底部：回転ナデ	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	良好	中・並		細・少		(13.4)	6.3	6.9		8/8	
83	5区	SB05（SP91）		土師質土器	碗	体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	体～底部：回転ナデ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y5/1 黄灰	良好	中・少						(7.9)		1/8 未満	
84	6区	SB06（SP161）		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後一部ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並				(8.4)	1.6	(6.4)		1/8	
85	6区	SB06（SP182）		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	良好	中・並						(9.2)		2/8	
86	6区	SB06（SP179）		須恵器	捏鉢	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N6/0 灰	N6/0 灰	良好	細・少								1/8 未満	東播系
89	6区	SP76		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	中・少		細・少		(6.3)	1.1	(5.6)		1/8	
90	6区	SP105		土師質土器	皿	体部：回転ナデ、底部：回転糸切	体～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	粗・並						(5.0)		1/8	
91	6区	SP203		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	中・多				(8.2)	1.0	(6.6)		2/8	
92	6区	SP203		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕・ナデ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	やや軟	中・並				(7.9)		(6.2)		2/8	
93	6区	SP203		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切・マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	やや軟	中・少				(8.4)		(6.6)		1/8	
94	6区	SP206		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	中・並				(8.0)				1/8	
95	6区	SP213		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後一部ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	中・並				(8.4)	1.0	(6.8)		2/8	
96	6区	SP200		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並		細・少		(8.5)	1.3	(6.8)		2/8	
97	6区	SP205		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	中・並				(9.2)		(7.0)		2/8	
98	6区	SP204		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良好	中・多				(8.6)	1.7	(7.6)		1/8	
99	6区	SP200		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転糸切	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少				(8.8)	0.9	(6.3)		1/8	
100	6区	SP203		土師質土器	台付杯	底部：高台貼付後ナデ	底部：回転ナデ	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	良好	中・並						(5.0)		2/8	
101	6区	SP197		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少				(11.7)				1/8	
102	6区	SP94		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	中・少		細・少		(11.6)				1/8 未満	
103	6区	SP201		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	中・少				(13.8)				1/8	
104	5区	SP62		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ・マメツ	口縁～体部：回転ナデ・マメツ	7.5YR8/4 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	良好	中・並				(14.2)				1/8 未満	
105	6区	SP115		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	体～底部：回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少						(7.4)		1/8 未満	内外面炭化物付着？
106	6区	SP201		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：糸切？後ナデ	体～底部：回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	中・並		中・少				(8.9)		1/8	
107	6区	SP92		須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	良好	中・並				(10.2)		(7.7)		1/8	
108	6区	SP116		須恵器	碗	体部：回転ナデ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：板ナデ	N6/0 灰	5Y6/1 灰	良好	中・少						(5.6)		2/8	十瓶山周辺窯産、内面見込み重ね焼痕
109	6区	SP152		白磁	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	7.5Y8/1 灰白（釉）	N8/0 灰白（胎）	良好									1/8 未満	中国製
110	6区	SP140		白磁	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	7.5Y8/1 灰白（釉）	N8/0 灰白（胎）	良好					(15.8)				1/8	中国製
111	6区	SP118		瓦質土器	蓋	口縁～天井部：回転ナデ	口縁～天井部：回転ナデ・ナデ	N5/0 灰	N5/0 灰	良好	中・少				(26.6)				1/8 未満	
112	6区	SP203		土師質土器	鍋	口縁：指オサエ・ヨコナデ、体部：板ナデ後ナデ	口縁～体部：板ナデ後ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	良好	中・並		細・少		(34.3)				1/8 未満	内外面炭化物付着
120	5区	SK04	最上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	中・並		細・並		(6.5)	1.3	(5.5)		6/8	
121	5区	SK04	下～最下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	中・並				(10.9)	3.0	(7.6)		1/8	
122	5区	SK04		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並				(10.1)	3.0	(7.1)		1/8	
123	5区	SK04	下～最下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	良好	中・並				(10.8)		(6.5)		1/8	
124	5区	SK04		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	中・並				(10.9)		(7.8)		2/8	

表 28　土器観察表（2）

遺物番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面・釉	内面・胎		石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
125	5区	SK04	中層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	良好	中・並				(10.8)	3.2	(7.6)		2/8	
126	5区	SK04	下～最下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕・ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	良好	中・並				(11.4)	3.5	8.2		8/8	
127	5区	SK04		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや軟	粗・並				(10.6)		(7.2)		1/8	
128	5区	SK04		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ・一部指オサエ	口縁～体部：板ナデ後回転ナデ？	10YR4/1 褐灰	2.5Y7/1 灰白	良好	中・少				(11.6)				2/8	内外面炭化物付着
129	5区	SK04	中層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	5Y7/2 灰白	5Y8/2 灰白	良好	中・並				(12.2)	3.3	(7.8)		2/8	
130	5区	SK04	下～最下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：板ナデ？後回転ナデ	2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	粗・並				(13.9)	4.0	(7.6)		1/8	内外面炭化物付着
131	5区	SK04	中層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並				(12.8)	3.6	(9.0)		2/8	
132	5区	SK04	最上層	土師質土器	皿	体部：回転ナデ・マメツ、底部：マメツ	体～底部：回転ナデ・マメツ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並						(8.2)		2/8	
133	5区	SK04	下～最下層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕・ナデ	体～底部：回転ナデ・ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 淡黄橙	良好	中・並						(7.6)		2/8	
134	5区	SK04		瓦質土器	杯	体部：回転ナデ？底部：ナデ	体～底部：マメツ	10Y3/1 オリーブ黒	10Y3/1 オリーブ黒	良好	粗・少						(6.3)		1/8	
135	5区	SK04	中層	土師質土器	鍋	口縁：ナデ・ヨコナデ	口縁：板ナデ後ナデ	10YR4/1 褐灰	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・多								1/8 未満	外面炭化物付着
144	7区	SK08	下～最下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/1 褐灰	良好	中・少				(12.4)	3.7	(8.0)		1/8	
145	7区	SK08	下～最下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	5Y2/1 黒	良好	中・少				(13.2)		(8.2)		1/8	
146	7区	SK08		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕	体～底部：回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	中・並						(8.1)		2/8	
147	7区	SK08	最上層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	体～底部：回転ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	中・少						(8.8)		1/8	
148	7区	SK08	下～最下層	須恵器	捏鉢	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	良好	中・少								1/8 未満	東播系
149	7区	SK08		焼締陶器	擂鉢	体部：回転ナデ、底部：未調整？	体～底部：回転ナデ後卸目	N4/0 灰	N5/0 灰	良好	粗・少								1/8 未満	備前焼
174	6区	SK09		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	2.5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	良好	細・少				(6.6)	0.9	(5.9)		1/8 未満	
175	6区	SK09		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切・マメツ	口縁～底部：マメツ	5YR8/4 淡橙	5YR8/3 淡橙	良好	中・少				(7.4)	1.0	(6.2)		1/8 未満	
177	6区	SK10		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切・マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並				(8.1)		(6.6)		1/8	
178	6区	SK10		須恵器	捏鉢	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N6/灰	N6/0 灰	良好	中・並				(30.2)				1/8 未満	東播系
179	6区	SK11		瓦質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：ナデ？	口縁～底部：回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	良好	細・少				(7.6)		(6.1)		1/8	
181	6区	SK14		須恵器	捏鉢	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N6/灰	N6/0 灰	良好	細・並								1/8 未満	東播系
182	6区	SK15		須恵器	捏鉢	体部：回転ナデ、底部：回転糸切後一部ナデ	体～底部：回転ナデ・マメツ	N6/0 灰	N6/0 灰	良好	中・少						(8.6)		4/8	東播系、内底面に炭化物付着
183	6区	SK16		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	7.5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	軟	中・少				(12.6)	2.5	(8.6)		1/8	
184	5区	SD012		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	良好	中・並				(11.9)	3.3	(9.1)		2/8	
186	5区	SD019		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	良好	中・少				(5.7)	1.1	(5.0)		2/8	
187	5区	SD019		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切・マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	中・並				(7.0)	1.0	(5.4)		1/8	
188	5区	SD019		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・並				(8.0)		(6.6)		1/8	
189	5区	SD019		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ・マメツ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白	良好	中・少				(10.3)				1/8	
190	5区	SD019		土師質土器	杯	体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切	体～底部：回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや軟	中・少						(8.0)		1/8	
191	5区	SD019		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	体～底部：回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	良好	中・並						(8.0)		1/8	
192	5区	SD019		須恵器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：マメツ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	良好	中・少						(5.6)		1/8 未満	十瓶山周辺窯産
195	5区	SD021		黒色土器	碗	体部：ミガキ・マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：平行ミガキ・マメツ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y3/1 黒褐	良好	中・少						(5.8)		1/8	
196	5区	SD021		青磁	大碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	2.5GY6/1 オリーブ灰（釉）	N8/0 灰白（胎）	良好					(24.6)				1/8 未満	越州窯系？
197	5区	SD023		土師質土器	杯	口縁～体部：マメツ	口縁～体部：マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR8/3 淡黄橙	やや軟	中・並				(13.0)				1/8 未満	
198	5区	SD023		瓦器	碗	体部：マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：格子状暗文・マメツ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	良好	中・少						(4.0)		1/8	和泉型
199	5区	SD026		瓦器	皿	口縁：ヨコナデ・マメツ、底部：指オサエ	口縁～底部：マメツ	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y3/1 黒褐	良好	中・並				(8.6)		(6.8)		2/8	和泉型
200	6区	SD031		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	中・少						(8.0)		1/8	
201	6区	SD031		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後板状圧痕・ナデ	体～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少						(8.1)		2/8	
202	5区	SD038		瓦器	碗	口縁：ヨコナデ・指オサエ	口縁：ヨコナデ後ミガキ	10Y4/1 灰	10Y4/1 灰	やや軟	中・少								1/8 未満	和泉型
203	5区	SD038		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並								1/8 未満	
204	7区	SD102		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：糸切？	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	中・並				(7.8)		(6.4)		1/8	
205	7区	SD102	上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ？マメツ、底部：回転糸切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ？マメツ	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・少				(7.8)	1.0	5.5		8/8	
206	7区	SD102	上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：糸切	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	中・少				(7.8)		(6.7)		1/8	
207	7区	SD102	下層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少				(7.2)		(6.0)		1/8	
208	7区	SD102	上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：糸切	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	中・並		細・少		(7.8)		(6.4)		1/8	
209	7区	SD102	上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	良好	中・並				(7.7)		(6.3)		1/8	内外面炭化物付着

表 29　土器観察表（3）

遺物番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面・釉	内面・胎		石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
210	7区	SD102	下層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ	口縁：回転ナデ・マメツ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・並				(8.1)		(5.8)		1/8	
211	7区	SD102	上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：糸切後板状圧痕？	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並		細・並		(7.5)	1.3	(5.9)		1/8	
212	7区	SD102	上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕・ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少				(8.1)	1.3	(6.4)		3/8	
213	7区	SD102	上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少				(7.6)	1.2	(6.2)		1/8	
214	7区	SD102	上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	やや軟	中・多				(9.0)		(7.3)		1/8	
215	7区	SD102	下層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：糸切り	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	中・多				(8.7)	1.4	(5.4)		1/8 未満	
216	7区	SD102	下層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	中・少				(8.7)	1.4	(7.0)		2/8	
217	7区	SD102	下層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転糸切？後板状圧痕・マメツ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並				(8.8)	1.8	(6.1)		1/8	
218	7区	SD102	上層	土師質土器	台付皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後脚台部貼付、脚台部：回転ナデ	口縁：回転ナデ、底部：回転ナデ後指オサエ、脚台部：回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	中・少				(8.3)	2.9	(6.1)		6/8	
219	7区	SD102	上層	土師質土器	杯	口縁：回転ナデ・マメツ	口縁：回転ナデ・マメツ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・並				(12.6)				1/8	
220	7区	SD102	下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ・マメツ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	中・少				(14.4)				1/8 未満	
221	7区	SD102	下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	7.5YR5/2 灰褐	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並				(13.8)				1/8	
222	7区	SD102	下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	中・少				(12.5)				2/8	
223	7区	SD102	下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	2.5YR6/6 橙	2.5YR7/6 橙	良好	中・少				(12.4)	3.9	(6.2)		1/8	内面炭化物付着？
224	7区	SD102	上層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・並				(12.7)	3.4	(7.8)		2/8	
225	7区	SD102	上層	土師質土器	杯	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	良好	中・並				(13.6)	3.2	(9.6)		1/8	内外面炭化物付着
226	7区	SD102	上層	土師器	杯	口縁～底部：マメツ	口縁～底部：マメツ	10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	やや軟	中・少				(13.8)		(9.6)		1/8	
227	7区	SD102	下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・少				(14.6)		(11.6)		1/8	
228	7区	SD102	上層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	良好	中・少						(9.5)		5/8	内外面炭化物付着
229	7区	SD102	上層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	体～底部：回転ナデ・マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	5YR7/4 にぶい橙	良好	中・少						(9.0)		1/8	
230	7区	SD102	上層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ？マメツ、底部：糸切？マメツ	体～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並						(8.0)		1/8	
231	7区	SD102	下層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ・ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	中・並						(8.2)		3/8	
232	7区	SD102	上層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転糸切・マメツ	体～底部：回転ナデ・マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・多						(8.4)		2/8	
233	7区	SD102		土師質土器	杯	体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転糸切	体～底部：回転ナデ・マメツ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	中・並						(8.0)		3/8	
234	7区	SD102	下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ？マメツ、底部：回転糸切	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	7.5YR8/6 浅黄橙	5YR7/6 橙	良好	中・並				(12.9)	2.9	(7.0)		1/8	
235	7区	SD102	下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転糸切	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並		細・少		(13.3)	3.7	(7.0)		8/8	
236	7区	SD102	下層	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕・ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	中・並				(13.8)	3.0	(9.1)		8/8	内外面炭化物付着
237	7区	SD102		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後一部ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR6/2 灰褐	良好	中・並				(14.4)	3.3	10.0		7/8	
238	7区	SD102	下層	土師質土器	碗	口縁：回転ナデ、体部：指オサエ	口縁～体部：ナデ後ミガキ・マメツ	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・少				(14.5)				1/8	
239	7区	SD102	上層	土師質土器	碗	口縁～体部：回転ナデ後ミガキ	口縁～体部：回転ナデ後ミガキ	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	良好	中・並				(15.4)				1/8	内外面炭化物付着
240	7区	SD102		土師質土器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：マメツ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	やや軟	中・少						(6.0)		1/8	
241	7区	SD102	下層	土師質土器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：マメツ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	良好	中・並						(6.3)		7/8	
242	7区	SD102	上層	黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：ミガキ・マメツ	2.5Y8/2 灰白	N5/0 灰	やや軟	中・少						(6.3)		1/8	
243	7区	SD102		須恵器	碗	口縁～体部：回転ナデ・指オサエ後回転ミガキ	口縁～体部：回転ナデ後ミガキ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	良好	細・少				(14.8)				1/8 未満	十瓶山周辺窯産
244	7区	SD102	上層	瓦器	皿	口縁：ヨコナデ？マメツ、底部：指オサエ・マメツ	口縁～底部：マメツ	N5/0 灰	10Y5/1 灰	やや軟	中・少				(7.7)		(6.2)		1/8 未満	和泉型
245	7区	SD102	下層	瓦器	碗	口縁：回転ナデ、体部：指オサエ・ナデ後ミガキ	口縁～体部：ナデ後ミガキ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	良好	中・少				(15.6)				2/8	和泉型
246	7区	SD102	下層	瓦器	碗	体部：指オサエ・ナデ・マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：マメツ	10Y4/1 灰	2.5Y8/3 淡黄	良好	中・少						(4.4)		2/8	和泉型
247	7区	SD102	下層	瓦器	碗	体部：指オサエ・ナデ、底部：高台貼付後指オサエ・ナデ	体～底部：ナデ後ミガキ・マメツ	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰	良好	細・少						(4.5)		2/8	和泉型
248	7区	SD102	下層	瓦器	碗	口縁：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ、底部：高台貼付後ナデ	口縁～底部：ナデ後ミガキ・マメツ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	良好	細・少				(16.0)	3.8			1/8	和泉型
249	7区	SD102	下層	瓦器	碗	口縁：ヨコナデ・マメツ、体部：指オサエ・マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	口縁～底部：ミガキ・マメツ	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	軟	中・並				(15.6)	4.3	(4.8)		2/8	和泉型
250	7区	SD102		瓦器	碗	口縁：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ、底部：高台貼付後ナデ	口縁～底部：板ナデ・ナデ後ミガキ	N4/0 灰	N5/0 灰	良好	中・少				(15.0)	4.0	4.4		7/8	和泉型
251	7区	SD102	上層	瓦器	碗	口縁：ヨコナデ？マメツ、体部：指オサエ・ナデ・マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	口縁～底部：マメツ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	軟	中・並				(16.4)	4.9	5.8		8/8	和泉型？
252	7区	SD102	上層	白磁	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	7.5GY8/1 明緑灰（釉）	N9/0 白（胎）	良好									1/8 未満	中国製

表 30　土器観察表（4）

遺物番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面・釉	内面・胎		石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
253	7区	SD102	下層	白磁	碗	口縁：施釉	口縁：施釉	5GY7/1明オリーブ灰（釉）	N8/0灰白（胎）	良好					(14.5)				1/8未満	中国製
254	7区	SD102	上層	土師質土器	鍋	口縁：ハケ後ヨコナデ	口縁：ハケ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙	良好	中・並								1/8未満	
255	7区	SD102	下層	土師質土器	鍋	口縁～体部：ナデ？マメツ	口縁～体部：板ナデ後ナデ	2.5Y7/2灰黄	10YR8/3浅黄橙	良好	中・並								1/8未満	
256	7区	SD102	下層	土師質土器	鍋	口縁：ヨコナデ・ハケ	口縁：ハケ・ナデ	10YR4/2灰黄褐	7.5YR6/4にぶい橙	良好	中・多				(28.9)				1/8未満	外面炭化物付着
258	7区	SD103		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：糸切り	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	良好	中・多				(8.1)		(6.8)		2/8	
259	5区	SD103		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ	2.5Y5/1黄灰	10YR6/2灰黄褐	良好	粗・並						(9.0)		2/8	
260	6区	SD103		瓦質土器	鉢	体部：回転ケズリ？後回転ナデ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：回転ナデ・マメツ	2.5Y7/1灰白	N4/0灰	良好	中・少						(8.0)		1/8未満	
261	5区	SD105		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR8/4浅黄橙	良好	中・並		細・少		(11.9)		(8.7)		1/8	内外面炭化物付着
263	7区	SD115		黒色土器	碗	体部：マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：マメツ	2.5Y5/1黄灰	2.5Y4/1黄灰	良好	中・並		細・少				(6.4)		1/8未満	
264	6区	SD128		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？	口縁～底部：回転ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	良好	中・少				(7.9)		(6.0)		1/8未満	
265	6区	SD128		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	やや軟	中・多				(7.9)		(5.4)		1/8	
266	6区	SD128		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	良好	中・並				(8.9)	1.0	(7.1)		1/8	
267	6区	SD128		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	良好	細・並		細・少		(8.9)	0.9	(6.9)		1/8	
268	7区	SD128		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕	口縁～底部：回転ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	5YR7/4にぶい橙	良好	中・少				(8.8)	0.8	(6.7)		3/8	内外面炭化物付着
269	6区	SD128		黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：平行ミガキ	2.5Y8/3淡黄	2.5Y4/2暗灰黄	良好	細・少						(6.2)		2/8	
270	6区	SD128		土師質土器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：分割ミガキ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y8/3淡黄	良好	中・並		細・並				(6.5)		2/8	
271	6区	SD128		白磁	碗	口縁：施釉	口縁：施釉	7.5Y8/1灰白（釉）	N8/0灰白（胎）	良好									1/8未満	中国製
272	6区	SD128		須恵器	壺	口縁～頸部：回転ナデ	口縁～頸部：回転ナデ	N6/0灰	N7/0灰白	良好	中・並				(18.6)				1/8未満	
273	6区	SD128		土師質土器	鍋	口縁：指オサエ・ヨコナデ	口縁：板ナデ後ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR6/6橙	良好	中・並								1/8未満	
278	7区	SD129		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転糸切	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	良好	中・多				(8.2)	1.4	(6.8)		2/8	
279	7区	SD129		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	良好	中・少				(12.8)				1/8	
280	7区	SD129		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	良好	中・少				(15.8)				1/8未満	
281	7区	SD129		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	体～底部：回転ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR6/4にぶい橙	良好	中・多						(8.4)		2/8	
283	6区	SD139		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転糸切後板状圧痕	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	やや軟	中・並				(13.5)	3.6	(8.6)		4/8	
285	2区	SD144		土師質土器	碗	体～底部：マメツ	体～底部：マメツ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	やや軟	細・少						(7.8)		1/8未満	
288	2区	SD145		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	良好	中・少				(5.6)	1.0	(4.8)		1/8	
289	2区	SD145		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：ナデ・マメツ	口縁～底部：回転ナデ	5YR7/8橙	5YR7/8橙	良好	粗・少				(5.3)	0.9	(4.8)		1/8	
290	3区	SD145		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ？マメツ、底部：回転ヘラ切・マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	7.5YR7/4にぶい橙	10YR6/3にぶい黄橙	やや軟	中・少				(10.0)		(6.0)		1/8	
291	2区	SD145		土師質土器	杯	体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕・ナデ	体～底部：マメツ	7.5YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	やや軟	中・並						(8.9)		1/8	
292	2区	SD145		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？マメツ	体～底部：回転ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	良好	中・並						(8.2)		2/8	
293	2区	SD145		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕・マメツ	体～底部：回転ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	良好	中・並						(9.0)		1/8	
294	2区	SD145		土師質土器	杯	体部：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切後板ナデ	体～底部：回転ナデ・マメツ	5YR6/6橙	5YR6/4にぶい橙	やや軟	中・並						(8.0)		3/8	
295	2区	SD145		黒色土器	碗	体部：マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：平行ミガキ・マメツ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y4/1黄灰	良好	細・並		細・並				(6.4)		1/8	
296	2区	SD145		黒色土器	碗	体部：マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：マメツ	5Y3/1オリーブ黒	5Y3/1オリーブ黒	良好	中・少						(5.8)		1/8	
297	2区	SD145		黒色土器	碗	体部：マメツ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：平行ミガキ・マメツ	2.5Y4/1黄灰	2.5Y4/1黄灰	良好	中・並						(6.2)		2/8	
298	3区	SD145		須恵器	鉢	体部：指オサエ・回転ナデ・下端回転ケズリ、底部：ケズリ？マメツ	体部～底部：回転ナデ・マメツ	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	やや軟	中・少						(13.0)		1/8	東播系
300	2区	SD161	中層	縄文土器	浅鉢	口縁：沈線・結節縄文・マメツ	口縁：ナデ・マメツ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	やや軟	中・並								1/8未満	
301	4区	SD161	最上層？	須恵器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	N6/0灰	N7/0灰白	良好	中・並				(13.0)	1.8	(10.4)		4/8	内外面火襷
302	2区	SD161	下層	須恵器	杯蓋	口縁：回転ナデ、天井部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～天井部：回転ナデ	N6/0灰	N6/0灰	良好	中・少				(14.6)				1/8未満	
303	2区	SD161	最下層	須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	良好	細・少				(12.1)				1/8	口縁部内外面に火襷
304	3区	SD161	中層	須恵器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後一部ナデ	口縁～底部：回転ナデ	N6/1灰	N6/1灰	良好	細・並				(13.7)	4.1	8.1		8/8	内面朱墨付着、外面火襷
305	3区	SD161	中層	須恵器	杯	底部：回転ヘラ切後ナデ	底部：回転ナデ	2.5Y4/1黄灰	10YR6/6灰黄褐	良好	中・少						(10.6)		2/8	２次的被熱
306	3区	SD161		須恵器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	良好	中・並						(7.5)		1/8	外面火襷
307	2区	SD161	最上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	やや軟	粗・少				(10.4)	1.5	(7.4)		1/8	
308	3区	SD161	中層	土師質土器	皿	体部：マメツ、底部：回転ヘラ切？マメツ	体～底部：マメツ	5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/4にぶい橙	やや軟	中・並						(6.8)		2/8	
309	2区	SD161	最上層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	体部～底部：回転ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	良好	中・少						(5.4)		2/8	
310	2区	SD161	中層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：マメツ	体～底部：回転ナデ・マメツ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	良好	細・並	細・並	細・少				(6.4)		2/8	
311	2区	SD161	中層	土師質土器	杯	体部：マメツ、底部：回転ヘラ切後ナデ？	体～底部：マメツ	5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	良好	中・並						(6.4)		1/8	
312	3区	SD161	中層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ・マメツ	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	やや軟	中・並						(7.5)		5/8	

表31　土器観察表（5）

遺物番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面・釉	内面・胎		石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
313	2区	SD161	中層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ？マメツ	体～底部：回転ナデ・マメツ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	やや軟	中・並						(7.6)		2/8	
314	2区	SD161	中層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ？マメツ、底部：マメツ	体～底部：回転ナデ？マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・少						(6.7)		1/8 未満	
315	2区	SD161	最上層	土師質土器	杯	体～底部：マメツ	体～底部：回転ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	やや軟	中・少						(9.2)		1/8	
316	2区	SD161	最上層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並						(8.8)		1/8	
317	2区	SD161	最上層	土師質土器	杯	体～底部：マメツ	体～底部：マメツ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	やや軟	中・少						(8.4)		2/8	
318	3区	SD161	中層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切	体～底部：回転ナデ・マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	粗・少		中・少				(7.6)		1/8	
319	2区	SD161	中層	土師質土器	碗	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	良好	中・並				(14.1)				1/8 未満	
320	3区	SD161	中層	土師質土器	碗	体部：マメツ、底部：回転ヘラ切後高台貼付後ナデ	体～底部：マメツ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	やや軟	中・並		細・少						1/8	
321	3区	SD161		土師質土器	碗	体部：ミガキ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：マメツ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	やや軟	中・並	細・少					(7.4)		1/8 未満	
322	2区	SD161	下層	土師質土器	台付鉢	体～底部：回転ケズリ後高台貼付・ナデ	体～底部：マメツ	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	やや軟	中・並	細・少					(6.8)		6/8	
323	2区	SD161	最上層	土師質土器	台付杯	底部：回転ヘラ切？後高台貼付・マメツ	底部：回転ナデ？	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	軟	細・少								1/8	
324	2区	SD161	中層	黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：マメツ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	良好	中・並						(6.9)		1/8	
325	3区	SD161	中層	黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：平行ミガキ・マメツ	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y3/1 黒褐	良好	中・少	細・並	細・並				(7.4)		2/8	
326	2区	SD161	最上層	黒色土器	碗	体～底部：マメツ、高台貼付	体～底部：マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙	5Y5/1 灰	やや軟	中・並						(7.2)		3/8	
327	2区	SD161	中層	黒色土器	碗	体～底部：回転ケズリ後高台貼付・ナデ	体～底部：平行ミガキ・マメツ	10YR5/3 にぶい黄褐	5Y3/1 オリーブ黒	良好	中・並	細・並	中・並				(7.0)		1/8	
328	2区	SD161	下層	黒色土器	碗	体～底部：回転ケズリ後高台貼付・ナデ	体～底部：平行ミガキ	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y3/1 黒褐	良好	中・並						(7.4)		1/8	
329	2区	SD161	最上層	黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：平行ミガキ・マメツ	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	良好	中・少						(6.2)		1/8	
330	2区	SD161	最上層	黒色土器	碗	底部：回転ヘラ切後高台貼付・ナデ	底部：平行ミガキ	5Y4/1 灰	5Y3/1 オリーブ黒	良好	中・少						(6.8)		2/8	
331	3区	SD161	下層	緑釉陶器	碗	体～底部：施釉	体～底部：施釉	2.5G3.5/2.5 暗緑（釉）	2.5Y8/2 灰白（胎）	良好	細・並						(6.0)		5/8	畿内産、外底面にヘラ記号？
332	3区	SD161	下層	緑釉陶器	碗	底部：回転ヘラ切後ナデ・施釉	底部：回転ナデ・施釉	10BG4/1 暗青灰（釉）	10YR7/3 にぶい黄橙（胎）	良好	細・少						(8.1)		4/8	畿内産
333	3区	SD161	下層	緑釉陶器	碗	体部：回転ナデ・施釉、底部：回転ケズリナデ・高台内無釉	体～底部：回転ナデ・施釉	2.5B4/0.5 暗青灰（釉）	N7/0 灰白（胎）	良好	中・少						(6.0)		3/8	畿内産
334	3区	SD161	下層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：板ナデ後ヨコナデ、体部：板ナデ・ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	良好	中・並	細・少	細・並		(17.8)				1/8	内・外面炭化物付着
335	3区	SD161	下層	土師器	甕	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：板ナデ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	中・並	細・少	細・並						1/8 未満	
336	3区	SD161	下層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	口縁：ヨコナデ、体部：板ナデ・ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	良好	中・並	細・少	細・多		(25.1)				1/8 未満	内外面炭化物付着
337	2区	SD161	上層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	良好	中・並	細・少	細・少		(25.4)				1/8	体部内面炭化物付着
338	3区	SD161	中層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	良好	中・並	細・並	中・並		(23.4)				1/8	内外面炭化物付着
339	2区	SD161	中層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁～体部：ヨコナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	良好	中・並	細・少	細・並		(25.1)				1/8 未満	
340	3区	SD161	中層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ・ナデ	口縁：ヨコナデ、体部：板ナデ・ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐	良好	中・多	細・並	細・並		(26.8)				1/8	体部外面炭化物付着
341	3区	SD161	下層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ・板ナデ後指オサエ・ナデ	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y4/1 黄灰	良好	中・並	細・少	細・多		(25.4)				4/8	内外面炭化物付着
342	2区	SD161	最上層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ナデ	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	中・並	細・並	細・並		(30.0)				1/8 未満	
343	2区	SD161	最上層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ・ナデ、体部：板ナデ後ナデ	口縁～体部：板ナデ後ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	粗・並		細・少		(30.1)				1/8 未満	
344	2区	SD161	最上層	須恵器	甕	口縁～頸部：平行タタキ後回転ナデ、体部：格子タタキ	口縁～頸部：回転ナデ、体部：ナデ・回転ナデ	N5/0 灰	N6/0 灰	良好	粗・少				(31.6)				1/8 未満	十瓶山周辺窯産
345	2区	SD161	最上層	須恵器	甕	口縁：回転ナデ・端面に沈線１	口縁：回転ナデ	N4/0 灰	N5/0 灰	良好	細・少				(23.4)				1/8 未満	
346	2区	SD161	最上層	須恵器	壺	口縁～頸部：回転ナデ・自然釉	口縁～頸部：回転ナデ	N7/0 灰白	N6/0 灰	良好	中・少				(12.6)				1/8	
347	3区	SD161		焼締陶器	甕	体部：ハケ後押印文	体部：板ナデ・ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	2.5Y7/2 灰黄	良好	中・並								破片	常滑焼
348	2区	SD161	最上層	土師器	羽釜	口縁～鍔部：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	口縁～体部：ハケ後ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並				(22.4)				1/8	
349	3区	SD161	下層	土師器	羽釜	口縁～鍔部：ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	口縁～体部：ハケ後板ナデ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/3 にぶい褐	良好	中・並	細・並	細・少		(24.3)				1/8 未満	
350	3区	SD161	中層	土師器	羽釜	口縁：ハケ後ヨコナデ、鍔部：ヨコナデ、体部：ハケ後指オサエ・ナデ	口縁～体部：ハケ後ヨコナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	良好	中・並	細・並			(23.6)				1/8 未満	内外面炭化物付着
351	3区	SD161	中層	土師器	羽釜	口縁～鍔部：ヨコナデ・ナデ	口縁：ハケ後ヨコナデ・ナデ	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	良好	中・並		細・多		(24.5)				1/8 未満	
352	2区	SD161	最上層	土師器	羽釜	口縁～鍔部：ヨコナデ・指オサエ、体部：ハケ・ナデ	口縁：ヨコナデ、体部：板ナデ・ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	良好	中・多				(27.2)				1/8	
353	3区	SD161	下層	土師質土器	竈	掛口：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後指オサエ・ナデ？	掛口：ヨコナデ、体部：ハケ後板ナデ・ナデ	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y4/1 黄灰	良好	中・並	細・少	中・多		(20.2)				1/8	内面・破断面炭化物付着
354	3区	SD161	下層	土師器	竈	掛口：ハケ後ヨコナデ、鍔～焚口部：ヨコナデ	掛口～焚口部：ヨコナデ・ナデ	10YR5/1 褐灰	2.5Y6/1 黄灰	良好	中・並	細・少	中・多		(20.2)				1/8	内外面炭化物付着
355	2区	SD161	最上層	土師器	竈	体部：ハケ・マメツ、鍔部：ヨコナデ	体部：マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	やや軟	中・多							3.2（厚）	8/8	
356	3区	SD161	中層	土師器	竈	体部：ハケ後ナデ、底部：ヘラ切後ナデ	体部：ハケ・ナデ・マメツ	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y6/2 灰黄	良好	中・並	細・少	細・並						破片	
357	2区	SD161	最上層	土師器	竈	体部：ハケ・ナデ、鍔部：ヨコナデ	体部：ハケ・ナデ？	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	中・並							3.2（厚）	破片	内面炭化物付着
358	3区	SD161	中層	土師器	竈	体部：ハケ・マメツ、底部：未調整・スサ？状圧痕	体部：指オサエ・ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	良好	中・多	細・少	細・多						破片	
359	2区	SD161	最上層	須恵器	猿面硯	背面：平行タタキ後ケズリ後ナデ	硯面：布目・螺旋状？当て具痕後板ナデ・ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	良好	細・少							0.61（厚）	小片	
360	2区	SD161	最上層	須恵器	猿面硯	背面：格子タタキ後ケズリ・ナデ、側面：ケズリ後ナデ	硯面：螺旋状？当て具後ケズリ・ナデ	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰	良好	中・少							0.72（厚）	破片	
361	2区	SD161	最上層	須恵器	猿面硯	背面：格子タタキ後ケズリ・ナデ、側面：ケズリ後一部ナデ	硯面：螺旋状？当て具後ケズリ・ナデ	N7/0 灰白	N6/0 灰	良好	中・少							0.73（厚）	破片	
362	2区	SD161	最上層	須恵器	猿面硯	背面：格子タタキ後ナデ、側面：ケズリ後ナデ	硯面：螺旋状当て具後ナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	良好	中・少							0.95（厚）	破片	
376	2区	SX05		土師質土器	皿	体部：回転ナデ、底部：ナデ？マメツ	体～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少						(4.8)		3/8	

表 32　土器観察表（6）

遺物番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面・釉	内面・胎		石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
377	2区	SX05		土師質土器	皿	口縁部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良好	中・並						(5.0)		2/8	
378	3区	SX05		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良好	粗・少				(12.0)	2.7	(8.6)		1/8	
379	2区	SX05		土師器	羽釜	口縁：ヨコナデ、鍔部：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	口縁～体部：板ナデ・ヨコナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	粗・並				(26.5)				1/8 未満	
380	1区	SX05		須恵器	捏鉢	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	やや軟	細・多				(25.3)				1/8 未満	東播系
381	2区	SX05		土師器	竈	鍔部：指オサエ・ナデ、端面：ヨコナデ	鍔部：指オサエ・ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y6/4 にぶい黄	良好	粗・多							1.7（厚）	破片	
387	7区	SD131		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ	口縁：回転ナデ・マメツ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	中・並				(7.4)				1/8	
388	6区	SD122		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ・マメツ、底部：糸切	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・少				(8.0)	1.2	(6.6)		1/8	
389	6区	SD136		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並				(8.4)	1.5	(5.7)		1/8	
390	6区	SD126		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ・マメツ	5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙	やや軟	中・並				(11.1)				1/8 未満	
391	7区	SD109		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	中・少				(12.2)				1/8	
392	6区	SD134		土師質土器	皿	回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少						(6.8)		1/8	
393	6区	SD130		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並						(7.6)		1/8 未満	
394	6区	SD141		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？マメツ	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや軟	中・少						(8.3)		1/8 未満	
395	7区	SD117		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ	口縁：マメツ	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	良好	中・並				(14.8)				1/8 未満	
396	6区	SD123		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕・ナデ	口縁～底部：回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	良好	中・並				(14.1)		(9.8)		2/8	
397	7区	SD116		土師質土器	杯	口縁：回転ナデ、体部：指オサエ・回転ナデ・マメツ、底部：回転ヘラ切・マメツ	口縁～底部：マメツ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	やや軟	中・並				(13.4)	3.4	(10.1)		3/8	
398	6区	SD134		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切？後ナデ	体～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・少						(12.0)		1/8 未満	
399	6区	SD122		瓦器	碗	体部：指オサエ・ナデ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：ナデ？後ミガキ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y8/2 灰白	良好	細・少						(3.2)		1/8	和泉型
400	7区	SD109		瓦器	碗	体部：指オサエ・マメツ、底部：高台貼付後ナデ・マメツ	体～底部：マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	やや軟	細・少						(5.0)		1/8	和泉型
403	2区	包含層2		土師質土器	碗	体部：回転ケズリ後ナデ、底部：回転ヘラ切	体部～底部：回転ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	やや軟	粗・並						6.0		8/8	
404	2区	包含層2		黒色土器	皿	口縁：回転ナデ？後ミガキ、底部：ケズリ後ミガキ	口縁～底部：ミガキ	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	やや軟	中・少				(11.2)		(9.0)		1/8	
405	2区	包含層2		黒色土器	碗	口縁～体部：回転ナデ後回転ミガキ	口縁～体部：回転ナデ後回転ミガキ	5Y3/1 オリーブ黒	5Y3/1 オリーブ黒	良好	中・少				(15.1)				1/8	
406	2区	包含層2		黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：マメツ	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	良好	中・少						(5.8)		1/8	
407	2区	包含層2		黒色土器	碗	体部：ミガキ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：ミガキ・マメツ	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	良好	中・少						(5.8)		2/8	
408	2区	包含層2		黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：ミガキ・マメツ	7.5Y3/1 オリーブ黒	7.5Y3/1 オリーブ黒	やや軟	中・並		細・少				(7.2)		1/8	
409	2区	包含層2		青磁	碗	底部：施釉、高台畳付～内：回転ケズリ・無釉	底部：施釉	2.5GY6/1 オリーブ灰（釉）	N8/0 灰白（胎）	良好							(6.0)		2/8	龍泉窯系
410	1区	包含層2		土師質土器	擂鉢	口縁：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	口縁～体部：ハケ・板ナデ後卸目	2.5Y5/1 黄灰	7.5YR6/3 にぶい褐	良好	中・並		中・少						1/8 未満	
411	3区	包含層2		瓦質土器	擂鉢	口縁：回転ナデ、体部：ナデ・マメツ	口縁～体部：板ナデ・ナデ	5Y3/1 オリーブ黒	5Y4/1 灰	良好	中・並								1/8 未満	
412	1区	包含層2		焼締陶器	擂鉢	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ後卸目５条／単位	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	良好	中・少								1/8 未満	備前焼
413	2区	包含層2		焼締陶器	甕	口縁～頸部：回転ナデ	口縁～頸部：回転ナデ	5YR4/1 褐灰	5YR5/2 灰褐	良好	粗・並								1/8 未満	備前焼
414	2区	包含層2		須恵器	獣面硯	背面：格子タタキ後ナデ	硯面：螺旋状？当て具後ナデ	5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	やや軟	中・少							0.74（厚）	破片	
418	3区	SK18		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	6PB3/12 さえた青紫（釉）	N8/0 灰白（胎）	良好					(10.6)				1/8	
419	3区	SK18		染付磁器	鉢	口縁：施釉	口縁：施釉	6PB4/12 さえた青紫	N8/0 灰白（胎）	良好									1/8 未満	肥前系
420	3区	SK18		焼締陶器	擂鉢	体部：回転ケズリ、底部：ハナレ砂	体部：回転ナデ後卸目、底部：回転ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	良好	中・並						(9.6)		1/8	堺・明石産
421	3区	SK18		土師質土器	井戸側	体部：マメツ、底部：ナデ	体部：板ナデ後指オサエ・ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5Y4/1 黄灰	良好	粗・並	細・多	細・並				(95.6)		1/8 未満	御既産か
422	2区	SK19		土師質土器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：ミガキ・マメツ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白	やや軟	中・少						(4.4)		1/8	
423	2区	SK19	下層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ・マメツ	口縁：ヨコナデ、体部：板ナデ？マメツ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	良好	中・並	細・少	細・多		(17.7)				1/8 未満	
424	2区	SK19	下層	土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体部：ハケ後ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	中・並	細・少	細・多						1/8 未満	
425	2区	SK20		土師質土器	鍋	口縁：ヨコナデ・ナデ	口縁：板ナデ後ナデ	5YR4/2 灰褐	5YR6/6 橙	良好	中・並								1/8 未満	外面炭化物付着
427	4区	SE01	石組内	土師質土器	火消壺	口縁：回転ナデ、体部：回転ナデ・マメツ	口縁部：回転ナデ、体部：指オサエ後ケズリ・回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	良好	中・並	細・多	細・多		(17.6)				2/8	御既産か
428	4区	SE01	掘方	土師質土器	井戸側	口縁：回転ナデ・ナデ後沈線文	口縁：ハケ	7.5YR5/6 明褐	10YR3/1 黒褐	良好	中・並	細・少	中・多						1/8 未満	御既産か、外・破断面炭化物付着
429	4区	SE01	石組内	焼締陶器	鉢	口縁：回転ナデ、体部：回転ケズリ	口縁～体部：回転ナデ・ナデ	5Y4/2 灰褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	良好	中・並				(33.2)				1/8 未満	備前焼
430	4区	SE01	掘方	焼締陶器	擂鉢	口縁：回転ナデ・沈線１、体部：回転ケズリ後回転ナデ？	口縁：回転ナデ、体部：回転ナデ後卸目	5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	良好	中・多				(32.6)				1/8 未満	堺・明石産
431	4区	SE01	石組内	土師質土器	焙烙	口縁：ヨコナデ、体部：指オサエ後ナデ	口縁：ヨコナデ、体部：板ナデ	5Y2/1 黒褐	5Y5/4 にぶい赤褐	良好	中・並	細・並	細・少		(48.2)				1/8 未満	御既産か、外面炭化物付着
432	4区	SE01	石組内	土師質土器	大甕	口縁：回転ナデ、体部：板ナデ（ケズリ）後回転ナデ・ナデ	口縁：回転ナデ、体部：板ナデ（ケズリ）後指オサエ・回転ナデ	7.5YR5/6 明褐	10YR6/4 にぶい黄橙	良好	粗・多	細・並	細・少		(94.8)				1/8 未満	御既産か
435	3区	SD142		土師質土器	杯	体～底部：マメツ	体～底部：マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	やや軟	中・少						(9.1)		1/8 未満	
436	2区	SD143		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ	体～底部：回転ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並						(8.0)		1/8	外面炭化物付着
437	2区	SD143		黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：マメツ	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y3/1 黒褐	良好	中・少						(6.4)		1/8 未満	
438	2区	SD143		灰釉陶器	壺	口縁：回転ナデ・施釉	口縁：回転ナデ・施釉	5Y7/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄	良好	細・少								1/8 未満	
440	1区	SD148	上層	土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後板状圧痕	口縁～底部：回転ナデ・ナデ	5YR7/8 橙	5YR7/6 橙	良好	中・少				(8.5)	1.7	(5.8)		5/8	
441	2区	SD148		土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・少		細・少		(11.8)				1/8	
442	1区	SD148	下層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切・マメツ	体～底部：回転ナデ	5YR7/8 橙	5YR6/6 橙	良好	中・並		細・少				(9.8)		1/8	

表 33　土器観察表（7）

遺物番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm）				残存率	備考
						外面	内面	外面・釉	内面・胎		石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	口径	器高	底径	その他		
443	1区	SD148	上層	土師質土器	鍋	口縁～体部：ヨコナデ・指オサエ・ナデ？	口縁～体部：板ナデ・ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並		細・並						1/8 未満	外面炭化物付着
444	1区	SD148		焼締陶器	甕	体部：ハケ後ナデ、底部：ナデ	体～底部：回転ナデ・ナデ	5YR5/2 灰褐	7.5YR5/1 褐灰	良好	粗・並						(23.5)		1/8 未満	備前焼
445	1区	SD148		土師質土器	足釜	口縁～鍔部：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	口縁：ヨコナデ、体部：板ナデ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・並		細・少		(33.6)				1/8 未満	体部外面炭化物付着
446	5区	SD046		縄文土器	深鉢	口縁：RL 縄文・ナデ・沈線文	口縁：ナデ・マメツ	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	良好	中・並		中・少						1/8 未満	
447	5区	SD046		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：マメツ	体～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	細・並						(10.0)		1/8 未満	
448	5区	SD083		施釉陶器	鉢	口縁：施釉	口縁：施釉	5Y7/3 浅黄（釉）	5Y7/2 灰白（胎）	良好	細・少								1/8 未満	肥前系
449	5区	SD090		瓦器	碗	底部：高台貼付後ナデ・マメツ	底部：マメツ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	良好	中・少						(4.6)		1/8	和泉型
450	5区	SD046		染付磁器	碗	口縁：施釉	口縁：施釉	10BG4/1 暗青灰（呉須）	5Y8/1 灰白（胎）	良好					(13.7)				1/8 未満	肥前系
451	5区	SD093		染付磁器	碗	口縁～体部：施釉	口縁～体部：施釉	5B5/1 青灰（呉須）	5Y8/1 灰白（胎）	良好					(9.7)				1/8	肥前系
454	1区	SD151		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切後ナデ？マメツ	体～底部：回転ナデ・ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並						(8.4)		1/8	
455	5区	遺構外		縄文土器	浅鉢	口縁端：縄文、口縁部：ミガキ	口縁：ミガキ？マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	良好	中・多								1/8 未満	
456	6区	遺構外		弥生土器	長頸広口壺	口縁：ヨコナデ、頸部：ハケ	口縁：ハケ、頸部：指オサエ・ナデ？マメツ	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	良好	粗・並		細・少		(16.0)				1/8	
457	5区	遺構外		弥生土器	壺	体部：タタキ後一部ナデ・マメツ、底部：ナデ？マメツ	体～底部：板ナデ後ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/6 暗褐	良好	中・多						2.9		8/8	
458	5区	遺構外		弥生土器	甕	口縁：タタキ後ヨコナデ・マメツ、体部：タタキ後ハケ？マメツ	口縁：ヨコナデ？マメツ、体部：板ナデ？マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	中・多				(15.2)				1/8	
459	6区	遺構外		弥生土器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ？後指オサエ・ナデ	7.5YR5/6 明褐	10YR6/4 にぶい黄橙	良好	粗・少		細・少		(14.0)				1/8	体部外面炭化物付着
460	5区	遺構外		弥生土器	甕	口縁：ヨコナデ・マメツ、体部：ハケ・マメツ	口縁：ハケ、体部：ハケ後指オサエ・ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	良好	中・並				(14.8)				1/8	
461	5区	遺構外		古式土師器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ・マメツ	口縁：ヨコナデ・マメツ、頸部：ナデ	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR4/4 褐	良好	中・並		細・少		(15.2)				1/8	
462	6区	遺構外		古式土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR5/6 明赤褐	良好	中・並		中・多		(12.0)				1/8 未満	
463	6区	遺構外		古式土師器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：ハケ	口縁：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ・マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	中・並		中・多		(13.6)				1/8 未満	
464	5区	遺構外		弥生土器	甕	体部：タタキ後一部ナデ、底部：ナデ？マメツ	体部：板ナデ？マメツ、底部：指オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	中・並						3.2		8/8	
465	5区	遺構外		古式土師器	高杯	杯部：ヨコナデ	杯部：ヨコナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良好	中・少	細・並	細・少		(22.6)				1/8 未満	
466	5区	遺構外		弥生土器	高杯	脚柱～裾部：ミガキ・マメツ	脚柱部：シボリ目、脚裾部：ナデ？マメツ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	良好	中・並		細・少						6/8	
467	5区	遺構外		古式土師器	小形丸底壺	口縁：ヨコナデ？マメツ、体部：ハケ・マメツ	口縁：ヨコナデ・指オサエ、体部：指オサエ・ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR4/3 褐	良好	中・並				(8.8)				1/8	
468	5区	遺構外		須恵器	提瓶	口頸部：回転ナデ・沈線1	口頸部：回転ナデ	5Y7/1 灰白	N7/0 灰	良好	中・少				(7.2)				1/8	
469	2区	遺構外		土師器	不明	体部：ハケ・マメツ、底部：回転ヘラ切？マメツ	体部：板ナデ・ナデ、底部：マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	やや軟	中・多		細・並				(15.0)		2/8	内面の一部に炭化物付着
470	1区	遺構外		青磁	碗	口縁：施釉	口縁：片彫文・施釉	5Y6/3 オリーブ黄（釉）	5Y8/1 灰白（胎）	良好									1/8 未満	龍泉窯系
471	2区	遺構外		須恵器	獣面硯	背面：格子タタキ後ケズリ	硯面：布目・螺旋状？当て具後ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	良好	細・少							0.56（厚）	破片	
472	2区	遺構外		須恵器	獣面硯	背面：格子タタキ後ナデ	硯面：布目後ケズリ・ナデ	N7/0 灰白	7.5Y7/1 灰白	良好	中・少							0.72（厚）	破片	
473	2区	遺構外		須恵器	獣面硯	背面：格子タタキ後ナデ、側面：ケズリ後ナデ	硯面：布目・螺旋状？当て具後ナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	良好	細・少							0.98（厚）	破片	
474	2区	遺構外		須恵器	獣面硯	背面：格子タタキ後ケズリ・ナデ、側面：ケズリ後ナデ	硯面：布目・螺旋状？当て具後ケズリ・ナデ	N6/0 灰	N7/0 灰白	良好	中・少							0.68（厚）	破片	
475	2区	遺構外		須恵器	獣面硯	背面：ケズリ後ナデ？、側面：ケズリ後ナデ	硯面：布目・螺旋状？当て具？後ナデ	N7/0 灰白	N8/0 灰白	良好	細・少							0.89（厚）	破片	
476	2区	遺構外		須恵器	獣面硯	背面：格子タタキ後ナデ、側面：ケズリ後ナデ	硯面：布目・平行当て具後ケズリ・ナデ	N7/0 灰白	N7/0 灰白	良好	中・少							0.71（厚）	破片	

表 34　土器観察表（8）

報文番号	調査区名	遺構名	層位	器種	調整		色調		焼成	胎土				計測値（cm・g）				残存率	備考
					外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	長径・外径	短径・口径	厚さ・高	重量		
274	6区	SD128		フイゴ羽口	熔解物付着	無調整？	2.5GY5/1 オリーブ灰色	10R3/6 暗赤	良好（土師質）	中・多				(6.5)	(2.5)	2.0		1/8	
363	3区	SD161	中層	土馬	脚部：ケズリ・マメツ、蹄底：ナデ？マメツ		7.5YR6/4 にぶい橙		やや軟（土師質）	中・多				2.2	1.5	5.4		破片	
364	3区	SD161	中層	土馬	脚部：ケズリ後一部ナデ、蹄底：ナデ・マメツ		2.5Y7/3 浅黄		やや軟（土師質）	中・並				3.4	2.8	(4.4)		破片	
365	2区	SD161	下層	不明	ナデ		7.5YR6/6 橙		良好（土師質）	中・多				2.5	2.2			破片	

表 35　土製品観察表

遺物番号	調査区	遺構名	層位	器種	調整	色調	焼成	胎土				法量（cm・g）					残存率	備考
								石英・長石	角閃石	雲母	結晶片岩	長	長径・幅	短径・厚	孔径	重量		
14	4区	SR02		管状土錘	マメツ	7.5YR7/6 橙	やや軟（土師質）	中・並				3.95	2.93	2.87	0.75	(26.66)	一部欠損	
68	3区	SX01		管状土錘	マメツ	5YR6/8 橙	良好（土師質）	中・少				(2.93)	1.03	0.91	0.28	(2.65)	半損	
69	2区	SX01		棒状土錘	ナデ	2.5Y6/2 灰黄	良好（土師質）	中・多	細・少			(4.68)	1.67	1.42	0.41	(12.74)	半損	
70	3区	SX01		棒状土錘	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	良好（土師質）	中・並		細・少		(4.71)	1.59	1.31	0.30	(11.55)	半損	
71	3区	SX01		棒状土錘	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	良好（土師質）	中・並		細・少		(6.80)	1.36	1.62	0.29	(16.06)	半損	
82	2区	SX03	上層	棒状土錘	ナデ	2.5Y4/1 黄灰	良好（土師質）	中・並	細・少			(3.80)	1.26	1.16	0.39	(7.07)	半損	
113	6区	SP85		棒状土錘	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	良好（土師質）	中・並				(5.89)	1.22	1.23	0.38	(12.10)	半損	
262	7区	SD105		棒状土錘	ナデ・マメツ	5YR7/4 にぶい橙	良好（土師質）	中・多				(3.89)	1.26	0.96	0.37	(5.10)	半損	
366	2区	SD161	下層	棒状土錘	ナデ	10YR6/4 灰黄褐	良好（土師質）	細・少	細・並			(5.04)	1.31	1.33	0.35	(10.45)	半損	
367	2区	SD161	中層	棒状土錘	ナデ	N4/6 灰	良好（土師質）	細・並		細・少		(5.32)	1.43	1.29	0.30	(11.74)	半損	
382	2区	SX05		棒状土錘	ナデ	2.5Y5/1 黄灰	良好（土師質）	中・少		細・並		(3.96)	1.41	1.26	0.38	(7.00)	半損	
426	2区	SK20		有溝土錘	指オサエ・ナデ	10YR8/3 浅黄橙	良好（土師質）	中・並				3.6	(2.0)	1.9	−	(10.26)	一部欠損	

表 36　土錘観察表

遺物番号	調査区	遺構名	層位	器種	色調		焼成	胎土				計測値（cm）				調整			残存率	備考
					凸面	凹面		石英・長石	角閃石	雲母	その他	長さ	幅	厚さ	その他	凸面	凹面	端・側面		
114	6区	SP206		平瓦	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	須恵質（硬質）	粗・並				(12.2)	(10.5)	2.9		縄目タタキ	布目 4 ～ 5 本／cm	布目後ケズリ・ナデ	破片	
115	6区	SP218		平瓦	10YR5/2 灰黄褐	10Y5/1 灰	須恵質（硬質）	中・並				(5.6)	(5.9)	1.7		縄目タタキ	布目 5 ～ 6 本／cm	ケズリ後ナデ	破片	
116	6区	SP205		丸瓦	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/3 淡黄	須恵質（軟質）	中・少				(8.9)	(6.9)	2.1		ケズリ後ナデ	布目 5 ～ 6 本／cm	ケズリ後ナデ	破片	
193	5区	SD019		平瓦	N6/0 灰	10Y5/1 灰	須恵質（硬質）	中・多				(7.0)	(11.0)	2.1		縄目タタキ	布目 9 ～ 10 本 /cm	ケズリ後ナデ	破片	
257	7区	SD102	下層	平瓦	10YR5/2 灰黄褐	10YR8/2 灰白	土師質（軟質）	粗・並				(5.6)	(11.8)	2.3		縄目タタキ	布目 8 ～ 9 本 /cm・マメツ	ケズリ後ナデ	破片	
275	6区	SD128		丸瓦	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	土師質（硬質）	中・並				(8.2)	(3.5)	1.3		縄目タタキ後ナデ	布目 8 本 /cm	ケズリ後ナデ	破片	
282	7区	SD129		平瓦	N6/0 灰	N6/0 灰	須恵質（硬質）	粗・並				(7.7)	(8.6)	2.5		縄目タタキ後一部ナデ	布目 7-8 本 /cm	ナデ	破片	
284	6区	SD139		平瓦	7.5Y4/1 灰	2.5Y5/2 暗灰黄	須恵質（軟質）	粗・多				(8.7)	(5.8)	2.8		縄目タタキ	布目 4 ～ 5 本 /cm	布目後ケズリ・ナデ	破片	
383	2区	SX05		平瓦	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	土師質（やや軟）	中・少				(12.6)	(11.0)	2.6		縄目タタキ	布目 6 本 /cm	ケズリ後ナデ	破片	
384	2区	SX05		平瓦	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	土師質（やや軟）	中・少				(6.7)	(6.4)	1.9		縄目タタキ	布目 5 本 /cm	ケズリ後ナデ	破片	
415	3区	包含層 2		平瓦	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	須恵質（やや軟）	中・少				(9.2)	(17.7)	3.1		縄目タタキ	布目 7 本 /cm		破片	
416	2区	包含層 2		平瓦	N4/0 灰	5Y7/1 灰白	瓦質（良好）	粗・並				(6.8)	(5.5)	2.0		離れ砂	ナデ・離れ砂	ケズリ後ナデ	破片	
433	4区	SE01		丸瓦	N4/0 灰	N4/0 灰	瓦質（良好）	粗・少				21.8	13.3	1.5		ナデ	コビキ B 後棒状タタキ	ケズリ後ナデ	8/8	
477	7区	遺構外		平瓦	5Y8/1 灰白	5Y7/1 灰白	須恵質（軟質）	細・少				(13.7)	(12.7)	2.5		縄目タタキ	布目 5 ～ 6 本 /cm	布目後ナデ	破片	

表 37　瓦類観察表

遺物番号	調査区	遺構名	層位	器種	計測値（cm・g）				材質	残存	備考
					現存長	最大幅	最大厚	重量			
4	5 区	SR01		石鏃	(3.79)	2.56	0.71	5.90	サヌカイト	基部折損	凸基式
136	5 区	SK04		磨石	9.30	5.56	5.65	401.01	安山岩	ほぼ完存	
176	6 区	SK09		石鏃	2.12	1.61	0.31	1.02	サヌカイト	ほぼ完存	平基式
276	7 区	SD128		石鏃	1.87	1.43	0.3	0.69	サヌカイト	ほぼ完存	平基式
385	2 区	SX05		スクレイパー	10.51	3.78	1.00	51.25	サヌカイト	ほぼ完存	
478	5 区	遺構外		石鏃	(2.27)	(1.60)	0.25	0.65	サヌカイト	基部折損	凹基式
479	5 区	遺構外		石鏃	(2.99)	(1.71)	0.32	1.75	サヌカイト	基部折損	
480	2 区	遺構外		磨石	4.55	9.44	3.01	144.76	砂岩	破損	
481	4 区	遺構外		管状骨製品	3.63	1.84	0.97	12.57	骨	ほぼ完存	長径 0.97cmの穿孔
485	1 区	遺構外		五輪塔	23.4	30.7	30.5	17.100	角礫凝灰岩（火山石）	一部欠損	水輪

表 38　石器・石製品・骨角器観察表

遺物番号	調査区	遺構名	層位	器種	計測値（cm）			樹種	木取り	残存	備考
					現存長	現存幅	最大厚				
26	3 区	SR03		木杭	20.3	5.1	4.1	モミ属	芯持	欠損	
27	3 区	SR03		木杭	26.5	4.9	4.9	コナラ属クヌギ節	芯持	欠損	
28	3 区	SR03		木杭	29.9	6.6	6.2	コナラ属クヌギ節	芯持	欠損	
29	3 区	SR03		丸太材	21.3	9.0	9.1	コナラ属クヌギ節	芯持	上端折損か	
30	3 区	SR03		木杭	51.2	6.4	6.2	コナラ属クヌギ節	芯持	上端折損か	
31	3 区	SR03		丸太材	30.5	11.5	10.5	コナラ属クヌギ節	芯持	上端折損か	
32	3 区	SR03		木杭	20.6	7.5	8.6	コナラ属クヌギ節	芯持	ほぼ完存	
34	3 区	SE02		曲物	41.0	(10.6)	0.4			破損	
35	3 区	SE02		曲物	42.0	22.7	0.4			破損	
36	3 区	SE02		曲物	42.9	21.4	0.5			破損	放射性炭素年代測定を実施
72	3 区	SX01		斎串	8.8	2.0	0.3	アスナロ	板目	破片	
73	2 区	SX01		板材	17.5	7.3	2.1	ヒノキ	板目	ほぼ完存	
119	6 区	SP99		柱材	43.7	7.2	5.4	マツ属複維管束亜族	芯持	ほぼ完存？	
137	5 区	SK04	下～最下層	竹製容器	7.1（口径）	4.1（高さ）	6.9（底径）	タケ亜科		底部の一部折損	
138	5 区	SK04	下～最下層	木杭	9.3	2.4	2.3	マツ属複維管束亜族	芯持	上端折損	
139	5 区	SK04	下～最下層	加工木	9.2	2.4	2.0	マツ属複維管束亜族	割材	上端部焼損	上半炭化
140	5 区	SK04	下～最下層	加工木	13.8	2.7	1.4	マツ属複維管束亜族	柾目	上端部焼損	上半炭化
141	5 区	SK04	下～最下層	加工木	12.3	2.2	1.2	マツ属複維管束亜族	割材	上端部焼損	上半炭化
142	5 区	SK04	下～最下層	板材	20.1	6.0	1.3	ツブラジイ	柾目	下端部の一部折損	腐食顕著
143	5 区	SK04	下～最下層	加工木	7.5	9.9	4.3	マツ属複維管束亜族	割材	ほぼ完存	虫損痕
150	7 区	SK08	上層	加工木	12.4	2.1	1.4	マツ属複維管束亜族	割材	上下端折損	
151	7 区	SK08		板材	10.4	4.6	1.0	ツブラジイ	柾目	ほぼ完存	
152	7 区	SK08		板材	27.4	2.5	0.5	モミ属	板目	下端を中心に折損	虫損痕
153	7 区	SK08		板材	24.0	3.3	0.3	モミ属	追柾目	上下端折損か	
154	7 区	SK08	下～最下層	板材	21.5	3.3	0.5	モミ属	板目	一部折損	
155	7 区	SK08	下～最下層	板材	20.3	10.5	0.7	ツガ属	板目	一部折損	
156	7 区	SK08		板材	29.2	10.6	0.3	ツガ属	板目	下端一部折損	
157	7 区	SK08		板材	53.3	9.9	0.6	モミ属	板目	上下端・左図左半折損	
158	7 区	SK08		板材	49.5	8.2	0.6	モミ属	板目	下端折損	
159	7 区	SK08		板材	37.2	9.1	0.4	モミ属	板目	周縁折損	
160	7 区	SK08	下～最下層	板材	72.0	4.2	0.7	モミ属	板目	下端部折損	
161	7 区	SK08		板材	68.9	9.9	0.9	モミ属	板目	下端部折損	虫損痕
162	7 区	SK08		木杭	15.0	2.6	2.5	マツ属複維管束亜族	芯持	ほぼ完存	上端炭化
163	7 区	SK08	下～最下層	板材	14.0	4.0	1.9	マツ属複維管束亜族	板目	下端と背面折損	
164	7 区	SK08	上層	板材（端材）	5.6	3.6	1.1	マツ属複維管束亜族	板目		
165	7 区	SK08		板材	55.0	10.7	0.6	ツガ属	板目	一部折損	
166	7 区	SK08		板材	49.5	10.7	0.4	ツガ属	板目	一部折損	
167	7 区	SK08	下～最下層	加工木	8.0	4.0	2.5	マツ属複維管束亜族	割材	下端折損	虫損痕
168	7 区	SK08	下～最下層	加工木	8.3	4.6	2.9	マツ属複維管束亜族	芯持	上下端折損	虫損痕
169	7 区	SK08	下～最下層	加工木	9.5	3.3	2.3	マツ属複維管束亜族	割材	下端・左図左半折損	
170	7 区	SK08	下～最下層	加工木	10.2	4.8	2.2	マツ属複維管束亜族	板目	左右側縁・上端折損	虫損痕
171	7 区	SK08		加工木	16.4	4.9	3.2	マツ属複維管束亜族	割材	上端折損	虫損痕
172	7 区	SK08	下層	板材	16.4	3.4	1.8	マツ属複維管束亜族	板目	下端と背面折損	虫損痕
173	7 区	SK08		加工木	12.2	4.2	2.7	マツ属複維管束亜族	割材	一部折損	虫損痕
375	2 区	SD161	下層	板材	12.3	4.1	1.2	カヤ	板目	欠損	一部炭化
434	4 区	SE01		木杭？	28.5	3.7	4.3	マツ属複維管束亜族	芯持	ほぼ完存	年輪数８～10

表 39　木器・木製品観察表

遺物番号	調査区名	遺構名	層位	器種	計測値（cm・g）				材質	残存	備考
					現存長	最大幅	現存厚	重さ			
74	3 区	SX01		鉄釘	5.5	1.0	0.4		鉄	ほぼ完存	角釘
87	6 区	SB06（SP179）		鉄釘？	3.2	0.8	0.7		鉄	上下端折損	角釘？
88	6 区	SB07（SP162）		鉄釘	2.6	0.3	0.3		鉄	上下端折損	角釘
117	5 区	SP68		鉄釘	5.3	0.8	0.7		鉄	下端部折損	角釘
118	7 区	SP168		鉄釘？	3.7	0.7	0.6		鉄	上下端折損	角釘？
180	6 区	SK13		鉄釘	7.1	1.0	0.9		鉄	下端部折損	角釘
185	5 区	SD012		鉄釘	2.2	0.5	0.6		鉄	頭部・下端部折損	角釘
194	5 区	SD019		鉄滓	3.60	3.53	1.34	14.66	鉄	一部折損	鍛錬鍛冶滓
277	6 区	SD128		鉄釘？	3.7	0.6	0.55		鉄	上下端折損	角釘？
286	2 区	SD144		鉄滓	2.2	2.9	1.6	14.21	鉄	一部折損	
287	2 区	SD144		鉄滓	4.4	3.5	1.6	29.12	鉄	一部折損	
299	2 区	SD159		鉄釘	3.2	0.5	0.5		鉄	一部折損	角釘
368	2 区	SD161	最上層	鉄釘	2.0	0.7	0.5		鉄	破片	角釘
369	2 区	SD161	最上層	鉄滓	2.0	1.4	1.2	4.03	鉄	一部折損	
370	2 区	SD161		鉄滓	2.6	1.9	1.3	8.73	鉄	一部折損	
371	2 区	SD161		鉄滓	4.2	2.7	1.6	16.78	鉄	一部折損	
372	2 区	SD161	最上層	鉄滓	3.3	2.3	1.4	8.25	鉄	一部折損	
373	2 区	SD161		鉄滓	4.2	4.7	2.0	41.04	鉄	一部折損	鍛錬鍛冶滓
374	2 区	SD161		鉄滓	5.2	4.8	3.5	121.95	鉄	一部折損	精錬鍛冶滓
386	2 区	SX05		鉄滓	4.4	2.4	1.3	14.83	鉄	一部折損	
401	6 区	SD134		刀子	3.0	1.4	0.2		鉄	小片	
402	6 区	SD134		鉄滓	3.50	2.96	2.90	34.81	鉄	一部折損	
417	2 区	包含層２		鉄滓	2.7	1.6	1.2	5.20	鉄	一部折損	
439	2 区	SD143		鉄滓	2.0	1.9	1.4	7.95	鉄	一部折損	
452	5 区	SD046		不明	3.2	2.1	0.25		鉄	小片	
453	5 区	SD100		鉄釘	4.2	0.9	0.7		鉄	下端部折損	角釘
482	2 区	遺構外		銅碗	1.2	2.5	0.02		銅	小片	483 と同一個体？
483	2 区	SD161	最上層	銅碗？	2.1	2.5	0.01		銅	小片	482 と同一個体？
484	6 区	遺構外		鉄滓	8.45	6.45	3.03	100.11	鉄	一部折損	

表 40　金属器観察表

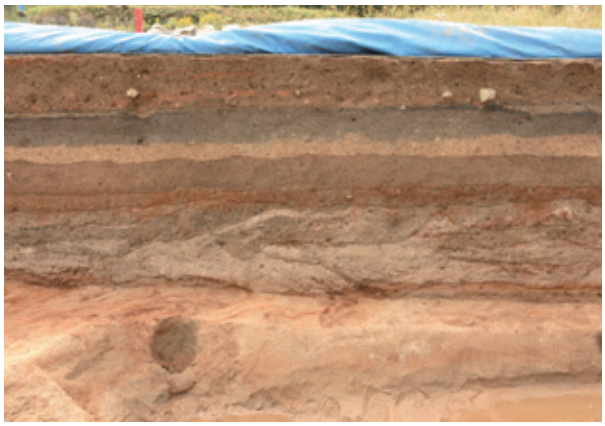
写 真 図 版

図版９　遺構写真１（第１次調査区）

１・２区南半部全景（西より）

１区遺構検出状況（西より）

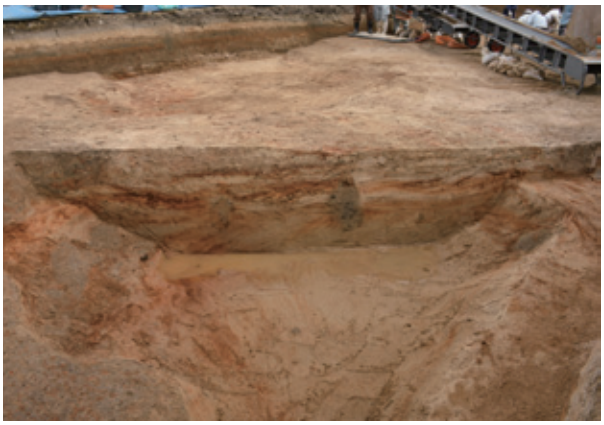
１区全景（西より）



１区南壁基本層序（北より）

１・２区遠景（西より）

２区 SD148 検出状況（西より）



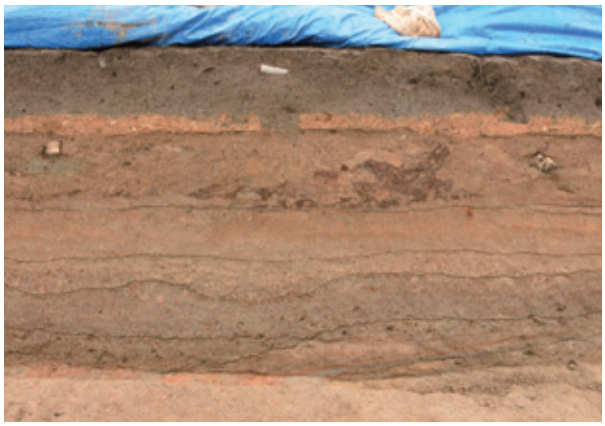
２区 SD148 土層断面（南西より）

２区 SD148 全景（北より）

２区 SD157 ～ SD158 全景（西より）

２区 SD158 土層断面（西より）

２区 SD157 土層断面（西より）



２区南壁基本層序（北より）

２区東壁基本層序（西より）

図版 11　遺構写真３（第１次調査区）

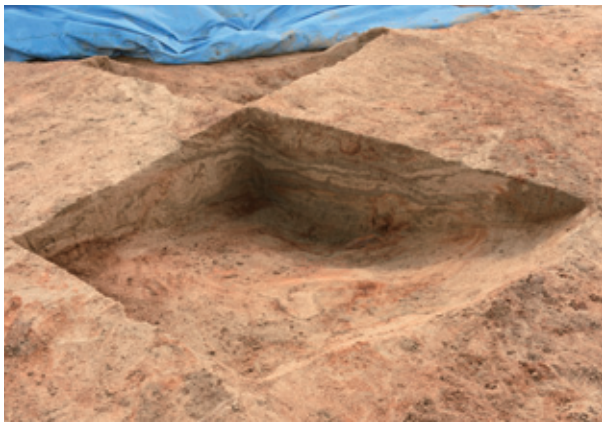
２区北半全景（西より）

２区北半遺構検出状況（西より）

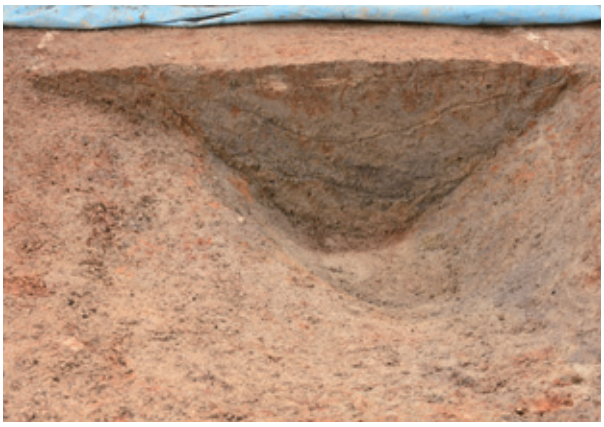
２区北壁土層（南西より）

２区 SK19 全景（西より）

２区 SK19 土層（西より）



2 区 SK20 土層（北より）



2 区 SD143 土層（北より）

2 区 SD144・SD145 全景（西より）

2 区 SD144・SD145 全景（東より）

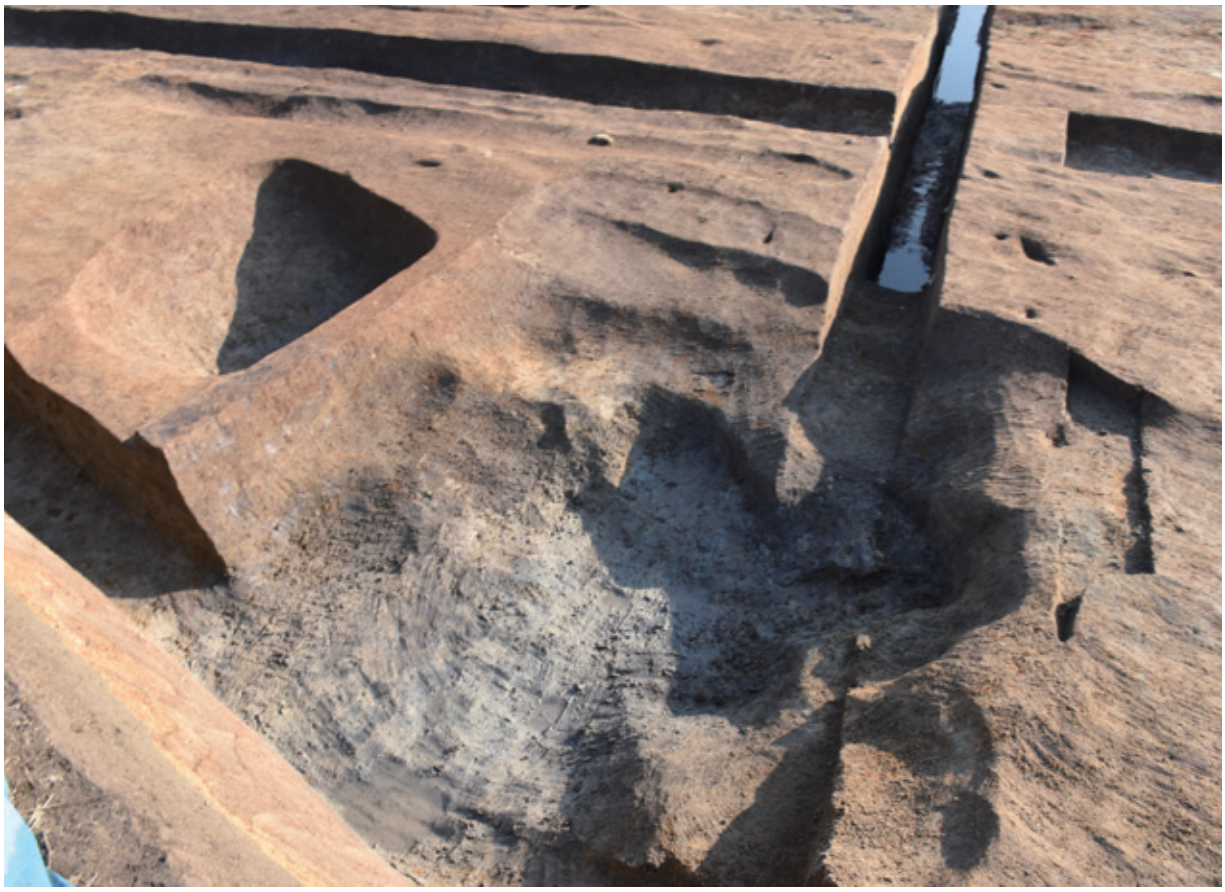
2 区 SD144 土層（東より）

2 区 SD145 土層（東より）

2 区 SX02 全景（北より）

2 区 SX02 土層（西より）

図版 13　遺構写真５（第１次調査区）



２区 SX03・SX04 全景（北より）

２区 SX03 土層（北より）

２区 SX03 土層（東より）

２区 SX03 西半土層（北より）

２区 SX04 土層（北より）

２区 SD161 全景（西より）

２区 SD161 検出状況（西より）

２区 SD161 底面有機物層検出状況（東より）

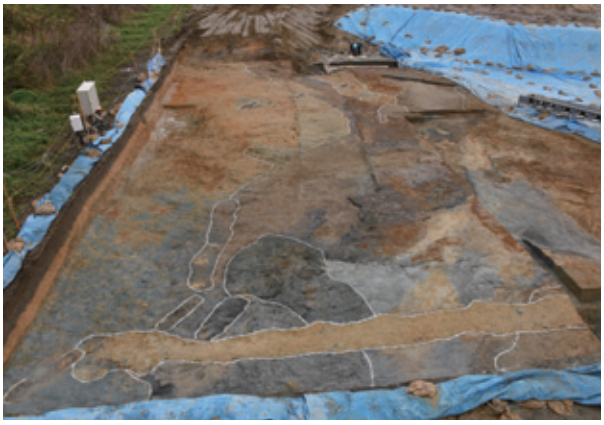
２区 SD161 土層（東より）

２区 SD161 土層（西より）

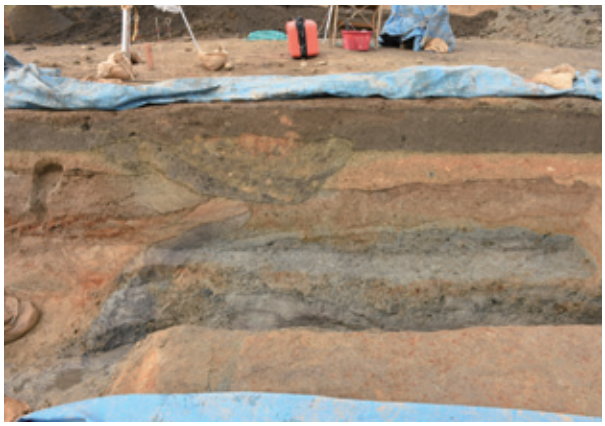
図版 15　遺構写真７（第１次調査区）

３区北半全景（東より）

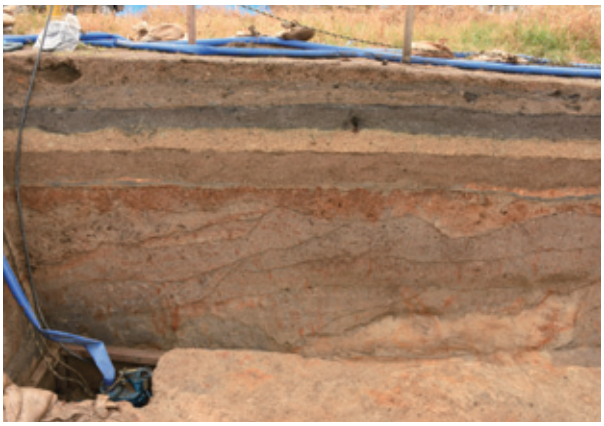
３区北半遺構検出状況（南西より）



３区北半遺構検出状況（西より）



３区西壁基本層序（東より）



３区南壁基本層序（北より）

３区全景（西より）

３区西半・４区全景（西より）

３区 SK18 板材出土状況（南より）

３区 SK18 土層（南より）

３区 SK18 全景（南より）

３区 SE02 検出状況（南より）

３区 SE02 土層（東より）

3 区 SE02 曲物出土状況（東より）

3 区 SE02 曲物内遺物出土状況（西より）

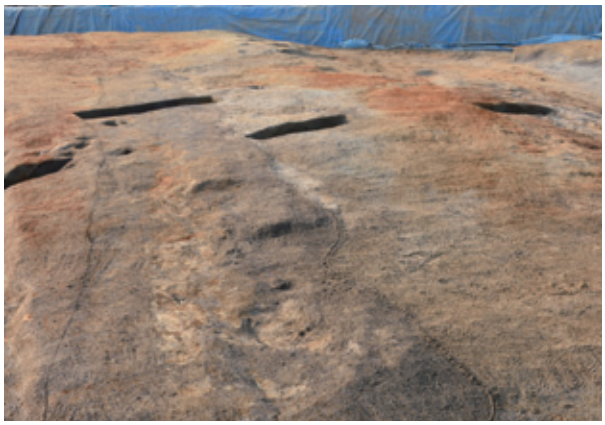
3 区 SE02 最下段曲物出土状況（東より）

3 区 SE02 最下段曲物出土状況（南東より）

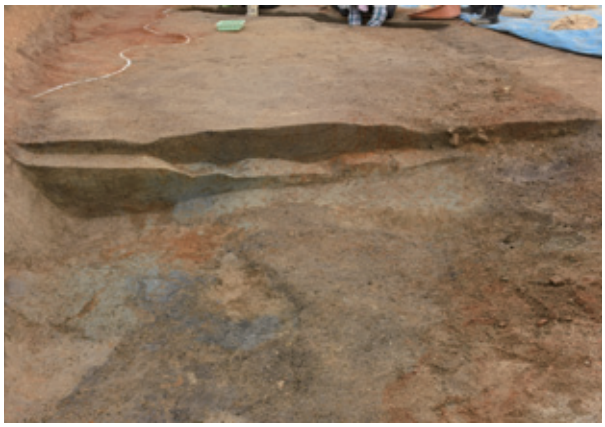
3 区 SE02 全景（東より）

図版 19　遺構写真 11（第 1 次調査区）

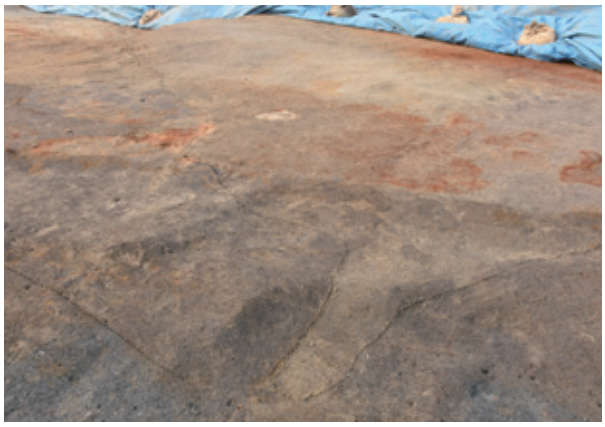
3 区 SD145 土層（西より）



3 区 SD145 検出状況（東より）



3 区 SD142 土層（西より）



3 区 SD142 検出状況（東より）

3 区 SD142 全景（東より）

3 区 SD146 土層（西より）

3 区 SD145・SD146 全景（西より）

3 区 SD145・SD146 全景（東より）

３区 SX01 遺物出土状況（西より）

３区 SX01 検出状況（西より）

３区 SX01 検出状況（東より）

３区 SX01 遺物出土状況（東より）

３区 SX01 遺物出土状況（南西より）

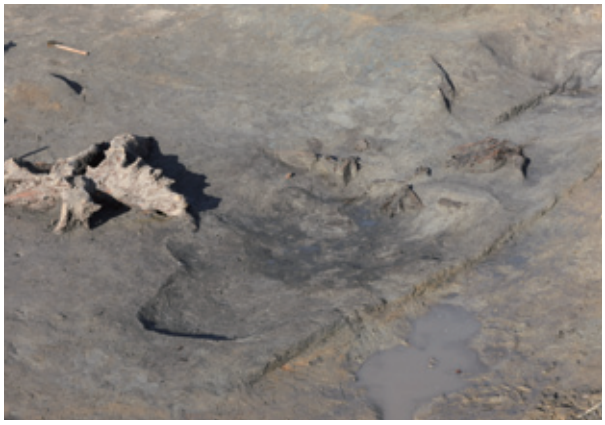
3 区 SX01 南半部遺物出土状況（西より）

3 区 SX01 下半部土層（北より）

3 区 SX01 全景（西より）

3 区 SX01 全景（南東より）

3 区 SX01 下層遺物出土状況（東より）



3 区 SX01 南端部全景（南東より）

3 区 SR02 土層（西より）

3 区 SR02・SR03 土層（北より）

3 ・ 4 区 SR02・SR03 全景（南東より）

3 区 SR02 下層遺物（9）出土状況（南より）

3 区 SR02 下層遺物（12）出土状況（西より）

3 区 SR03 木杭（29・31）出土状況（北より）

4 区 SR02・SR03 土層（北より）

図版 23　遺構写真 15（第 1 次調査区）

3 区 SD161 全景（東より）

3 区 SD161 全景（東より）

3 区 SD161・SE02 遠景（南より）

3 区 SD161 遺物（363）出土状況（南より）

3 区 SD161 遺物（331）出土状況（北より）

4 区 SE01 石組全景（西より）

4 区 SE01 上面検出状況（西より）

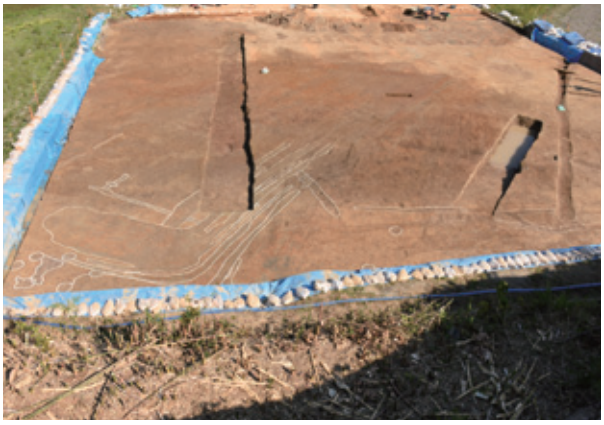
4 区 SE01 石組内土層（東より）

4 区 SE01 石組断面（東より）

4 区 SE01 石組基底石（東より）

５区１面全景（北より）

５区１面西半遺構検出状況（北より）

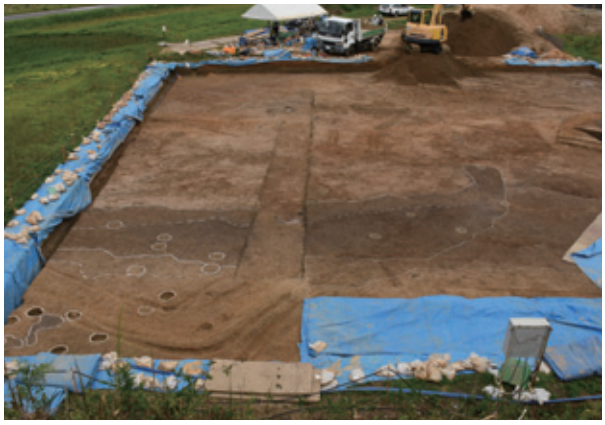


５区１面東半遺構検出状況（北より）

５区 SD046 遺物出土状況（東より）

５区 SD019 遺物（193）出土状況（南より）

５区２面全景（南より）



５区２面東半遺構検出状況（北より）

５区２面西半遺構検出状況（北より）

５区２面全景（南より）

図版 27　遺構写真 19（第２次調査区）

６区全景（南より）

６区北半遺構検出状況（南より）

６区北半全景（南より）

６区南半遺構検出状況（東より）

６区南半全景（東より）

７区全景（南西より）

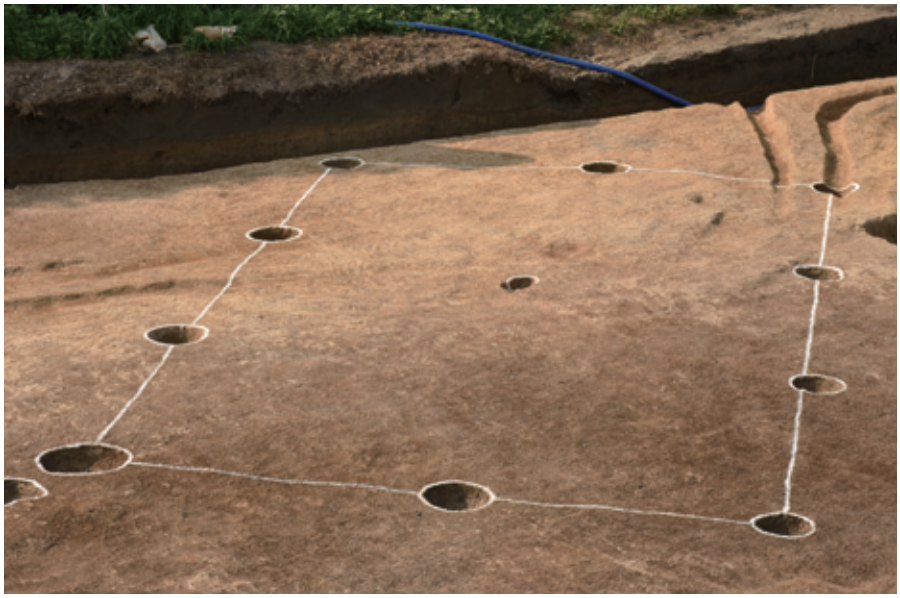
７区遺構検出状況（南より）

７区上層遺構全景（南より）

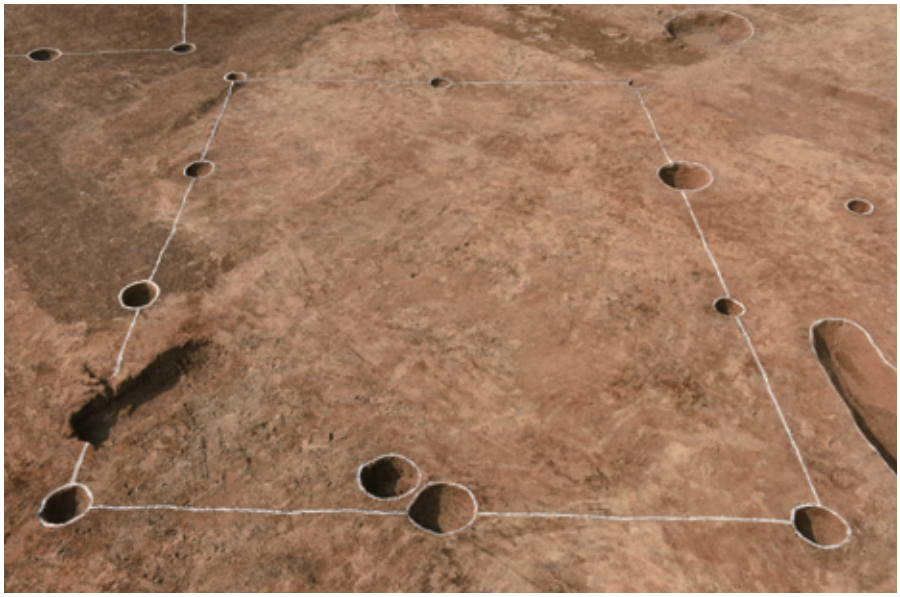
第１次調査区遠景（第２次調査区より）

図版 29　遺構写真 21（第２次調査区）

５区 SB01 全景
（南より）



５区 SB03 全景
（南より）



５区 SB04 全景
（南より）

６区 SP099 柱材出土状況（北より）

６区 SP182 遺物（85）出土状況（南より）

６区 SP161 遺物出土状況（北より）

６区 SP201 遺物（103・106）出土状況（南より）

６区 SP173 根石出土状況（南より）

６区 SP205 遺物（97）出土状況（南より）

６区 SP178 石出土状況（南より）

６区 SP206 遺物（114）出土状況（南より）

5 区 SK04 全景（東より）

5 区 SK04 遺物（120）出土状況（南より）

5 区 SK04 土層上半（東より）

5 区 SK04 遺物（131）出土状況（南より）

5 区 SK04 土層下半（東より）

5 区 SK04 遺物（126）出土状況（南より）

5 区 SK04 遺物出土状況（南より）

5 区 SK04 遺物（129・136）出土状況（東より）

5 区 SK01 土層（北より）

5 区 SK05 土層（南より）

5 区 SK02 土層（南より）

5 区 SK06 土層（北東より）

5 区 SK03 土層（南より）

6 区 SK07 土層（南より）

5 区 SK05 全景（東より）

6 区 SK09 土層（南より）

６区 SK10 土層（南より）

６区 SK13 土層（北より）

６区 SK11 土層（南より）

６区 SK14 土層（南より）

６区 SK12 全景（南より）

６区 SK15 全景（南より）

６区 SK13 遺物（180）出土状況（北より）

６区 SK15 土層（南より）

６区 SK16 土層（東より）

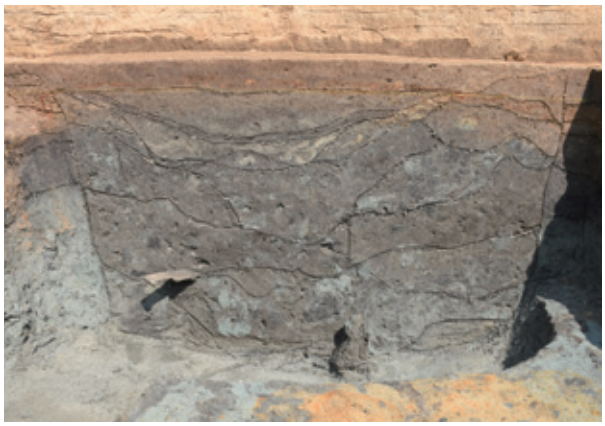
７区 SK08 遺物（153）出土状況（南東より）

６区 SK17 土層（南より）

７区 SK08 遺物（154）出土状況（西より）

７区 SK08 全景（南より）

７区 SK08 遺物（171）出土状況（南より）



７区 SK08 土層（西より）

７区 SK08 遺物（159・161）出土状況（西より）

５区 SD019 全景（南より）

５区 SD019 土層（北より）

５区 SD019 遺物出土状況（南より）

５区 SD012 遺物（184）出土状況（南より）

５区 SD023 全景（南より）

５区 SD023 土層（南より）

５区 SD021 遺物（196）出土状況（西より）

５区 SD105 遺物出土状況（南より）

５区 SD026 土層（東より）

５区 SD105 土層（南より）

５区 SD030 土層（南より）

５区 SD038 土層（西より）

５区 SD103・SD105 全景（東より）

６区 SD128 土層（南より）

７区 SD102 遺物（225）出土状況（西より）

６区 SD128 遺物出土状況（北より）

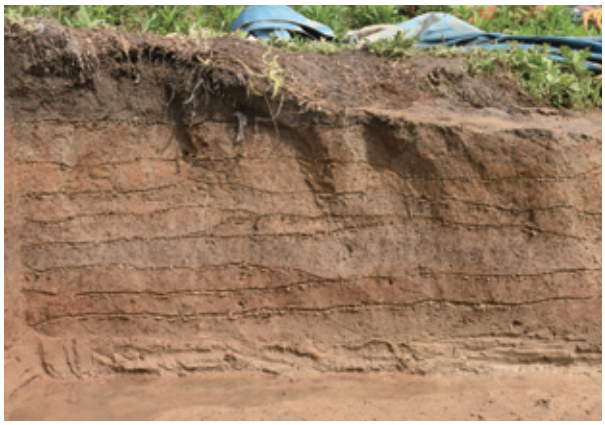
７区 SD102 遺物（237・250）出土状況（西より）

６区 SD138・SD139 土層（南より）

７区 SD102 土層（南より）

６区 SD139 遺物（283）出土状況（北より）

７区 SK08 と SD102 重複（東より）



５区東端南壁土層（北より）

６区北端西壁土層（東より）

５区北端東壁土層（西より）

６区東端南壁土層（北より）

５区南端西壁土層（東より）

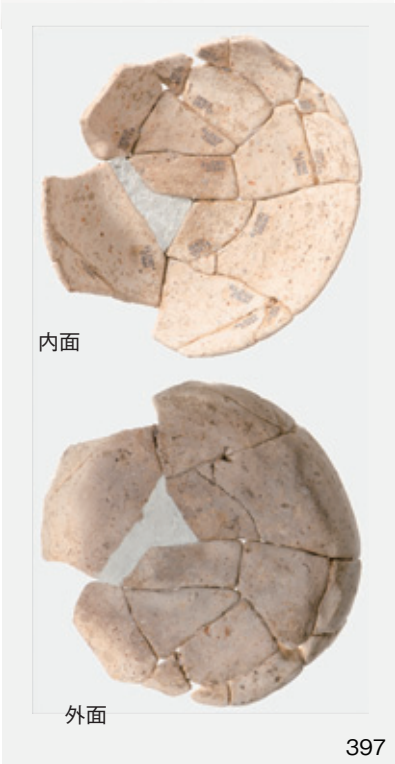
７区東端南壁土層（北より）

５区 SR01 トレンチ西壁土層（東より）

６区 SR01 トレンチ土層（南より）

図版 39　遺物写真 1（土器）

304



397

218

81

46

80

55

57

182

385

41

126

236

237

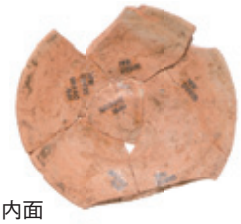
250

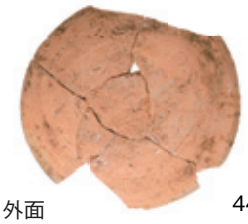
249

3

8

347


内面


外面　440

12

181

412

341

413

67

274

図版 41　遺物写真３（土器・土製品）

363
364
365
5
300
446
355
357
271
252
253
470
409
110
109
196

図版 43　遺物写真 5（瓦類）

385

478　276　176

479　4

136

480

485

図版 45　遺物写真７（木製品）

72

73

375

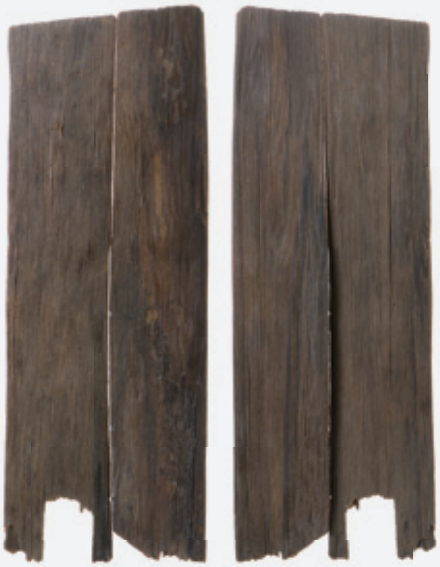
34

35

36

図版 47　遺物写真 9（木製品）

155



156

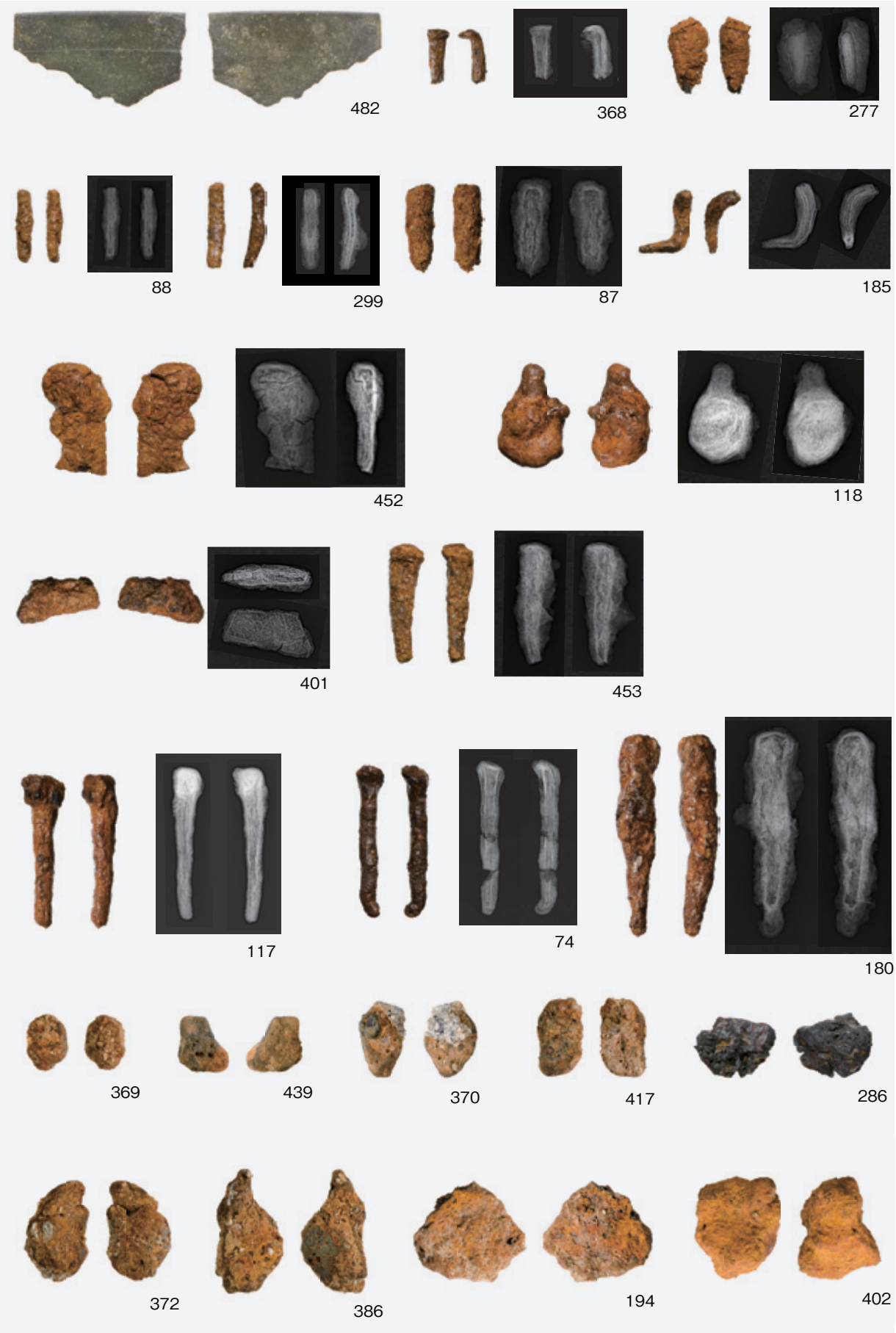
157

158

図版 49　遺物写真 11（木製品）

166
164
167
168
169
162
163
170
173
171
172
434

図版 51　遺物写真 13（金属器・X 線写真）



報告書抄録

ふりがな	みどのきたいせき
書名	三殿北遺跡
副書名	国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	第６冊
編著者名	蔵本晋司（編）、日鉄住金テクノロジー株式会社、株式会社パレオ・ラボ、文化財調査コンサルタント株式会社
編集機関	香川県埋蔵文化財センター・国土交通省四国地方整備局
所在地	〒 762-0024　香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 ℡. 0877-48-2191　Mail. maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行機関名	香川県教育委員会
発行年月日	2020 年３月 19 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
三殿北遺跡（みどのきたいせき）	香川県東かがわ市三殿（かがわけんひがしかがわしみどの）	37207		34°15′01″	134°17′45″	2016 年 10 月 1 日～2017 年 1 月 31 日 2017 年 6 月 1 日～2017 年 8 月 31 日	3,470㎡	道路建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代～古墳時代	自然河川　3 溝　1	縄文土器、弥生土器、古式土師器、石器、木製品	
	古代	井戸　1 不明遺構　4	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、墨書土器、陶硯、布目瓦、土錘、土馬、斎串、銅碗、製錬鍛冶滓	地方官衙関連遺跡の可能性
	中世	掘立柱建物 7 土坑　17 溝　26 不明遺構　1 耕作痕　1	土師質土器、須恵器、瓦器、輸入磁器、国産陶器、フイゴ羽口、土錘、鉄釘、鉄滓、竹・木製品、砥石	大型灌漑水路
	近世	土坑　4 井戸　1 溝　4 耕作痕　2	土師質土器、国産陶磁器、石製品、木製品、金属器	

要約

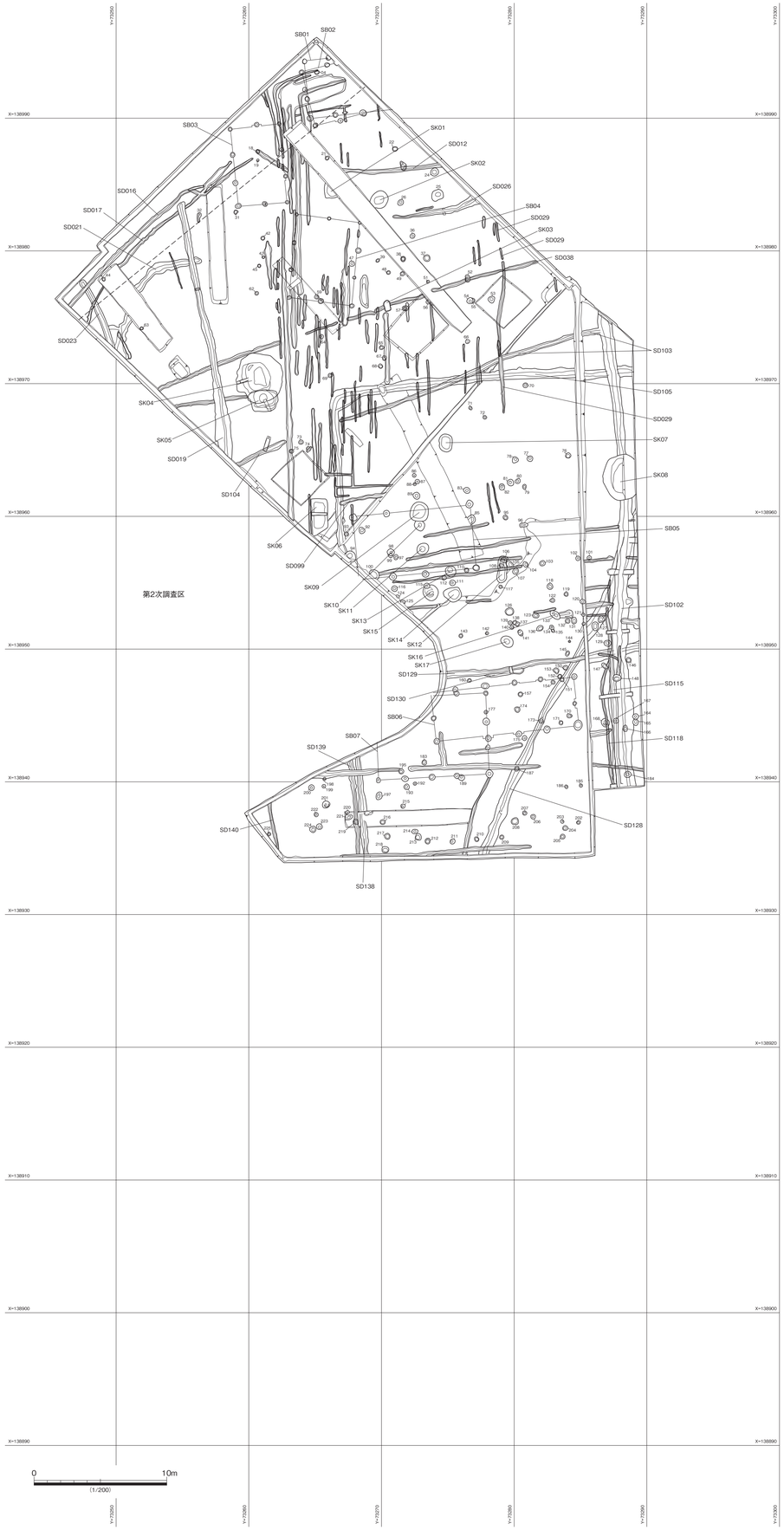
遺跡は、東かがわ市西部の番屋川北岸中流谷底平野上に立地する、弥生時代前期～中・近世にかけての集落遺跡である。とくに古代、９～11 世紀前半期には、井戸を除いて明確な遺構に乏しいものの、銅碗や緑釉・灰釉陶器、猿面硯を中心とした陶硯、やや多量の土錘、墨書土器、土馬や斎串といった律令祭具のほか、布目平・丸瓦類、県内初の精錬鍛冶滓が出土し、宗教や文書行政、漁業、金属器生産等の多彩な職能集団を内包する地域的複合体として、機能していた可能性が想定される。郡領氏族ないし郷レベルの有力層が経営する官衙関連施設の具体的な様相を明らかにしたものと評価される。12 世紀に生じた気候変動に伴う番屋川の河床低下を起因とした農地の再開発として、番屋川を取水源とする大型灌漑水路が新たに開削されたが、水路に改修の痕跡は乏しく、おそらくは期待した以上の成果は得られないまま、別の対策が行われた可能性が考えられる。積極的に評価すれば、灌漑水路の管理に関わり 12 世紀前半に成立したⅡ区の中世屋敷地は、14 世紀前葉まで経営が維持されるが、その後、明確な土地利用は、近世段階になるまで放棄されたようである。

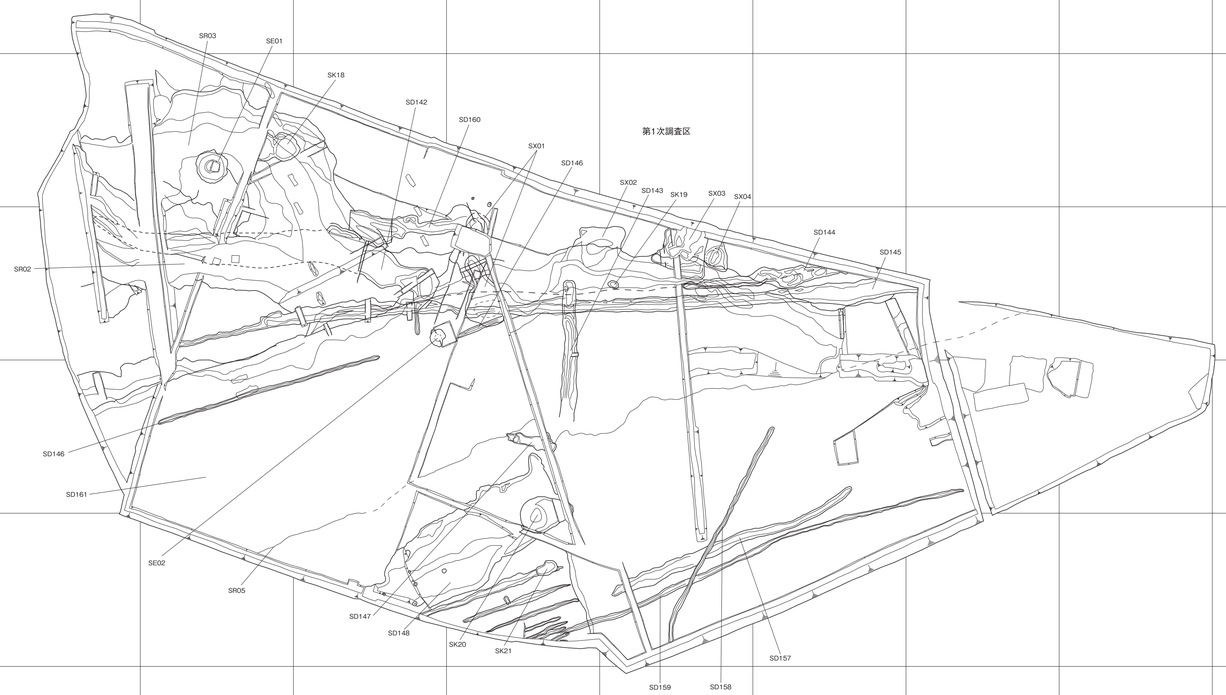
国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第 6 冊

三殿北遺跡

2020 年 3 月 19 日
編集　香川県埋蔵文化財センター
〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
Tel 0877-48-2191
E-Mail　maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行　香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
印刷　新日本法規出版株式会社

付図　三殿北遺跡 全体図


第2次調査区
SB01
SB02
SB03
SK01
SD012
SK02
SD026
SD016
SD017
SD021
SB04
SD029
SK03
SD029
SD038
SD023
SD103
SD105
SD029
SK07
SK04
SK05
SD019
SK08
SD104
SB05
SK06
SD099
SK09
SK10
SK11
SK13
SK15
SK14
SK12
SK16
SK17
SD102
SD129
SD115
SD130
SB06
SD118
SB07
SD139
SD128
SD140
SD138
0
10m
(1/200)


第1次調査区
SR03
SE01
SK18
SD142
SD160
SX01
SD146
SX02
SD143
SK19
SX03
SX04
SD144
SD145
SR02
SD146
SD161
SE02
SR05
SD147
SD148
SK20
SK21
SD157
SD159
SD158